

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第三十九冊

原間遺跡 I

第1分冊

2002. 3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日木本道公土木部

お詫びと訂正

納品させて頂きました 四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
第三十九冊 原間遺跡 I 278 ページにてミスがございました。

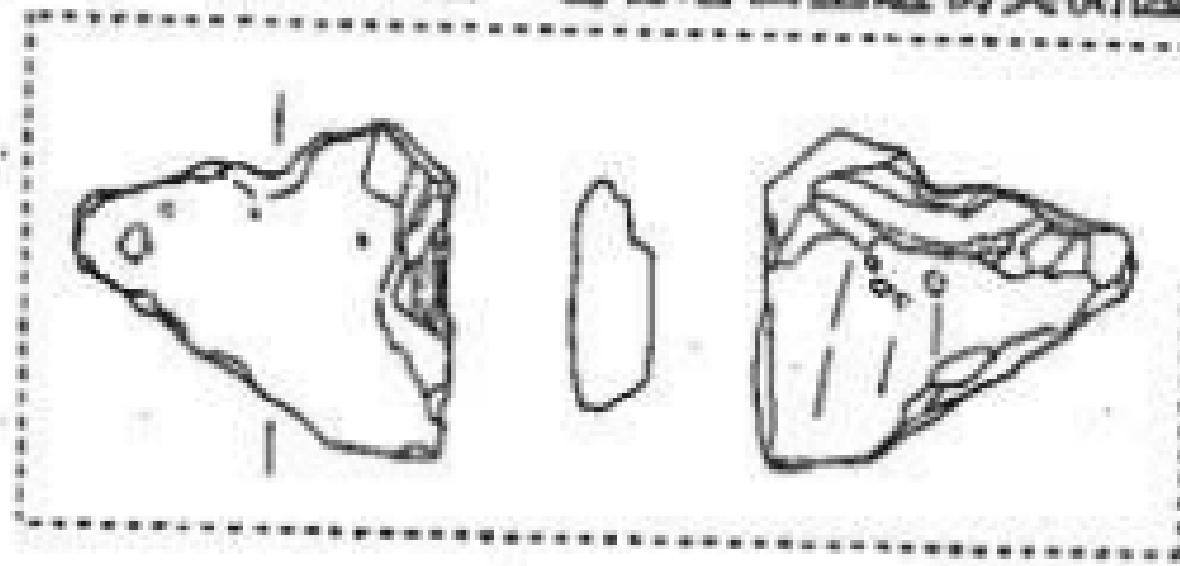
訂正シールを同封させていただきます。

大変ご面倒おかけいたしますが、訂正していただきますよう
何卒よろしくお願ひいたします。

四国横断自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第三十九冊 原間遺跡 I

278 ページ 第277図 包含層出土遺物実測図(1/2)



四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第39冊 原間遺跡I 正誤表

第1分冊

頁	行	誤	正
目次	24行目ページ	443	442
目次	以下505ページまで1ページずつれる		
目次		505	504
挿図目次	第102図ページ	104	109
挿図目次	第439図ページ	441	440
挿図目次	以下495ページまで1ページずつれる		
挿図目次		495	494
90	1行目	のの2種類	鉢は、大・中・小が認められ、底部の形態は若干の平底を残すものとへら削りにより丸底化しているものの2種類
117	キャプション	キャプションを入れる	第118図 SDIII23断面図(1/40)
129	第126図 上段 図面の右一番上		
190	キャプション	SHV01	SHIV01
204	6行目	は約10を	は約0.10mを
325	第321図		
344	キャプション	第347図 ②-②	第347図 V区ワフ
346	第349図		
348	第352図		
381	キャプション	STV03	SRV03
382	キャプション	STV03	SRV03
390	7行目	総数 個で	総数298個で
408	キャプション	SHVI14	SDVI14
487	14行目	(第41図)。	(第463図)。

第2分冊

頁	行	誤	正
図版目次	図版1		④～⑥をとる
図版目次	図版52	①SDIII02	①SDIII10
図版目次	図版111	①SRIV01	①SRIV02
図版目次	図版111	②SRIV01	②SRIV02
図版目次	図版112	①SRIV01	①SRIV02
図版目次	図版112	②SRIV01	②SRIV02
図版目次	図版113	①SRIV01	①SRIV02
図版目次	図版113	②SRIV01	②SRIV02
図版目次	図版114	①SRIV01	①SRIV02
図版目次	図版114	②SRIV01	②SRIV02
図版目次	図版145	①STV03	①SKV03
図版目次	図版145	②STV04	②SKV04
図版目次	図版164	②SRV03IV	②SRV03IV群
図版目次	図版174	①SXVI12	①SHVI12
図版目次	図版174	②SXVI12・SXVI14	②SHVI12・SDVI14
図版目次	図版175	①SXVI12	①SHVI12
図版目次	図版175	②SXVI14	②SDVI14
遺構観察表凡例	【第III調査区】	⑤灰色砂質土層	⑥灰色砂質土層
遺構観察表凡例	【第III調査区】		22と24の間に23暗茶灰色砂混じり粘質土層 を挿入する

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第三十九冊

原間遺跡 I

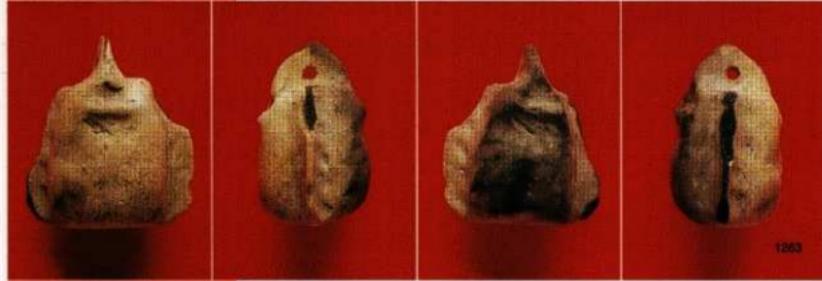
第1分冊

2002.3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公团
香川県土木部



巻頭カラー図版 2



序 文

四国横断自動車道（津田～引田）は、県内の高速道路網の完成を目指して、平成5年度の施工命令以後、継続して進められ、平成13年春に完成いたしました。

この道路の建設に先立ち、香川県教育委員会では、平成8年度から埋蔵文化財の発掘調査を財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して行ってまいりました。また、発掘調査と並行して、平成11年度からは出土品の整理を同センターに委託して実施しております。

このたび「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十九冊 原間遺跡Ⅰ」として刊行いたしますのは、大川郡大内町川東原間に所在する原間遺跡についてであります。

原間遺跡の調査では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が検出されております。特に弥生時代では直径約60mの範囲内に竪穴住居2～3棟、掘立柱建物1棟で構成される縄まり（単位集団）が確認でき、その集合体が原間遺跡の集落であることが解りました。また、砂糖甕も多数検出され、近世以降東讃を中心として砂糖業が盛行していたことを裏付ける貴重な資料となりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元関係各位には多大な御援助と御協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年3月

香川県教育委員会

教育長 折原 守

例　　言

1. 本報告書は、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第三十九冊で、香川県大内郡大内町川東原間に所在する原間遺跡（わらま　いせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財團法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査の期間及び担当は以下のとおりである。

予備調査　期間　平成8年

担当　大久保徹也、住野正和、高橋佳緒里

本調査　期間　平成9年4月1日～平成10年3月31日

担当　植松邦浩、片桐孝浩、浜松春水、松岡宏一、野崎隆亨、信里芳紀、多田歩、大屋敷慶子

期間　平成10年4月1日～平成11年3月31日

担当　片桐孝浩、樋本清輝、松岡宏一、佐々木正之、森澤千尋、多田　歩、徳永（東條）貴美、藤沢（佐々木）明子

4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県土木部横断自動車道対策室、同長尾土木事務所横断道対策課、大内町横断道対策室、大内町教育委員会、地元自治会
5. 本報告書の作成は、財團法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
本報告書の執筆・編集は片桐孝浩が担当した。
6. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第IV系の北であり、標高はT. P. を基準としている。
また、遺構は下記の略号により表示している。

S H…竪穴住居	S B…掘立柱建物	S E…井戸	S F…窓	S T…土壙墓	S K…土坑
S D…溝状遺構	S R…自然流路	S X…不明遺構	S P…柱穴		
7. 石器実測図中、薄く黒く表現している部分は摩滅痕を、輪郭線の回りの実線は潰れを、同じく波線は顕著な研磨あるいは摩滅を、同じく点線はあまり顕著でない研磨あるいは摩滅をそれぞれ表す。なお、現代の欠損は濃く黒で潰している。石器石材は特に表記がない限り、サヌカイトである。
8. 採図の一部に国土地理院地形図　三本松（1/25,000）、大内町全図（1/10,000）、大内町都市計画図（1/2,500）を使用した。

9. 本遺跡の報告にあたっては、下記の機関等に分析を依頼・委託した。

弥生土器の胎土分析……岡山理科大学 白石 純

須恵器の胎土分析 ……大谷女子大学 三辻利一

遺物の写真撮影 ……坂出市 末澤写真館

石製品の材質鑑定 ……徳島大学 塩田次男

10. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）である。

11. 土器観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色
票監修『新版標準土色帖 1992年度版』を使用して表す。また、残存率は遺物の図下部分に占める
割合であり、完形品に対する割合ではない。

目 次

序文

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過と体制	5
1 調査の経過	5
2 発掘調査及び整理作業の体制	5
第2章 原間遺跡の調査	8
第1節 立地と環境	8
1 地理的環境	8
2 歴史的環境	8
①周辺の遺跡	8
②原間地区の行政区画について	11
第2節 予備調査	12
第3節 調査の方法	17
第4節 遺構と遺物	20
第I調査区（概要、遺構・遺物、小結）	20
第II調査区（概要、遺構・遺物、小結）	22
第III調査区（概要、遺構・遺物、小結）	60
第IV調査区（概要、遺構・遺物、小結）	186
第V調査区（概要、遺構・遺物、小結）	283
第VI調査区（概要、遺構・遺物、小結）	399
第VII調査区（概要、遺構・遺物、小結）	443
第3章 自然化学分析の成果	453
第1節 原間遺跡出土弥生土器の胎土分析	453
第2節 香川県、原間遺跡における自然化学分析	461
第4章 まとめ	486
第1節 旧地形の復元について	486
第2節 遺構の変遷について	488
第3節 弥生時代集落について	491
第4節 大内町内の集落の消長	502
第5節 銅鐸形土製品について	504
第6節 古代の集落	505

插図目次

第1図 因幡横断自動車道(津田～引田)埋蔵文化財位置地 (遺跡名番号)	2	第5図 発掘調査対象の断面・旧地形復元図	13
第2図 原間遺跡位置図	6	第6図 子備調査区トレーンチ配図図	14
第3図 周辺遺跡位置図	9	第7図 子備調査区トレーンチ土壌柱状図(1/40)①	15
第4図 原間地区水利図	10	第8図 子備調査区トレーンチ上層柱状図(1/40)②	16
		第9図 調査区配置図(新)・旧地形復元図	18
第I調査区			
第10図 SHI 01 平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)	21		
第II調査区			
第11図 II区A-A', B-B' 土層断面図(1/40)	23	第30図 SHII 06 平・断面図(1/40),出土遺物実測図(1/4)	42
第12図 II区C-C' 上層断面図(1/40)	24	第31図 SKII 02 平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)	43
第13図 II区D-D' 上層断面図(1/40)	25	第32図 SKII 04・SKII 06・SKII 10 平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)	43
第14図 SHII 01 平・断面図(1/60)	26	第33図 SDII 07 断面図(1/20),出土遺物実測図(1/4)	44
第15図 SHII 02 平・断面図(1/60)	27	第34図 SDII 15 平・断面図(1/20),出土遺物実測図(1/4)	45
第16図 SHII 03 平・断面図(1/60)	28	第35図 SXII 05 平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)	47
第17図 SBII 01 平・断面図(1/60)	29	第36図 SXII 06 平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)	47
第18図 SBII 02 平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)	30	第37図 SXII 07 平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)	47
第19図 SBII 03 平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)	31	第38図 案穴出土遺物実測図(1/4)	48
第20図 SBII 04 平・断面図(1/60)	32	第39図 包含層出土遺物実測図(1/4)①	49
第21図 SBII 05 平・断面図(1/60)	33	第40図 包含層出土遺物実測図(1/4)②	50
第22図 SBII 06 平・断面図(1/60)	33	第41図 包含層出土遺物実測図(1/4)③	51
第23図 SBII 07 平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)	34	第42図 包含層出土遺物実測図(1/6)④	52
第24図 SFII 01 平・断面図(1/40)	36	第43図 包含層出土遺物実測図(1/4)⑤	53
第25図 SFII 02 平・断面図(1/40)	37	第44図 包含層出土遺物実測図(1/4)⑥	54
第26図 SFII 03 平・断面図(1/40),出土遺物実測図(1/4)	37	第45図 包含層出土遺物実測図(1/4)⑦	55
第27図 SFII 04 平・断面図(1/40)	39	第46図 包含層出土遺物実測図(1/4)⑧	56
第28図 SFII 05 平・断面図(1/40)	41	第47図 II区過橋実測図(1/500)	59
第29図 SFII 06 出土遺物実測図(1/4)	42		
第III調査区			
第48図 III区A-A', B-B' 土層断面図(1/40)	61.62	第57図 SHIII 04 平・断面図(1/60)	72
第49図 III区C-C' 土層断面図(1/50)	63.64	第58図 SHIII 04 出土遺物実測図(1/4)	73
第50図 SHIII 01 平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)	65	第59図 SHIII 05 平・断面図(1/60)	74
第51図 SHIII 02 平・断面図(1/60)	66	第60図 SHIII 05 出土遺物実測図(1/4)	75
第52図 SHIII 02 遺物出土状況(1/80)	67	第61図 SHIII 06 平・断面図(1/60)	76
第53図 SHIII 02 出土遺物実測図(1/4)①	68	第62図 SHIII 06 遺物出土状況(1/80)	77
第54図 SHIII 02 出土遺物実測図(1/4)②	69	第63図 SHIII 06 出土遺物実測図(1/4)	78
第55図 SHIII 03 平・断面図(1/60)	70	第64図 SHIII 07(新) 掘失屋敷出土状況平面図(1/80)	79
第56図 SHIII 03 出土遺物実測図(1/4)	71	第65図 SHIII 07(新) 平・断面図(1/60)	80

第 66 図 SHII 07 (吉) 平面図 (1/4)	81	第 107 図 SDII 01 出土遺物実測図 (1/4) ③	112
第 67 図 SHII 07 遺物出土状況・翠根材復元図 (1/80)	82	第 108 図 SDII 01 出土遺物実測図 (1/4) ④	113
第 68 図 SHII 07 出土遺物実測図 (1/4) ①	83	第 109 図 SDII 02 断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	114
第 69 図 SHII 07 出土遺物実測図 (1/4) ②	84	第 110 図 SDII 08 平・断面図 (1/40)	115
第 70 図 SHII 08 半・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	85	第 111 図 SDII 08 出土遺物実測図 (1/4)	116
第 71 図 SHII 09 半・断面図 (1/60)	87	第 112 図 SDII 09 断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	116
第 72 図 SEMI 01 半・断面図 (1/20)	88	第 113 図 SDII 10 断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	117
第 73 図 SEMI 01 出土遺物実測図 (1/4) ①	89	第 114 図 SDII 11 断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	117
第 74 図 SEMI 01 出土遺物実測図 (1/4) ②	90	第 115 図 SDII 13 断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	116
第 75 図 SEMI 01 平・断面図 (1/50)	91	第 116 図 SDII 20 断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	116
第 76 図 SEMI 02 半・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4)	92	第 117 図 SDII 21 断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	117
第 77 図 SEMI 03 半・断面図 (1/50)	93	第 118 図 SDII 23 断面図 (1/40)	117
第 78 図 SEMI 04 半・断面図 (1/50)	94	第 119 図 SXII 01 平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	118
第 79 図 SEMI 05・STII 07 平・断面図 (1/50), STII 07 出土遺物実測図 (1/4)	96	第 120 国 SXII 02 平・断面図 (1/40)	119
第 80 国 SEMI 06 平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4)	97	第 121 国 SXII 03 平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	120
第 81 国 STII 01 半・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	99	第 122 国 SXII 04 平・断面図 (1/40)	121
第 82 国 STII 02 平・断面図 (1/40)	102	第 123 国 SRII 01 ~ SRII 03 土層断面図 (1/40)	123-124
第 83 国 STII 03 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	100	第 124 国 SRII 03・SDII 02 土層断面図 (1/40)	125-126
第 84 国 STII 04 平・断面図 (1/40)	102	第 125 国 SRII 01 出土遺物実測図 (1/4)	122
第 85 国 STII 05 半・断面図 (1/40)	102	第 126 国 SRII 03 東出上状況平・断面図 (1/20)	129
第 86 国 STII 06 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	99	第 127 国 SRII 03 東出上位置図 (1/100)	129
第 87 国 STII 08 半・断面図 (1/40)	102	第 128 国 SRII 03 波路模式図 (1/400)	127-128
第 88 国 STII 09 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	99	第 129 国 SRII 03(第 128 図 A 地区) 出土遺物実測図 (1/4) ①	130
第 89 国 STII 10 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	99	第 130 国 SRII 03(第 128 図 A 地区) 出土遺物実測図 (1/4) ②	131
第 90 国 SKII 01 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	103	第 131 国 SRII 03(第 128 図 A 地区) 出土遺物実測図 (1/4) ③	132
第 91 国 SKII 02 平・断面図 (1/40)	103	第 132 国 SRII 03(第 128 図 A 地区) 出土遺物実測図 (1/4) ①	133
第 92 国 SKII 03 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	104	第 133 国 SRII 03(第 128 図 A 地区) 出土遺物実測図 (1/4) ②	134
第 93 国 SKII 09 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	104	第 134 国 SRII 03(第 128 国 A 地区) 出土遺物実測図 (1/4) ③	135
第 94 国 SKII 10 平・断面図 (1/40)	109	第 135 国 SRII 03(第 128 国 A 地区) 出土遺物実測図 (1/4) ④	136
第 95 国 SKII 11 半・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	109	第 136 国 SRII 03(第 128 国 A 地区) 出土遺物実測図 (1/4) ⑤	137
第 96 国 SKII 13 半・断面図 (1/30), 出土遺物実測図 (1/4)	105	第 137 国 SRII 03(第 128 国 A 地区) 出土遺物実測図 (1/4) ⑥	138
第 97 国 SKII 18 平・断面図 (1/30), 出土遺物実測図 (1/4)	105	第 138 国 SRII 03(第 128 国 B-①地区) 出土遺物実測図 (1/4) ①	139
第 98 国 SKII 20 平・断面図 (1/30), 出土遺物実測図 (1/4) ①	106	第 139 国 SRII 03(第 128 国 B-①地区) 出土遺物実測図 (1/4) ②	140
第 99 国 SKII 20 出土遺物実測図 (1/4) ②	107	第 140 国 SRII 03(第 128 国 B-①地区) 出土遺物実測図 (1/4) ③	141
第 100 国 SKII 21 半・断面図 (1/40)	109	第 141 国 SRII 03(第 128 国 B-①地区) 出土遺物実測図 (1/4) ④	142
第 101 国 SKII 23 平・断面図 (1/30), 出土遺物実測図 (1/4)	104	第 142 国 SRII 03(第 128 国 B-①地区) 出土遺物実測図 (1/4) ⑤	143
第 102 国 SKII 24 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	104	第 143 国 SRII 03(第 128 国 B-①地区) 出土遺物実測図 (1/4) ⑥	144
第 103 国 SKII 25 平・断面図 (1/40)	109	第 144 国 SRII 03(第 128 国 B-②地区) 出土遺物実測図 (1/4) ①	145
第 104 国 SKII 26 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	109	第 145 国 SRII 03(第 128 国 B-②地区) 出土遺物実測図 (1/4) ②	146
第 105 国 SDII 01 断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4) ①	110	第 146 国 SRII 03(第 128 国 B-③地区) 出土遺物実測図 (1/4) ①	147
第 106 国 SDII 01 平・断面図 (1/100), 出土遺物実測図 (1/4) ②	111	第 147 国 SRII 03(第 128 国 B-③地区) 出土遺物実測図 (1/4) ②	148
		第 148 国 SRII 03(第 128 国 B-③地区) 出土遺物実測図 (1/4) ③	149

第 149 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ④	150
第 150 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑤	151
第 151 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑥	152
第 152 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑦	153
第 153 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑧	154
第 154 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑨	155
第 155 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑩	156
第 156 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑪	157
第 157 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑫	158
第 158 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑬	159
第 159 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑭	160
第 160 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑮	161
第 161 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑯	162
第 162 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑰	163
第 163 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑱	164
第 164 图	SRII 03(第 128 图 B-③地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑲	165
第 165 图	SRII 03(第 128 图 B-④地区) 出土遗物实测图 (1/4) ⑳	166
第 166 图	SRII 03(第 128 图 B-④地区) 出土遗物实测图 (1/4) ㉑	167
第 167 图	SRII 03(第 128 图 B-④地区) 出土遗物实测图 (1/4) ㉒	168
第 168 图	SRII 03(第 128 图 B-④地区) 出土遗物实测图 (1/4) ㉓	169
第 169 图	SRII 03(第 128 图 B-④地区) 出土遗物实测图 (1/4) ㉔	170
第 170 图	SRII 03(第 128 图 B-④地区) 出土遗物实测图 (1/4) ㉕	171
第 171 图	SRII 03(第 128 图 B-④地区) 出土遗物实测图 (1/4) ㉖	172
第 172 图	SRII 03(第 128 图 C 地区) 出土遗物实测图 (1/4)	173
第 173 图	SRII 03(第 128 图 C 地区) 出土遗物实测图 (1/4)	174
第 174 图	SRII 03(第 128 图 C 地区) 出土遗物实测图 (1/4)	175
第 175 图	SRII 03(第 128 图 C 地区) 出土遗物实测图 (1/4)	176
第 176 图	SRII 03(第 128 图 C 地区) 出土遗物实测图 (1/4)	177
第 177 图	柱穴出土遗物实测图 (1/4) ①	178
第 178 图	柱穴出土遗物实测图 (1/4) ②	179
第 179 图	台基出土遗物实测图 (1/4)	180
第 180 图	Ⅲ区道路交通网 (1/300)	185

第IV调查区

第 181 图	IV区 A-A' 土层断面图 (1/40)	187
第 182 图	IV区 B-B' 土层断面图 (1/40)	188
第 183 图	IV区 C-C' 土层断面图 (1/40)	189
第 184 图	SHIV 01 平·断面图 (1/60)	190
第 185 图	SHIV 01 出土遗物实测图 (1/4)	191
第 186 图	SHIV 02 平·断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	192
第 187 图	SIV 03 平·断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	193
第 188 图	SHIV 04 平·断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	194
第 189 图	SHIV 05 平·断面图 (1/60)	195
第 190 图	SHIV 06 平·断面图 (1/60)	196
第 191 图	SHIV 07 ~ SHIV 14 · SIV 01 平面图 (1/60)	197
第 192 图	SHIV 07 ~ SHIV 13 · SIV 01 断面图 (1/60)	198
第 193 图	SIV 15 ~ SIV 17 平面图 (1/60)	199
第 194 图	SIV 15 断面图 (1/60)	200
第 195 图	SHIV 16 断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	200
第 196 图	SHIV 17 断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	200
第 197 图	SHIV 18 · SHIV 19 平·断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	201
第 198 图	SHIV 20 · SHIV 21 平面图 (1/60)	202
第 199 图	SHIV 20 · SHIV 21 断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	203
第 200 图	SHIV 20 出土遗物实测图 (1/4)	204
第 201 图	SIV 22 · SIV 23 平面图 (1/60)	205
第 202 图	SHIV 22 断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	206
第 203 图	SHIV 23 断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	206
第 204 图	SHIV 24 · SHIV 25 平面图 (1/60)	207
第 205 图	SHIV 24 · SHIV 25 断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	208
第 206 图	SIV 26 平·断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	209
第 207 图	SIV 27 ~ SIV 32 平面图 (1/60)	210
第 208 图	SHIV 27 ~ SHIV 32 断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	211
第 209 图	SHIV 01 平·断面图 (1/50)	213
第 210 图	SHIV 02 平·断面图 (1/50)	214
第 211 图	SHIV 03 平·断面图 (1/60)	215
第 212 图	SHIV 04 平·断面图 (1/60)	216
第 213 图	SHIV 05 · SHIV 04 出土遗物实测图 (1/4)	217
第 214 图	SHIV 05 平·断面图 (1/60), 山土遗物实测图 (1/4)	218
第 215 图	SHIV 06 平·断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	219
第 216 图	SHIV 07 平·断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	220
第 217 图	SHIV 08 平·断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	221
第 218 图	SHIV 09 平·断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	222
第 219 图	SHIV 01 平·断面图 (1/60)	223
第 220 图	SHIV 02 平·断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	223
第 221 图	SHIV 03 平·断面图 (1/10), 山土遗物实测图 (1/2)	224
第 222 图	SHIV 04 平·断面图 (1/60), 出土遗物实测图 (1/4)	223
第 223 图	SHIV 05 平·断面图 (1/10)	225
第 224 图	SHIV 06 山土遗物实测图 (1/4)	226
第 225 图	SHIV 06 平·断面图 (1/10), 山土遗物实测图 (1/4)	227
第 226 图	SHIV 07 平·断面图 (1/60)	223

第227图	STIV 08 半·断面图(I/10)①	228	第254图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑤	255
第228图	STIV 08 半·断面图(I/10)②	229	第255图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑥	256
第229图	STIV 08 出土遗物实测图(I/4)	230	第256图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑦	257
第230图	STIV 09 平·断面图(I/20)	231	第257图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑧	258
第231图	STIV 09 出土遗物实测图(I/4)	232	第258图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑨	259
第232图	SKIV 01 半·断面图(I/20),出土遗物实测图(I/4)	234	第259图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑩	260
第233图	SKIV 02 半·断面图(I/40),出土遗物实测图(I/4)	235	第260图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑪	261
第234图	SKIV 06 出土遗物实测图(I/4)	236	第261图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑫	262
第235图	SKIV 08 平·断面图(I/20),出土遗物实测图(I/4)	237	第262图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑬	263
第236图	SDIV 13-SDIV 14 断面图(I/20)	238	第263图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑭	264
第237图	SDIV 13-SDIV 15 出土遗物实测图(I/4)	238	第264图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑮	265
第238图	STIV 14 出土遗物实测图(I/4)	239	第265图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑯	266
第239图	SRIV 01 出土遗物实测图(I/4)	240	第266图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑰	267
第240图	SRIV 02 断面图(I/30)	241	第267图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑱	268
第241图	萤光X射线分析	242	第268图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑲	269
第242图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)①	243	第269图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)⑳	270
第243图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)②	244	第270图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)㉑	271
第244图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)㉒	245	第271图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)㉓	272
第245图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)㉔	246	第272图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)㉕	273
第246图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)㉖	247	第273图	柱穴出土遗物实测图(I/4)㉗	274
第247图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)㉘	248	第274图	柱穴出土遗物实测图(I/4)㉙	275
第248图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)㉚	249	第275图	包含层出土遗物实测图(I/4)㉛	276
第249图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)㉜	250	第276图	包含层出土遗物实测图(I/4)㉜	277
第250图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)㉝	251	第277图	包含层出土遗物实测图(I/4)㉞	278
第251图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)㉟	252	第278图	包含层出土遗物实测图(I/4)㉟	279
第252图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)㉟	253	第279图	IV区堆积整理图(I/1200)	282
第253图	SRIV 02 出土遗物实测图(I/4)㉟	254			

第五调查区

第280图	SHV 01 遗物出土状况平面图(I/60)	284	第292图	SHV 05 出土遗物实测图(I/4)	285
第281图	SHV 01 第1次床面平·断面图(I/60)	284	第293图	SBV 01 半·断面图(I/50),出土遗物实测图(I/4)	296
第282图	SHV 01 第2次床面平·断面图(I/60)	285	第294图	SBV 02 半·断面图(I/50)	297
第283图	SHV 01 出土遗物实测图(I/4)①	286	第295图	SBV 03 半·断面图(I/50)	298
第284图	SHV 01 山土遗物实测图(I/3)②	287	第296图	SBV 04 半·断面图(I/50),出土遗物实测图(I/4)	299
第285图	SHV 02 半·断面图(I/60)	288	第297图	SBV 05 半·断面图(I/50),出土遗物实测图(I/4)	301,302
第286图	SHV 02 出土遗物实测图(I/4)	289	第298图	SBV 06 半·断面图(I/50)	300
第287图	SHV 03 半·断面图(I/60)	290	第299图	SBV 07 半·断面图(I/50)	303
第288图	SHV 03 出土遗物实测图(I/4)	291	第300图	SEV 01 半·断面图(I/20)	304
第289图	SHV 04 半·断面图(I/60)	292	第301图	SEV 01 平面图(I/20)	305
第290图	SHV 04 出土遗物实测图(I/4)	293	第302图	SEV 01 出土遗物实测图(I/4)①	306
第291图	SHV 05 半·断面图(I/60)	294	第303图	SEV 01 出土遗物实测图(I/4)②	307

第 304 図 SEV 02 平・断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/6)	308	第 344 図 SRV 05 レンヂナ土層断面図 (1/40)	342
第 305 図 SEV 03 平面図 (1/40)	309	第 345 図 SRV 05 トレンチ土層断面図 (1/40)	342
第 306 図 STV 01 平面図 (1/10)	310	第 346 図 VIE②-②' 土層断面図 (1/40)	343
第 307 図 STV 01 出土遺物実測図 (1/5)	311	第 347 図 VIE①-②' 土層断面図 (1/40)	344
第 308 図 STV 02 平・断面図 (1/10)、出土遺物実測図 (1/5)	312	第 348 図 SRV 05-SXV 05 土層断面図 (1/40)	345
第 309 図 SKV 01 平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/6)	313	第 349 図 SDV 30-SRV 03 土層断面図 (1/40)	346
第 310 図 SKV 03 平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/4)	314	第 350 図 SRV 03-SRV 04 土層断面図 (1/40)	347
第 311 図 SKV 04 平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/4)	315	第 351 図 SRV 03-SRV 04 上層断面図 (1/40)	347
第 312 図 SKV 05 平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/4)	313	第 352 図 SRV 06 土層断面図 (1/40)	348
第 313 図 SKV 12 平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/6)	316	第 353 図 SRV 01 土層断面図 (1/40)	349
第 314 図 SKV 14 平・断面図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/4)	317	第 354 国 VIE③-④' 土層断面図 (1/40)	350
第 315 国 SKV 16 平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/4)	318	第 355 国 VIE⑤-⑥' 土層断面図 (1/40)	351
第 316 国 SKV 19 平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/4)	319	第 356 国 自然川川土遭れ実測図 (1/40)	352
第 317 国 SKV 25 平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/6)	320	第 357 国 SRV 03 遺物出土状況① (1/40)	353,354
第 318 国 SKV 30 平・断面図 (1/10)、出土遺物実測図 (1/5)	321	第 358 国 SRV 03 遺物出土状況② (1/40)	355,356
第 319 国 SDV 23 断面図 (1/20)	324	第 359 国 SRV 03 遺物出土状況③ (1/40)	357,358
第 320 国 SDV 30 断面図 (1/20)	324	第 360 国 SKV 03 遺物出土状況④ (1/40)	359,360
第 321 国 VIE④-⑤'、⑥-⑦' 土層断面図 (1/40)	325	第 361 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ①	361
第 322 国 SDV 02-SDV 07-SDV 23-SDV 24-SDV 30、 出土遺物実測図 (1/4)	326	第 362 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ②	362
第 323 国 SDV 36 断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/4)	326	第 363 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ③	363
第 324 国 SDV 45 断面図 (1/20)	327	第 364 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ④	364
第 325 国 SDV 47 断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/4)	326	第 365 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ⑤	365
第 326 国 SDV 53 断面図 (1/20)	327	第 366 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ⑥	366
第 327 国 SDV 54 断面図 (1/20)	327	第 367 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ⑦	367
第 328 国 SDV 55 断面図 (1/20)	327	第 368 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ⑧	368
第 329 国 溝出土遺物実測図 (1/4)	328	第 369 国 SKV 03 出土遺物実測図 (1/4) ⑨	369
第 330 国 SDV 59 断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/6)	329	第 370 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ⑩	370
第 331 国 SXV 02 平・断面図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/4)	330	第 371 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ⑪	371
第 332 国 SXV 05-SXV 07 出土遺物実測図 (1/4)	331	第 372 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ⑫	372
第 333 国 SXV 27 断面図 (1/60)、出土遺物実測図 (1/4)	331	第 373 国 SKV 03 土層断面図 (1/4) ⑬	373
第 334 国 SXV 06 平・断面図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/6)	332	第 374 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ⑭	374
第 335 国 SXV 17 平面図 (1/80)	333	第 375 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ⑮	375
第 336 国 SXV 17 断面図 (1/80)、出土遺物実測図 (1/4)	334	第 376 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ⑯	376
第 337 国 SXV 25 平・断面図 (1/80)、出土遺物実測図 (1/4)	335	第 377 国 SRV 03 土層断面図 (1/4) ⑰	377
第 338 国 SDV 56-SRV 11 土層断面図 (1/40)	337	第 378 国 SRV 03 土層断面図 (1/4) ⑱	378
第 339 国 SDV 56 土層断面図 (1/40)	337	第 379 国 SRV 03 出土遺物実測図 (1/4) ⑲	379
第 340 国 SDV 9 ~ SDV 11 土層断面図 (1/40)	338	第 380 国 SRV 03 土層断面図 (1/4) ⑳	380
第 341 国 VIE④-⑤' 土層断面図 (1/40)	339	第 381 国 SRV 03 土層断面図 (1/4) ㉑	381
第 342 国 VIE⑤-⑥' 土層断面図 (1/40)	340	第 382 国 SRV 03 土層断面図 (1/4) ㉒	382
第 343 国 SRV 05 レンヂナ土層断面図 (1/40)	341	第 383 国 SRV 03 土層断面図 (1/4) ㉓	383
		第 384 国 SRV 03 土層断面図 (1/4) ㉔	384

第385図 SRV 03出土遺物実測図 (1/4) ②	385	第389図 包含層出土遺物実測図 (1/4) ①	391
第386図 SRV 05出土遺物実測図 (1/4)	388	第390図 包含層出土遺物実測図 (1/2) ②	392
第387図 SRV 08～SRV 11出土遺物実測図 (1/4)	389	第391図 V造構造層 (1/100) ①	397
第388図 柱穴出土遺物実測図 (1/4)	390	第392図 V造構造層 (1/100) ②	398

第VI調査区

第393図 VI区A-A' 土層断面図 (1/40)	399	第417図 SBM 11平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/2)	421
第394図 VI区B-B' 土層断面図 (1/40)	400	第418図 SBM 12平・断面図 (1/60)	421
第395図 VI区C-C', D～J十層断面図 (1/40)	401,402	第419図 SBM 13平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	422
第396図 SHVI 01平・断面図 (1/60)	403	第420図 SBM 14平・断面図 (1/60)	423
第397図 SHVI 02平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	404	第421図 SHVI 01断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	424
第398図 SHVI 03平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	405	第422図 SHVI 02平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	424
第399図 SHVI 04平・断面図 (1/60)	406	第423図 SDVI 01断面図 (1/20), 出土遺物実測図 (1/4)	425
第400図 SHVI 05平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	406	第424図 SDVI 15断面図 (1/20)	426
第401図 SHVI 06平・断面図 (1/60), 山土遺物実測図 (1/4)	406	第425図 SDVI 03-SDVI 16断面図 (1/20), 山土遺物実測図 (1/4)	426
第402図 SHVI 07平・断面図 (1/60)	407	第426図 SXVI 01断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	427
第403図 SHVI 08平・断面図 (1/60)	406	第427図 SXVI 04平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	428
第404図 SHVI 12-SDVI 14平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	406	第428図 SXVI 05平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	429
第405図 SBVI 01平・断面図 (1/60)	409	第429図 SXVI 09出土遺物実測図 (1/4)	429
第406図 SHVI 01出土遺物実測図 (1/4)	411	第430図 SXVI 09平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/4)	429
第407図 SBVI 02平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	412	第431図 柱穴七遺物実測図 (1/4)	430
第408図 SBVI 03平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	413	第432図 包含層出土遺物実測図 (1/4) ①	431
第409図 SBVI 04平・断面図 (1/60)	414	第433図 包含層出土遺物実測図 (1/4) ②	432
第410図 SBVI 05平・断面図 (1/60)	415	第434図 包含層出土遺物実測図 (1/4) ③	433
第411図 SHVI 06平・断面図 (1/60)	416	第435図 包含層出土遺物実測図 (1/4) ④	434
第412図 SBVI 07平・断面図 (1/60)	417	第436図 包含層出土遺物実測図 (1/4) ⑤	435
第413図 SBVI 08平・断面図 (1/60)	418	第437図 包含層出土遺物実測図 (1/4) ⑥	436
第414図 SBVI 08断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	419	第438図 予備調査トレンチ出土遺物実測図 (1/4)	437
第415図 SBVI 09平・断面図 (1/60)	420	第439図 VI区造構造層 (1/100) ①	441
第416図 SBVI 10平・断面図 (1/60)	420	第440図 VI区造構造層 (1/100) ②	442

第VII調査区

第441図 SHVI 01平・断面図 (1/60), 山土遺物実測図 (1/4)	444	第446図 SKVI 07平・断面図 (1/60), 山土遺物実測図 (1/4)	449
第442図 SEVI 02平・断面図 (1/60)	445	第447図 SKVI 08平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)	449
第443図 SEVI 02出土遺物実測図 (1/4)	446	第448図 SXVI 01平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/2)	450
第444図 STVI 01平・断面図 (1/40), 山土遺物実測図 (1/4)	448	第449図 包含層出土遺物実測図 (1/4)	451
第445図 STVI 02平・断面図 (1/40)	448		

自然科学分析

第450図 岐阜遺跡出土土器の鉄分比較 K-Ca 敷布図	457	第453図 草原遺跡と名古屋市内各遺跡出土川津B層土器の比較 Rb-Sr 敷布図	458
第451図 岐阜遺跡出土土器の鉄分比較 Rb-Sr 敷布図	457	第454図 香川県、草原遺跡IV-3区 SHI 04の植物珪酸体分析結果	477
第452図 西園遺跡と名古屋市内各遺跡出土下川津B層土器の比較 K-Ca 敷布図	458		

第 455 図 原間遺跡の櫛突	478	第 460 図 原間遺跡の木材 V	483
第 456 図 原間遺跡の木材 I	479	第 461 図 原間遺跡の木材 VI	484
第 457 図 原間遺跡の木材 II	480	第 462 図 植物珪酸体の顕微鏡写真 - 50 μm	485
第 458 図 原間遺跡の木材 III	481	第 463 図 梁間遺跡遺構立地分類図	487
第 459 図 原間遺跡の木材 IV	482	第 464 図 整穴住居分布図	494
 第 1 表 四国横断自動車道（津田～引田）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧①		3	
第 2 表 四国横断自動車道（津田～引田）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧②		4	
第 3 表 調査の体制		7	
第 4 表 調査区の変更・変表		19	
第 5 表 地下分析一覧表 (%) ただし、Rb, Sr, Zr は ppm		485	
第 6 表 地下分析一覧表 (%) ただし、Rb, Sr, Zr は ppm		496	
第 7 表 原間遺跡における歯型同定結果		474	
第 8 表 原間遺跡における歯型同定試料・結果		475 - 476	
第 9 表 香川県・原間遺跡における植物珪酸体分析結果		477	
第 10 表 整穴住居一覧		495	

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経過

四国横断自動車道津田～引田間の建設については、平成5年度に建設大臣から日本道路公団總裁に対して建設の施工命令が下され、平成6年度に路線の中心杭の打設が行われた。

これに伴う埋蔵文化財保護については、平成4年度から県教育委員会と日本道路公団高松建設局とで事前協議が開始された。平成7年6・7月には県教育委員会が国庫補助事業として分布調査を行い、津田～引田間については22地区について埋蔵文化財の保護に配慮する必要があることを日本道路公団に通知した。日本道路公団は県教育委員会の意見を踏まえ、平成7年10月文化庁と協議を行い、平成8年1月文化庁から「工事の施工に先だって発掘調査を実施すること」等の回答がなされた。これにより、平成4年度からの事前協議は終了し、平成8年4月、県教育委員会と日本道路公団とで埋蔵文化財発掘調査についての委託契約が締結され、さらに県教育委員会と財團法人香川県埋蔵文化財センターとの発掘調査の委託契約が締結された。

一方、県教育委員会では明石大橋開通にあわせた津田～引田間の高速道路の整備は香川県の緊急かつ重要な課題であることから、平成8年度及び9年度に文化財専門職員を新規採用し、調査体制の充実を図ることで対応した。

津田～引田間22地区の調査対象地区のうち、大内町内にはその内の11地区がある。平成8年度からは、この調査対象地区的具体的な遺跡の内容を把握するため、用地買収の進捗にあわせて、予備調査を実施し、隨時本調査の範囲を確定した。

平成12年度現在の遺跡位置及び遺跡内容は第1図及び第1・2表のとおりである。

原間遺跡は、前記の平成7年度の県教育委員会による22地区のうち、大内町原間地区にあたり、平成8年から現地踏査を中心とした予備調査を実施した。平成9年4月からは昨年度に引き続き、主として平野部の予備調査を実施し、本調査の範囲を確定し、引き続き本調査を実施した。また、本調査に併行して丘陵部の予備調査を実施し、丘陵部本調査の範囲を確定し、平成10年度に丘陵部の本調査を実施した。

なお整理作業については、平成12年度4月より開始し、平成13年9月30日に終了した。

参考文献

- 『埋蔵文化財試掘調査報告Ⅸ 国道バイパス等事業予定地内の調査』香川県教育委員会 1996.3
- 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成8年度』香川県教育委員会他 1997.3
- 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』香川県教育委員会他 1998.3
- 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』香川県教育委員会他 1999.3
- 山下平重『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十六番 金毘羅山遺跡・塔の山南遺跡・庵の谷遺跡』香川県教育委員会、財團法人香川県埋蔵文化財調査センター他 2000.8

第1図 四国横断自動車道（津田～引田）埋蔵文化財包蔵地（遺跡名番号）



遺跡名		地区名	所在	調査面積(m ²)	調査期間	遺構	遺物	備考
1	中谷遺跡	中谷	大川郡津田町鷺羽	518	8.10.1~9.	1.31	中世：柱穴 弥生：溝	瓦器、土師器
2	大山遺跡	大山	大川郡津田町鷺羽	2,113	8.10.1~9.	1.31	中世：柱穴 弥生：溝 漢：土壙墓	瓦器、土器、瓦器、 土師器
③	馬籠A ～D	馬籠A ～D	大川郡大内町馬籠	620	9. 7. 1~9.	8.31	(予備調査)	平成9年度概報で報告完了
④	小砂	小砂	大川郡大内町小砂	100	9. 6. 1~9.	6.30	(予備調査)	平成9年度概報で報告完了
5	坪井遺跡	中山	大川郡大内町中山	6,566	10. 9. 1~11.	3.31	奈良：掘立柱建物跡 刻印付須恵器、黒色土 器	坪井遺跡」として報告書刊行
6	三段出口遺跡	三段	大川郡大内町三段	135	11. 7. 1~11.	7.31	(予備調査)	平成13年度概報で報告完了
				6,370	11. 4. 1~11.	6.30	近世：砂糖甕	平成13年度概報で報告完了
⑦	町田	大川郡大内町町田		69	10. 9. 1~10.	9.30	(予備調査)	平成10年度概報で報告完了
8	橋谷A	橋谷A	大川郡大内町水主橋谷	1,000	11. 3. 1~11.	3.31	(予備調査)	平成11年度概報で報告完了
	B			1,578	9. 7. 1~10.	3.31	弥生：掘立柱建物跡 ・溝・川	平成11年度概報で報告完了
	C			460	8.12. 1~8.	12.31	(予備調査)	平成9年度概報で報告完了
⑨	高原	高原	大川郡大内町水主高原	11	9. 9. 1~9.	9.30	(予備調査)	平成12年度概報で報告完了
10	金毘羅山遺跡	下屋敷	大川郡大内町水主下屋敷	446	8.11. 1~8.	11.30	(予備調査)	「金毘羅山遺跡」として 報告書刊行
				100	10. 3. 1~10.	3.31	(予備調査)	平成12年度概報で報告完了
				3,600	10. 4. 1~10.	8.31	弥生：竪穴住居跡、 縄文土器、青銅 器	「金毘羅山遺跡」として 報告書刊行
				1,300	11.12. 1~11.	12.31	古墳：竪穴住居跡 式石室(予備調査)	平成12年度概報で報告完了
11	塔の山南遺跡	別所	大川郡大内町川東社の端	15	9. 9. 1~9.	9.30	弥生土器、墨穴 式石室(予備調査)	塔の山南遺跡」として報 告書刊行
				1,300	11. 1. 1~11.	3.26	弥生：埴輪群	平成9年度概報で報告完了
12	西谷遺跡	枝の堀	大川郡大内町川東西谷	2,092	9. 6. 1~10.	3.31	弥生：溝、 土器、 柱立建物	弥生土器 土師器

第1表 四国横断自動車道(津田～引田)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧①

13	原間遺跡	原間	大川郡大内町川東原間	500 19,254 24,243	9. 2. 1~9. 2.28 9. 4. 1~10. 3.31 10. 4. 1~11. 3.31	(予備調査) 弥生・縄文住居跡・ 撫立柱建物跡	弥生土器、須恵 器、土師器	平成13・14年 度「原間遺跡 Ⅰ・Ⅱ」とし て報告書刊行
14	極端遺跡	極端	大川郡白鳥町西藤井	3,590	10.12. 1~11. 3.31	弥生・縄文 古墳：古墳 占塙：古墳	弥生土器、須恵 器、耳環、铁鍊、 青銅鏡	平成14年度 度「極端」とし て報告書刊行 予定
15	成重遺跡	成重	大川郡白鳥町白鳥成重	1,500 1,647 14,650	9. 2. 1~9. 2.28 10. 12. 1~11. 10.31 9. 4. 1~10. 3.31	(予備調査) 弥生・縄文住居跡・ 古墳：古墳 占塙：古墳	弥生土器、石器、 磁器、銅錢	平成14年 度「成重」とし て報告書刊行
16	谷遺跡	谷	大川郡白鳥町白鳥谷	111 2,741 900	10. 7. 1~10. 7.31 11. 9. 1~12. 3.31 12. 4. 1~12. 8.31	(予備調査) 弥生・縄文住居跡・ 撫立柱建物跡	弥生土器、石器、 磁器、銅錢	平成14年 度「谷」とし て報告書刊行
17	前門池西遺跡	池の奥	大川郡白鳥町白鳥谷	3,566 2,500 1,050	9.11.17~10. 3.31 10. 4. 1~11. 3.31 11. 7. 1~11. 8.31	弥生・縄文住居跡 撫立柱建物跡	弥生土器、石器、 土師器、須恵器 土師器、須恵器 土師器、須恵器	平成14年 度「前門池西」 として報告書刊行
18	池の奥遺跡	池の奥	大川郡白鳥町白鳥谷	8,700	10. 6. 1~11. 3.26	弥生・縄文住居跡・ 土塙	弥生土器、鐵製 石劍	平成14年 度「池の奥」 として報告書刊行
⑨ 法月	大川郡白鳥町福来			510	10. 1. 1~10. 1.31	(予備調査)		平成9年度概 観で報告完了
20	天王谷遺跡	塗屋	大川郡引田町引田中山	1,200 1,475 6,038	11. 1.22~11. 3.24 11. 7. 1~11. 8.31 10. 8. 1~11. 3.31	中世：撫立柱建物跡 十輪器、瓦 ・瓦窯	十輪器、瓦	平成13年度整 理中
21	川北遺跡	塗屋	大川郡引田町小海	554 2,300	10. 4. 1~10. 5.31 11. 4. 1~11. 6.30	(予備調査) 撫立柱建物跡	土師器、石器	平成13年度整 理中
22	迹田石垣遺跡	迹田	大川郡引田町引田迹田	1,450	10.12. 1~10. 1.29	弥生：縄文住居跡 (予備調査)	弥生土器、須恵器 土師器、石器	平成13年度整 理中
23	迹田谷下池遺跡	迹田	大川郡引田町引田迹田	310 3,800	9. 7. 1~9. 10.31 10. 4. 6~10. 8.31	(予備調査) 撫立柱建物跡 中世：土燒	弥生土器、六器 須恵器、土師器 土師器	平成13年度整 理中
24	鹿庭遺跡	鹿庭	大川郡引田町吉田					平成12年度 度「鹿庭」 として報告書 刊行
25	鷺の谷遺跡	黒羽	大川郡引田町黒羽下内	3,978	9.10. 1~10. 3.31	弥生・縄文住居跡・ 土塙	弥生土器、石器	平成12年度 度「鷺の谷遺跡」 として報告書 刊行
	合計							
				145,724				

第2表 四国横断自動車道(津田～引田)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧②

第2節 調査の経過と体制

1 調査の経過

原間遺跡は、平成8年に現地踏査を中心とした予備調査を開始し、平成9年度4月～5月にかけて全調査対象面積63,487m²を対象に予備調査を実施した後、平成9年度は19,254m²が本調査面積となり、ただちに本調査を開始した。この一方当初未買収部分・未伐採部分・宅地部分等で予備調査を実施できなかった部分については、平成10年度の本調査面積を確定するために平成9年度に予備調査を併行して実施し、本調査対象面積24,243m²を確定した。

以上の結果、調査期間は平成9年4月1日から平成11年3月31日の2カ年で、調査面積は43,997m²となった。

発掘調査は2班体制の調査員6名で、直営方式で実施した。

整理作業は平成12年4月～平成13年9月で、調査員1名、整理作業員8名で行った。

今回の整理報告は「原間遺跡Ⅰ」として平成13年度に刊行し、古墳時代については継続して実施する埴輪遺跡の整理作業結果と共に「原間遺跡Ⅱ－古墳時代編－・埴輪遺跡」として平成14年度に刊行する予定である。

2 発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査及び整理作業の体制は第3表のとおりである。

その他、日々雇用職員として発掘調査に携わった方々は以下のとおりである。

現場整理作業員 川畑妙子、五十嵐由美

現場事務員 大嶋見芳子

普通作業員 荒川義行、入谷慶博、上枝貞義、遠藤増雄、金香 勝、川原武夫、国方 剛、倉本一也、佐々木勇、杉原章哲、清水信由、砂川正澄、十河 創、高木輝雄、瀧 武士、多田英明、遠山泰男、富岡晴美、中川浩二、中川恒夫、中川弘美、前田千太郎、間島健吉、松木正勝、三宅恒義、六車静夫、山坂浩樹、芳田 司、

軽作業員 池田佳苗、泉千代子、遠藤トミ子、遠藤マサ子、太田政栄、鎌田敦子、鎌田敏子、金香栄子、川田安子、川越マユミ、木村育子、日下弘恵、楠木美和子、河野ミチ子、高木マス子、小坂葉子、小島直美、酒井俊子、佐廣志保、白井久美子、杉本範子、鈴江由香、十河美枝子、高木ミチ子、谷口美智子、谷次義子、千代川高子、筒井圭子、寺元文化、土居キミエ、中川真理子、中山和子、中山美智子、蓮井シゲミ、濱 明子、濱野いづみ、百村幸子、平川勤美、古川静子、前田功江、松本 環、三木ひとみ、百姓亨子、六車ふみ子、村尾マサエ、元山富子、矢木和子、矢木トヨ子、矢野時子、山崎美津子、山田君子、山本ゆか、米川武子、和田悦子

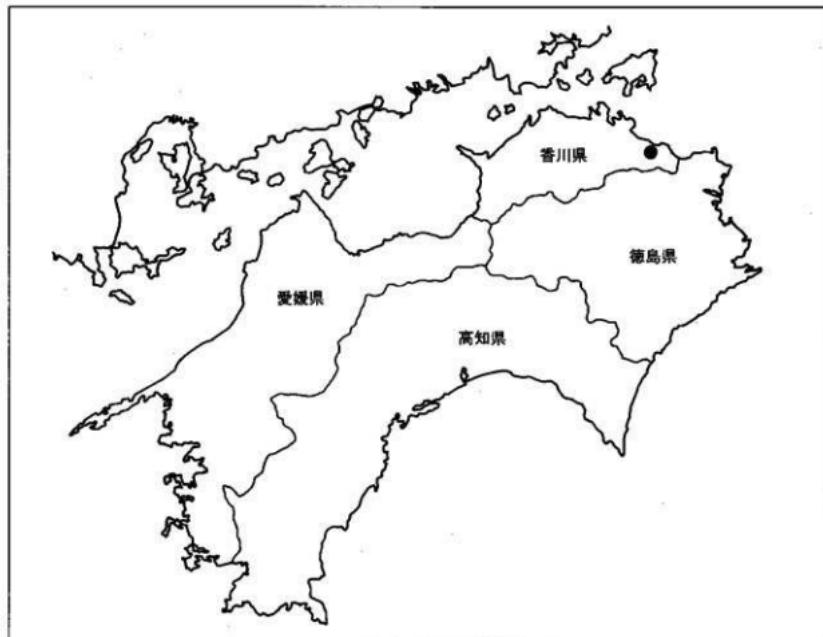
学生アルバイト 塙 雄一、定住祐作、中川ゆう子、中嶋飛鳥、長町安希子、水口由香、六車美保、六車陽子、矢木祐介、八木良弘

整理作業に携わった方々は以下のとおりである。

整理員 西橋右子

整理補助員 若山淳子、青屋真理、

整理作業員 加藤恵子、池内妙子、森川理恵、藤澤（佐々木）明子、乗松（宮武）典子、塩崎真由美



第2図 原間遺跡位置図

香川県教育委員会		文化行政課														
職務	括	平成9年度			平成10年度			平成11年度			平成12年度			平成13年度		
		課長	副長	補佐	課長	副長	補佐	課長	副長	補佐	課長	副長	補佐	課長	副長	補佐
埋蔵文化財	調査技術員	打越 主事	北原 主幹	星加 主幹	北原 主幹兼係 副主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹	大森 主事								
		(6.1～)	和美 事務官	隆宏 事務官	弘明 事務官	和利 事務官	和利 事務官	忠彦 事務官								
			松村 (東史)					小野 田中	小野 田中	西川 前田						
								秀文 和也	秀文 和也	和也 和也						
								(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)
総括	所次官	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長
調査	調査技術員	調査技術員	調査技術員	調査技術員	調査技術員	調査技術員	調査技術員	調査技術員	調査技術員	調査技術員	調査技術員	調査技術員	調査技術員	調査技術員	調査技術員	調査技術員
調査	所次官	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長	大森 長
		佐藤 主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹	佐藤 主幹
		和也 和也	和也 和也	和也 和也	和也 和也	和也 和也	和也 和也	和也 和也	和也 和也	和也 和也	和也 和也	和也 和也	和也 和也	和也 和也	和也 和也	和也 和也
		(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)	(~5.31)

第3表 調査の体制

財團法人香川県埋蔵文化財調査センター

第2章 原間遺跡の調査

第1節 立地と環境

1 地理的環境

原間遺跡は香川県東部の大内町に広がる平野の南部、大川郡大内町川東原間1356番地外に所在する。ここは大内町にある平野内では南東隅の奥まった部分に当たり、東・西・南には丘陵が、北東には原間池を挟み湊川があり、現在の行政区画である白鳥町に接する。遺跡は東西を阿讃山脈の分脈である矢筈山系から北方向に延びる丘陵に、北を秋葉山から西方向に延びる丘陵に挟まれ、僅かに北西方向に開けた東西約300m、南北約700mの狭い平野である。その平野の東部、東丘陵裾を現在2級河川古川が北上し、東丘陵と秋葉山から南に延びる丘陵の間には現在原間池がある。微地形的には小平野（開削低地）の西側に所在する西丘陵裾から北方向に延びる微高地が確認でき、地形は南北方向から北東方向に傾斜している。

調査区は小平野の中央部分にあたり、その傾斜がさらに緩やかになる部分にある。

2 歴史的環境

①周辺の遺跡（第3図）

原間遺跡周辺には、主として弥生時代～古墳時代の遺跡が所在する。

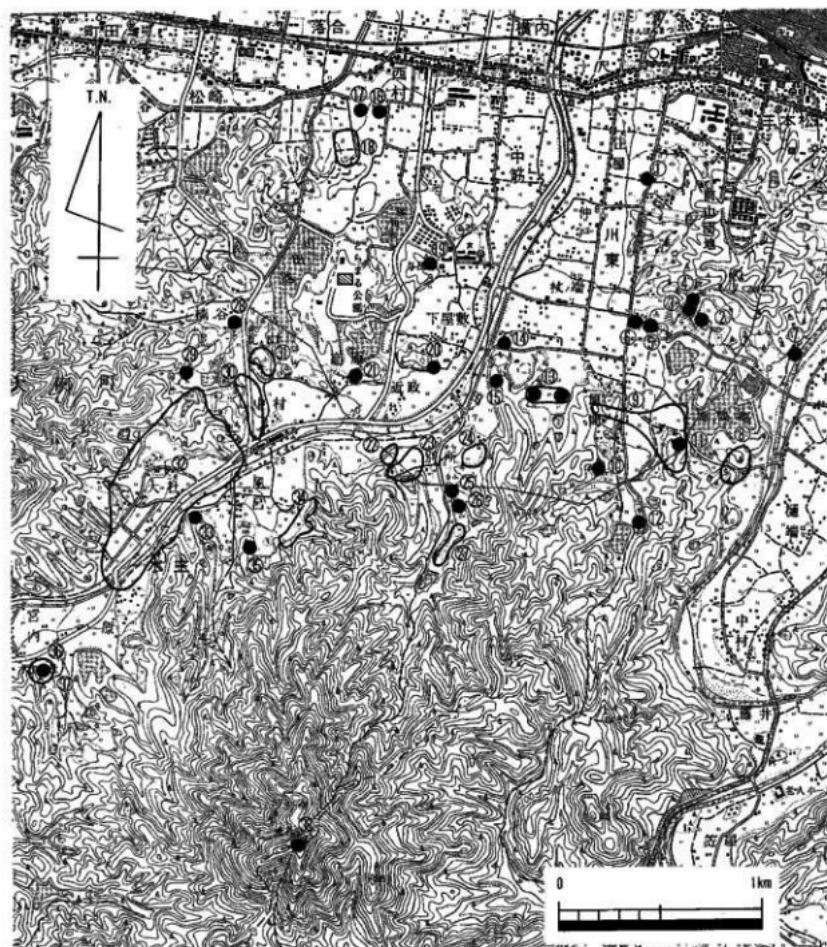
旧石器時代の遺跡は明確ではないが、遺物は当遺跡の西方の与田川の河原でスクレイバーや尖頭器が明治末年から昭和初期にかけて採集されている大社遺跡がある。与田川の河原では大内ダムが出来るまで、大雨の後に当該期の遺物がかなり落ちていたと言われている。

縄文時代の遺跡は平成9年度の調査である白鳥大内インター線の事前調査で実施した原間遺跡（H9県道原間遺跡）、四国横断自動車道建設に伴い発掘調査で実施した金星羅山遺跡、従来からの大内町水主西内にある西内遺跡がある。遺構としてはH9県道原間遺跡で検出した縄文時代後期の自然流路内に漁労施設と考えられる規則的に配置された杭跡が確認されている。しかしこれ以外は確認されておらず、遺物としては与田川上流域で発見された石鏃・石斧・すり石などが水主神社宝物殿に保管されているとの与田川中流域の金星羅山遺跡から縄文時代前期初頭と考えられる玦状耳飾と土器が出土しているのみである。

旧石器・縄文時代の遺構は与田川上流域、大内町水主を中心に行なわれていたことが解る。

弥生時代では前期の遺跡として落合遺跡がある。農業基盤整備事業に伴い発掘調査が行われ、多量の弥生土器が出土している。中期後半に比定できる遺跡として大内町南西部の水主神社遺跡があり、現在の水主神社を中心とする地域から様々な遺物が採集されている。後期になると飛谷遺跡・別所遺跡・中善寺遺跡などのように与田川やその支流を中心として集落が成立する。今回報告の原間遺跡の調査により古川上流域でも弥生時代後期の集落を確認したことは大内町内の集落の展開過程を解明するに当たり貴重な資料となつた。

古墳時代には当遺跡周辺でも数基の古墳が確認されている。古墳時代前期では当遺跡の北に位置する香川県下の前方後円墳で最も東に位置する大日山古墳が築造されている。この古墳の規模は全長38m、



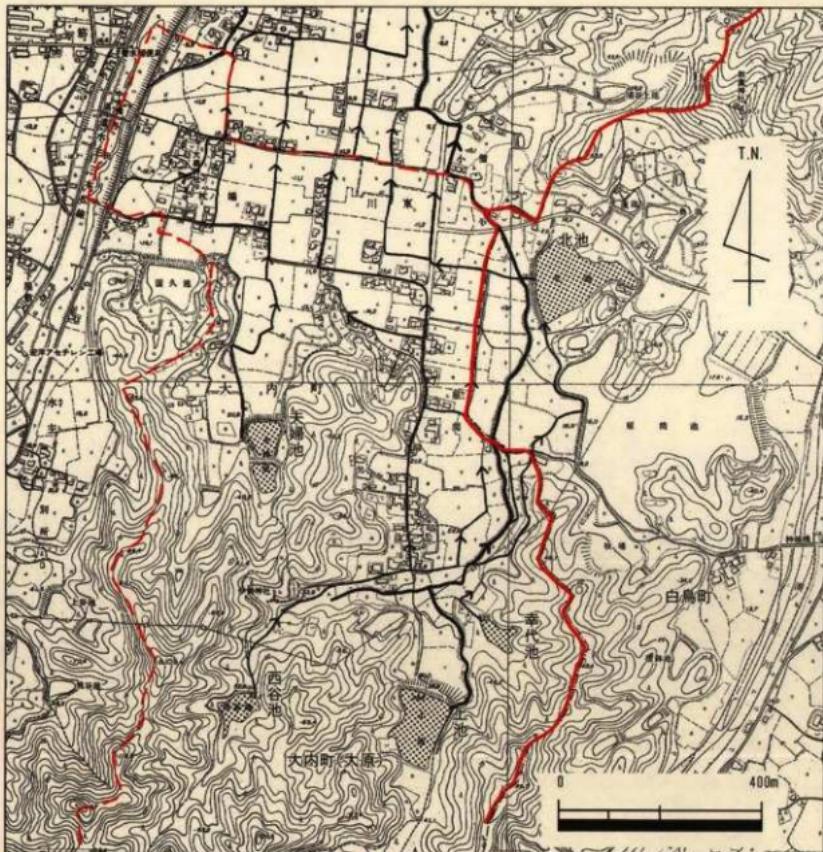
- | | | |
|-----------------|------------------|-------------------|
| ① 住屋遺跡 | ⑭ 杖の端遺跡(古墳時代) | ㉑ 飛谷遺跡(弥生時代) |
| ② 高松廃寺(平安時代) | ⑮ 塔の山南遺跡 | ㉒ 楠谷遺跡 |
| ③ 大日山1号古墳(古墳時代) | ⑯ 西村古墳(古墳時代) | ㉓ 楠谷古墳(古墳時代) |
| ④ 大日山2号古墳(古墳時代) | ㉐ 清塚古墳(古墳時代) | ㉔ 仲善寺遺跡(古墳時代) |
| ⑤ 大日山3号古墳(古墳時代) | ㉑ 落合遺跡(弥生時代) | ㉕ 北山遺跡(奈良時代) |
| ⑥ 小僧遺跡 | ㉒ 与田寺山古墳(古墳時代) | ㉖ 大社遺跡(旧石器～弥生時代) |
| ⑦ 積端遺跡 | ㉓ 金毘羅山遺跡(縄文～中近世) | ㉗ 長尾山遺跡(古墳時代) |
| ⑧ 神越古墳(古墳時代) | ㉔ 高原遺跡(弥生時代) | ㉘ 風呂遺跡(弥生時代) |
| ⑨ 原間遺跡(弥生～平安時代) | ㉕ 笠塚遺跡(弥生時代) | ㉙ 岩瀬庵古墳(古墳時代) |
| ⑩ 原間1号墳(古墳時代) | ㉖ 城の内遺跡(弥生～平安時代) | ㉚ 水主神社古墳(古墳時代) |
| ⑪ 原間2号墳(古墳時代) | ㉗ 別所池田遺跡(弥生～中世) | ㉛ 水主神社遺跡(弥生時代～中世) |
| ⑫ 幸代池西遺跡(弥生時代) | ㉘ 別所古墳(古墳時代) | ㉜ 虎丸城跡(室町時代) |
| ⑬ 西谷遺跡(弥生～室町時代) | ㉙ 別所遺跡(弥生時代) | |

第3図 周辺遺跡位置図

後円部の径 20 m、高さ 3 m で、前方部の西側は一部削平されていて、形状には不明な点があるが、くびれ部等の状況から推定すれば柄鏡状を呈する前方後円墳の可能性が高い。また、古墳時代後期のものでは当遺跡の南方にある片袖式の横穴式石室を有する原間 1 号墳がある。その規模は玄室長 3.8 m、奥壁幅 2.1 m、玄門内側で幅 1.9 m、玄門幅 1.4 m、玄室高 2.4 m、玄門高 1.3 m を測り、玄門と玄室の比高差は 0.9 m である。

奈良～平安時代のものとしては与田寺があげられるが行基草創の伝説を持つため、奈良時代建立と考えられるがちだが、当時の建立を裏付ける資料が存在しないため立証することは難しいのが現状である。

中世以降では虎丸城跡がある。当遺跡南西の標高 420 m の虎丸山山頂にある。旧大内郡を領有した寒川氏が構えた城である。南北朝時代に守良親王が入城したという言い伝えがあり、戦国時代には土佐の長宗我部氏の攻撃を受けたとされている。



第4図 原間地区水利図

②原間地区的行政区画について

ところで原間遺跡は現在の行政区画でみると遺跡が所在する小平野部分はほぼ東西に分割するように大内町と白鳥町の境界線が引かれており、その西半分が大内町に属し、東半分が白鳥町に属している。しかし、この狭い平野である原間地区は元々白鳥町に属していたことが寛永十（1633）年の「讃岐国絵図」、江戸中期～末期頃の「東讃郡村免名録」、明治年間の「替水村史稿本」・「明治二年二月庄屋、組頭等の印鑑届改」・「山崎家文書」等で解っている。

詳細について説明すると原間地区的行政区画を示す資料で、最も遅れる資料は江戸時代寛永十（1633）年の「讃岐国絵図」で、白鳥郷内に「原間」の地名がみられ、また江戸時代の「東讃郡村免名録」の白鳥村にも「原間免」の記述がある。

明治時代では「明治二年二月庄屋、組頭の印鑑届改」・「山崎家文書の明治十一年八月、壳渡証文」の記述をみると「白鳥村・・高嶋氏」とあることから白鳥村に属していたことが解る。しかし、「山崎家文書の明治十三年正月十四日の事務引継演舌書」には「川東村（現大内町）高嶋氏」とあることから、原間地区は明治十一年八月から明治十三年一月十四日の間に白鳥村から川東村（現大内町）に移ったと考えられる。

資料によると明治十二年三月一日に戸長事務の引継が行われ、区画編成法の改正および郡区町村制が施行されていることから、おそらくこの時に高島家村近の原間が川東村に移り、現在の行政区画になつたものと考えられる。

また原間池の築造に関する記事でも原間地区の行政区分の変遷の経緯が確認できる。

原間池は満水面積 8.58 ヘクタール、貯水量 280 千立方メートルを計る。原間池の築造時期は明らかではないが、高松初代藩主松平頼重が讃岐に入封して四年目の正保二（1645）年の頃と考えられている。それまでこの地は原間地区から白鳥町に向かって緩やかな谷筋で、地形に応じて小池が点在し、尚かつ白鳥村の庄屋であり、原間池築造の池奉行を努めた高嶋家の田地五十六反が所在していたようである。田地が所在し、西から東に向けて緩やかに傾斜する谷筋のため、この地で貯水量を確保するためにはこの緩やかな谷筋の西側と東側に堤防を築かなければならず、堤防の構築できた池である。

原間池の貯水は渓川上流の笠屋付近の井堰から渓川西側を延長約 2km 導水し、取り込んでいる。この池の水掛かりは渓川西岸の水田と白鳥地区で、白鳥地区への導水は渓川に堰を掛け通水していたようである。これも渓川の河床が低いためであり、白鳥町にとって原間池は重要な位置を占めていたものと考えられる。ちなみに「樋端」の地名は渓川に堰を掛け通水することから付けられたものである。

それでは当時どこまでが白鳥村であったかについては現時点では不明であるが、現在確認できる状況証拠により復元したい。

まず第4図により川東原間地区的水利（水掛かり）をみると現大内町スポーツセンターの北に面する東西の町道までが古川とその上流（原間地区奥部）に造られた上池及び西谷池の水掛かりとなる。さらに二町北側の与田川中央橋から延びる東西の町道までの杖の端地区は国方池（現大内町スポーツセンター）・夫婦池と川東地区的北池が水掛かりとなる。それ以北は与田川の水利になることが解っている。

また明治初年の字切り図を見ると概ね与田川中央橋から延びる東西の町道までが替水村「大原」となっており、この町道を境として字境がある。またこの字境は与田川の水掛かりと古川、原間地区・杖の端地区に所在する溜池との水掛かりの境界と合致している。

このことから水利による村境・字境は妥当性があり、水掛かりを基準として白鳥村原間はこの町道以南の地区であったと考えられる。

第2節 予備調査

原間遺跡は四国横断自動車道（津田～引田）建設に伴い事業対象地となった区間で、香川県教育委員会が分布調査を行い埋蔵文化財の保護に配慮する必要があるとした22地区のうち、大川郡大内町川東原間（原間地区第1図-13）に所在する遺跡である。

当地区は大内白鳥インターチェンジ予定地で、対象面積が広大であり、用地取得が年度末に近かったため、平成8年度は現地踏査を中心に予備調査を実施した。

平成9年度は昨年度に引き続き4月から予備調査を再開した。この地区的対象面積は約63,487m²である。予備調査の結果、西丘陵頂部からは古墳時代中期の古墳を検出し、東丘陵からは周知の遺跡である原間2号墳（横穴式石室）の他、弥生時代・古墳時代の遺構を検出した。また平地部においては古川の隣接地で河川氾濫源となっていたが、それ以外の地域からは弥生時代～中世の遺構・遺物を検出し、43,997m²について本調査が必要と判断した。

さて平成9年度からの予備調査として、まず最初に原間地区及び周辺も含めた微地形の復元（第5図）を行うことにより、旧地形の想定と適切な予備調査トレンチの配置計画に努めた。微地形の復元の結果、古川に沿って旧流路bが確認したことと調査区西部（現県道に沿って）において南から北へと緩やかに傾斜する平地部分に僅かながら旧流路a（低地）を確認し、この両者によって挟まれた部分で僅かな微高地aを確認した。西部の低地は北方向に延びる西丘陵の東側にある僅かな谷部分から東に延びる開削低地aと平野部最高所北側から延びる開削低地bが合流し、そこから北部に旧流路a（低地）が延びる。一方調査区内で検出した微高地aは原間1号墳背後の西丘陵から東に延びる丘陵裾部から連続して東に延び、さらに北方向に屈曲し、横断道原間遺跡（本報告書掲載部分）調査区内へと延びる。この微高地aは平野部南の最高所も含めたものである。

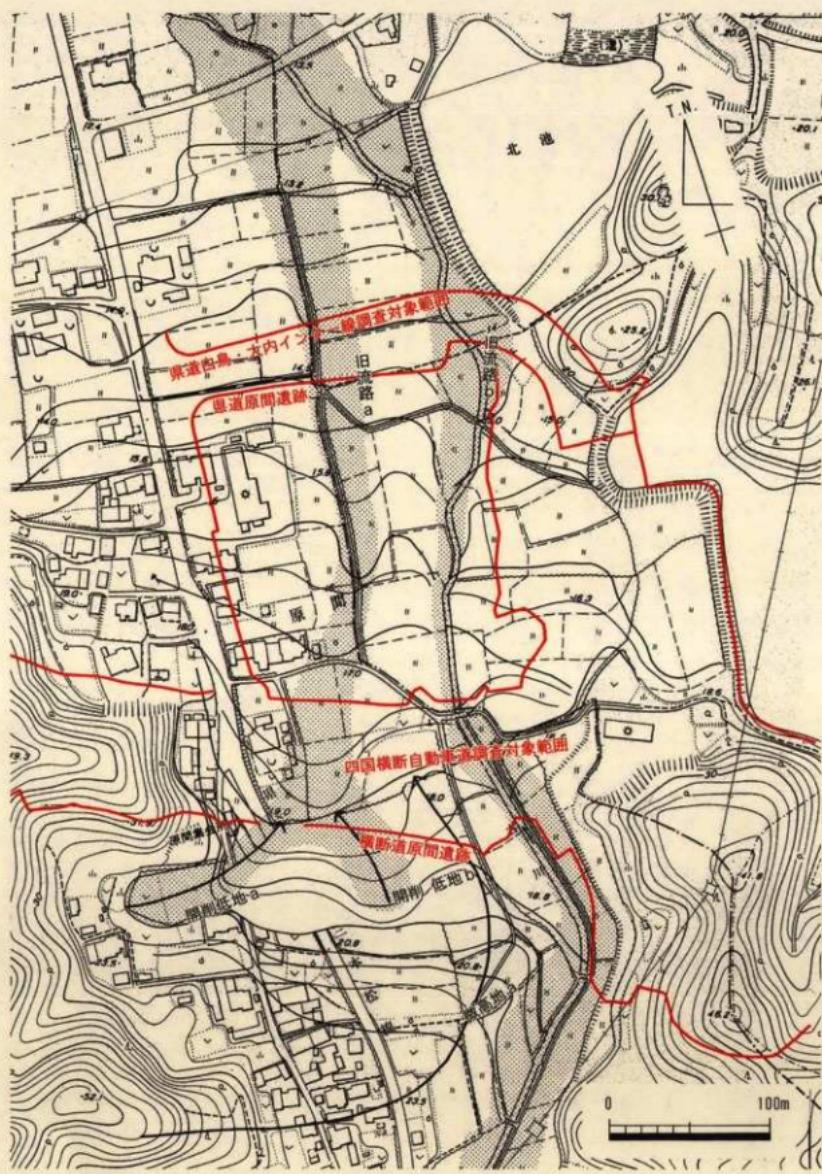
この結果を基に設定したのが横断道予備調査トレンチ配置図（第6図①～⑯原間地区）である。図示したトレンチ配置図中には文化行政課による県道試掘及び香川県埋蔵文化財調査センターによる県道予備調査トレンチ（a～m）並びに大川広域による圃場整備事業に伴う試掘トレンチ（a～c）も含めている。

ここではトレンチによるこれら全ての試掘・予備調査結果を基に本調査対象面積を決定したかについて述べたい。

平野部に設定した横断道予備調査トレンチは合計35本で、先に復元した旧地形・旧流路・低地の肩部に直交する配置となるように心がけた。また本調査対象面積の確定には文化行政課が行った試掘調査の結果も参考にした。

古川より西部の平地部分に設定したトレンチ①～⑩及びトレンチk～mの結果、旧流路（低地）と推定した部分はさらに西の丘陵裾まで広がり、かなり広い面積の低湿地部分が確認できた。また当初旧流路として北方に延びると推定していたが、トレンチ⑦・⑧では自然流路と考えられる落ち込みや土層も確認できなかった。第8図トレンチ⑧の柱状図をみると弥生時代遺構面から約20～50cm程の低地が確認できる。この低地部には土層④暗灰色粘土層、土層⑤灰黒色粘土層が水平堆積していることが解る。この水平堆積土層は水田の可能性を指摘できるが、畦畔等は確認できなかった。土層④・⑤にはほとんど遺物が混じっておらず、包含層下において遺構も検出できなかった。

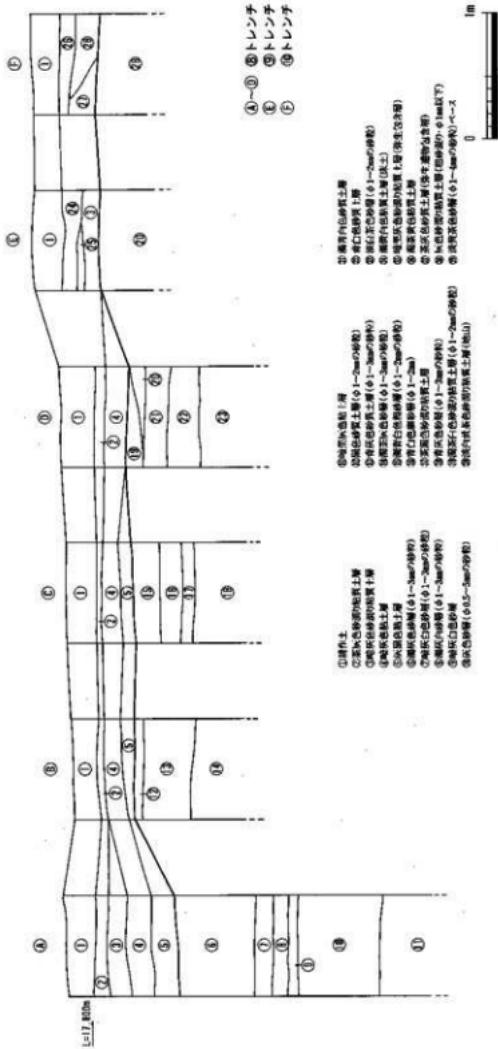
このようにトレンチ④・⑦・⑧の結果から水田域の可能性も考えられたが、水田畦畔を確認できなか



第5図 発掘調査対象範囲図・旧地形復元図

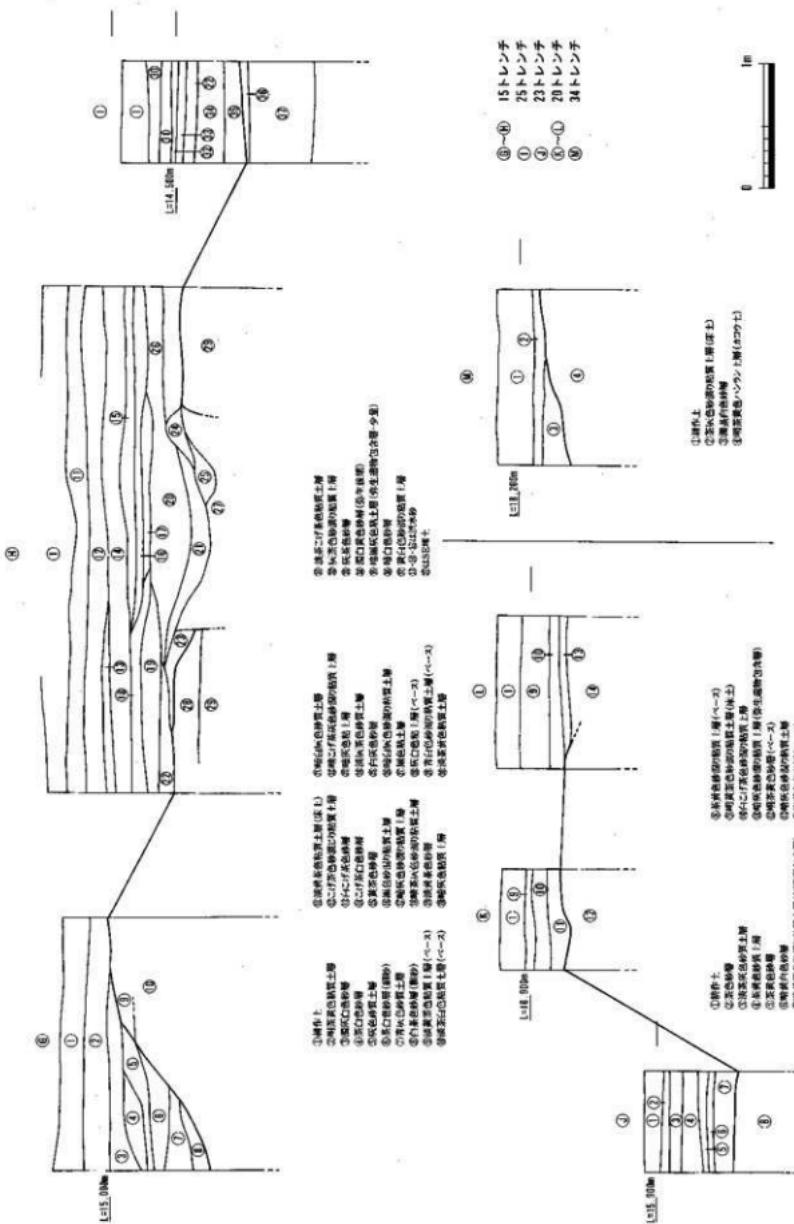


第6図 予備調査区トレンチ配置図



第1図 予備調査区トレーンチ土層柱状図(1/40)①

第8図 予備調査区トレーンチ土質柱状図(1/40)②



ったこと明確な流路跡が検出できなかったことにより、窪んだ部分に谷筋部分からの自然湧水によって低湿地 a が形成されたものと考え、低湿地部分は本調査対象面積から除外した。

一方微高地と考えていた部分ではトレント⑥・⑨・⑩・⑪から耕作土・床土下位に暗灰色砂混り粘質土・茶灰色砂質土層と砂粒を多量に含む洪水砂が厚さ 5 ~ 20 cm 程度で全域に確認でき、古川の氾濫がこの当たり全域を覆い尽くすようなものだったことが伺われる。遺構はこの洪水砂層下の淡白黄茶色砂混り粘質土上で、濃密な弥生時代後期の遺構（堅穴住居跡、柱穴等）を検出した。

一方東丘陵裾部分（現古川東側）ではトレント⑫～⑯から洪水砂の上面と下面で遺構を検出した。上面では灰～こげ茶色系の砂質土層を遺構面として、古代の遺構を検出し、下面では白灰～茶灰色系の砂層下で、かなり削平を受けた弥生時代の遺構面を検出した。

トレント⑭～⑬、④・⑤から現古川が東丘陵先端部で流路 b と c に分岐し、流路 b は現古川と同じ方向に北流し、流路 c は原間池から湊川へ延びることを確認した。またトレント a から調査区北部でも低湿地部（低湿地 b）を確認し、トレント②から原間池方向に延びる旧流路 c がかなりオーバーフローしていたことを確認した。

この旧流路 b・c 間及び低湿地 b に挟まれるように微高地 b を検出した。ここでも微高地 a と同様に洪水砂層が全面で確認でき、古川の氾濫がいかに激しかったかが解る。

また削平された丘陵部の復元も行った。まず西丘陵は予備調査トレント③の状況や地形復元を行った結果、東方向に延びる丘陵先端部が北と南に分岐し、ほぼ中央が窪むような地形となっていたことが解った。一方東丘陵は予備調査トレント⑪・⑬～⑯の状況や地形復元の結果、土砂採取される以前の地形は丘陵が北方向へはトレント⑫を設定した部分まで延び、北西方向へはトレント⑦のやや南まで延びていることを確認した。その結果東丘陵の先端は 3 方向に分岐し、僅かに丘陵先端部が延びることが確認でき、西側トレント⑭部分はその丘陵先端部に挟まれた窪み部分となり、東側でも同じような窪み部分を確認した。

この予備調査による結果を踏まえて本調査部分が確定し、設定したのが、第 9 図の調査区配置図である。

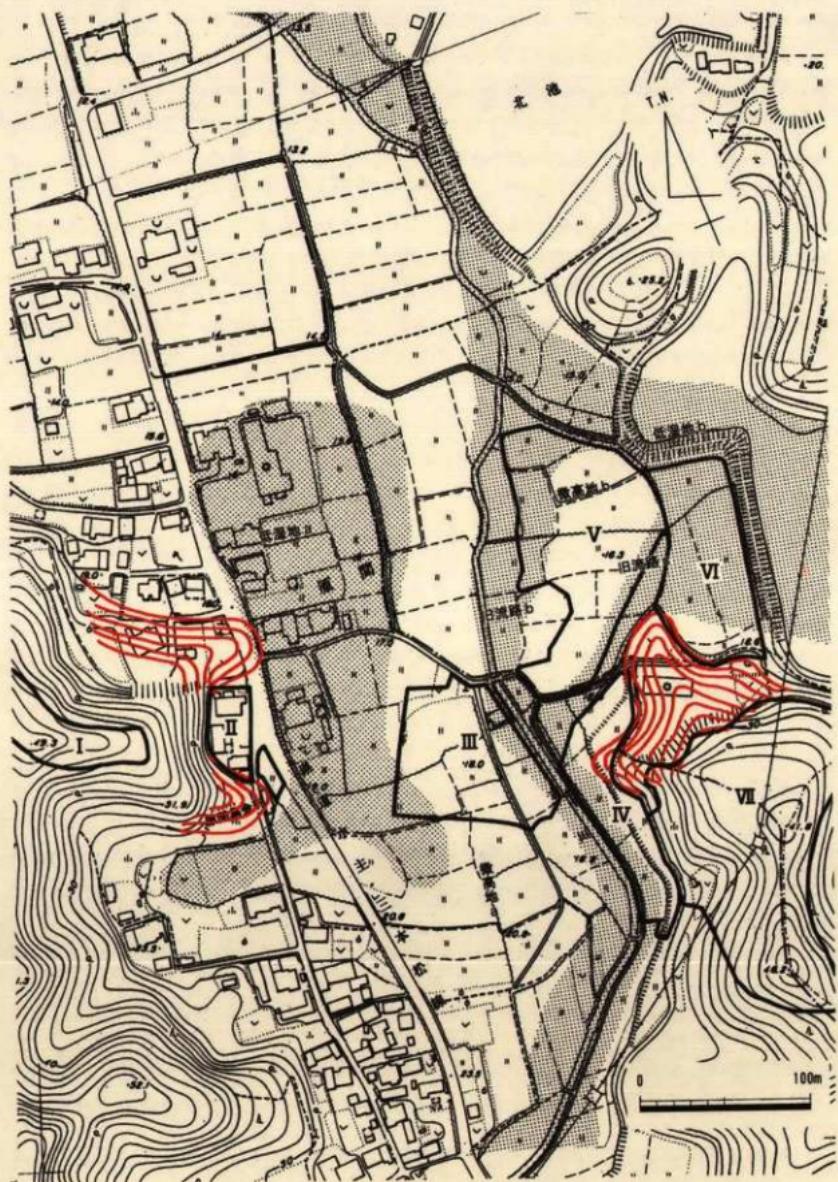
また予備調査トレントは継続して設定され、順次東西の丘陵部から極端地区にかけて行われた。その結果丘陵部分及び斜面部に 23 本、平野部に 44 本の合計 67 本が設定されることになる。

丘陵部は尾根筋に平行するように頂部稜線上に、斜面部は等高線に直行するように頂部から下方に向けて設定し、平野部は現状の地形及び諸々の制約はあるものの旧地形の復元を最大限に配慮したものと設定した。

その結果丘陵頂部に設定したトレントでは腐植土直下花崗土の地山が確認でき、斜面部では僅かに地山土が 2 次的に堆積した土層を検出した。

第 3 節 調査の方法

調査地は前節で本調査の範囲を確定した部分が現流路及び旧流路によって小区画ごとに分断されていることからそれごとに調査区名（第 I ~ XI 調査区、概報時調査区配置図）を付け本調査を実施した。しかしこの 11 区全てが今回報告する横断道原間遺跡部分ではなく、この時点で同時期に白鳥大内インター線に伴う



第9図 調査区配置図（新）・旧地形図復元図

原間遺跡（県道部分）の本調査も平行して実施していたため連続して調査区を設定した関係から県道原間遺跡部分の第V～VII調査区までを除外する結果となる。

遺構の測量については平面図はおもに航空測量で行い、その他は手書きで実施した。

整理報告に当たっては横断道部分の原間遺跡について本調査時とは別に新たに調査区名を設定し、報告する（第9図）。

その結果、第4表となった。第I調査区は西丘陵部分である。第II調査区は西丘陵と県道水主三本松線に挟まれた部分で、西丘陵東裾部に位置する。丘陵先端部に挟まれた窪み部分に位置する。第III調査区は県道水主三本松線と現古川に挟まれた部分のうち、西半分は予備調査の結果低地と判断したために本調査対象外とした部分となるため、東半分の微高地状を呈する部分である。第IV調査区は東丘陵と現古川に挟まれた部分、東丘陵西裾に位置する。第V調査区は原間遺跡北部の現古川と現古川から北東方向（原間池方向）に延びる旧流路cとに挟まれた部分である。第VI調査区は東丘陵北部に位置し、第V調査区と原間池に挟まれた部分である。第VII調査区は東丘陵部分である。

また整理報告での遺構番号はそれぞれの調査区で1から始まる番号を使用し、例えばSHI 01（第I調査区検出の竪穴住居の1番目）と呼称する。

第4表 調査区の変更一覧表

報告書	本調査・概報
第I調査区	第XI調査区
第II調査区	第X調査区
第III調査区	第I調査区
第IV調査区	第II調査区
第V調査区	第IV調査区
第VI調査区	第III・VII調査区
第VII調査区	第IX調査区

第4節 遺構と遺物

第I調査区概要

第I調査区は平野部西側の丘陵上に位置し、虎丸山から北方向に派生する丘陵がちょうど横断道用地部分において北西方向と東方向に分岐し、その分岐部分も含めてほぼその丘陵先端部までの全域が調査区である。

この西丘陵は昭和初期まで畠地として開墾されていることが、地元からの聞き取りにより調査前から解っていた。そのためかなりの削平や風雨による土砂の流失が予想され、遺構の残存状況が危ぶまれた。しかし予備調査の結果、腐植土・僅かな花崗岩バイラン土下において、削平は受けているものの古墳時代中期の古墳を6基、東に延びる丘陵先端部で弥生時代の竪穴住居跡を1棟検出した。

この丘陵先端部からは後述する平野部において検出した弥生時代の集落が眼下に見え、また北方向には大内町に広がる平野そして瀬戸内海までが一望できる。

竪穴住居跡

SHI01

SHI01は西丘陵にある第I調査区東部、東に延びる丘陵先端部の標高43.4mにおいて検出した竪穴住居跡である。一部を除き掘り方は古墳築造によってかなり削平されているが、復元すると平面形態は円形を呈する。規模は復元直径約6.75m、床面積約35.8m²、検出面からの深さは約0.15mを測る。

竪穴住居内堆積土は2層に分けられ、そのほとんどは土層①(暗やまぶき黄色砂混り粘質土層)である。

竪穴住居の構造はほぼ中央に土坑を配し、周囲に主柱穴6穴を検出した。

主柱穴は平面形態が円形で、直径0.3~0.45m、深さ0.3~0.4mを測る。

中央土坑は平面形態が隅丸の台形状を呈し、北側底面には平面形態が梢円形を呈する一段深い部分が認められる。土坑の規模は北側辺1.2m、南側辺0.7m、南北1.25m、深さ6cmを測り、北側の梢円形の落ち込みは深さ15cmを測る。堆積埋土には炭を含まず、中央土坑の南辺側に炭及び焼土面が一部確認できる。

竪穴住居内全域の包含層中から遺物が出土しているが、そのほとんど破片で散乱した状況であった。

出土遺物は弥生土器壺・甕を主としており、僅かに角閃石を含む土器(2・12)が出土している。

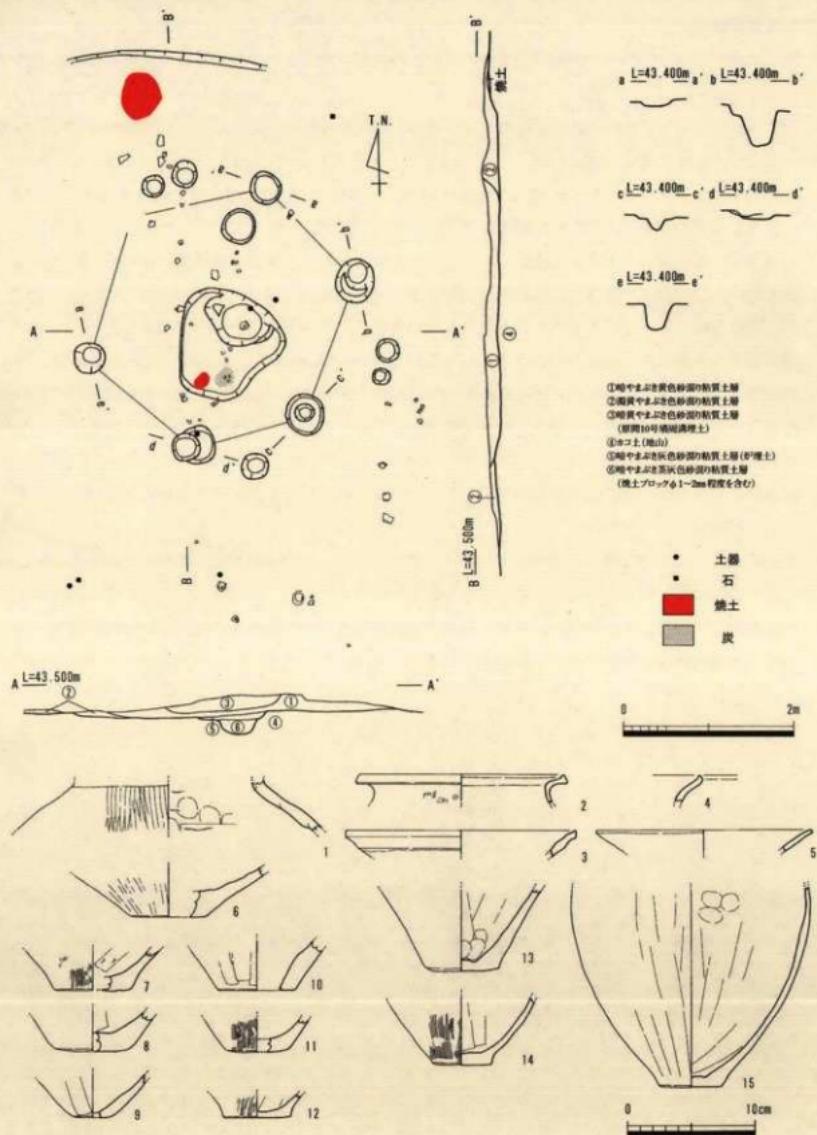
時期は出土遺物から弥生時代後期後半と考える。

第I調査区小結

西丘陵に設定した第I調査区では弥生時代の竪穴住居跡1棟を検出したのみである。この竪穴住居跡を検出した位置は西丘陵の東先端頂部で、眼下に原間遺跡弥生時代の集落が望めることから平地部分の集落との有機的な関係が指摘できる。またここからは大内町に広がる平野及び瀬戸内海まで一望でき、眺望にも優れた場所に立地する。

検出した竪穴住居には建て替えの痕跡が無く、中央土坑(炉)内には炭が少量であったことや使用期間がさほど無いこと、出土遺物も少量の土器のみであったことから短い期間しか機能していなかったことが推定される。

こういった状況から原間集落の防御的な見張り場所としての性格が強い竪穴住居と考えられる。



第10図 SHI 01平・断面図(1/60),出土遺物実測図(1/4)

第II調査区概要

第II調査区は虎丸山から北方向に派生する西丘陵の東裾と県道水主三本松線に挟まれた部分に位置する。

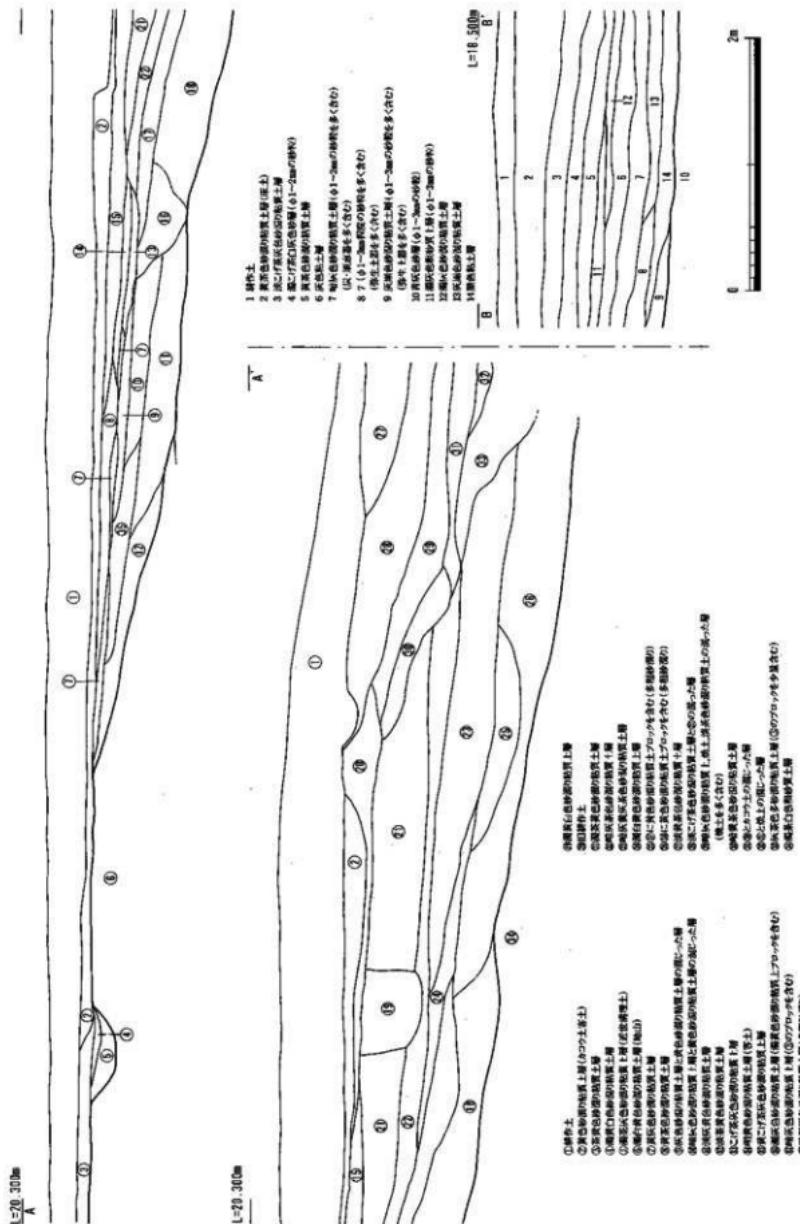
予備調査によって県道西側には低湿地aを確認し、この低湿地と西丘陵に挟まれた僅かな部分に弥生時代・古代・近世の遺構を検出した。

この調査区部分は西丘陵から東に延びる丘陵先端部が北側と南側には僅かな丘陵の突出として延び、その挟まれた部分に南北約60m、東西約20mほどの窪んだ部分が確認でき、その部分で遺構を検出した。現在はこの北側・南側の先端部は削平され、北側は宅地に、南側は町道及び水田化されている。

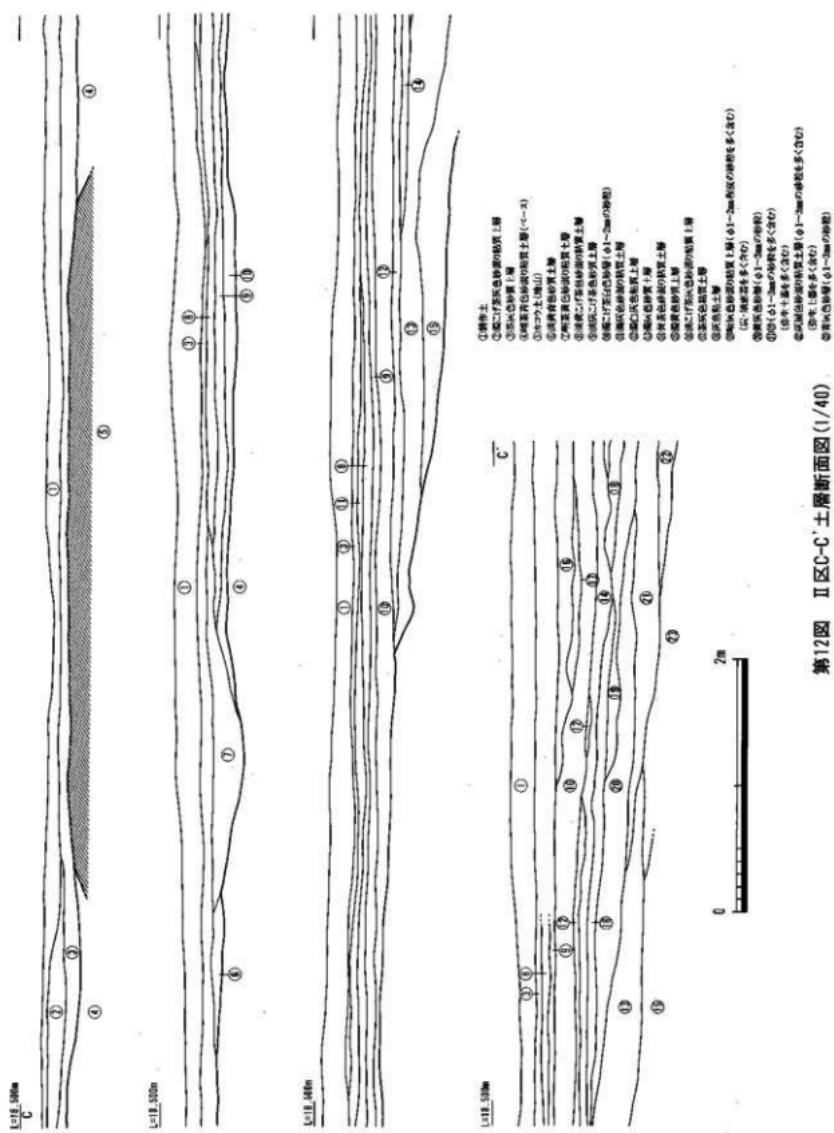
この調査区で検出した遺構は弥生時代・古代・近世の3つの時期があり、遺構面は最下面で弥生時代・古代の遺構を検出し、上位の面で近世を検出しているために2面となる。東西土層断面A-A'では西丘陵裾部から東側にある低湿地に向けて傾斜しており、徐々に傾斜堆積していく過程で遺構が形成され、近世段階で居住面積を確保するために整地を行った形跡が確認できる。この土層の東に延長部である土層断面B-B'では下位部分で須恵器を多量に含む土層6・7があり、最下層で弥生土器を多量に含む土層8・13・14がある。

須恵器を多量に含む層には須恵器の融着したものや炭などが出土していることから、窯の存在も考えたが土層断面A-A' と B-B' の間に町道があるため確認することが出来なかった。

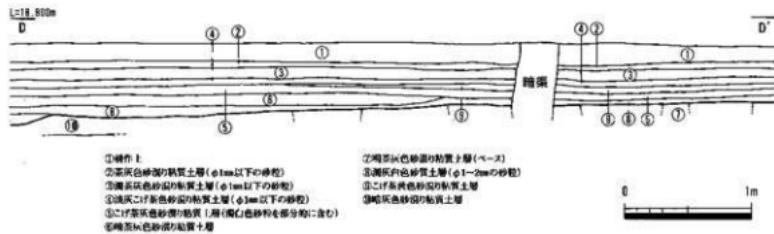
土層断面C-C'では南側では西丘陵から東に延び、分岐した南側先端部の基盤層である花崗岩を検出したことにより、明らかに丘陵先端部が調査区まで延びていることが判明した。また古代の遺構面はこの基盤層上に堆積する土層断面C-C' 土層④（暗茶青色砂混り粘質土）あるいは土層断面D-D' 土層⑪（明茶灰色砂混り粘質土）上面において検出した。



第11図 II A-A', B-B' 土層断面図 (1/40)



第12図 II区C-C' 土層断面図(I/40)



第13図 II区D-D' 土層断面図(1/40)

堅穴住居跡

SHII01

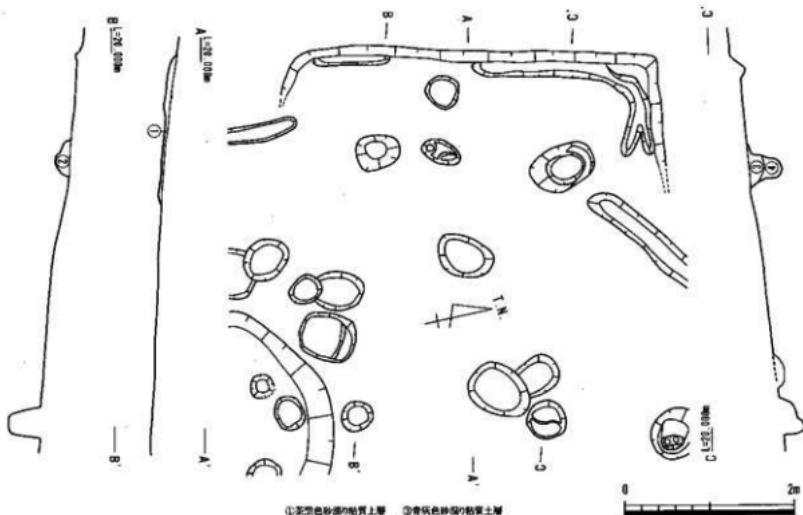
SHII01は第Ⅱ調査区北部、標高19.7mにおいて検出した堅穴住居で、東側部分を地形の傾斜によって削平を受けている。平面形態は復元すると方形を呈し、一部を除き掘り方内の壁際に壁溝を確認した。規模は残存する部分で一辺約4.5m、床面積約(20.3)m²、検出面からの深さは約0.08mを測るものである。主柱穴は推定4穴で、中央土坑と考えられるものは確認していない。南北主軸はN-13°-Eをとる。

堅穴住居内堆積土層は西側で土層①(茶黒色砂混り粘質土)を確認した。

主柱穴は平面形態が円形で、直径0.4~0.5m、深さ0.15~0.4mを測る。柱穴間は東西が3.0m、南北が2.3mを測り、やや東西が長い。

西側に残る掘り方内で幅16cm、深さ5cm程度の壁溝を部分的に検出した。

住居内から遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、堆積土及び構造から弥生時代と考える。



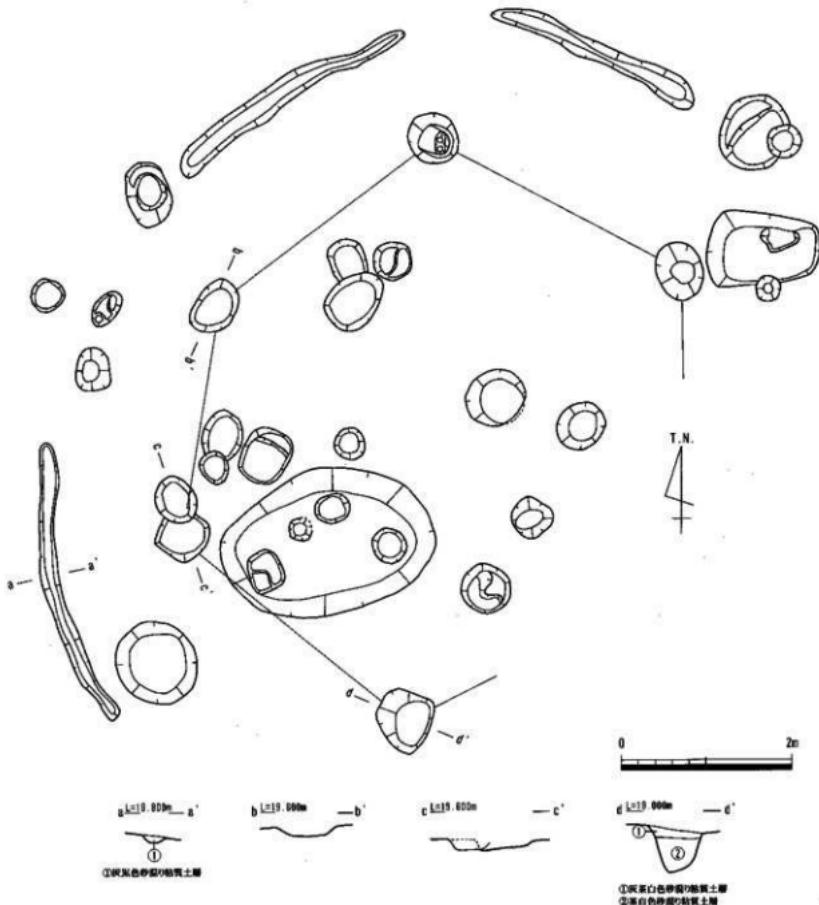
第14図 SHII01平・断面図 (1/60)

SHII02

SHII02は第Ⅱ調査区北部、標高19.55mにおいて検出した堅穴住居で、全体にかなり削平を受けており、西側で壁溝を残すのみである。平面形態は壁溝から判断すると円形を呈する。規模は壁溝外側で推定直径約10.67m、床面積約89.4m²を測る。

掘り方が削平されているため住居内では、主柱穴及び西側を中心部分的に壁溝を検出した。

主柱穴は推定6穴のうち5穴を検出した。平面形態が円形で、直径0.5~0.6m、深さ0.1~0.5mを



第15図 SHII-02平・断面図 (1/60)

測る。

西側の高い部分で幅 20 cm、深さ 7 cm 程度の壁溝を検出した。

竪穴住居に伴う遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、堆積土及び構造から弥生時代と考える。

竪穴住居 SHII-01 と SHII-02 は近接して確認している。検出状況及び出土遺物から切り合い(前後関係)は確認できない。

SHII03

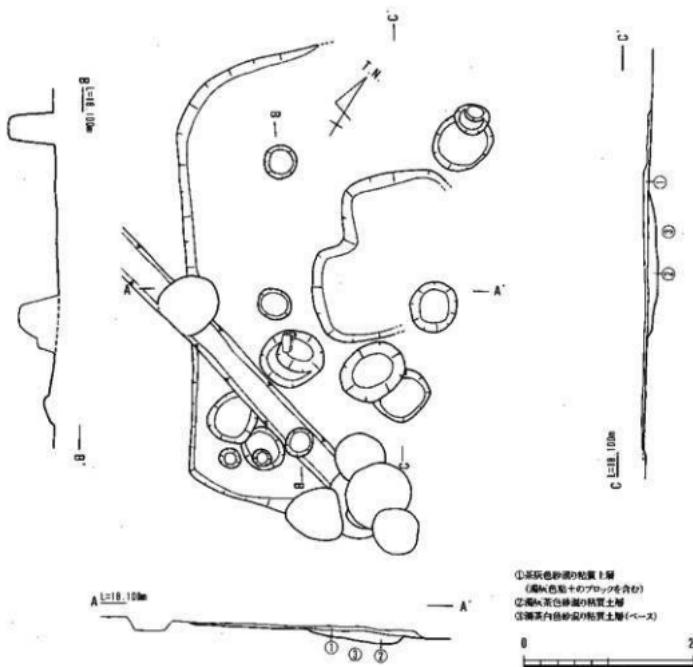
SHII03は第Ⅱ調査区南部、標高17.8mにおいて検出した堅穴住居で、西側の一部分のみでほとんどは削平を受けている。平面形態は復元すると方形を呈する。規模は一辺約5.5m、床面積約30.1m²、検出面からの深さは約0.04mを測る。南北主軸はN-34°Wをとる。

東側の掘り方が削平されているが、西側で主柱穴及び中央土坑を検出した。

中央土坑は平面形態が突出部の付いた方形状を呈し、断面は浅く窪む。堆積土に炭・焼土等は含まれていない。

主柱穴は4穴と考えられ、その内の西側2穴を検出した。平面形態は円形で、直径0.4~0.5m、深さ0.1~0.5mを測る。柱穴間は約3.4mを測る。

堅穴住居に伴う遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、堆積土及び構造から弥生時代と考える。



第16図 SHII03平・断面図(1/60)

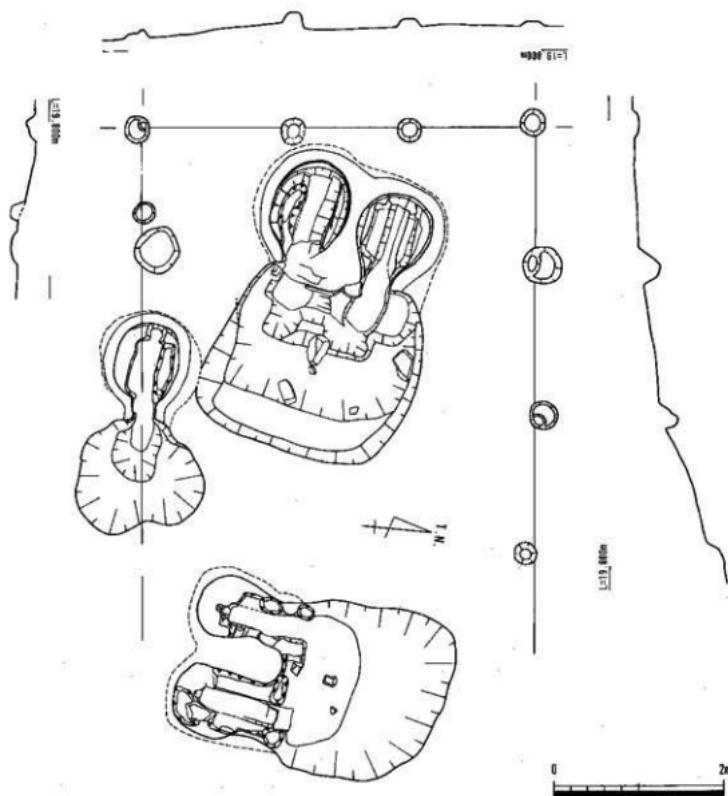
掘立柱建物跡

SBII01

SBII01は第II調査区南部、標高19.5mにおいて検出した3(梁間)×4(桁行)間の東西棟の掘立柱建物で、東側が削平され、全容は不明である。規模は梁間4.67m、桁行5.2mを測り、南北主軸はN-5°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径約25~50cm、深さ約10~20cmを測る。

この建物はSFIII04・05・06の砂糖甕を覆うように検出しており、覆い屋の可能性が考えられる。

柱穴内から実測可能な遺物は出土していないため詳細な時期は不明であるが、柱穴埋土や砂糖甕との位置関係から砂糖甕と同時期の近世と考えられる。

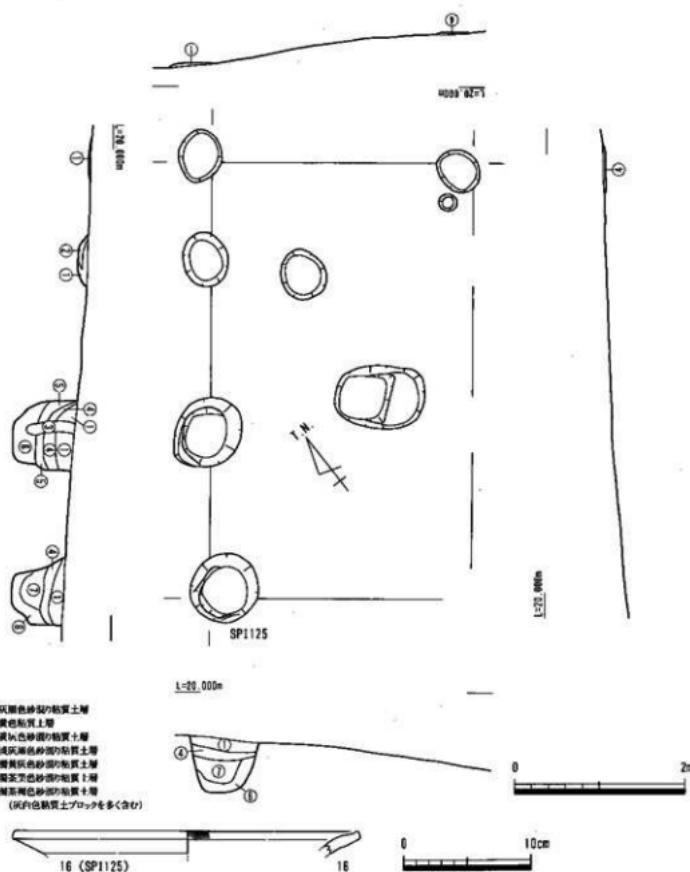


第17図 SBII01平・断面図(1/60)

SBII02

SBII02は第II調査区北部、標高19.7mにおいて検出した1(梁間)×3(桁行)間の南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間3.1m、桁行5.2m、床面積16.1m²を測り、南北主軸はN-38°-Eをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径40~80cmと大きく、深さ80cmを測る。土層断面から柱痕が確認でき、約13cm程度の柱材であったことが解る。

柱穴内から出土した遺物は土師質壺で、この遺物と埋土の状況から時期は古代と考える。

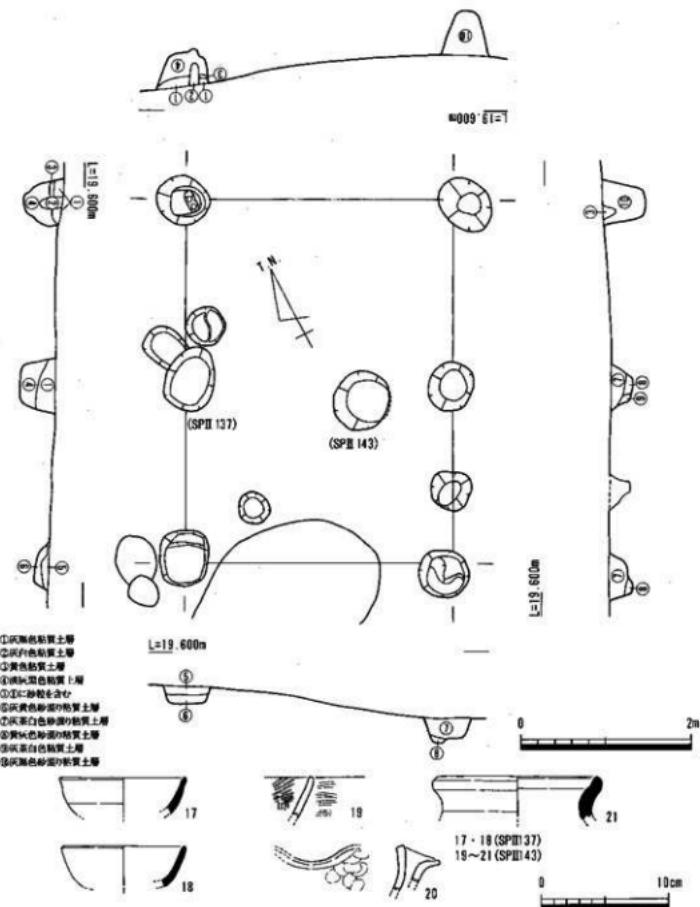


第18図 SBII02平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

SBII03

SBII03は第II調査区北部、標高19.2mにおいて検出した1(梁間)×2(桁行)間の南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間3.15m、桁行4.4m、床面積13.9m²を測り、南北主軸はN-27.5°-Eをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形及び隅丸方形状を呈し、規模は直径50~60cmと大きく、深さ20~50cmを測るしっかりとした掘立柱建物である。土層断面から柱痕が確認でき、約14cm程度の柱材であったことが解る。

柱穴内から須恵器坏身(17・18)・土師器坏A(19)・土師質土器鉢(20)が出土しており、これらの遺物と埋土の状況から時期は7世紀後半と考える。



第19図 SBII03平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

SBII04

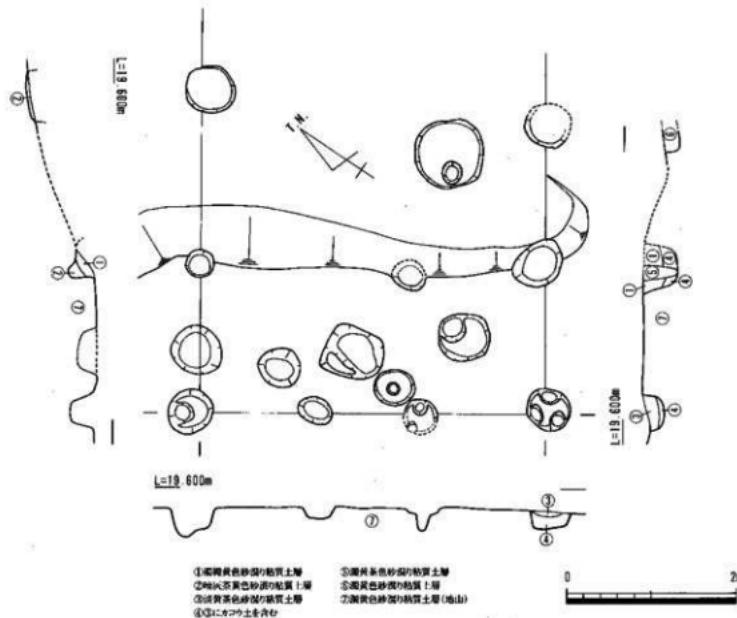
SBII04は第II調査区南部、標高19.4mにおいて検出した3(梁間)×(3)(桁行)間の東西棟の掘立柱建物で、東側が削平されている。規模は梁間4.08m、桁行(3.5)mを測り、南北主軸はN-35°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径40~60cm、深さ10~30cmを測る。

柱穴内から実測可能な遺物は出土していないため詳細は不明であるが、柱穴埋土の状況から古代と考える。

SBII05

SBII05は第II調査区南部、標高17.7mにおいて検出した2(梁間)×(1)(桁行)間の東西棟と考えられる掘立柱建物で、東側は調査区外に延びている。規模は梁間4.3m、桁行不明で、南北主軸はN-19°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径55~80cm、深さ40~60cmを測る。

柱穴内から実測可能な遺物は出土していないため詳細は不明であるが、柱穴埋土の状況から古代と考える。



第20図 SBII04平・断面図(1/60)

SBII06

SBII06は第II調査区南部、標高17.8mにおいて検出した2(梁間)×(1)(桁行)間の東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間3.34m、桁行不明で、南北主軸はN-12.5°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径60~70cm、深さ30~50cmを測る。

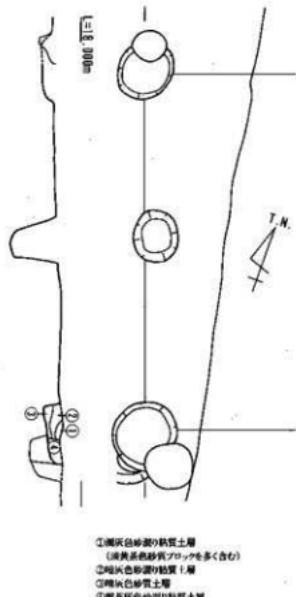
柱穴内から実測可能な遺物は出土していないため詳細は不明であるが、柱穴埋土の状況から古代と考える。

SBII07

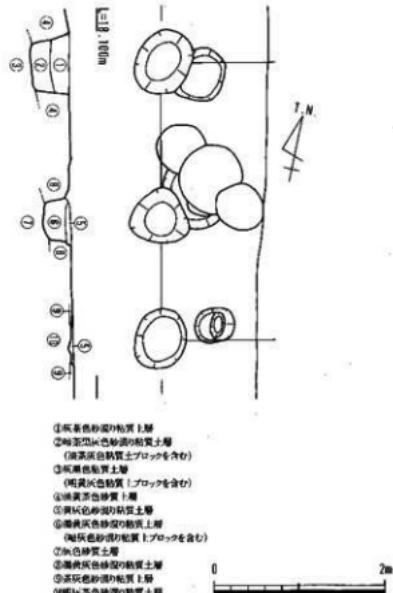
SBII07は第II調査区南部、標高17.9mにおいて検出した2(梁間)×3(桁行)間の南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間2.85m、桁行4.5m、床面積12.8m²を測り、南北主軸はN-11°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径60~80cmと大きく、深さ40~70cmを測る。

柱穴内から出土した遺物はほとんどなく、埋土の状況から時期は古代と考える。

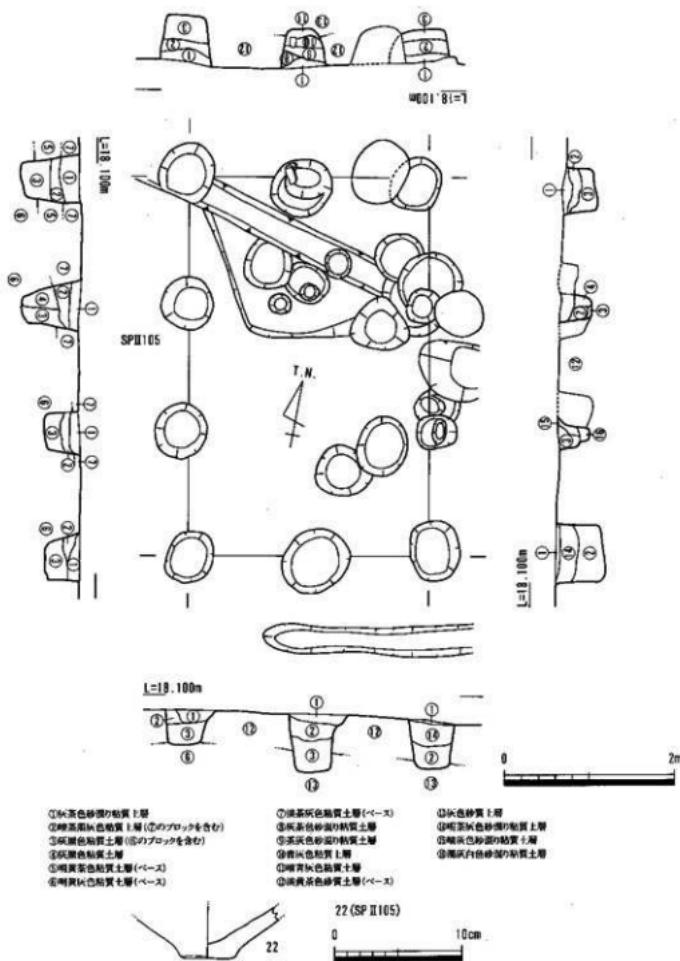
SBII05・06・07は近接して検出しており、一部掘立柱建物を構成する柱穴の切り合いが確認できる。その切り合いかからSBII07(古)→SBII05・06(新)となる。



第21図 SBII05平・断面図(1/60)



第22図 SBII06平・断面図(1/60)



砂糖竈跡

第II調査区では砂糖竈と考えられる遺構を合計6基検出した。

県内において砂糖の生産は1789(寛政元)年に大内郡湊村(現白鳥町)の向山周慶によって「白砂糖」の製造法が確立して以来、特に東讃を中心として盛んに行われた。砂糖の製造は「砂糖糀を砂糖車で掉り、しづり汁を釜で煮詰め、こげ茶色の白下糖を作る。その白下糖を練って柔らかくし、圧搾装置で糖蜜を掉り取ると上質の白砂糖が出来上がる」というような工程を経ている。

原間遺跡で検出した遺構は「しづり汁を煮詰める」工程に使用されたものである。上部に鉄釜を置き、焚き口を持つ竈が2つ並ぶもので、これはしづり汁を保温する揚釜と灰汁を抜き取りながら水分を蒸発させ結晶にする荒釜で、機能によって使い分けられるためにこのような特徴ある構造になっている。

このような砂糖竈の検出は東讃で砂糖製造が盛んであったことを裏付ける資料である。

SF II 01

SF II 01は第II調査区北東部、標高19.8mにおいて検出した砂糖竈で、円形の竈部に隅丸方形の作業場が付く平面形態である。

砂糖竈は竈を2つ並列させ、焚き口部からそのまま作業場へと繋がる構造である。

竈部は2つあり、作業場から向かって右を右竈、左を左竈とする。それぞれの平面形態は円形を呈し、規模は右竈が直径0.97m、検出面からの最深部0.53m、左竈が直径0.84m、検出面からの最深部0.54mを測り、右竈の方がやや規模が大きい。竈断面でみると両者とも垂直に掘り込み、下位部分に内傾する平らな面を持つ。さらに内側は「U」字状に窪み、中央は溝状を呈する。

平面的にみるとこの平らな面は焚き口部分を除き、ほぼ全周するようで、中央の窪む部分は奥側で角を持った方形を呈し、中央の溝状部分が伸びることによって奥側に突出部が付くような平面形を呈する。溝状部分は右竈が幅20cm、左竈が幅22cmと同じ規模であるが、奥への突出長が右竈では28cm、左竈では15cmと差が認められる。また平らな部分の幅でも右竈が20cm、左竈が15cmと差が認められる。これらの差は前述した「揚釜」と「荒釜」の機能的な差による可能性が考えられる。

また竈部は焼成室のために被熱し、平らな部分と溝状部分は表面が還元焰状態になったものか暗灰色に変色し、硬質化している。

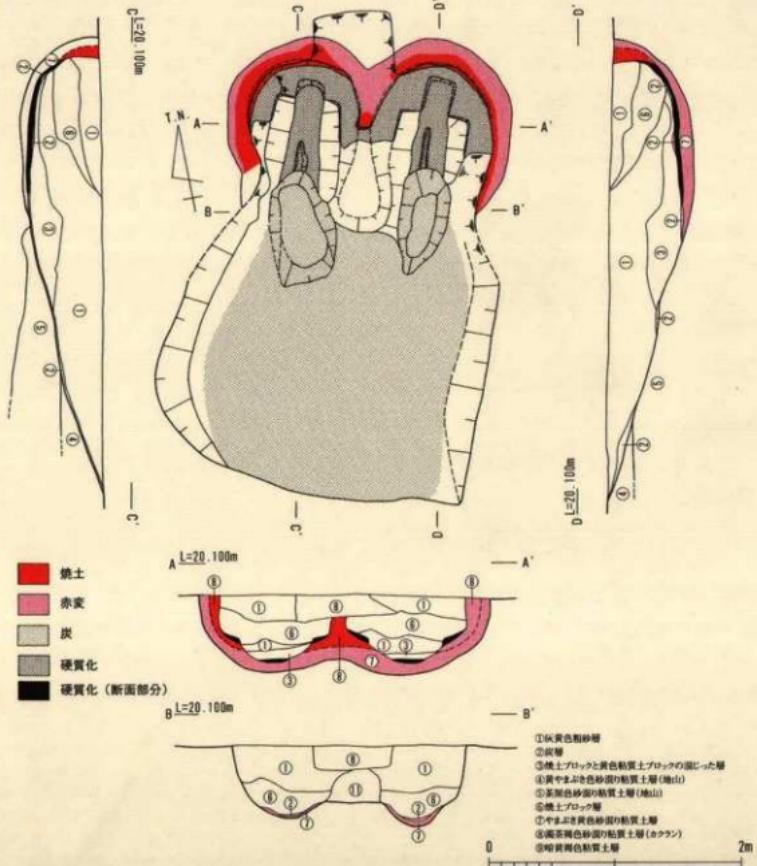
さらに断割を入れた結果、竈部は全体を一括で掘削し、その内部に粘土を貼り付け、壁をつくり、それぞれを画るように構築していることが判明した。被熱はその粘土を変色させ、内側が赤褐色に、外側がピンク色となる。

焚き口部分は竈と作業場の間にあり、溝状部分から引き続いて焚き口部分となる。焚き口部分の深さは僅か3cmほどではあるが梢円形状に窪む。規模は右焚き口で幅39cm、長さ87cm、左焚き口で幅52cm、長さ98cmを測る。焚き口部分は燃焼室であるが、被熱の痕跡は認められない。

作業場部分は平面形態が隅丸の方形を呈し、焚き口部分に向かい傾斜する。全面に炭が2cmほど堆積している。

また上部構造は削平のために不明である。中心主軸はN-19°-Eを取り、竈部が概ね北に、作業場が南に位置する。

時期は遺物が出土していないので詳細は不明であるが、堆積埋土および検出面などから近世以降と考えられる。



第24図 SFII01平・断面図(1/40)

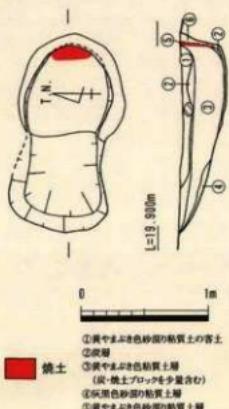
SFII02

SFII02は第II調査区北東部、標高 19.75 mにおいて検出した砂糖竈で、円形の竈部に作業場がなく隅丸方形の焼き口部が付く平面形態である。

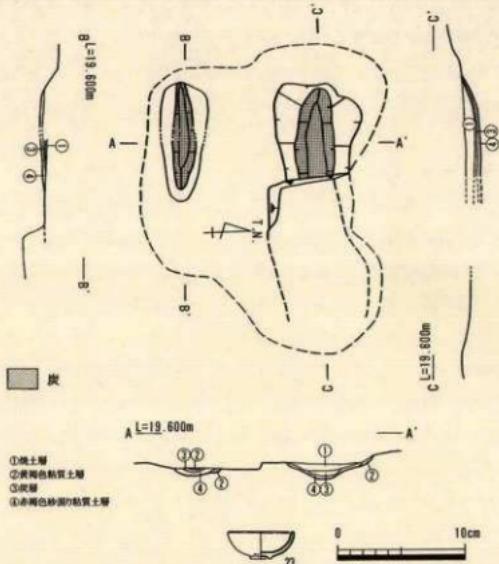
この砂糖竈は竈が1つのもので、平面形態は歪な円形を呈し、規模は直径 0.69 m、検出面からの最深部 0.33 m を測る。竈断面でみると垂直に掘り込み、一気に底面の平らな部分となる。SFII01にみられたような側面途中の平らな部分や溝状部分も認められない。

また竈部は焼成室であるために被熱し、奥壁の部分のみ表面が還元焰状態になったものか暗灰色に変色し、硬質化している。奥壁下位部分にのみ炭が残存する。

さらに断削を入れた結果、竈部は全体を一括で掘削し、その内部に粘土を貼り付け、壁を構築してい



第25図 SFII 02平・断面図(1/40)



第26図 SFII 03平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)

ることが判明した。被熱はその粘土を変色させ、赤褐色となる。

焚き口部分は竈部に向かい傾斜し、底部全面が灰黒色を呈する。焚き口部分の規模は幅約70cm、長さ76cmを測る。被熱の痕跡は認められない。

上部構造は削平のために不明である。中心主軸はN-93°-Eを取り、ほぼ東西方向を向く。竈部が東で、焚き口部が西に位置する。

時期は遺物が出土していないので詳細は不明であるが、堆積埋土および検出面などから近世以降と考えられる。

SFII 03

SFII 03は第II調査区中央部、標高19.4mにおいて検出した砂糖竈で、かなり削平をされており、全容は不明であるが、竈部と作業場がかろうじて確認できる。

砂糖竈は竈を2つ並列させ、焚き口部からそのまま作業場へと繋がる構造である。

竈部は2つあり、作業場から向かって右を右竈、左を左竈とする。それぞれにかなり削平を受けており、平面形態は不明である。僅かに中央部の溝状を呈する部分のみを検出している。溝状部分の規模は右竈のものが幅30cm、右竈のものが幅18cmを測る。

焚き口部分は明確には確認できず、作業場部分も底部にやや傾斜が付くこと程度でその他は不明である。

また被熱の痕跡も確認できなかった。

上部構造は削平のために不明である。中心主軸はN-88°Wを取り、ほぼ東西方向を向く。竈部が西で、焚き口部が東に位置する。

時期は遺物が出土していないので詳細は不明であるが、堆積埋土および検出面などから近世以降と考えられる。

SF II 04

SF II 04は第II調査区南部、標高19.3mにおいて検出した砂糖竈で、上部の円形部分が削平された結果下位の溝状部分のみの検出で、隅丸の長方形の竈部に隅丸方形の作業場が付く平面形態である。おそらく溝状部分を構築する左右の石列上面が、SF II 01で確認した平らな部分に相当するものと思われる。

砂糖竈は竈を2つ並列させ、明確な焚き口部は確認していないが、そのまま作業場へと繋がる構造である。

竈部は2つあり、作業場から向かって右を右竈、左を左竈とする。それぞれの平面形態は隅丸の長方形を呈し、規模は右竈が幅22cm、長さ98cm、検出面からの最深部18cm、左竈が幅25cm、長さ108cm、検出面からの最深部18cmを測り、僅かに左竈の方が大きい。竈平・断面でみると石がかなり抜き取られているものの側壁として20~40cmの砂岩及び安山岩などを使用し、溝状に構築している。そのため両者とも壁は垂直になり、断面箱形を呈する。側壁を構成する石の上面はほぼ同じ高さで、部分的に赤変していることから、これがSF II 01で確認した下位の平らな部分に相当するものと考える。また両方の奥部には外傾する突出部を持ち、煙突の可能性も指摘できる。

竈部は焼成室であるために被熱し、側壁内部が赤変し、最奥部は表面が還元焰状態になったものか暗灰色に変色し、硬質化している。炭は溝状部分の底部、厚さ1cm程度で全面に検出した。

さらに断削を入れた結果、竈部の構造はそれぞれに掘削し、その内部に粘土と石で壁をつくり、構築していることが判明した。被熱によってその粘土は変色し、側壁内側が赤褐色となる。

またこの竈の被熱面が奥側にのみ下位にもう1面あることを確認した。上部の被熱面を取り除き、下位の被熱面で検出すると側壁は造り替えていないが、奥壁は粘土の後側で石を検出し、傾斜させることにより奥壁を構築していることが判明した。奥石内面は赤変し、手前の溝状部分に炭が堆積する。

明確な焚き口部分は確認できなかったが、左竈の焚き口部分当たりに一辺約27cm程度の砂岩を敷いて底面としていることからここが焚き口部分に相当するものと考える。

作業場部分は平面形態が隅丸の方形を呈し、竈方向に傾斜し、竈部全面に60cm程度平らな部分を持つ。全面に炭が2cmほど堆積している。

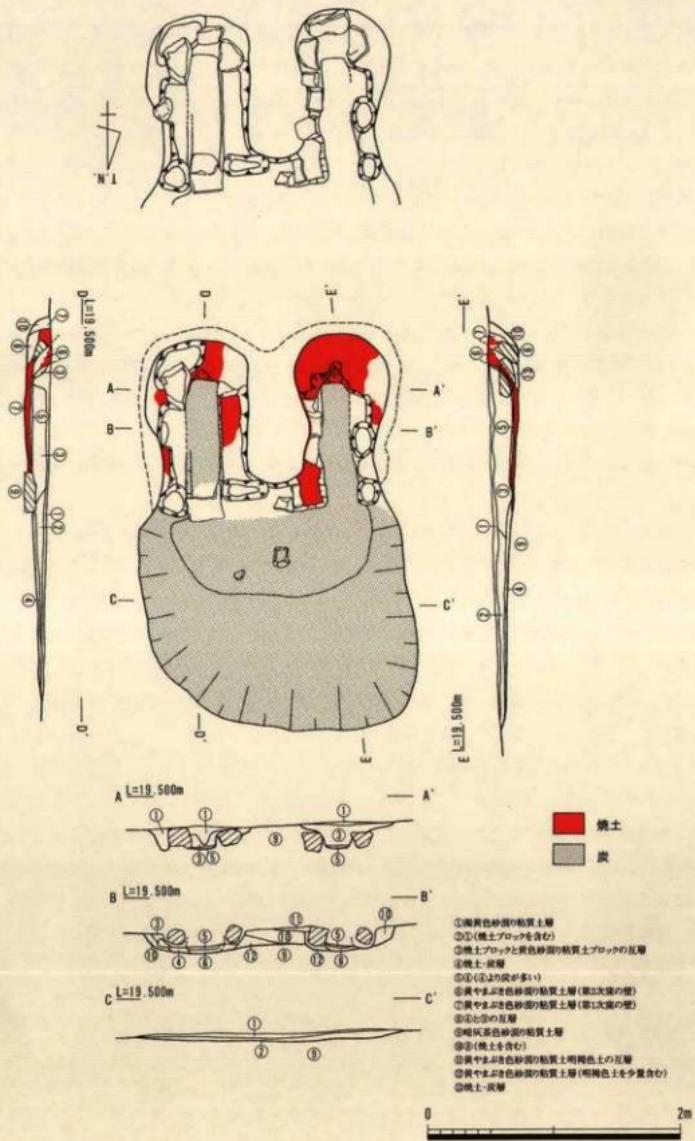
また上部構造は削平のために不明である。中心主軸はほぼ南北を取り、竈部が概ね南に、作業場が北に位置する。

この砂糖竈は①竈部の溝状部分の側壁に石を使用している点、②それぞれの竈を別々に掘削している点、③明確な焚き口部がない点など、他の竈と異なった構造であることが判明した。

時期は遺物が出土していないので詳細は不明であるが、堆積埋土および検出面などから近世以降と考えられる。

SF II 05

SF II 05は第II調査区南部、標高19.5mにおいて検出した砂糖竈で、円形の竈部に隅丸方形の作業場



第27図 SFII04平・断面図(1/40)

が付く平面形態である。

砂糖窯は竈を2つ並列させ、焚き口部からそのまま作業場へと繋がる構造である。

竈部は2つあり、作業場から向かって右を右竈、左を左竈とする。それぞれの平面形態は円形を呈し、規模は右竈が直径0.86m、検出面からの最深部0.44m、左竈が直径0.89m、検出面からの最深部0.50mを測り、ほぼ同規模である。竈断面でみると右竈は垂直に掘り込み、下位部分に内傾する平らな面を部分的に持つ。さらに内側は箱型に窪み、中央にはさらに溝状に窪むために2段の平らな部分を経て、底部になる断面形状を呈している。平面的にみるとこの平らな面は「逆コ」「コ」の字状に残り、中央の窪む部分は幅54cm、長さ67cmの方形の前後に突出部が付くような形態をしている。中央の溝部分は幅23cm、深さ4cm程度で焚き口から連続してほぼ最奥部まで延びている。一方左竈部は垂直に掘り込み、下位部分に内傾する平らな面を部分的に持つ。さらに内側は箱型に窪み、中央にはさらに溝状に窪む。平面的にみるとこの平らな面は「半月」状に残り、中央の窪む部分は幅47cm、長さ約100cmの長方形を呈している。中央の溝部分は幅22cm、深さ9cm程度で焚き口から連続してほぼ最奥部まで延びている。

規模は同じであるが、内部の構造の差は前述した「揚釜」と「荒釜」の機能的な差によるもの可能性が考えられる。

また竈部は焼成室であるために被熱し、竈内面と2段の平らな部分上面が還元焰状態になったものが暗灰色に変色し、硬質化している。

さらに断割を入れた結果、竈部は全体を一括で掘削し、その内部に粘土を貼り付け、壁をつくり、それぞれを画するように構築していることが判明した。被熱はその粘土を変色させ、内側が赤褐色に、外側がピンク色となる。

焚き口部分は竈と作業場の間にあり、溝状部分から引き続いて焚き口部分となる。当調査区で検出した砂糖窯の内唯一焚き口部の天井が残存する。左焚き口部に残る天井部は壁面を粘土により構築した後に竈前面左右に平らな石を積み上げ、平らな石及び大型の土器片（第29図26）を架げることにより焚き口部を造り、さらに粘土で覆う構造である。焚き口部の規模は幅約25cm、高さ30cmを測る。焚き口部分底面は僅か4cmほどはあるが梢円形形状に窪む。焚き口部分は燃焼室であるが被熱の痕跡は認められない。

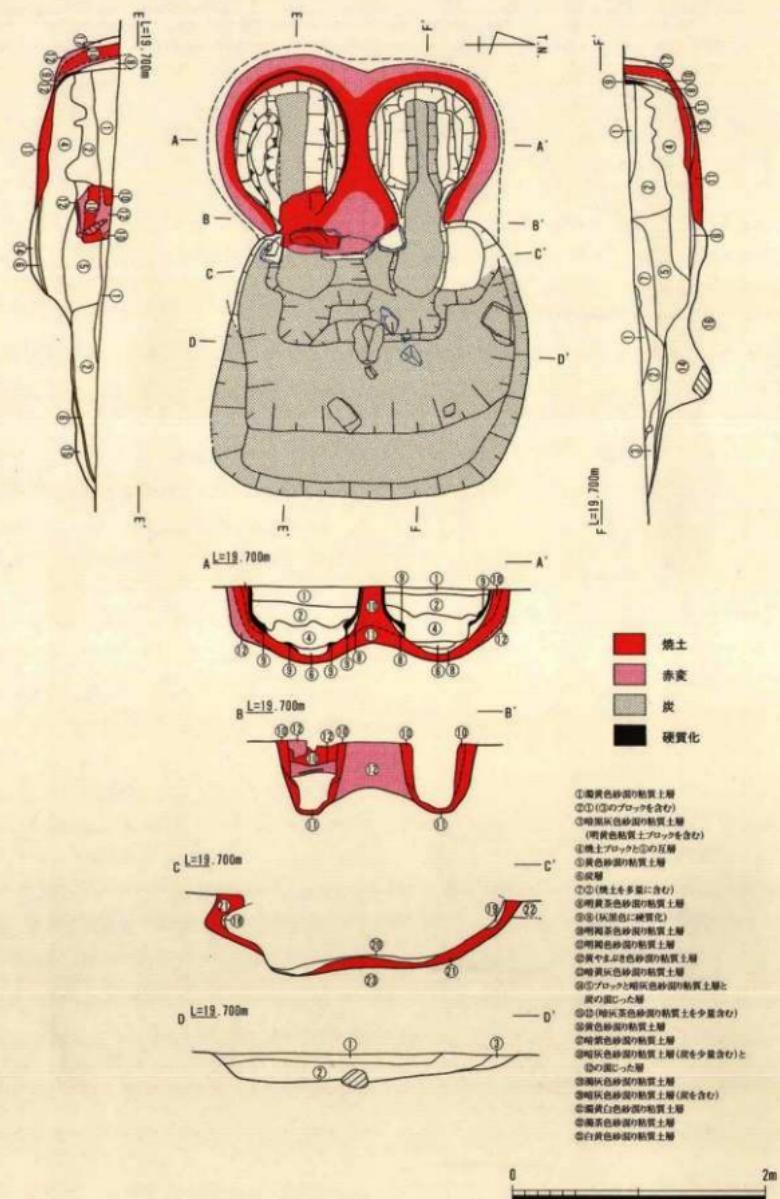
作業場部分は平面形態が隅丸の方形を呈し、焚き口部全面に45cmほどの平らな部分とさらに前面に幅40cmほどの平らな部分が認められることから階段状になっていることが解る。全面に炭が2cmほど堆積している。

また上部構造は削平のために不明である。中心主軸はほぼ東西を取り、竈部が概ね西に、作業場が東に位置する。

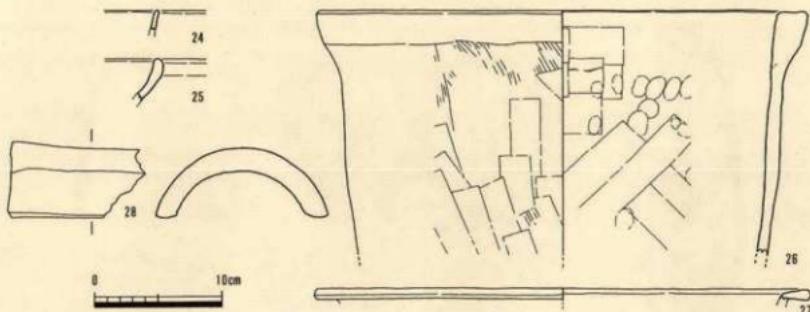
SF II 05から少量の遺物が出土している。26は前述した焚き口天井部の粘土内に埋め込まれていたもので、土師質火鉢あるいは甕である。時期はこれらの遺物及び堆積埋土、検出面などから近世と考えられる。

SF II 06

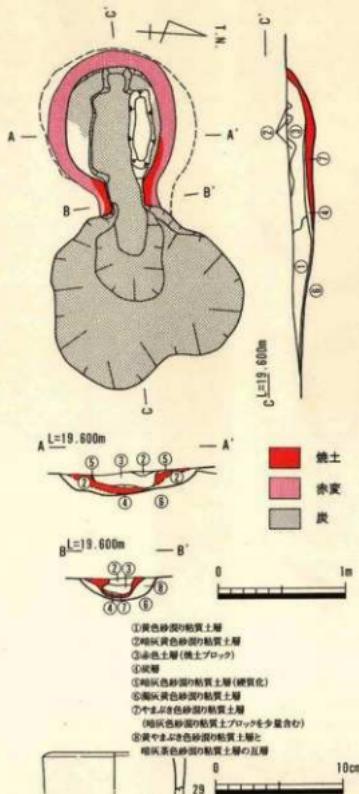
SF II 06は第II調査区南部、標高19.45mにおいて検出した砂糖窯で、円形の竈部に不定形の作業場が付く平面形態である。



第28図 SFII05平・断面図(1/40)



第29図 SFII05出土遺物実測図(1/4)



第30図 SFII06平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)

この砂糖窯は竈が1つのもので、平面形態は円形を呈し、規模は直径0.76 m、検出面からの最深部0.12 mを測る。竈断面でみると竈は垂直に掘り込み、下位部分に内傾する平らな面を持つ。さらに内側は箱型に窪み、中央にはさらに溝状に窪むために2段の平らな部分を経て、底部になる断面形状を呈している。平面的にみるとこの平らな面は「逆コ」「コ」の字状に残り、中央の窪む部分は幅約40 cm、長さ70 cmの長方形の前後に突出部が付くような形態をしている。中央の溝部分は幅20 cm、深さ3 cm程度で焚き口から連続してほぼ最奥部まで延びている。SFII05の右竈と同様な構造である。また竈部は焼成室であるために被熱し、平らな部分と溝部分の表面が還元焰状態になったものか暗灰色に変色し、硬質化している。ほぼ前面に炭が残存する。

さらに断剤を入れた結果、竈部は全体を一括で掘削し、その内部に粘土を貼り付け、壁を構築していることが判明した。被熱はその粘土を変色させ、赤褐色となる。

焚き口部分は僅かに窪み、前面に炭が堆積する。被熱の痕跡は認められない。

上部構造は削平のために不明である。中心主軸はN-100°-Wを取り、ほぼ東西方向を向く。竈部が西で、焚き口部が東に位置する。

時期は遺物が出土していないので詳細は不明であるが、堆積埋土および検出面などから近世以降と考えられる。

土坑跡

SKII02

SKII02は第II調査区北西部、標高19.95mにおいて検出した土坑で、平面形態は橢円形を呈する。規模は長軸1.73m、短軸1.02m、検出面からの深さ0.24mを測る。

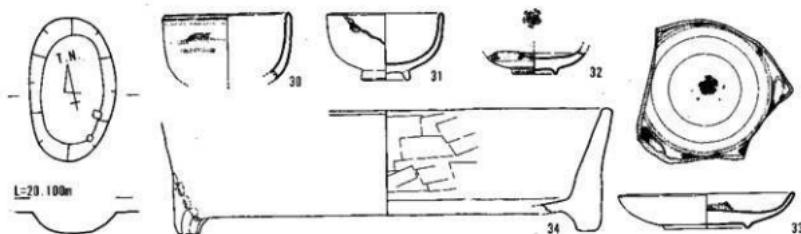
断面は浅い「U」字状を呈する。

土坑内から遺物が出土した。器種は染付椀・皿、土師質火鉢で、第31図34の火鉢は底部に短い脚が3つ付き、体部は僅かに外方に開く。

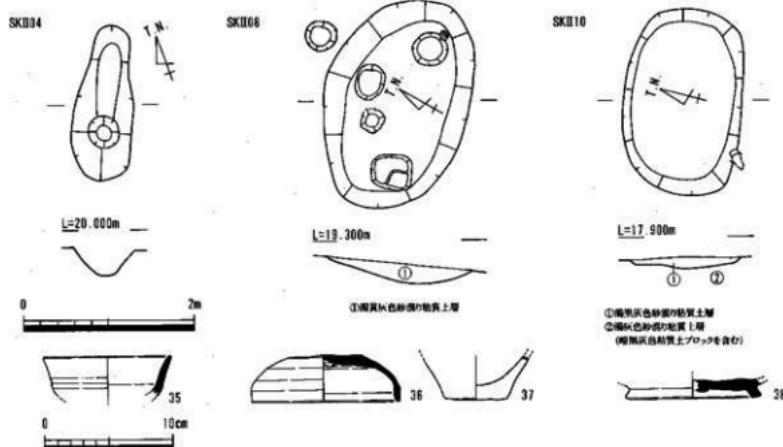
時期は近世である。

SKII04

SKII04は第II調査区北部、標高19.8mにおいて検出した土坑で、平面形態は細長い橢円形を呈する。



第31図 SKII02平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)



第32図 SKII04・SKII08・SKII10平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

南中央に円形の窪みがある。規模は長軸 1.85 m、短軸 0.7 m、検出面からの深さ 0.32 m を測る。土坑内から遺物が出土した。器種は須恵器高杯と考えられ、時期は 7 世紀後半である。

SK II 08

SK II 08 は第 II 調査区北部、標高 19.1 m において検出した土坑で、平面形態は歪な楕円形を呈する。ちょうど SH II 02 内に位置するが共存しない。規模は長軸 2.58 m、短軸 1.74 m、検出面からの深さ 0.20 m を測る。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、7 世紀中葉と考える。

SK II 10

SK II 10 は第 II 調査区南部、標高 17.65 m において検出した土坑で、隅丸の長方形を呈する。SX II 07 を切るように検出した。規模は長軸 2.2 m、短軸 1.4 m、検出面からの深さ 0.13 m を測る。

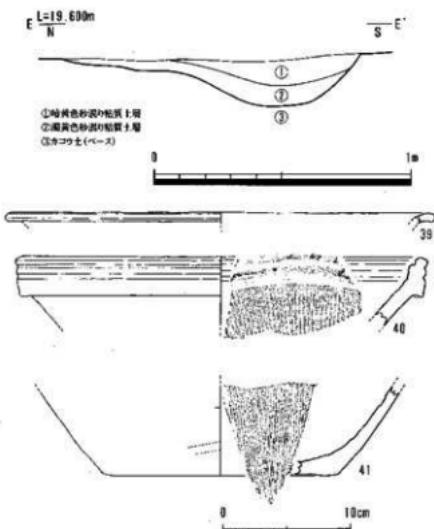
出土遺物と埋土の状況も合わせ、7 世紀後半から 8 世紀前半と考える。

溝跡

SD II 01・04～06

SD II 01・04～06 は第 II 調査区北部、標高 20.0 m において検出した溝で、西丘陵縫部側のみで検出した。この溝 4 条はそれぞれの間が途切れているものおそらく一連のもので、「逆コ」の字型を呈する。また SD II 05 からは東に流路が派生し、この溝が区画溝となるものと思われる。これらの溝で区画された範囲は南北 30 m を測り、さらに南よりの区画溝で北が 24 m、南が 6 m に分割される。溝の規模は幅 40 m、検出面からの深さ 20 m を測る。断面は浅い「U」字状を呈する。

溝から遺物が出土しておらず詳細は不明であるが、堆積埋土及び検出面から近世と考える。



SD II 07

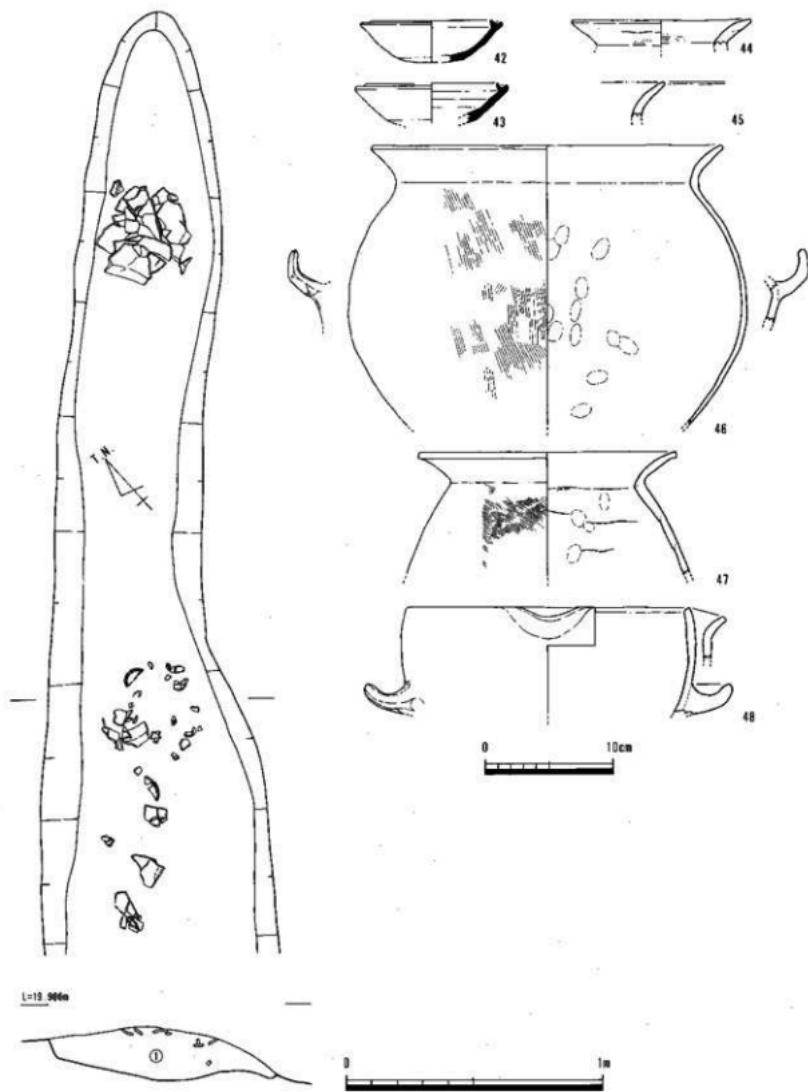
SD II 07 は第 II 調査区中央部、標高 19.3 m において検出した溝で、西丘陵縫部で検出した。近世以降の畦畔に伴うものである。規模は幅 1.16 m、検出面からの深さ 0.18 m を測る。断面は浅い「U」字状を呈する。

溝から明石・堺産擂鉢（第 33 図 40・41）が出土している。時期は近世である。

SD II 15

SD II 15 は第 II 調査区中央部、標高 19.65

第 33 図 SD II 07 断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)



第34図 SDII 15平・断面図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)

mにおいて検出した溝状遺構で、幅 0.93 m、検出長 6.5 m を測る。溝内から部分的に集中して遺物が出土しているにもかかわらず、性格不明である。

出土した遺物は須恵器・土師質土器で、煮沸形態が特に多いことがこの溝の特徴である。

時期は出土遺物から 7 世紀中葉と考える。

不明遺構

SX II 05

SX II 05 は第 II 調査区中央部、標高 19.45 m において検出した不明遺構で、北側が削平を受けているが、平面形態は方形を呈するものと考えられる。規模は東西幅約 3.7 m を測り、断面は東側が一段低くなる。

遺構内出土の小片遺物及び埋土の状況も合わせ、古代と考えられる。

SX II 06

SX II 06 は第 II 調査区中央部、標高 19.25 m において検出した不明遺構で、平面形態は隅丸の方形を呈する。掘り方断面は角の丸い箱形を呈する。規模は長軸 2.8 m、短軸 2.1 m、深さ 0.5 m を測る。北西の隅部分から東方向に幅 15 cm 程度の溝が延び、内部に疊を充填していた。堆積土層はほぼ水平堆積で、特に遺構の性格を知りうるものはない。

遺構内から土師器壺 C (50)・須恵器・石製品が出土している。

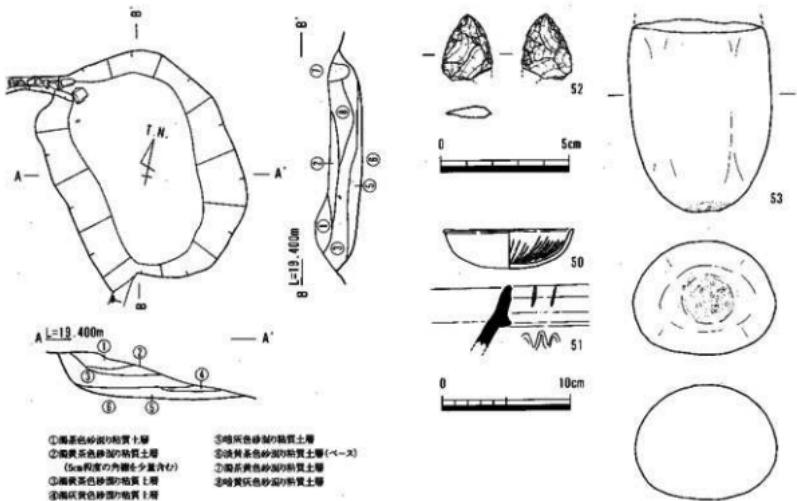
これらの遺物から時期は 7 世紀中葉と考える。

SX II 07

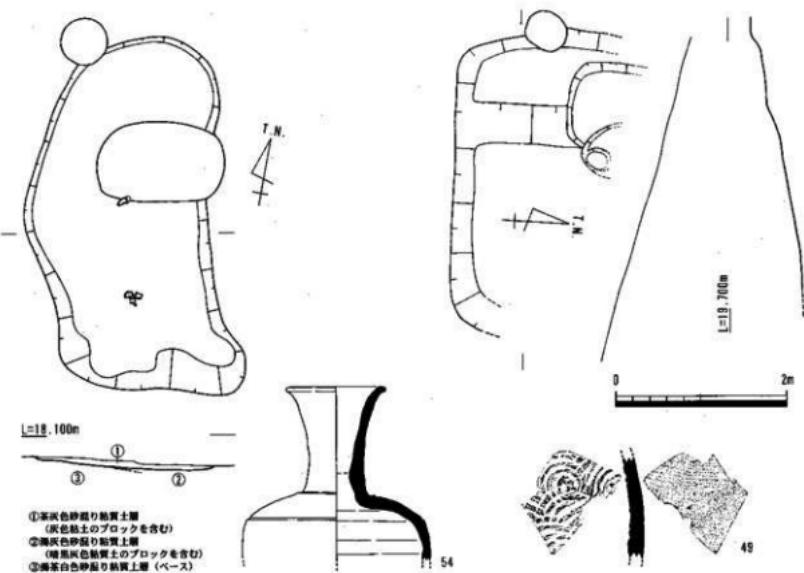
SX II 07 は第 II 調査区南部、標高 17.9 m において検出した不明遺構で、平面形態は歪な隅丸長方形を呈し、規模は長軸 4.2 m、短軸 2.13 m、深さ 0.10 m を測る。掘り方断面は緩やかに底面に至り、底面はほぼ平らを呈する。

遺構内から須恵器壺が出土している。

これらの遺物から時期は古代と考える。



第36図 SXII06平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)



第37図 SXII07平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

第35図 SXII05平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

柱穴出土遺物

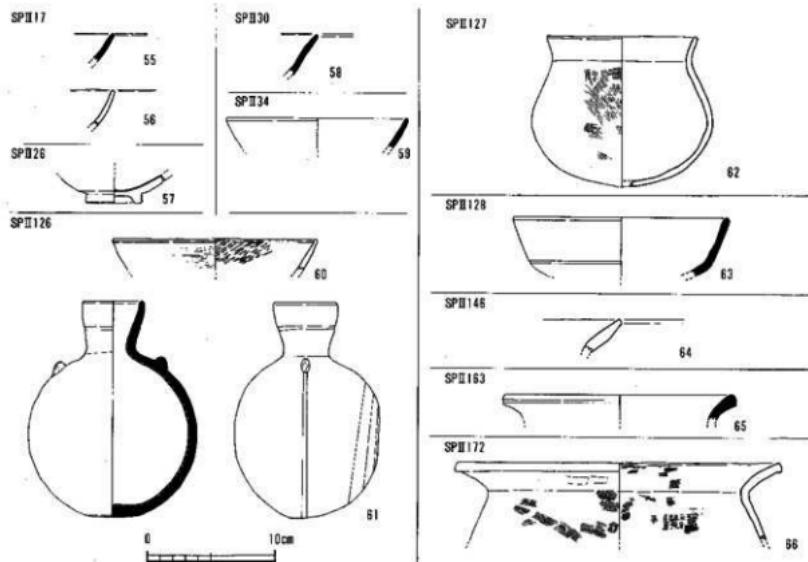
第II調査区で検出した柱穴は、第1面・第2面を合わせて総数215個で、柱穴堆積土の土色は第11表の凡例をみると27色ある。

この調査区は西丘陵東裾部に位置するために地山は裾部から東方向に傾斜している。柱穴はその地山上面（第2遺構面・傾斜面）と傾斜部分に堆積した土層上位部分（第1面遺構面）で検出している。また裾部分においては部分的に全ての時期を同一平面上で検出している。

第1面で検出した柱穴のほとんどは近世を中心とし、土色は灰色を呈するものが主体であった。また第2面で検出した柱穴は弥生時代と古代を中心とするもので、土色は弥生時代がこげ茶色系を呈し、古代が茶黒色系を呈するものを主体としている。概ね時代により土色で判別できるが、後述する第IV調査区（丘陵裾部）、第V調査区（丘陵裾部）では微妙に土色が異なる。

柱穴から出土した遺物はそのほとんどが小片で、時期は弥生時代、古代、近世の遺物である。

図化可能なものを第38図に掲載した。図化した遺物のほとんどは7世紀の遺物である。SP II 126からは体部内外面にヘラ磨きが施されている土師器壺A（60）が出土していることから7世紀でも後半頃のものと考えられる。62は土師質壺で、体部下半が下ぶくれするタイプである。

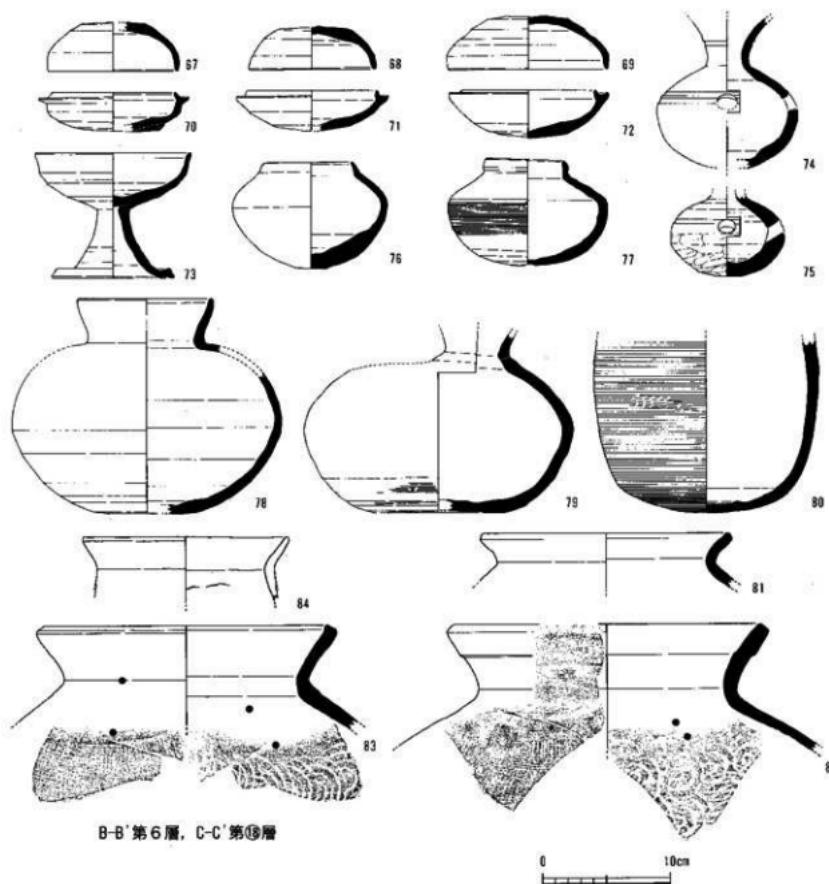


第38図 柱穴出土遺物実測図(1/4)

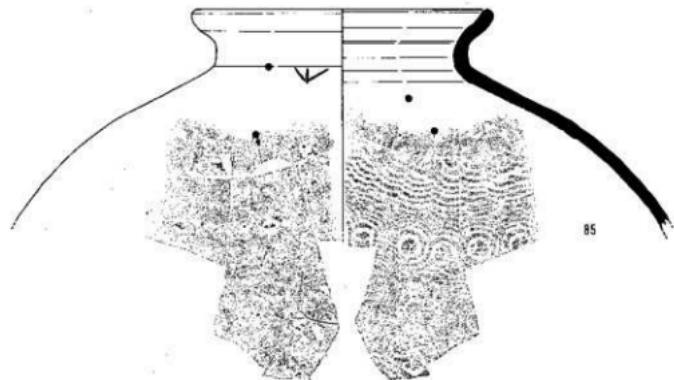
包含層出土遺物

包含層出土遺物は主として第II調査区南部の県道と町道に挟まれた部分で出土した遺物を掲載した。遺物は主として7世紀中葉の須恵器と弥生土器後期後半の土器が出土している。これらの遺物は県道と町道に挟まれた調査区の北部に纏まって出土した。この部分は第11図土層断面A-A'・B-B'をみると西から東に傾斜しており、第12図土層断面C-C'をみると南から北に傾斜していることからB'、C'部分が一番深くなっていることが解る。この落ち込みが予備調査で検出した低湿地aの西側に相当するものと考えられる。

まず須恵器包含層は第II調査区県道及び町道西側の調査区での第11図土層断面A-A'においては検出されず、町道と県道に挟まれた調査区での第11図土層断面B-B'（第11図土層断面A-A'の



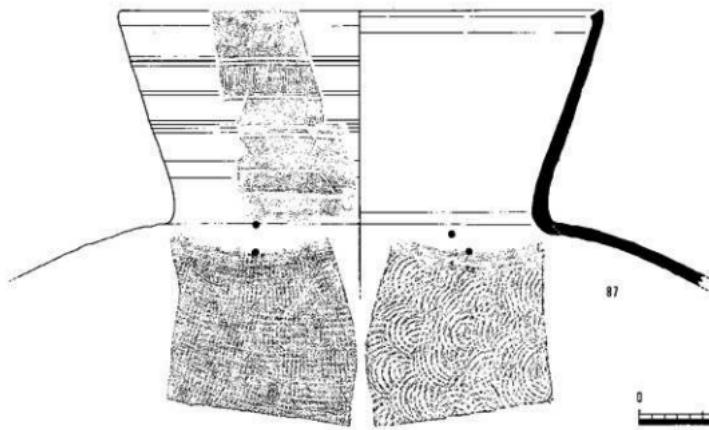
第39図 包含層出土遺物実測図(1/4)①



85



86



87

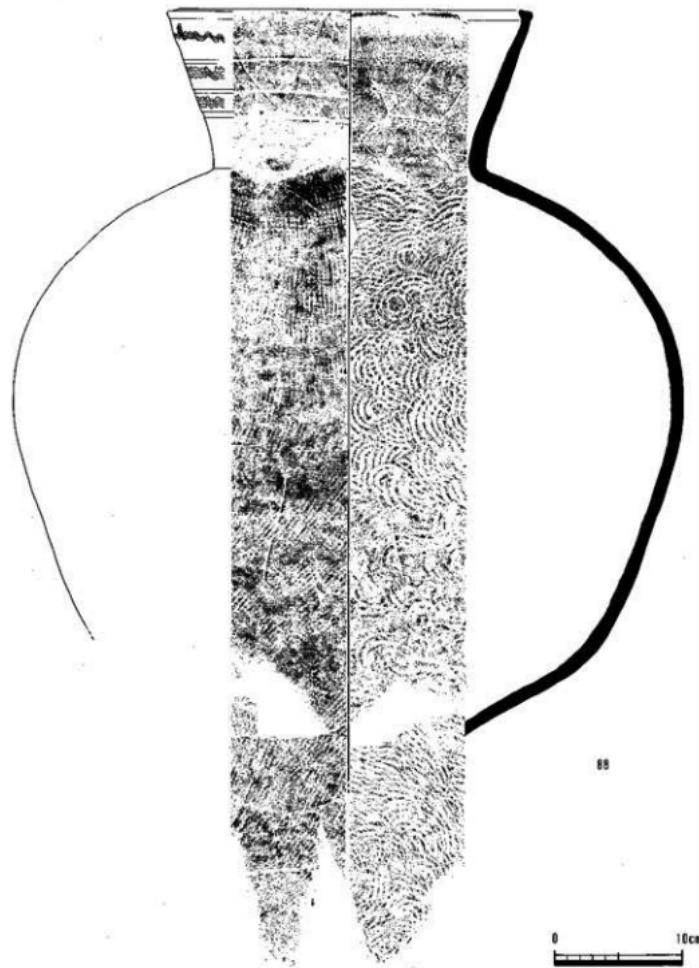


B-B' 第6層, C-C' 第⑩層

第40図 包含層出土遺物実測図(1/4)②

東側延長)の第6・7層から多量に須恵器が出土している。特に土層断面A-A' 第6層灰色粘土層から多量の須恵器とともに炭化木材・炭、須恵器では融着土器が出土した。

予備調査の段階でこの包含層を検出していたので、当初は窯に伴う灰原の可能性を考えていたが、町道を挟み西側の調査区で窯跡らしき遺構は検出出来なかった。また同時期の遺構の検出状況も丘陵裾の高い部分でのみ検出していることから、これらの遺物は同時期の遺構からの廃棄の結果である可能



B-B' 第6層、C-C' 第⑧層

第41図 包含層出土遺物実測図(1/4)③

性が高い。須恵器包含層下位では弥生土器を多量に含む包含層を検出した。第11図土層断面B-B'では第8・13・14層で、第12図土層断面C-C'では第⑩層から出土している。

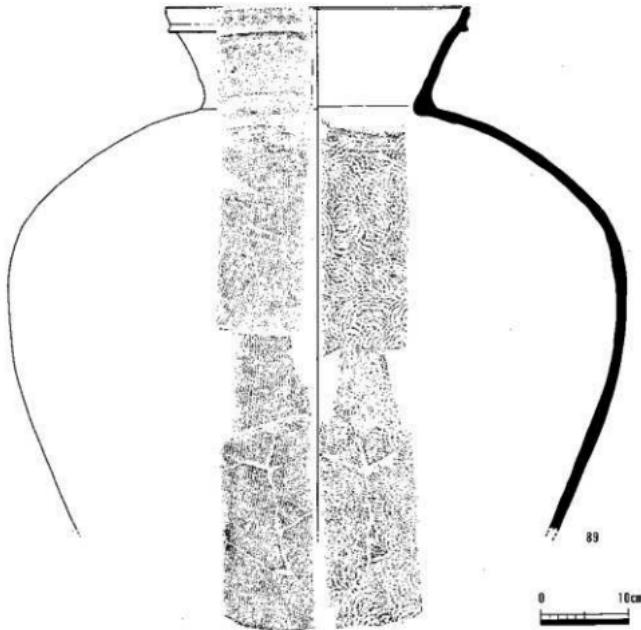
遺物の出土範囲は若干狭い。

第39～42図67～89は第11図土層断面B-B'第6層、第12図土層断面C-C'第⑩層から出土した遺物である。器種は須恵器坏身・坏蓋・高环・短頸壺、半瓶、壺、甕などで全ての器種が揃っている。土師器は土師質甕が少量出土している。坏身は立ち上がりが短く、底部はヘラ削りされている。坏蓋は天井部外側がヘラ切りのものとヘラ削りのものが認められる。85は甕で、体部内面に同心円を呈する当員痕が明確に認められるもので、87は体部内面の当員痕の中心部分が「十」を呈する。

須恵器坏身・坏蓋からこの層の時期は7世紀中葉頃と考える。

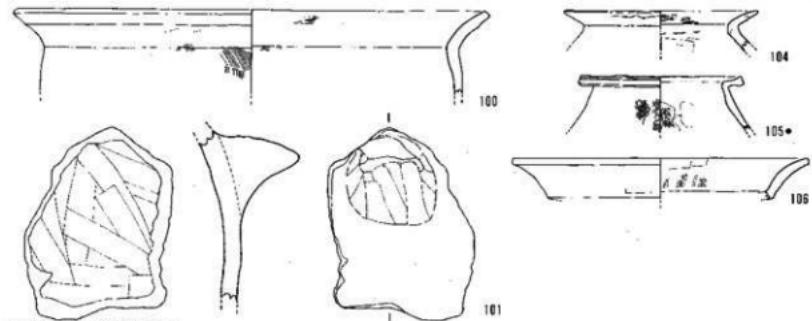
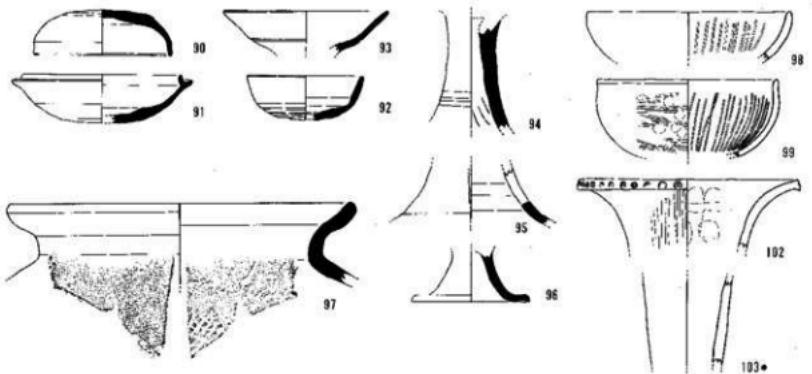
第43図90～106は第11図土層断面B-B'第7層、第12図土層断面C-C'第⑩層から出土した遺物である。下層から巻き上げた弥生土器を含むが、基本的には須恵器を包含する土層である。第7層に比べるとやや上師器・土師質土器の量が多い。須恵器には7世紀中葉以前に遡るやや長脚になるものが多く、土師器では98のように7世紀中葉頃と思われるやや器高の低い土師器坏Cがある一方99のようにやや器高が深く、7世紀前半頃に遡るものも認められる。

第44図118は第11図土層断面B-B'第⑩層、第44図119～139は第11図土層断面B-B'第⑩

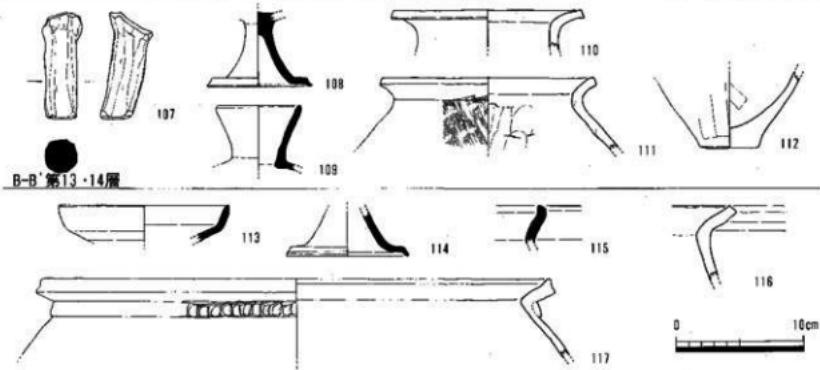


B-B'第6層、C-C'第⑩層

第42図 包含層出土遺物実測図(1/6)④



B-B'第7層, C-C'第10層



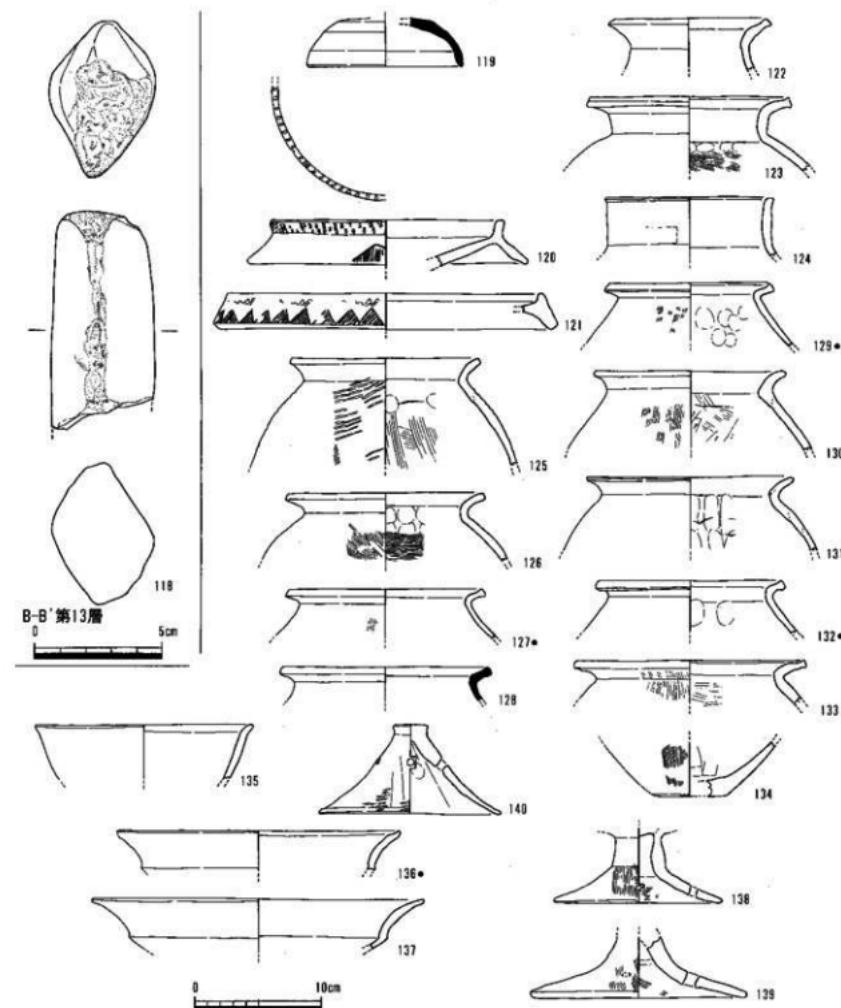
B-B'第8層, C-C'第12層

第43図 包含層出土遺物実測図(1/4)⑤

層から出土した遺物である。この両層は弥生土器のみをかなり多量に包含する。119は須恵器壺蓋であるが、上層からの取り上げ時の混入と考える。

第45図 141～159は県道及び町道西側の調査区北半から出土した包含層遺物である。7世紀中葉の須恵器を中心に同時期の土師器、弥生土器が認められる。

第46図 160～173は県道及び町道西側の調査区南半から出土した包含層遺物である。この地区の包

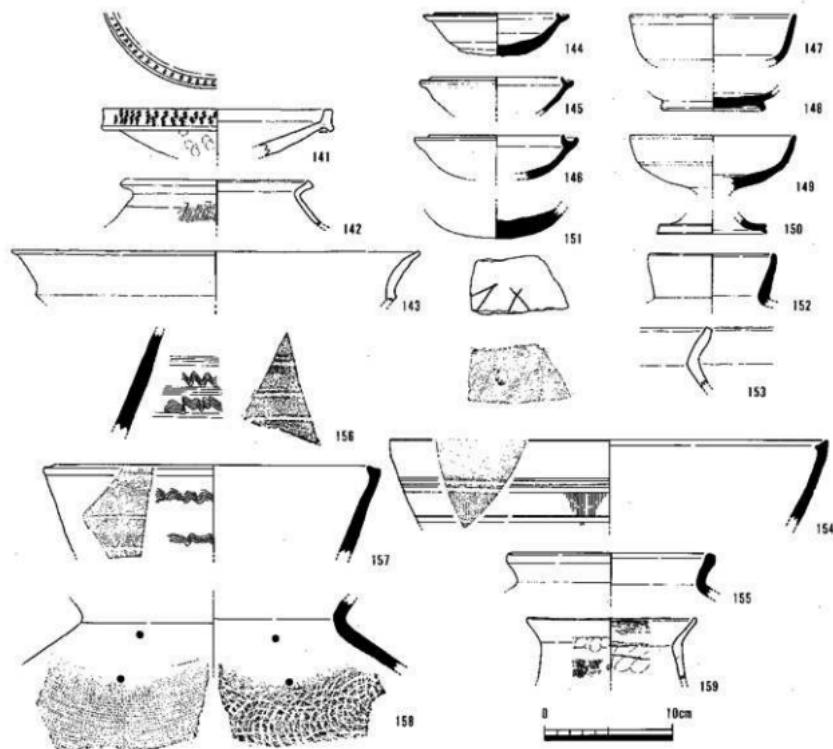


B-B'第13層

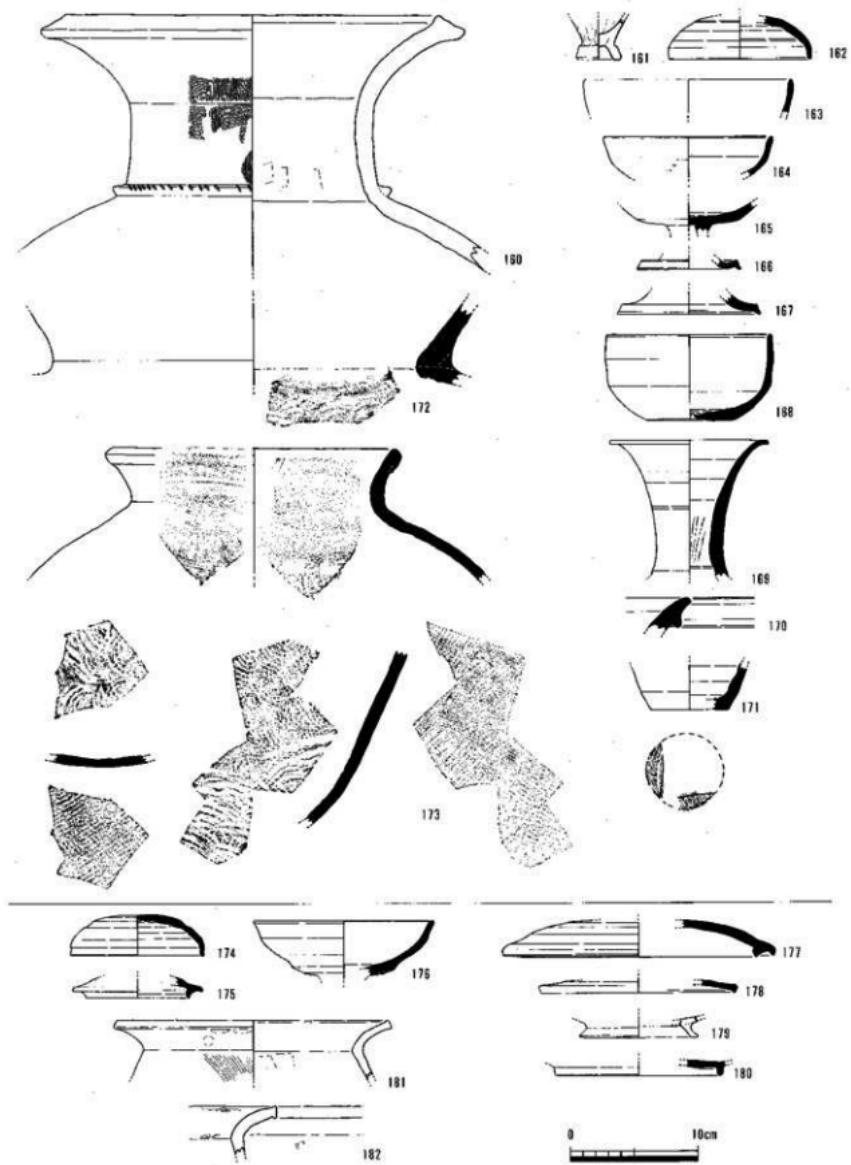
第44図・包含層出土遺物実測図(1/4)⑥

含層遺物からは弥生土器、5世紀前半（TK73型式）の須恵器、7世紀中葉の須恵器、9・10世紀の須恵器とかなり時代幅がある遺物が出土している。

特に170は初期須恵器で、TK73型式並行段階の須恵器壺である。胎土分析の結果、大阪陶邑産であることが解った。171は須恵器小壺の底部と考えられ、底部は糸切りを呈する。おそらく京都篠窯産と考えられる。



第45図 包含層出土遺物実測図(1/4)⑦



第46図 包含層出土遺物実測図(1/4)⑧

第II区調査区小結

第II調査区では弥生時代・古代・近世の遺構を検出した。検出面は近世の第1面と古代・弥生時代の第2面である。第2面で検出した古代と弥生時代は遺構埋土の土色・土質及び出土遺物で細分し、各時期の遺構を決定した。

その結果が第47図の遺構変遷図である。

弥生時代

弥生時代の遺構は竪穴住居跡を3棟検出した。検出面が西から東方向に傾斜しているために、その残存状況は非常に悪く、これら以上に遺構が存在した可能性がある。ただ現状では竪穴住居跡3棟のみで、調査区の北部でSHII01・02が重複するように、調査区の南部で竪穴住居跡SHII03を検出した。北部で検出した2棟はかなり削平を受けているために、その前後関係は不明であるが、おそらく円形の竪穴住居が古いものと考えられる。これら3棟の竪穴住居跡からほとんど遺物が出土しておらず、時期が不明であるために、共存関係は確認できない。

また、これら竪穴住居は西丘陵から東に延びる先端が北と南に分岐し、その間のやや奥まった部分に位置しており、東は予備調査で確認した低湿地があることから、このような僅かな平地部分にまで居住域としていたことが解る。

詳細な時期については、時期決定を行える遺物が出土していないために不明な部分もあるが、他の調査区で検出した遺構の状況、時期を比較・検討するとおそらく弥生時代後期後半と考えられ、これら3棟の竪穴住居はほぼ時期差がないものと考える。

この前提に立てばSHII01・02は重複するために建て替えられたものとすると円形竪穴住居(SHII01)・方形竪穴住居(SHII03)、方形竪穴住居(SHII02)・方形竪穴住居(SHII03)というセットが考えられ、竪穴住居2棟の共時性が考えられる。

古代

古代の遺構は掘立柱建物跡6棟、土坑、溝、不明遺構などを検出した。古代の遺構面も弥生時代の遺構面と同じ面で検出したために残存状況が非常に悪く、これら以上に遺構が存在した可能性が高い。

現状での古代の遺構は調査区全域で検出できる。まず掘立柱建物は北部で2棟、中央部で1棟、南部で3棟を検出した。南部の3棟以外重複しておらず、南北主軸も北部では東に27~38°、中央部では西に35°、南部では西に11~19°と2棟以上近接あるいは重複するものについては概ね10°程度の振れ幅内に收まり、それぞれの単位ごとにほぼ同方向を向くことが解る。これらの掘立柱建物の時期はSBII03以外明確に時期を決定する遺物が出土していないため不明であるが、SBII03が出土遺物から7世紀後半と考えられることやほとんどの柱穴埋土の土色が黒色系を呈することから、他の掘立柱建物もほぼ同時期とした。

この6棟の掘立柱建物が同時期にも係わらず同方向を向かない理由は、地形に制約されているものと考えられる。前述したように第II調査区は西側が西丘陵裾部に当たり、北と南は西丘陵から僅かに分岐した丘陵先端部によって閉鎖された奥まった部分であり、東は低湿地部分となるために僅かな平野部分を利用して、生活面が形成されていたことが解っている。それぞれの単位ごとの掘立柱建物南北主軸をみると南北主軸が西丘陵裾方向とほぼ同じで、弧を描いているように見られることは地形の制約を受け

ているためである。

またその他の遺構については掘立柱建物の北部と中央部の間にかなり同時期の溝・柱穴・不明遺構を検出しているが、削平のためその詳細については不明である。

近世

近世の遺構は掘立柱建物 1 棟、砂糖竈 6 基、溝、土坑、柱穴などを検出した。近世の遺構面は東に傾斜した弥生時代・古代の遺構面から東側で 1.6 m の傾斜堆積が形成された段階の平らな面で検出した。土層堆積状況を見るとこの自然堆積の後に、調査区東では約 3 m の範囲で近世段階の整地土が確認できることから、近世に整地を行い居住域を拡大する行為が行われていたことが解る。

近世の遺構は中央部から北部において検出した。その中心部に区画溝や柱穴を主とした遺構が検出されていることから、ここに居住域の中心施設、整然と区画された主屋等の建物あり、その縁辺部（東側）や南部に生業とした砂糖生産用の施設が配置されていることが解る。この調査区には調査時まで宅地が存在し、昭和初期まで砂糖生産を行っていたとのことである。

区画溝は現状で「逆コ」字状に配し、規模は南北 30 m で、さらにその中を東西の溝を配することにより、北側 24 m、南側 6 m にさらに区画する。東西は不明であるが、砂糖竈 SF II 01・02 を取り入れなければ概ね 15 m となり、主屋の敷地面積は 450 m²（約 136 坪）で、北側 360 m²、と南側 90 m²となる。

区画内で柱穴はほとんど検出されず、僅かに検出した柱穴埋土は灰色系を呈し、同時期と考えられるが、この柱穴数では掘立柱建物を構成できないため、おそらく近世以降は礎石建物であった可能性が指摘できる。

一方砂糖生産施設はその工程で火を使用することから延焼をさけるため主屋とは別棟とし、基本的には主屋南側と北東側を中心配置されたものと考えられる。砂糖生産には砂糖竈のある「釜場」以外に「純場」・「研ぎ場」・「乾燥場」・仕上げをする施設という施設が必要である。検出状況から考えると「純め場」は調査区南東部の屋外あるいは簡易な施設で、「研ぎ場」・「乾燥場」・仕上げをする施設などはおそらく主屋部分の南区画部分がそれに相当するのではないかと考えられる。

砂糖竈には調査では明らかに出来なかつたが竈の数、焼成施設部分の構築方法などにより時期差がある。まず竈の数に 1 つのものと 2 つのものがあるのは文化 3 (1806) 年に向山周慶によって砂糖釜を荒釜と揚釜に区分して使い分けを行うように改良されたことによる結果と考えられ、おそらく竈 1 つから竈 2 つに変遷したものと考えられる。遺構間での前後関係は近接して SF II 05・06 があるが、明確な切り合い関係は解っていない。また出土遺物でも時期差の根拠となるものは出土していない。

焼成部分の構築方法には SF II 04 のように側壁及び奥壁に石を使用するがあり、その他は粘土を貼り付けて構築していることから、おそらく強度面から焼成部に石を使用するようになっていったものと考えられる。

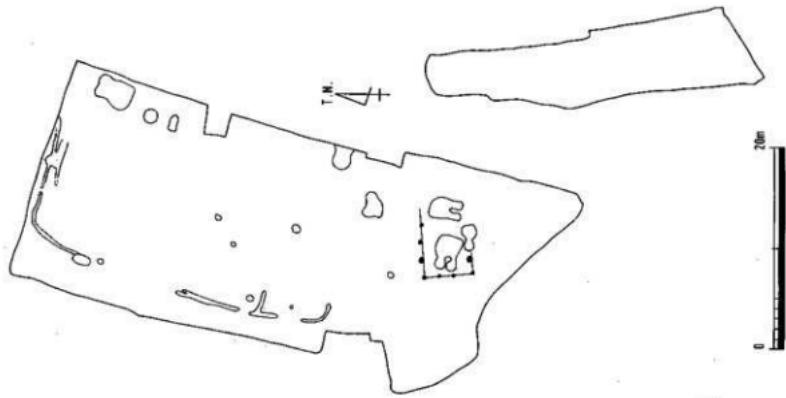
以上の結果から砂糖竈は竈 1 つの砂糖竈から竈 2 つの砂糖竈になり、さらに焼成部分に石を使用する砂糖竈に改良されたものと考えられる。

以上第 II 調査区で検出した 3 つの時期の検出遺構から、その変遷およびその利用が解る。

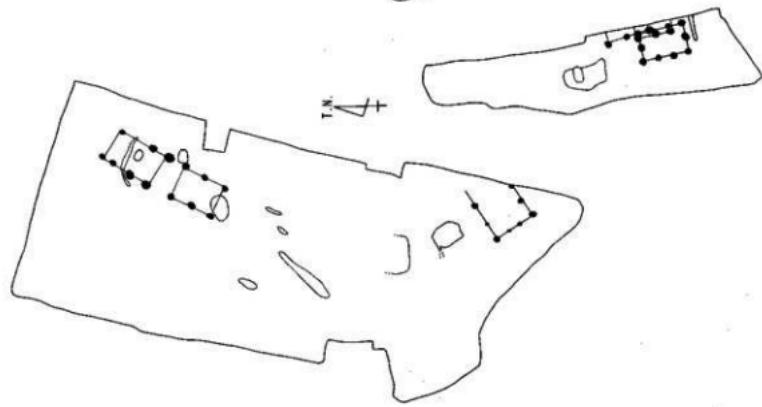
弥生時代においては微高地を中心に集落が形成されたが、人口増加等により生活域として使用された結果と考えられ、古代については古川の氾濫により安定した丘陵裾部の利用が想定できる。また近世においては谷筋の風を避け、砂糖製造を行うのに適した場所だったと考えられる。

第47图 II区遗物变迁图(1/500)

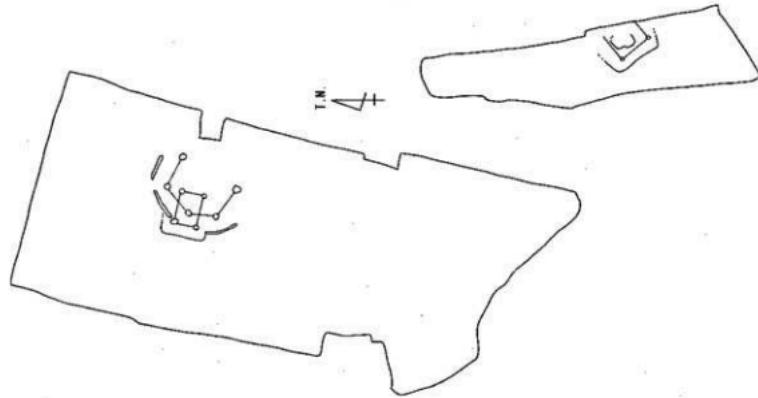
Ⅲ期(近代)



Ⅱ期(古代)



Ⅰ期(新石器时代)



第III調査区概要

第III調査区は虎丸山から北方向に派生する丘陵(西丘陵、東丘陵)に挟まれた僅かな平野部分、現古川の西側に位置する。この平野部分では微地形復元・予備調査により、南から北方向に延びる微高地a(第9図)を確認した。この微高地の中程に第III調査区は位置する。

この調査区の東側では現古川が北流する。予備調査の結果、現古川は現位置で機能していた時期が中世まで遡れ、また河床低下が認められることから古代末から中世初頭には現位置にあったことが確認できる。しかし上限がどこまで遡るかは不明である。また第III調査区の西部で低湿地aを確認している。

上記の結果から第III調査区は西側で低湿地部分(生産域か)を確認し、また発掘調査によって東側で旧古川(現古川)、北側ではほぼ南東方向から北西方向へ流路を取るSRIII03を確認したことによって西・北・東をこれら流路・低湿地によって区画された遺構を検出したことになる。

第48図南北七層断面A-A'、B-B'でみると耕作上表面下35cmで遺構面となり、耕作土・床上を除くと遺構面上部に約10~20cm程度の灰色系の多量に砂粒を包含する粘質土層が調査区全面に堆積していることが解る。また部分的には濁茶白色の砂層が堆積する。

第49図南部の東西土層断面C-C'では2条の自然流路を検出した。どちらも流路方向に対して斜行断面であるために流路幅がかなり広くなっている。土層断面の中で東側で検出した自然流路の埋土は茶白色の砂層で、西側で検出した自然流路の埋土は黒色系の砂混り粘質土と淡茶色系の砂層で構成されている。土層断面で見る限り、この自然流路の掘り込み面は弥生時代の遺構面と同一面としてとらえられる。

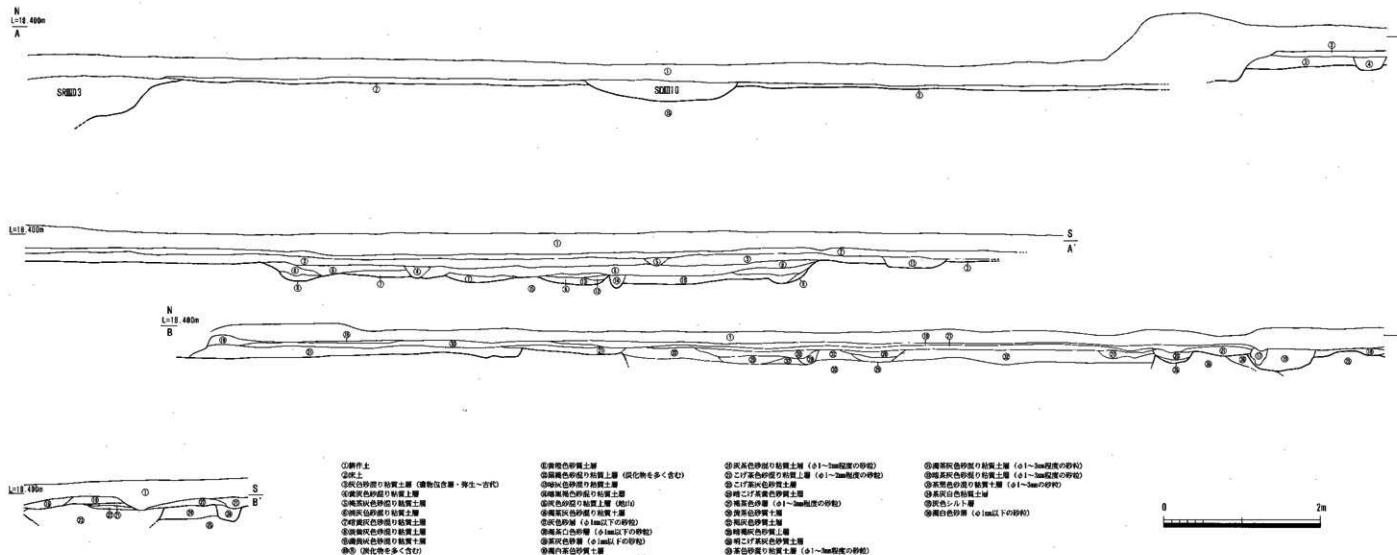
自然流路はほとんどが南東から北西方向に流路を取り、流路幅も一定でなく、かなり蛇行している。流路内から遺物は出土しておらず、底面も凹凸が認められ一定していない。おそらくこれらの自然流路は古川の氾濫によって短期間に形成され、埋没した流路であると思われる。これらの時期は出土遺物が出土していないので不明であるが、弥生時代より遡ると考えられる。

当調査区で検出した遺構はほとんどが弥生時代のもので、それ以外は中世・近世の遺構を少量検出したのみである。またこれらの遺構は現地表から遺構面まで35cmと浅いことや検出した遺構の深さが約10~20cmと浅いことからかなり削平を受けていることが解り、洪水砂層の堆積から古川がかなりの頻度で氾濫し、洪水砂層がこの微高地を含め、この全域を覆ったものと考えられる。

検出した遺構の時期は前述したように弥生時代のみで、遺構としては竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸、土壙墓、土坑、柱穴などがある。

これらの遺構は当初推定した微高地部分を中心に検出した。自然流路は古川から延びるもので、南東から北西方向に流路を取る一時期の支流ではないかと考えられる。ただ調査区内で検出した弥生時代の自然流路内には杭が打ち込まれた部分や意図的な蛇行部分が認められることから人為的な要素もある。またこの流路の延長が低湿地aに延びていることから導水路の可能性も考えられる。

その他の遺構として竪穴住居・掘立柱建物・土壙墓などが検出され、あまり切り合いが確認されていないことから短期間の集落であることが解る。

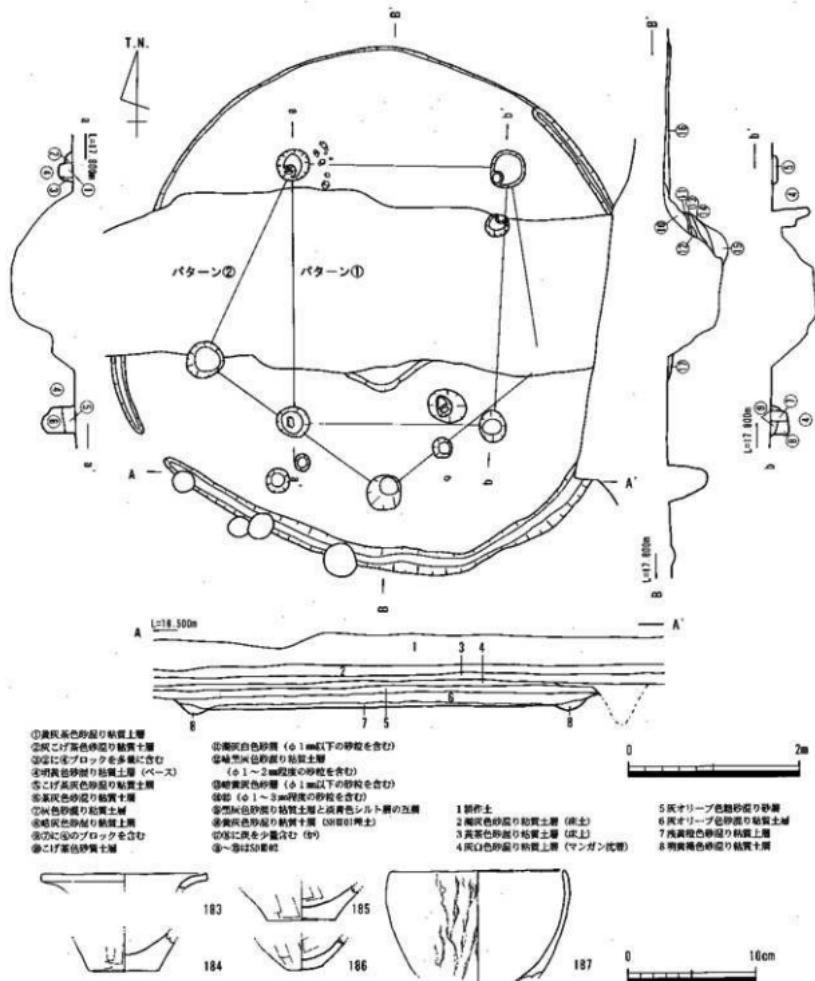


第48図 III区 A-A', B-B' 土層断面図(1/40)

堅穴住居跡

SHIII01

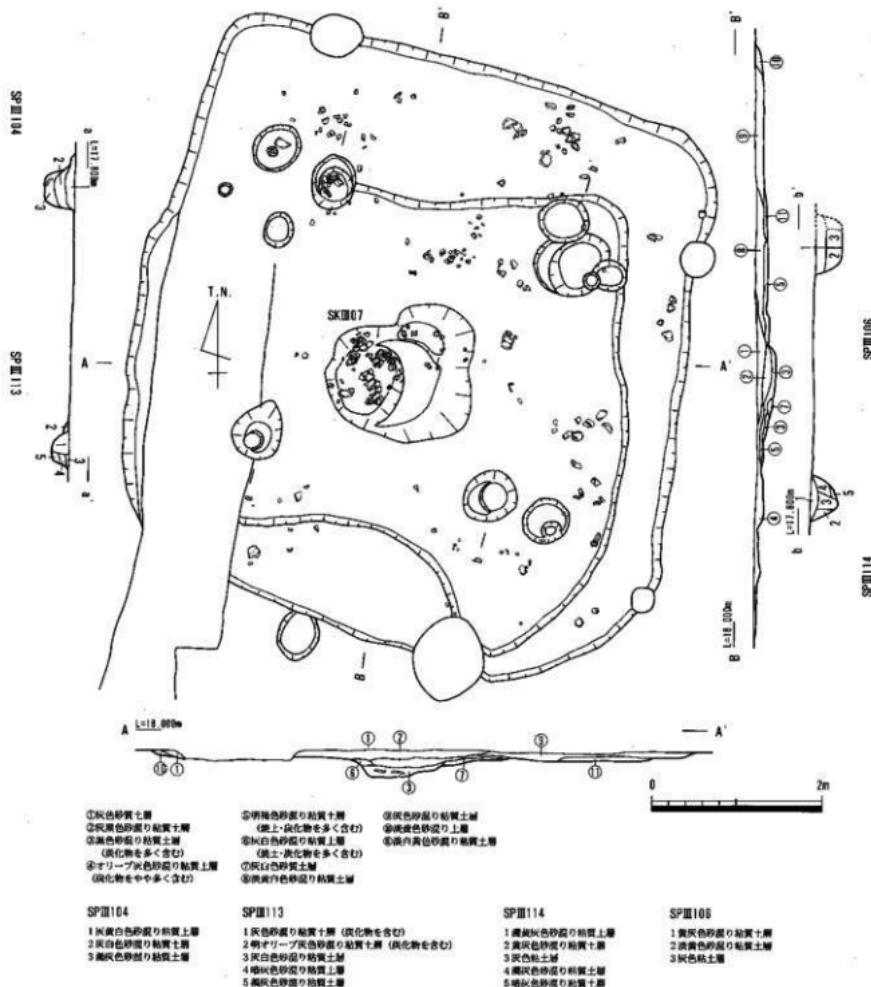
SHIII01は第III調査区中央北、標高17.7mにおいて検出した堅穴住居である。ほぼ中央を東西方向にSDIII02に切られているが、平面形態は円形を呈することが解る。規模は直径約6.25m、床面積約31m²、検出面からの深さは埋上が残存する部分で約0.10mを測るもので、全体的にかなり削平を受け、南半分は壁溝と主柱穴のみの検出である。



第50図 SHIII01平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

北側に残る竪穴住居堆積土（第50図土層⑩黄灰色砂混り粘質土）を取り除くと竪穴住居の内部構造が判明した。SDIII02に削平されているもののはば中央に中央土坑の南側（土層⑪炭を少量含む）が僅かに残存する。主柱穴はパターン①とすると4穴で、パターン②とすると5穴が想定できる。ここではパターン①とした。壁溝は北西部以外で検出した。

主柱穴は平面形態が円形で、直径0.3～0.45m、深さ0.1～0.50mを測る。その内柱痕が確認できるものから直径12～16cm程度の柱材が推定できる。また竪穴住居内部には主柱穴以外に数個の柱穴を確認したが、同時性を検証出来なかつた。



第51図 SHIII02平・断面図(1/60)

壁溝は北西部以外で検出でき、幅約16～26cm、深さ約10cmを測る。

竪穴住居内から少量の弥生土器が出土している（第50図183～187）。

出土遺物をみると鉢・高杯の形態や鉢の多量化が進んでいることまた皿状の鉢が出現していないことなどから弥生時代後期後半頃でも前半と考える。また中央で竪穴住居を切る溝SDIII02が弥生時代後期終末であることから時期的にも齟齬はない。

全体の出土遺物は少ないが、そのなかでも「下川津B類土器」の出土量は、3.1%と少ない。

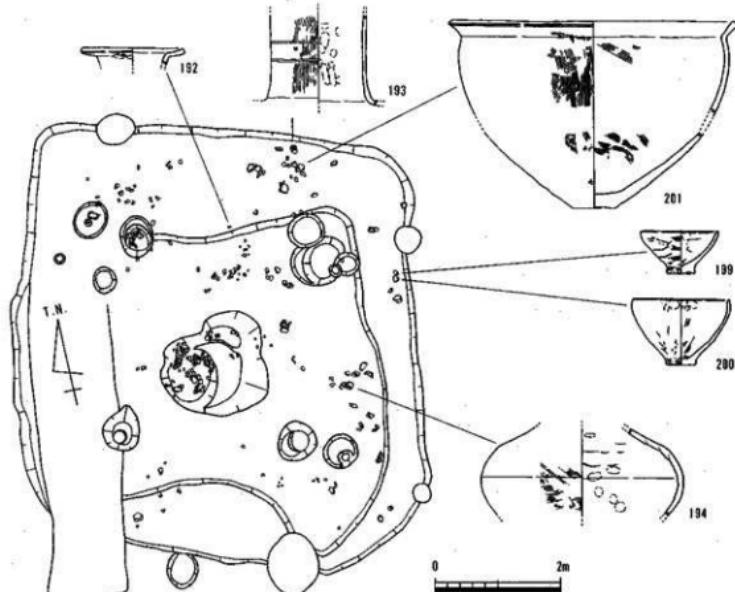
SHIII02

SHIII02は第Ⅲ調査区中央部、標高17.8mにおいて検出した竪穴住居で、西側を予備調査トレンチで破壊されているものの平面形態は隅丸の方形を呈する。規模は南北軸約6.93m、東西軸約6.51m、床面積約45.1m²、検出面からの深さは約0.1mを測るもので、全体的にかなり削平を受けている。南北主軸はN14°Eを取る。

竪穴住居内堆積土層は、ほぼ全体が灰色系の砂混り粘質土である。

この上位の堆積土を取り除くと竪穴住居の内部構造が明確に判明した。ほぼ中央に中央土坑を配し、北・東・南にベッド状遺構を持つもので、ベッド状遺構の内側コーナー部に4つの主柱穴を持つことが解る。

ベッド状遺構は北・東・南で検出されたが、その幅は一定でなく東側が狭く歪である。北側ベッド状遺構は最大幅約1.93m、高さ0.04mを測り、土層断面より地山削り出しで造られている。東側ベッド状遺構は幅約0.60～0.80m、高さ約0.04mと上面幅が狭く、南側ベッド状遺構は最大幅約1.20mあ



第52図 SHIII02遺物出土状況(1/80)

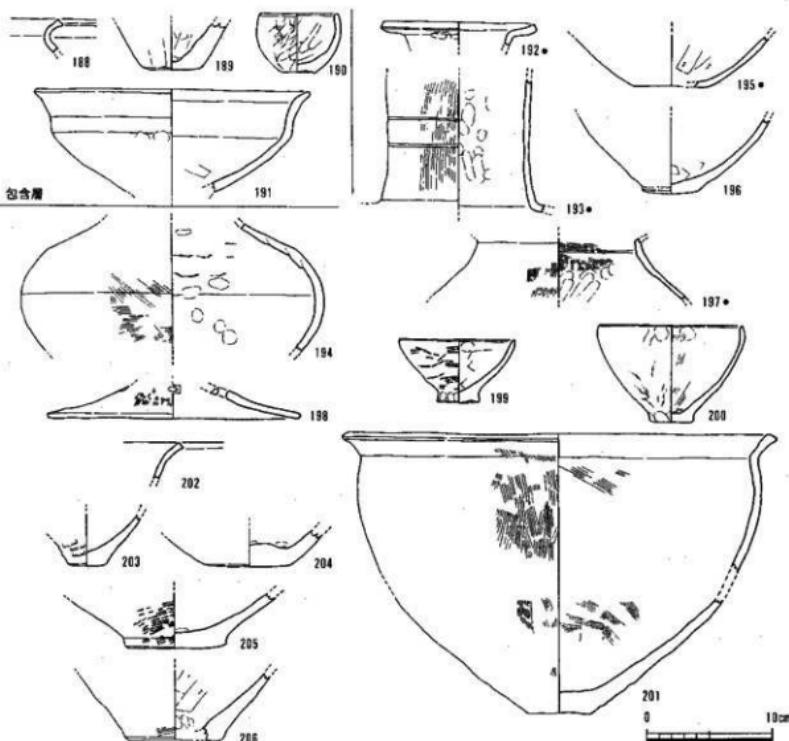
るが内側が曲線となっているなど、本来の形状を残していない可能性も指摘できる。これらベッド状遺構は土層断面から全て地山削り出しであるが、東側ベッド状遺構の土層断面A-A'をみると土層⑪の堆積上面とベッド状遺構の上面が同一であることから土層⑪がベッド状遺構の堆積土の可能性も考えられ、そうすると幅約1.50mを測り、北側・南側のベッド状遺構の幅とあまり変わらなくなる。

主柱穴は平面形態が円形で、直径0.6~0.9m、深さ約0.3mを測る。その内柱痕が確認できるものから直径約20cm程度の柱材が推定できる。また竪穴住居内部には主柱穴以外に数個の柱穴を確認したが、土坑以外は同時性を検証出来なかった。

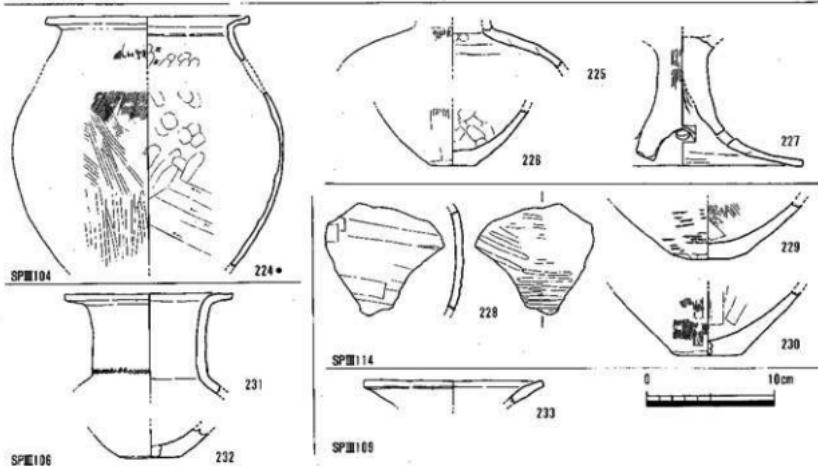
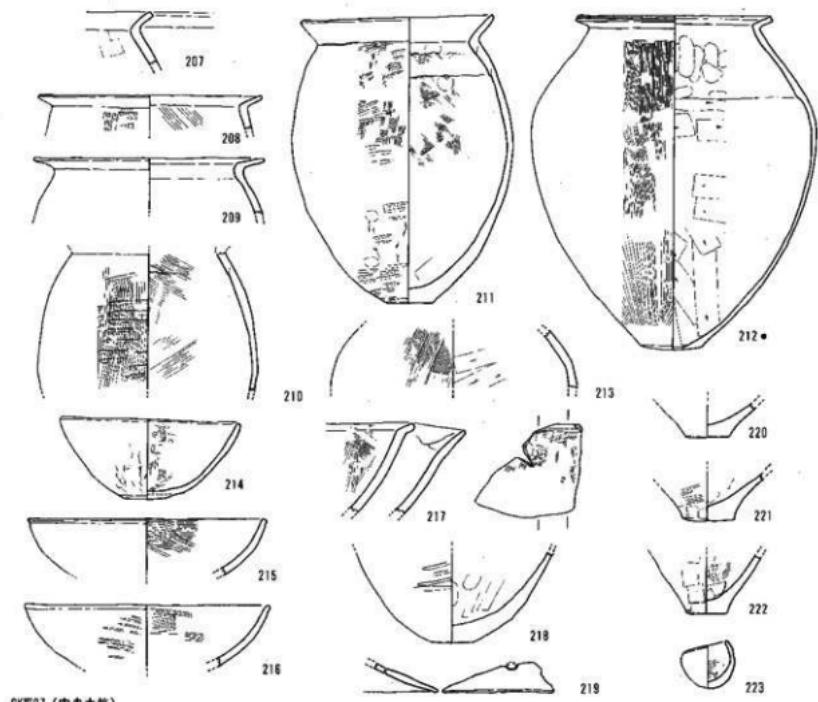
中央土坑は炉と考えられ、平面形態が歪な円形を呈し、北側に瘤状の突出を持つ。東側が2段の掘り方で、中心部は断面が逆台形状に窪む。規模は東西約1.76m、南北約1.30m、深さ約0.20mを測る。また土坑内部に被熱の痕跡は確認できない。埋土は上下2層に大別でき、下層には炭（炭化物）を多量に含む（炭層）がある。

竪穴住居内から弥生土器が多量に出土している（第53図）。

これらの遺物は大別して竪穴住居埋土中から出土したもの（188~191）、床面直上から出土したもの



第53図 SHIII-02出土遺物実測図(1/4)①



第54図 SHIII02 出土遺物実測図(1/4)②

(192～206)、中央土坑から出土したもの(207～223)、主柱穴から出土したもの(224～232)、住居内検出柱穴から出土したもの(233)に分けられる。

堅穴住居の埋土は検出面からの深さが約10cmと浅く、床直遺物として抽出した遺物はほとんどが破片で、その配置や器種構成上をみると鉢が北東側のベッド状遺構上から出土していることが解る。また中央の土坑(炉)や主柱穴を構成する柱穴から良好な遺物が出土している。

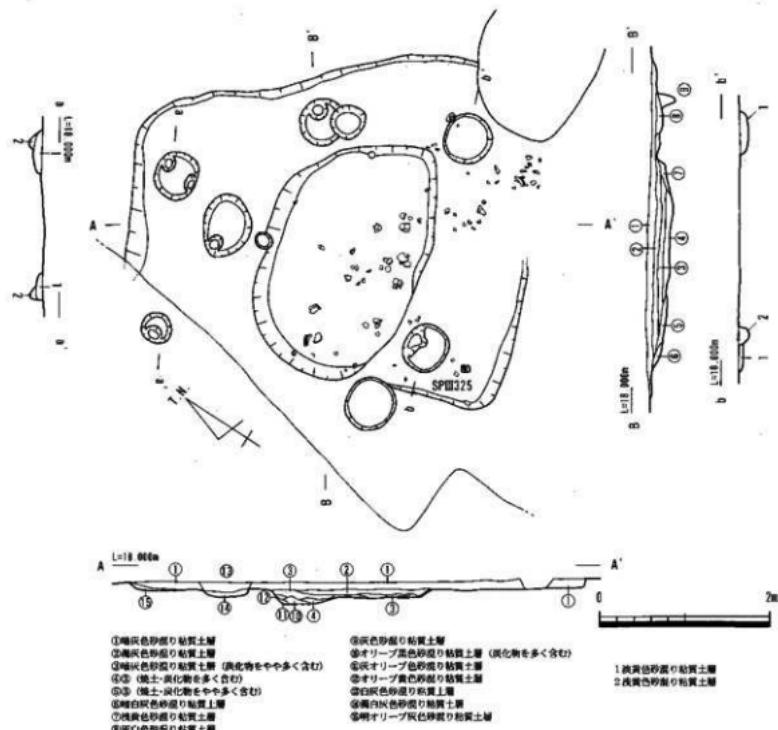
「下川津B類土器」の出土量は、12.8%と多い。

以上の出土遺物をみると鉢・高环の形態や鉢の多量化が進み、皿状の鉢が出現していることから弥生時代後期後半でも後半と考える。

SHIII03

SHIII03は第III調査区中央、標高17.9mにおいて検出した堅穴住居で、後の柱穴・溝等と切り合いがあるものの復元すると平面形態は隅丸の方形を呈する。規模は南北軸(北西～南東)約4.7m、東西軸(南西～北東)約4.0m、床面積約19.0m²とやや小振りのもので、検出面からの深さは約0.1mを測るものである。南北主軸はN-33°Wを取る。

堅穴住居内堆積土層は大別すると上・下2層に分けられる。上層としたものは土層①(暗灰色砂混



第55図 SHIII03平・断面図(1/60)

り粘質土層)で、住居内全面に堆積する。下層としたものはほぼ中央で検出した土坑の埋土である。

堅穴住居内堆積土はかなり削平を受けていたために層厚がなく、ほぼ単層である。

この堆積土を除去すると中央に土坑状の窪み(炉か)、主柱穴を検出した。

主柱穴は推定4穴と考えられる。平面形態が円形で、直径0.35~0.6m、深さ0.10~0.14mを測る。柱痕は確認できなかった。

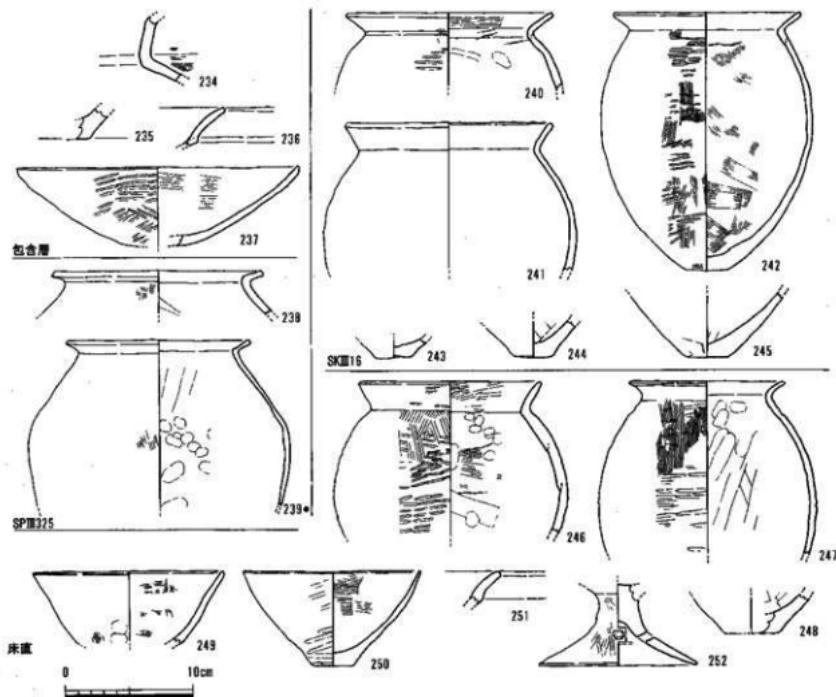
中央で検出した土坑状の窪みは平面形態が梢円形で、規模は南北約1.9m、東西約3.0m、深さ0.2mを測る。埋土には焼土・炭化物を含むことから炉と考えられるが、主柱穴とした柱穴に近接している。

堅穴住居内から多量の弥生土器が出土している(第56図234~252)。これらの遺物は大別して床直遺物と中央で検出した土坑状の窪みから出土している。

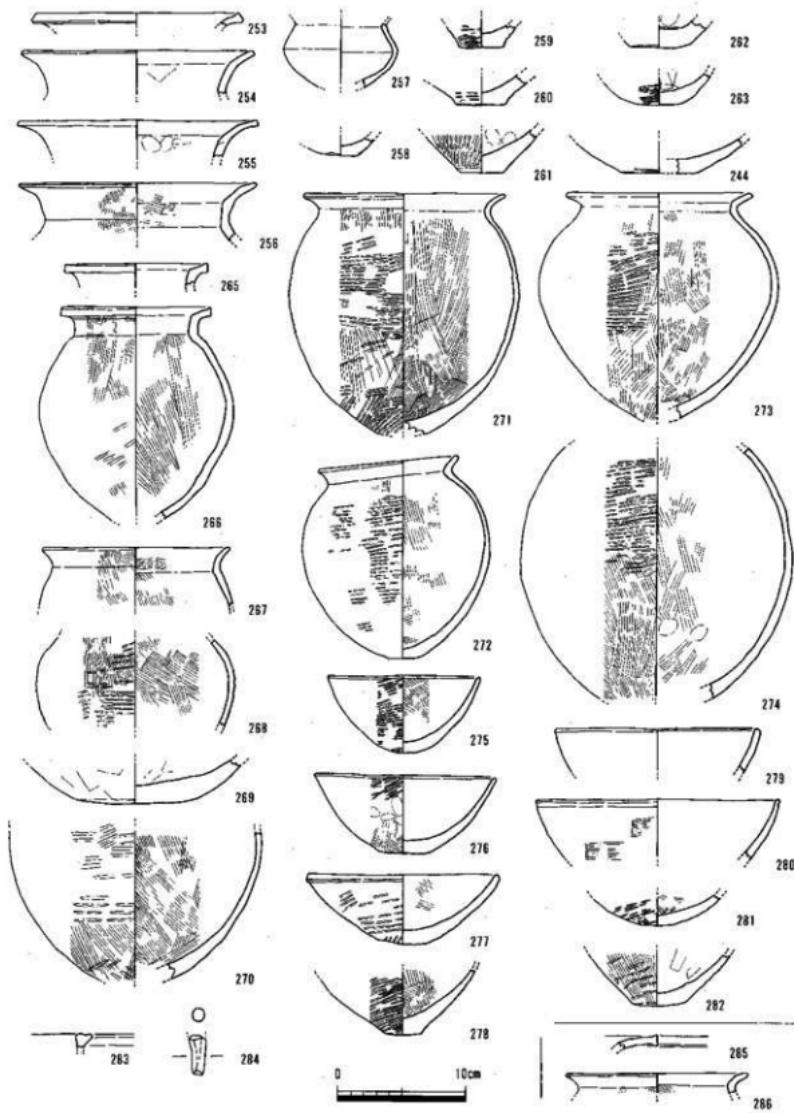
234~237が上層、240~245が土坑状の窪み、238・239が主柱穴を構成する柱穴から、246~252が床直からの遺物である。

「下川津B類土器」の出土量は、7.6%とやや多い。

この遺構の時期は鉢・高壺の形態や皿状の鉢が出現していることなどから弥生時代後期後半でも後半と考える。

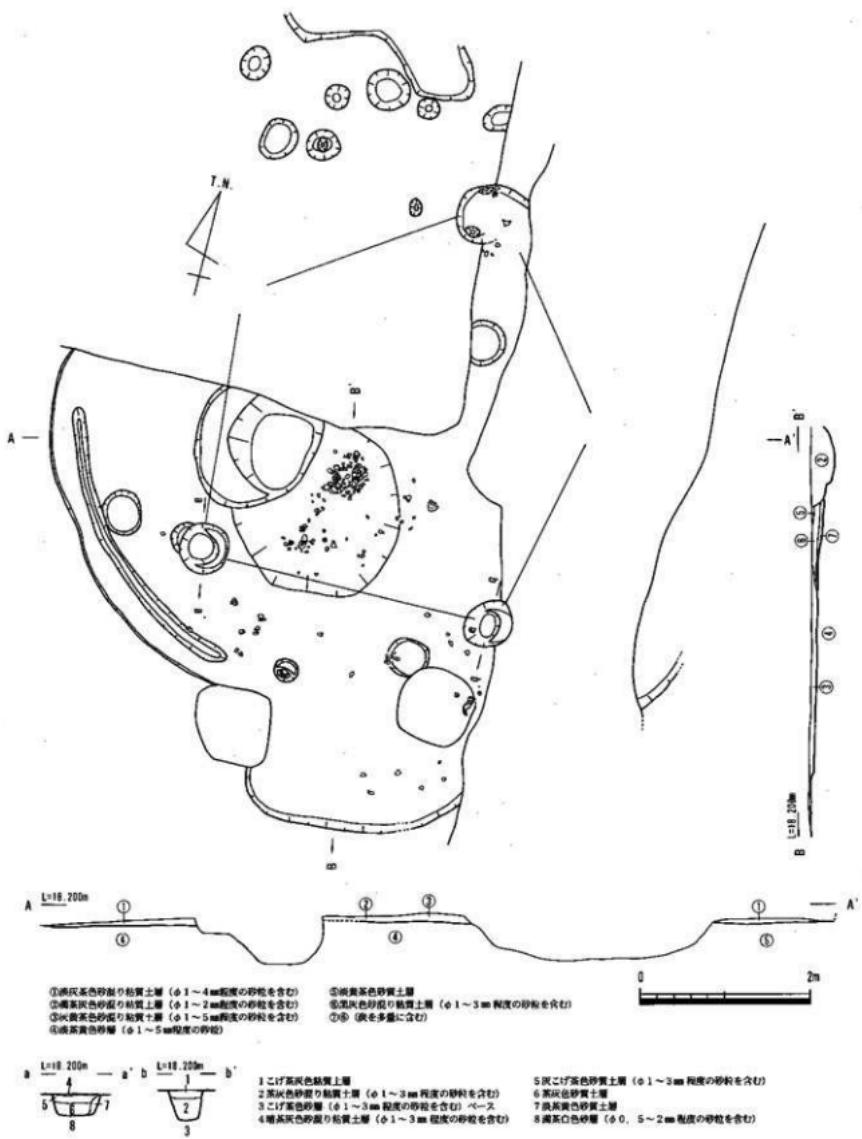


第56図 SHIII-03出土遺物実測図(1/4)



270 (SHIII-04)

第58図 SHIII-04出土遺物実測図(1/4)



第59図 SHIII05平・断面図(1/60)

SHIII05は第Ⅲ調査区中央南、標高18.0mにおいて検出した竪穴住居で、北半分及び東側部分を現水路等によって削平を受けているが、復元すると平面形態は円形を呈し、南部に長方形の張り出し部を持つ。規模は復元直径約8.31m、床面積約52m²、検出面からの深さは約0.1mを測るもので、全体的にかなり削平を受けている。また張り出し部は長方形に幅約2.7m、長さ約1.0mで突出している。この張り出し部も含めると外観上は直径約9.31mを測る竪穴住居である。

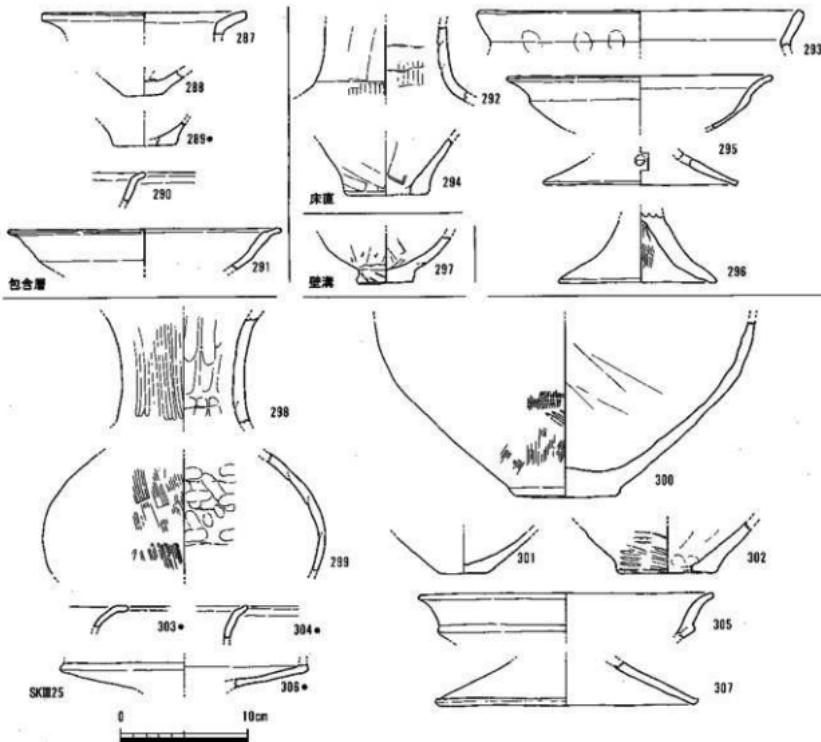
竪穴住居を復元推定すると南東部でSHIII01の北側張り出し部と重複するが、詳細な切り合い等については不明である。

竪穴住居内堆積土はかなり削平を受けているために層厚がなく、ほぼ単層である。

この堆積土を除去すると中央土坑、主柱穴、壁溝を検出した。

主柱穴は推定5穴と考えられ、現状では3穴のみ確認した。平面形態は円形で、直径0.5～0.6m、深さ0.26～0.36mを測る。柱痕は確認できなかった。

中央土坑は中央南寄りで検出した。平面形態が円形を呈し、断面の形状は中心底部が北側によった2段掘を呈する。規模は直径約2.0m、深さ約0.3mのもので、2段掘の浅い部分(南側)の埋土に多量に炭化物を含む。



第60図 SHIII05出土遺物実測図(1/4)

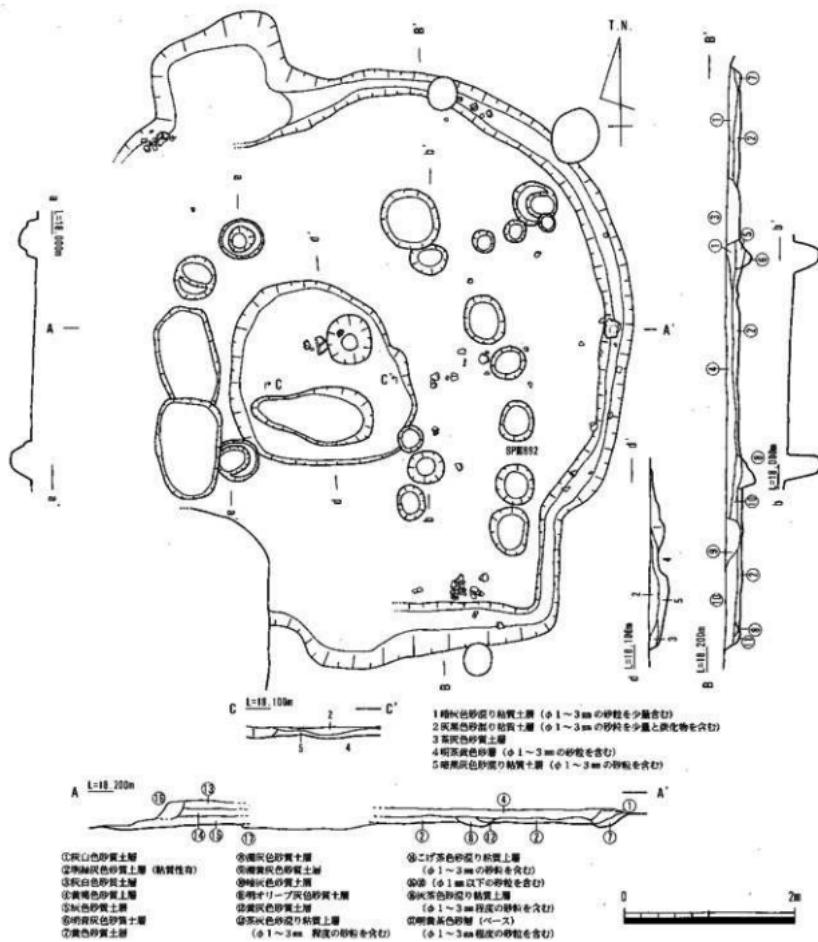
また住居内南西部で壁溝を検出した。

竪穴住居内から弥生土器が少量出土している（第60図）。

これらの遺物は大別して竪穴住居埋土中から出土したもの（287～291）、床面直上から出土したもの（292～296）、壁溝から出土したもの（297）、中央土坑から出土したもの（298～307）に分けられる。

「下川津B類土器」の出土量は、1.5%と少ない。

出土遺物をみると鉢・高壺の形態や鉢の多量化が進んでいないことなどから弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



第61図 SHIII-06平・断面図(1/60)

SHIII-06

SHIII-06は第III調査区中央南、標高18.0mにおいて検出した竪穴住居で、西側部分を現水路によって削平を受けているが、復元すると平面形態は円形を呈し、北西部と南部に長方形の張り出し部を持つ。規模は復元直径約6.90m、床面積約37m²、検出面からの深さは約0.2mを測るもので、全体的にかなり削平を受けている。また張り出し部は北西部が長方形に幅約1.6m、長さ約1.0mで、南部が長方形に幅約3.1m、長さ1.1mで突出している。この張り出し部も含めると外観上は直径約9.0mを測る竪穴住居である。

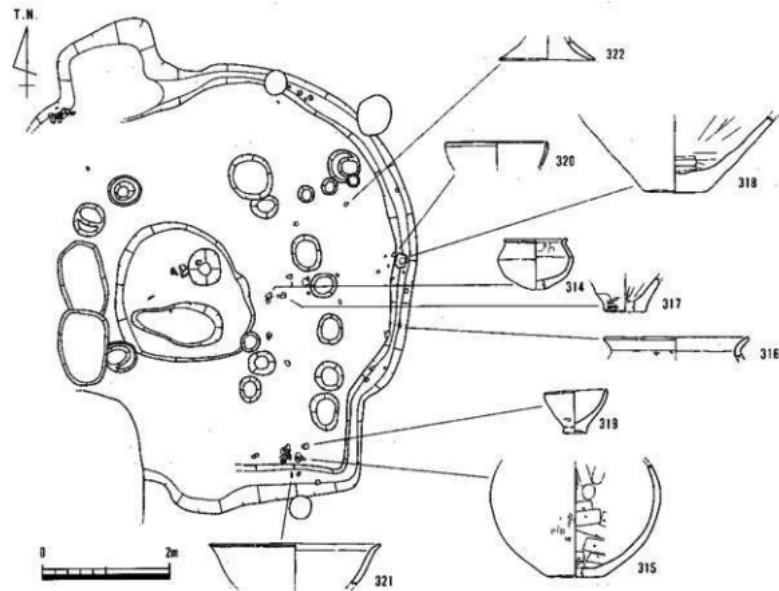
竪穴住居内堆積土層は大別して上・下2層に分けられる。

この2層を取り除くと竪穴住居の内部構造が判明した。ほぼ中央に円形の中央土坑を配し、周囲に壁溝を持つもので、4つの主柱穴を持つことが解る。

主柱穴は平面形態が円形で、直径0.4~0.5m、深さ0.2~0.5mを測る。また竪穴住居内部には主柱穴以外にかなり柱穴を確認したが、同時性は検証出来なかった。

周囲の壁溝は現水路で削平を受けている西側以外の部分において検出した。幅は竪穴住居掘り方の肩部から約40cm、床面からの深さ約5cmを測り、かなり幅広である。北西側の張り出し部での詳細は不明であるが、南側の張り出し部では掘り方の壁に沿って壁溝を巡らせる。

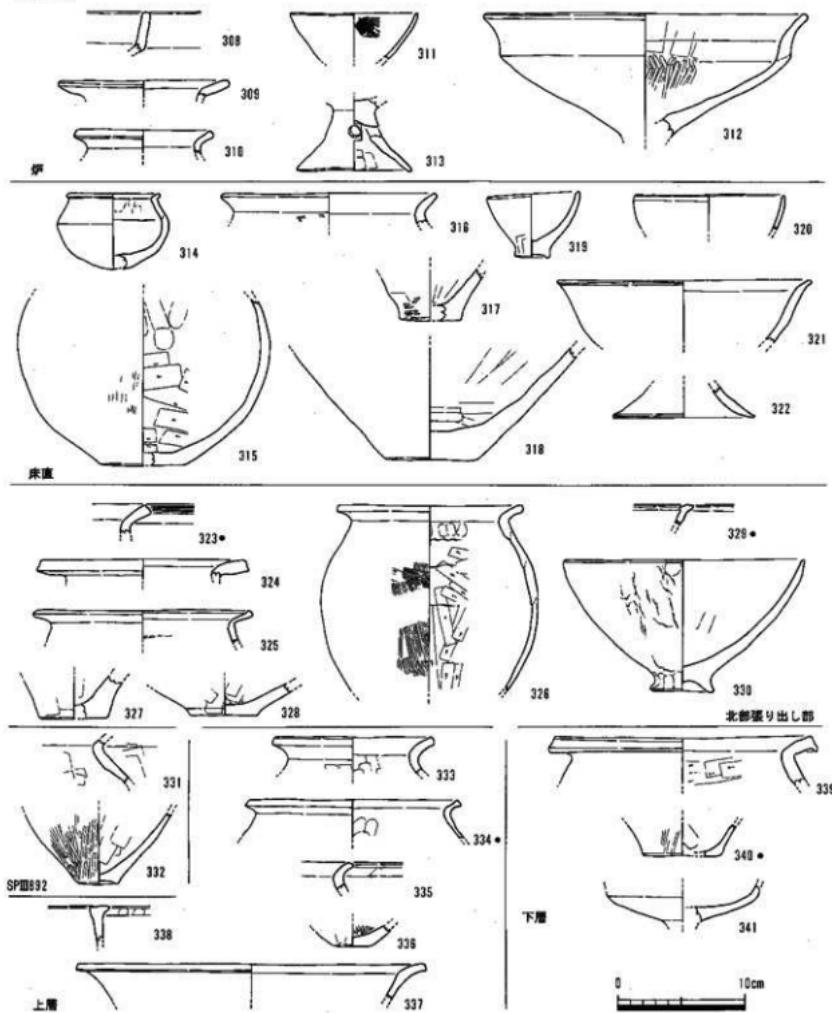
中央土坑は歪な円形の大きい掘り方を持ち、その内部の北側に円形、南側に長方形に近い土坑を持つ。まず大きい掘り方の土坑は平面形態が歪な円形で、直径約2.1m、深さ0.15m程度の浅い掘り込みである。その内部には北側に平面形態が円形を呈し、直径約0.5m、深さ0.15mを測る土坑と南側に長方形形状を呈し、長軸約1.5m、短軸0.7m、深さ0.2mを測る土坑を検出した。北側の土層を確認して



第62図 SHIII-06遺物出土状況(1/80)

いないため詳細は不明であるが、大きい掘り方の土坑堆積層を南側の土坑堆積層が切っている。このことから、この土坑は2時期あったものと考えられ、まず大きい掘り方の土坑が埋没（埋め戻された）した後南側の長方形状の土坑が掘削されたものと考える。南側の長方形状の土坑堆積土からかなり炭化物が出土している。

竪穴住居内から多量の弥生土器が出土している（第63図）。特に小型の鉢は住居内壁際からの出土が目立つ。



第63図 SHIII-06出土遺物実測図(1/4)

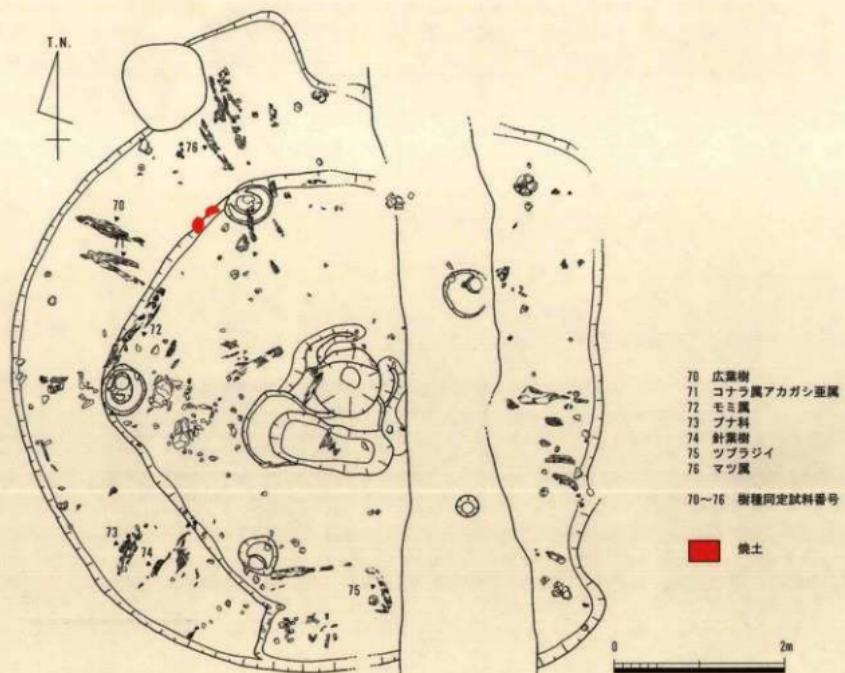
これらの遺物は大別して中央土坑から出土したもの（308～313）、床面直上から出土したもの（314～322）、北西張り出し部から出土したもの（323～330）、柱穴から出土したもの（331・332）、堆積土上層から出土したもの（333～338）、堆積土下層から出土したもの（339～341）に分けられる。

「下川津B類土器」の出土量は、5.2%と少ない。

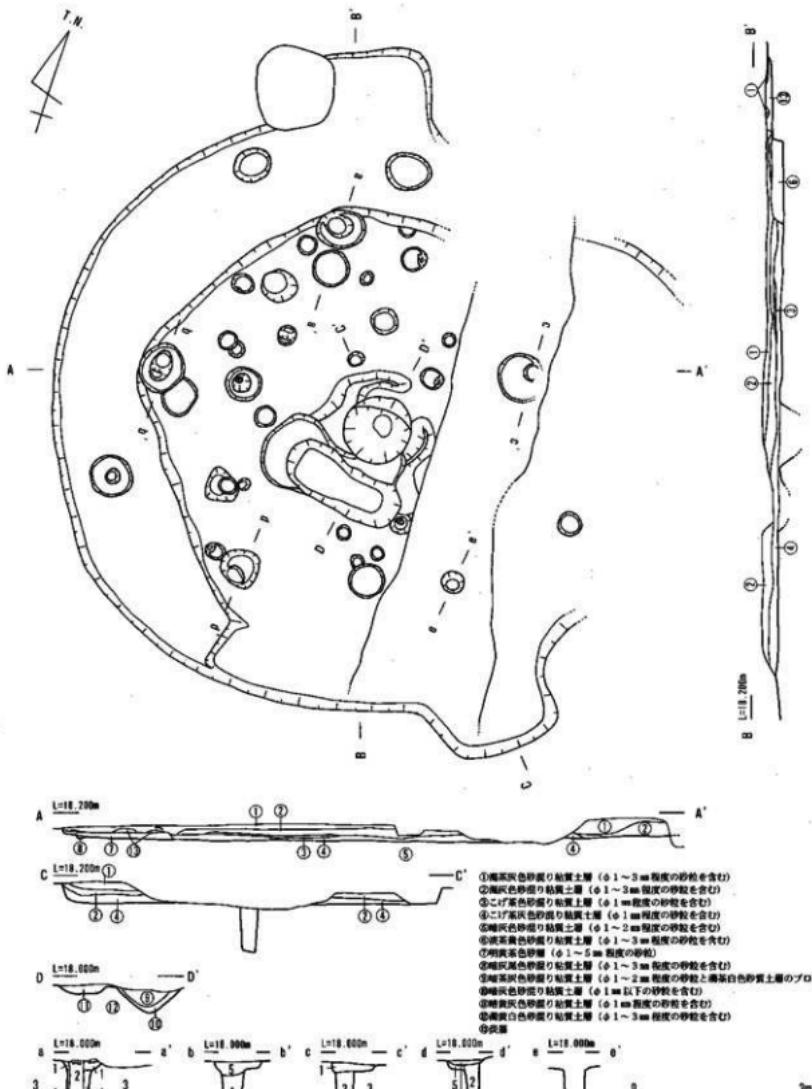
以上の出土遺物をみると鉢・高环の形態や鉢の多量化が進んでいいないことなどから弥生時代後期後半頃でも前半と考える。

SHIII07

SHIII07は第III調査区中央南、標高18.1mにおいて検出した竪穴住居で、東側部分を現水路によって削平を受けているが、復元すると平面形態は円形を呈し、北西部と南東部に長方形の張り出し部を持つ。規模は復元直径約7.3m、床面積約41.8m²、検出面からの深さは約0.2mを測るもので、全体的にかなり削平を受けている。また張り出し部は北西部が長方形に幅約1.5m、長さ約0.8mで、南東部が長方形に幅約1.4m、長さ0.9mで突出している。この張り出し部も含めると外観上は直径約8.82mを測る竪穴住居である。



第64図 SHIII07(新)焼失家屋検出状況平面図(1/60)



1 黄色砂砾り粘土層
2 増灰黄色砂砾り粘土層 (灰を少量含む)
3 増灰白色砂砾り粘土層 (<ベース>)
4 増灰白色砂砾り粘土層 (3ブロックを少量含む)
5 に3のブロックを多量に含む
6 に5のブロックを含む

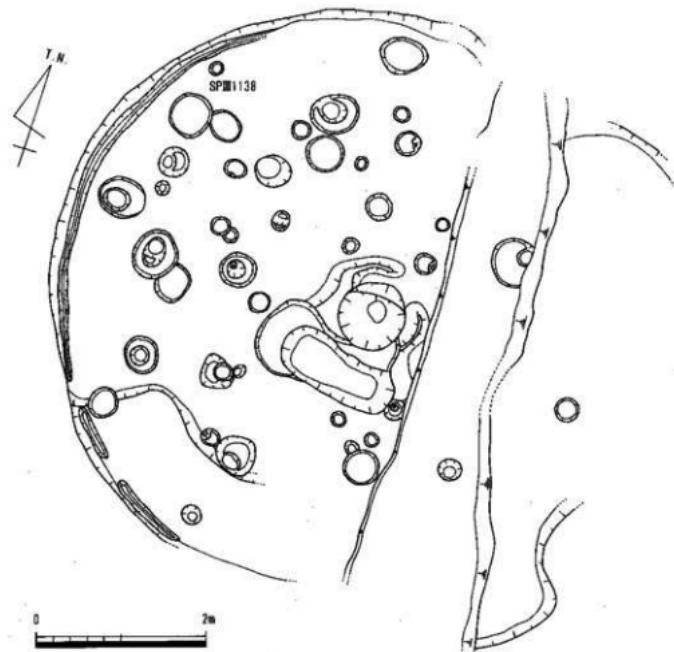
第65図 SHIM07(新) 平・断面図(1/60)

竪穴住居内堆積土層はベッド状遺構の内側に炭化木材を多量に包含する土層④（暗灰色砂混り粘質土層）とその上位に堆積する土層①～③（濁茶白色砂混り粘質土・濁灰茶色砂混り粘質土・こげ茶色砂混り粘質土）に分けられる。

竪穴住居内では検出時からかなり炭化木材が確認でき、消失家屋であることが解っていた。炭化木材には竪穴住居中心から放射状に検出した炭化木材、所謂垂木と主柱穴を結ぶように検出した炭化木材、所謂梁材があり、特に西半分で残存状態が良好であった。この炭化木材の材質鑑定の結果から垂木材は広葉樹・コナラ属アカガシ亜属・ブナ科・針葉樹・ツブライ・マツ属、梁材はモミ属と多様な木材を使用していたことが解った。おそらく周辺に植生する木材を使用しており、特定の木材を選定していなかったことが分析結果から解る。

炭化木材を取り除くと竪穴住居の内部構造が判明した。ほぼ中央に中央土坑を配し、南東部を除く周囲にベッド状遺構を持つもので、内形が五角形を呈し、その内側コーナー部に5つの主柱穴を持つことが解る。

このベッド状遺構は最大幅約1.3m、高さ0.08mを測り、土層断面より地山削り出しではなく、整地土（土層⑦濁灰黄白色砂混り粘質土）である。張り出し部は北西部のものはベッド状遺構上面から連続する同一面となり、張り出し部は地山面となる。一方南東部のものはベッド内側床面から連続する同一面と高低差が認められる。このことからもベッド状遺構が現水路により削平を受けているものの南東部に無かったことを立証している。



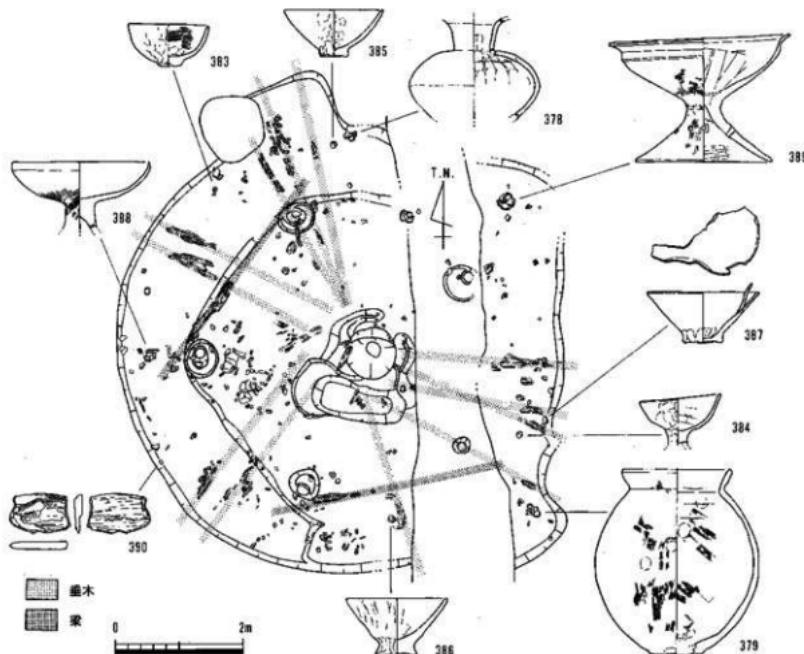
第66図 SHIII07(古)平面図(1/60)

主柱穴は平面形態が円形で、直径 0.4 ~ 0.6 m、深さ 0.5 ~ 0.7 m を測る。その内柱痕が確認できるものから直径 18 ~ 20 cm 程度の柱材が推定できる。また竪穴住居内部には主柱穴以外にかなり柱穴を確認したが、同時性を検証出来なかった。

中央土坑は北側と南側の 2 つに分けられ、北側は平面形態が円形を呈し、断面がすり鉢状に窪む直径約 0.8 m、深さ約 0.3 m のもので、埋土に少量炭を含む。周開には南側の土坑に取り付き、北東部が途切れる下場幅約 0.2 m、高さ約 0.05 m 程度の土手が巡る。また土坑内部に被熱の痕跡は認められない。一方南側の土坑は平面形態が隅丸長方形を呈し、断面が緩い船底状に窪む長軸約 1.8 m、短軸約 0.55 m、深さ約 0.1 m のもので、埋土に炭を多量に含む（炭層）。北側と西側では 2 段の掘り方となっている。

竪穴住居内西側の主柱穴際の床面直上から 20 ~ 40 cm 程度の砂岩を 2 石（写真図版 211）を検出した。床面直上から出土したことから竪穴住居が機能していた時に使用していたものと考えられるが、どの面にも人為的な調整が認められず、砂岩の機能については不明である。この 2 石は竪穴住居の焼失時に表面が薄く剥離し、かなり周囲に飛び散っている。その飛び散り方をみると石材西側部分は西側に、石材東側部分は東側に、また石材表面（飛距離約 1 m 以内）より内面の剥離部分がより遠くに飛び散っている状況（飛距離約 3 m 程度）が確認できた。これは竪穴住居延焼時の火力の程度によって、徐々に生きよいよく燃えたために被熱温度が上昇し、剥離石材の弾け方が強くなったものと考えられる。

整地土としたベッド状遺構を取り除くと西側の下位より竪穴住居（古）の掘り方と壁溝を検出した。ほとんど竪穴住居 SHIII-07 と同じ位置で検出したことから前述した竪穴住居 SHIII-07 を竪穴住居（新）



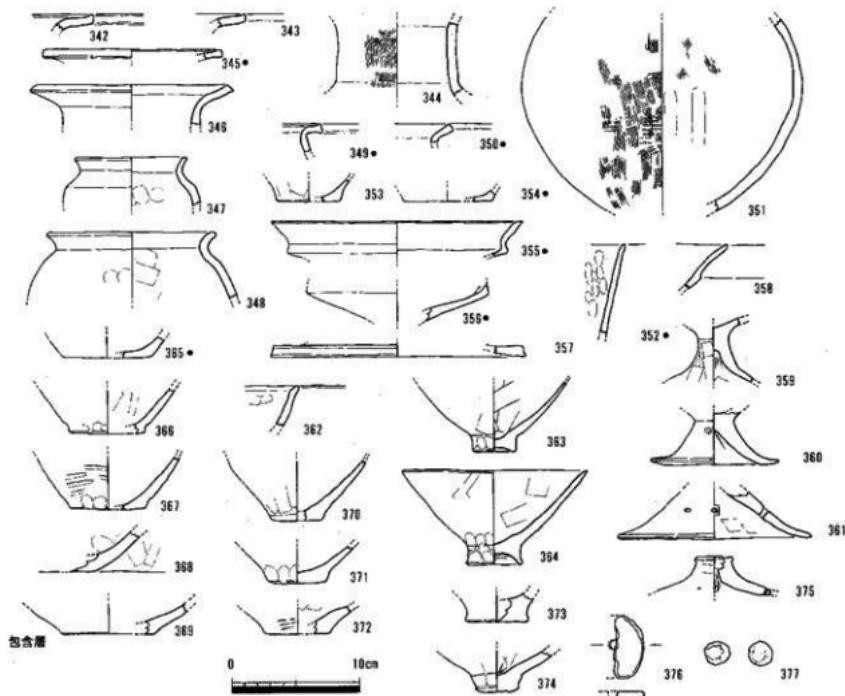
第67図 SHIII-07 遺物出土状況・屋根材復元図(1/80)

とし、下位を竪穴住居（古）とする。

竪穴住居（古）は東側は不明であるが、残りの良い西側で復元すると平面形態が円形を呈し、規模は直径約 6.88 m を測るもので、約 20 cm 程度小振りである。張り出し部の有無は明確には判断できないが、南東部のものが壁溝検出面と同一であることから竪穴住居（古）段階からあったものと考えたい。その他に確實に竪穴住居（古）に伴うものとして南西部でのみ、最大幅幅約 1.1 m、高さ約 0.04 m 程度の整地土のベッド状遺構を検出している。また竪穴住居（新）のベッド状遺構下から数個柱穴を検出したが、竪穴住居（古）に確實に伴うとは考えられず、また竪穴住居（新）と（古）が相似形を呈し、（古）から（新）へ拡張したと考え、主柱穴および中央土坑並びに床面はそのまま使用したものと考える。しかし前述したように竪穴住居（新）のベッド状遺構内側で検出した柱穴の中に竪穴住居（古）に伴うものも存在するかもしれない。

竪穴住居内から多量の弥生土器と少量の石製品が出土している（第 68・69 図）。

これらの遺物は大別して竪穴住居埋土中から出土したもの（342～377）、ベッド状遺構直上から出土したもの（378・379、383～390）、中央土坑から出土したもの（380～382）、柱穴から出土したもの

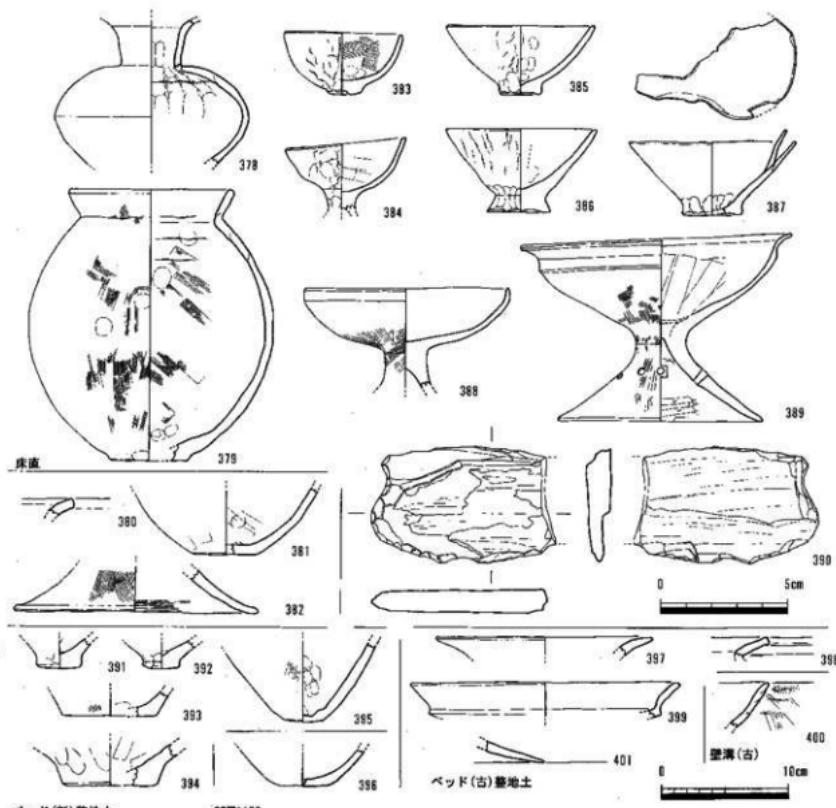


第68図 SHIII-07出土遺物実測図(1/4)①

(396)、竪穴住居（新）のベッド状遺構整地土から出土したもの（391～395）、竪穴住居（古）の壁溝・ベッド状遺構整地土から出土したもの（397～401）に分けられる。

竪穴住居の埋土は検出面からの深さが約20cmと浅く、焼失家屋であったため全体でみると明確に分層出来ない部分がある。この包含層からの出土遺物は壺・甕・鉢・高杯・蓋・土器製紡錘車・土玉と多様である。竪穴住居（新）内の床面直上からは壺・甕・鉢・高杯・結晶片岩製石庖丁が出土している。これらはほとんどが完形のもので、西側ではベッド状遺構上面、東側でも周辺部からの出土である。ただ379のみは南東部の張り出し部からの出土である。この出土位置から鉢1～2個を最低単位としたまとまりが認められ、鉢が銘々器としての機能を有すればある程度竪穴住居内における居住者の定位置が推定できるものと考える。特に焼失家屋のような竪穴住居は住居内の遺物の配置に意味があると考えられ、注意を払う必要がある。

また土層断面からこの竪穴住居は拡張されたことが解っている。その拡張に伴うベッド状遺構の整地に伴い整地土に混入した遺物が391～395で、ベッド状遺構を取り除いた部分で検出した柱穴より

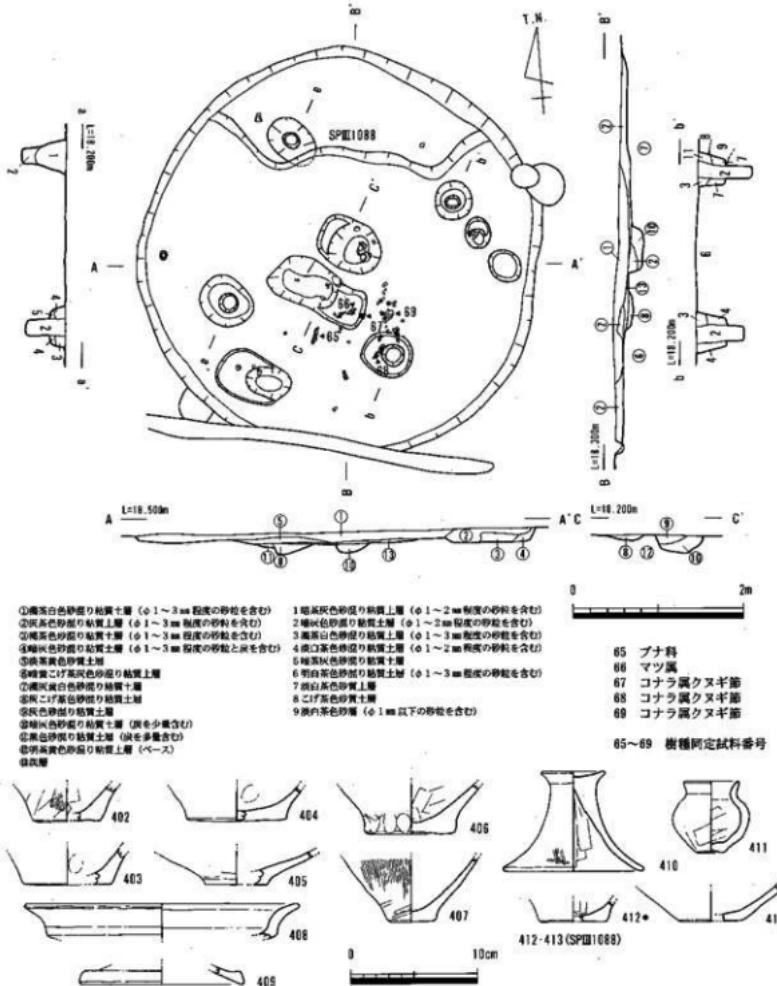


第69図 SHIII-07出土遺物実測図(1/4)②

出土した遺物が396である。

豊穴住居（古）段階では壁溝から鉢（400）が出土し、ベッド状遺構の整地土から397～399・401の壺・甕・高坏が出土している。

以上の出土遺物をみると鉢・高坏の形態や鉢の多量化が進んでおりことまた皿状の鉢が出現していないことなどから弥生時代後期後半頃のものと考えられ、しかも石製品の減少やその石製品がサヌカイトではなく結晶片岩製であることなどの現象も読みとれる。



第70図 SHIII08平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

「下川津B類土器」の出土量は、2.3%と少ない。

SHIII08

SHIII08は第III調査区中央南、標高18.2mにおいて検出した堅穴住居で、平面形態は円形を呈する。規模は直径約4.80m、床面積約18m²、検出面からの深さは約0.16mを測るもので、全体的にかなり削平を受けている。

堅穴住居内堆積土層は炭化木材を多量に包含する土層②（濁灰色砂混り粘質土層）とその上位にはレンズ状堆積する土層①（濁茶灰色砂混り粘質土）に分けられる。

堅穴住居内では中央寄りで少量炭化木材が確認でき、焼失家屋ではないかと考えられるが、中央土坑（炉）付近にのみ検出していることから疑問が残る。炭化木材は堅穴住居SHIII07で検出したような垂木材や梁材と限定できるような規則性を持っておらず、構造等を推定するまでには至っていない。この炭化木材の材質鑑定の結果からブナ科・マツ属・コナラ属クヌギ節と資料中コナラ属クヌギ節が3点と多く特定の木材を使用していたようであるが、分析資料点数が少ないとその範囲が狭いことから即判断するには注意を要する。

少量の炭化木材を取り除くと堅穴住居の内部構造が明確に判明した。ほぼ中央に中央土坑を配し、北部にベッド状遺構を持つもので、4つの主柱穴を持つことが解る。

このベッド状遺構は北部でのみ検出でき、最大幅約1.20m、高さ0.06mを測り、土層断面より地山削り出して造られている。しかし東西土層断面から中央土坑西側部分でも若干の高まり（土層③・④）が認められることからもう少し広い範囲にあった可能性も考えられる。

主柱穴は平面形態が円形で、直径0.4～0.6m、深さ0.5～0.65mを測る。その内柱痕が確認できるものから直径15～20cm程度の柱材が推定できる。また堅穴住居内部には主柱穴以外に数個の柱穴及び土坑を確認したが、土坑以外は同時性を検証出来なかつた。

中央土坑は北側と南側の2つに分けられ、北側は平面形態が歪な円形を呈し、西側が2段の掘り方を呈するが、中心部は断面がすり鉢状に窪む直径約0.6m、深さ約0.20mのものである。また土坑内部に被熱の痕跡は認められない。一方南側の土坑は平面形態が隅丸長方形を呈し、断面が緩い船底状に窪む長軸約1.2m、短軸約0.50mのもので、埋土に炭を多量に含む（炭層）。東側で2段の掘り方となっている。

土坑はおそらくこの住居に伴うものと考えられ、南西部の堅穴住居の壁に沿い検出した。平面形態は隅丸方形で、西側部分が2段の掘り方を呈する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.50m、深さ0.18mを測る。

堅穴住居内から少量の弥生土器が出土している（第70図）。

これらの遺物は大別して堅穴住居埋土中から出土したもの（402～407）、ベッド状遺構直上から出土したもの（410）、中央土坑から出土したもの（408・409）、土坑から出土したもの（411）、住居内検出柱穴から出土したもの（412・413）に分けられる。

堅穴住居の埋土は検出面からの深さが約16cmと浅く、土層①と②が明確に分層出来ない部分がある。この包含層からの出土遺物は壺・甕・鉢・高杯と思われる遺物が少量出土している。堅穴住居の床面直上、ここではベッド状遺構上面からの遺物は蓋（410）が1点のみの出土している。

以上の出土遺物をみると鉢・高杯の形態や鉢の多量化が進んでいることまた皿状の鉢が出現してい

ないことなどから弥生時代後期後半頃のものと考えられる。また南側でこの竪穴住居 SHIII08 を切る溝 SDIII21 を検出している。溝の時期は出土遺物から弥生時代と考えられるが、少量であるために明確に竪穴住居の下限時期を確定付けるまでには至っていない。

「下川津B類土器」の出土量は、2.3%と少ない。

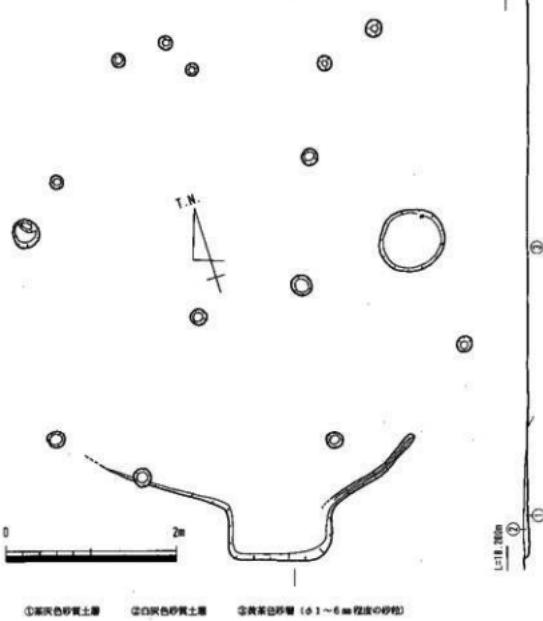
SHIII09

SHIII09は第III調査区中央南、SHIII08の西側、標高18.0mにおいて検出した竪穴住居で、南側の一部分のみでほとんどは削平を受けているが、復元すると平面形態は円形を呈し、南部に長方形の張り出し部を持つ。規模は復元直径約6.10m、床面積約29m²、検出面からの深さは約0.06mを測るものの、全体的にかなり削平を受けている。また張り出し部は長方形に幅約1.2m、長さ約0.6mで突出している。この張り出し部も含めると外観上は直径約6.70mを測る竪穴住居である。

竪穴住居内堆積土層は南部の一部しか検出していないため詳細は不明であるが、ベッド状遺構上に堆積する上層①(茶灰色砂質土層)が認められる。

竪穴住居の内部構造は残りが悪いために中央土坑・ベッド状遺構についての詳細については不明で、主柱穴も特定できなかった。

南部の張り出し部の床面と内部の床面とは同一面としてとら



第71図 SHIII09平・断面図(1/60)

えられ、高低差は確認できなかった。またこの張り出し部から東方向には約1.2m程度で、幅約0.1m、深さ約0.03mの壁溝を検出している。

遺物は出土していない。そのため時期は不明であるが、平面形態が円形を呈することと張り出し部を持つことから弥生時代の所産と考えられる。

SEIII01

SEIII01は第III調査区中央、標高18.0mにおいて検出した井戸である。平面形態は歪な橿円形を呈し、掘り方は逆台形状を呈する。規模は南北約1.70m、東西約2.35m、検出面からの深さは約0.70mを測る。

埋土は全て砂質土層で、下位層(土層⑩・⑪)は層厚20~30cmと厚くほぼ水平堆積で、上位層(土層①~⑨)は層厚が10cm程度と薄く細分される。このことから下位層は短期間で一気に堆積したものと考えられ、上位層は徐々に埋没したようである。

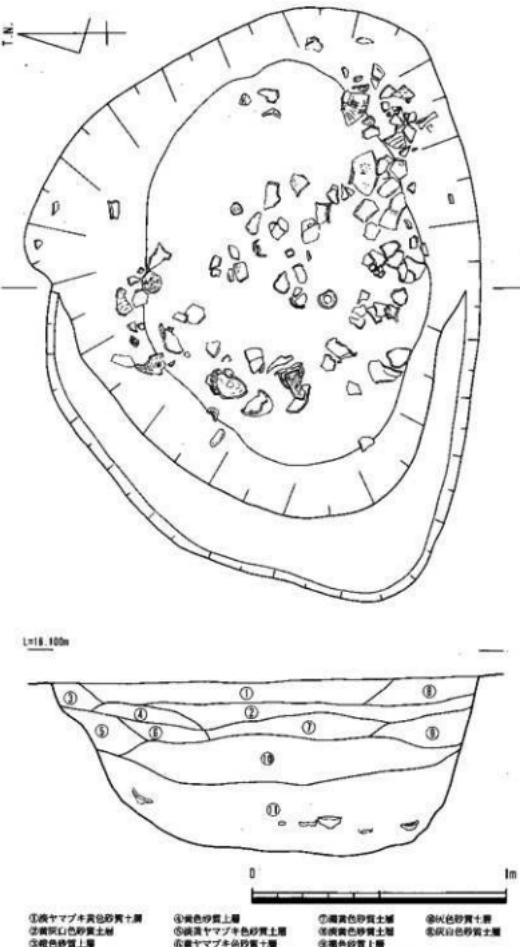
遺物はそのほとんどが土層⑪(灰白色砂質土層)から出土しており、遺物出土状況図は土層⑪内出土遺物のものである。

土層⑪の中位に遺物は面的な広がりを見せ、出土遺物には完形に復元できるものが数点あることから一括投棄された可能性が指摘できる。これは土層の堆積状況で推定した短期間での堆積を裏付けれる。

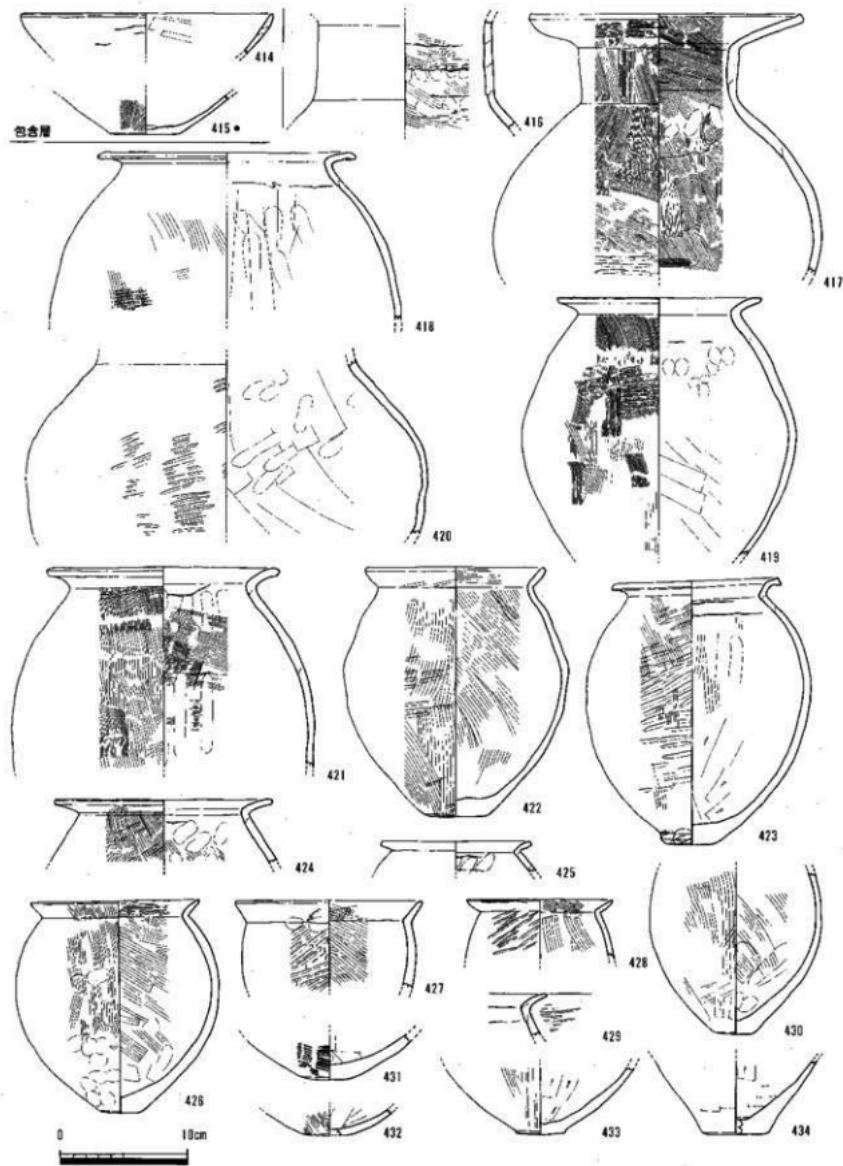
この井戸を検出した位置はⅢ区全体でみると砂層で構成される古川の旧河道(SRⅢ06)を検出した部分に当たり、粘質土を基調とする地山が広がる中で湧水が見込めると位置を意図的に選定し、井戸を掘削したものと考える。

414~451は井戸堆積埋土から出土した遺物である。414・415は上位層から出土した遺物で、それ以外は土層⑪から出土した遺物である。

器種的には壺・甕・鉢・製塙土器が出土しているが、壺は1点、高坏は出土しておらず、器種に偏りが認められる。甕は底部に若干の平底を残し、頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は拡張させずそのまま終わらせるものが多い。体部外面には叩き痕の後縦方向の刷毛目が施されているものが目立つ。



第72図 SEIII01平・断面図(1/20)

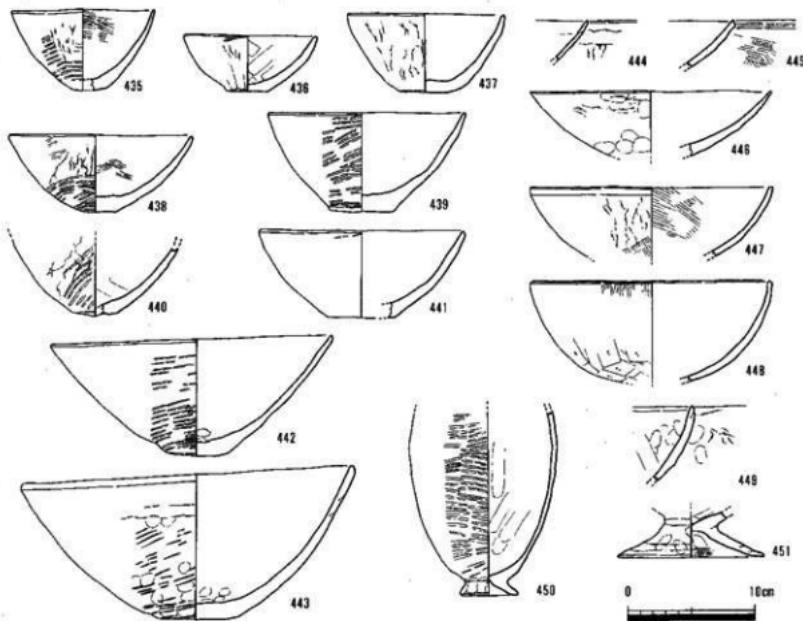


第73図 SEMI01出土遺物実測図(1/4)①

の2種類が認められる。製塙土器は脚部が小さく「ハ」の字に広がり、体部は内湾しながら口縁部に到る。体部外面には叩き痕が施されている。

「下川津B類土器」の出土量は、0.1%と非常に少ない。

時期は甕の形態、鉢の器種分化・丸底化、製塙土器の特徴から弥生時代後期終末と考える。



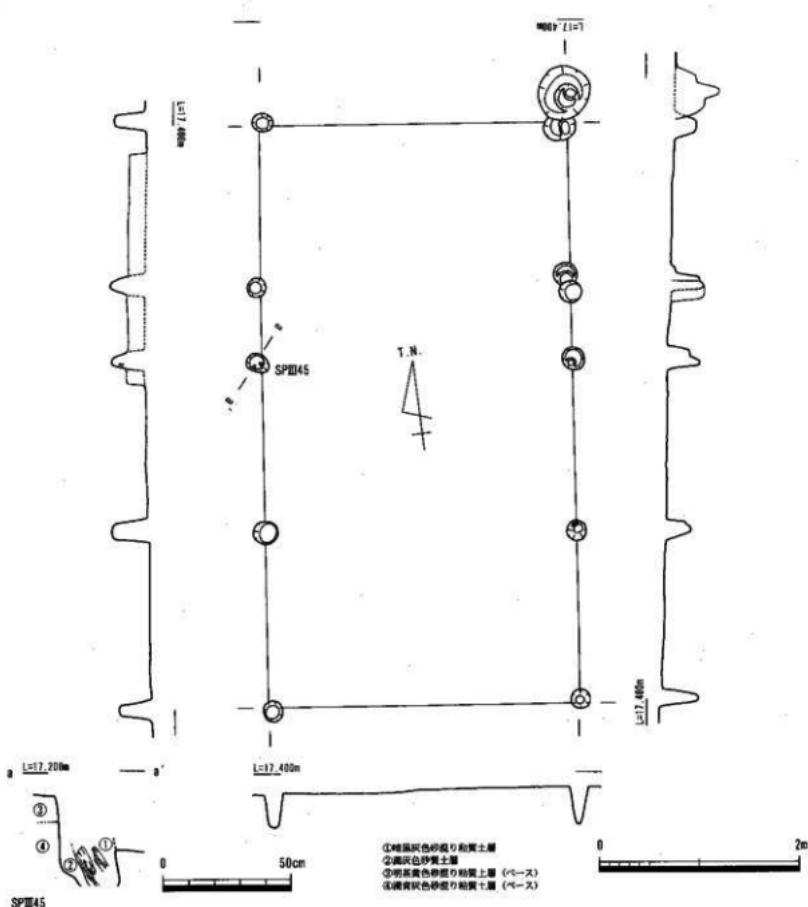
第74図 SEIII-01出土遺物実測図(1/4)②

掘立柱建物跡

SBIII01

SBIII01は第III調査区北西部、標高17.2mにおいて検出した1(梁間)×4(桁行)間の南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間3.04m、桁行5.79m、床面積17.6m²を測り、南北主軸はN-6°-Eをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径約0.2～0.3m、深さ約0.25～0.35mを測る。

この建物の桁行の柱穴間は南から3間目が約0.8mと短く、これ以外が約2倍の約1.7mを測る。



第75図 SBIII01平・断面図(1/50)

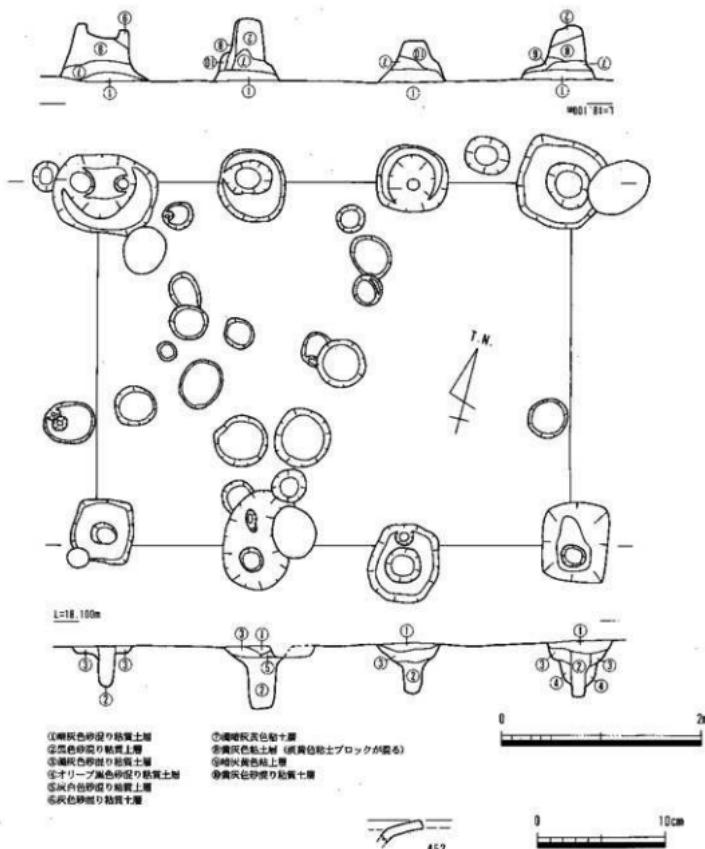
またこの内SBIII45から柱材が出土しており、樹種分析の結果サカキ属・タブノキであることが判明した。柱穴内から実測可能な遺物は出土していないため詳細は不明であるが、柱穴埋土が弥生時代の遺構の埋土と同様であることから、この掘立柱建物跡も弥生時代の所産と考えられる。

この掘立柱建物を検出した位置は調査区の北西部で、周囲には導水路としての溝しかなく竪穴住居が集中する中央部から南の居住城とは約30mほど距離をおく。

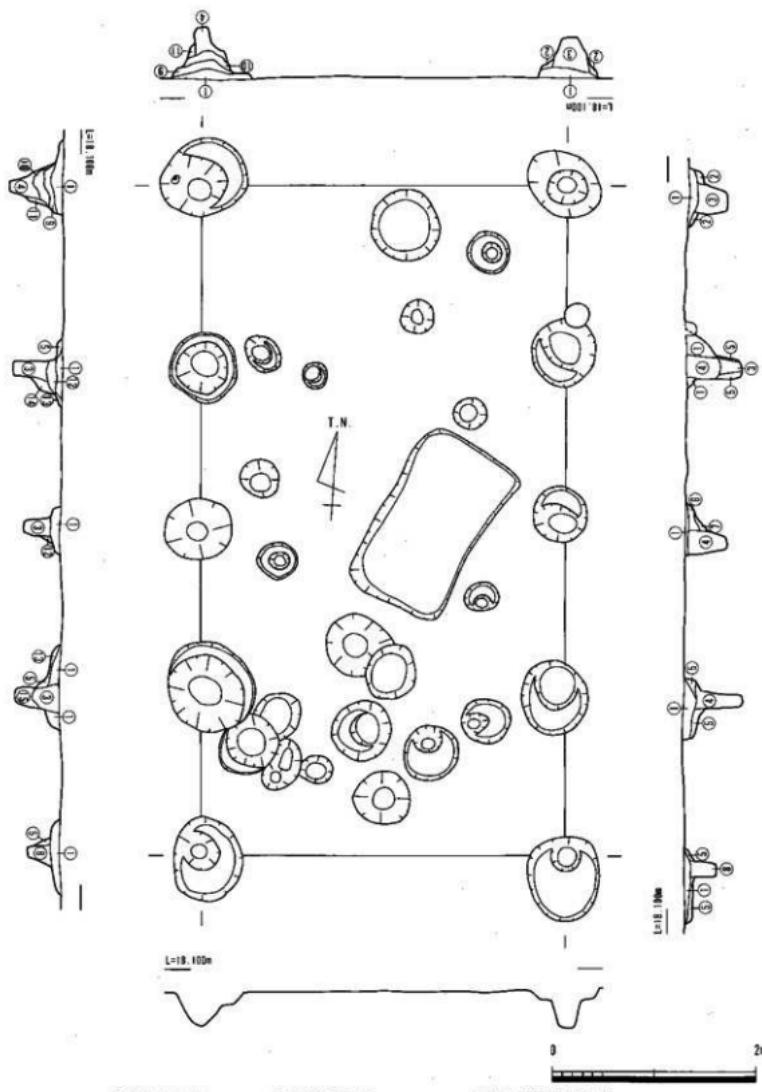
SBIII02

SBIII02は第Ⅲ調査区中央南、標高17.9mにおいて検出した1(梁間)×3(桁行)間の東西棟の掘立柱建物である。規模は梁間3.60m、桁行4.67m、16.8m²を測り、南北主軸はN-13.5°-Wをとる。

この建物を構成する柱穴は平面形態が円形及び剛丸方形状を呈し、規模は直径0.7~0.9cmと大きく、深さ0.4~0.6cmを測るしっかりとした掘立柱建物である。土層断面から柱痕が確認でき、約15cm程



第76図 SBIII02平・断面図 (1/50), 出土遺物実測図 (1/4)



①灰褐色砂質土層
 ②淡オーリーブ色砂質の粘質土層
 ③淡褐色砂質の粘質土層
 ④暗褐色砂質の粘質土層
 ⑤灰白色砂質土層

⑥淡褐色砂質の粘質土層
 ⑦淡オーリーブ色砂質の粘質土層
 ⑧淡褐色砂質の粘質土層
 ⑨暗褐色砂質の粘質土層
 ⑩灰白色砂質土層
 ⑪浅灰色粘土層（灰色粘土ブロック含む）

⑫オーリーブ褐色砂質の粘質土層
 ⑬淡オーリーブ色砂質の粘質土層
 ⑭淡褐色砂質の粘質土層
 ⑮淡オーリーブ褐色砂質の粘質土層
 ⑯淡褐色砂質土層

第77図 SBIII 03平・断面図(1/50)

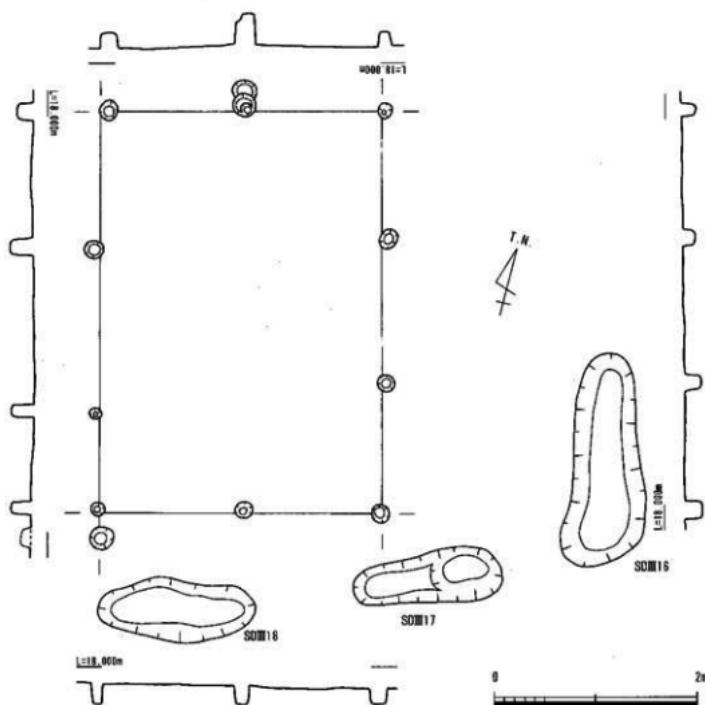
度の柱材であったことが解る。掘り方はSBIII03と同様に2段掘を呈している。また桁行の柱穴間は1.5~1.6mと等間隔で、ほぼSBIII03と同じである。

柱穴内から弥生時代の大型の鉢が出土したのみで詳細は不明であるが、柱穴埋土が暗灰色系を呈し、弥生時代の遺構の埋土と同様であることからこの掘立柱建物も弥生時代の所産と考えられる。

この掘立柱建物は近接して北部にSDIII13を検出している。この溝が区画溝あるいは雨落ち溝としての機能を与えるならばSBIII03とは同時併存しないこととなる。

SBIII03

SBIII03は第III調査区中央南、標高17.9mにおいて検出した1(梁間)×4(桁行)間の南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間3.59m、桁行6.69m、24.0m²を測り、南北主軸はN-3.5°-Wをとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径0.5~0.85cmと大きく、深さ0.35~0.55cmを測るしっかりとした掘立柱建物である。土層断面から柱痕が確認でき、約15~20cm程度の柱材であったことが解る。柱穴掘り方は2段掘を呈し、上段は大きめの掘り方で、下段部分は柱材よりやや大きめに掘削し、構築したことが解る。また桁行の柱穴間は約1.6mと等間隔で、規則的に造られている。



第78図 SBIII04平・断面図(1/50)

柱穴内から実測可能な遺物は出土していないが、柱穴埋土が暗灰色系を呈し、弥生時代の遺構の埋土と同様であることからこの掘立柱建物も弥生時代の所産と考えられる。

この掘立柱建物は調査区内ではかなり柱穴がまとまって出土している部分で、北部では東西に流路をとる SDIII13 を切っている。

SBIII04

SBIII04 は第Ⅲ調査区南部、標高 17.9 m において検出した 2 (梁間) × 3 (桁行) 間の南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間 2.80 m、桁行 3.99 m、11.2 m² を測り、南北主軸は N-14°-W をとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形あるいは隅丸方形状を呈し、規模は直径 10 ~ 20 cm、深さ 15 ~ 20 cm を測る。

柱穴内から実測可能な遺物は出土していないため詳細は不明であるが、柱穴埋土が暗灰色系を呈し、弥生時代の遺構の埋土と同様であることからこの掘立柱建物跡も弥生時代の所産と考えられる。

この掘立柱建物は南側と東側にとぎれとぎれではあるが区画溝 SDIII16 ~ 18 を伴う。

SBIII05

SBIII05 は第Ⅲ調査区南部、標高 18.0 m において検出した 1 (梁間) × 3 (桁行) 間の南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間 3.43 m、桁行 4.41 m、15.1 m² を測り、南北主軸は N-19°-W をとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形を呈し、規模は直径 20 ~ 30 cm、深さ 25 ~ 40 cm を測る。

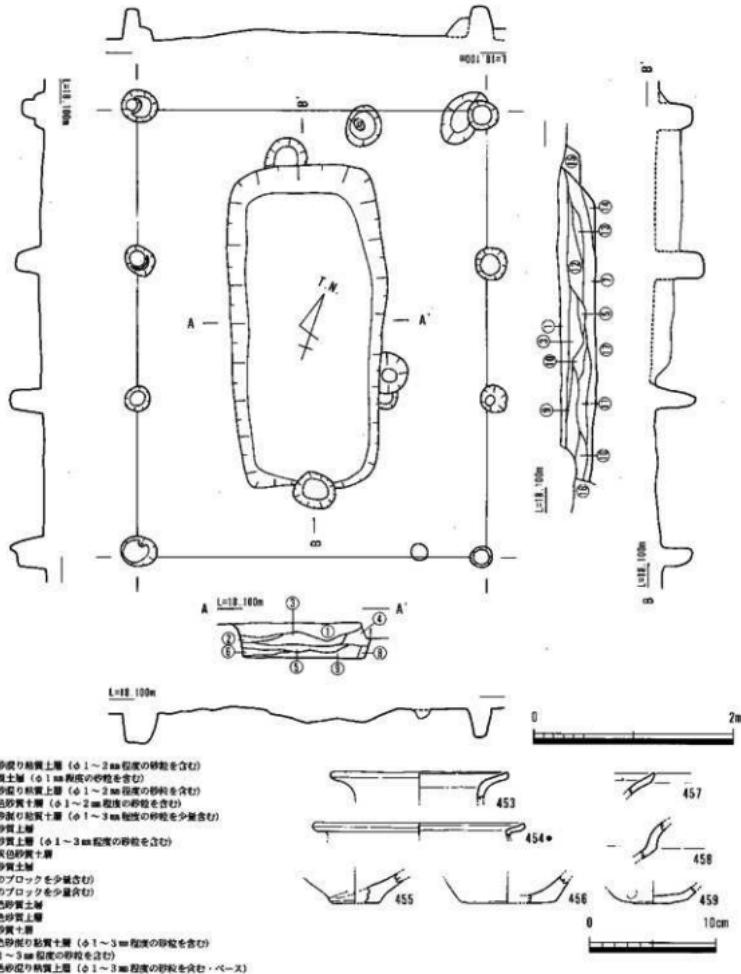
柱穴内から実測可能な遺物は出土していないため詳細は不明であるが、柱穴埋土が茶灰色系を呈し、弥生時代の遺構の埋土と同様であることからこの掘立柱建物跡も弥生時代の所産と考えられる。

この掘立柱建物の内部ではほぼ中心に STIII07 を検出しておらず、遺物及び埋土から同時期であることが解る。SBIII05 はこの土壙墓の覆い屋と考えている。

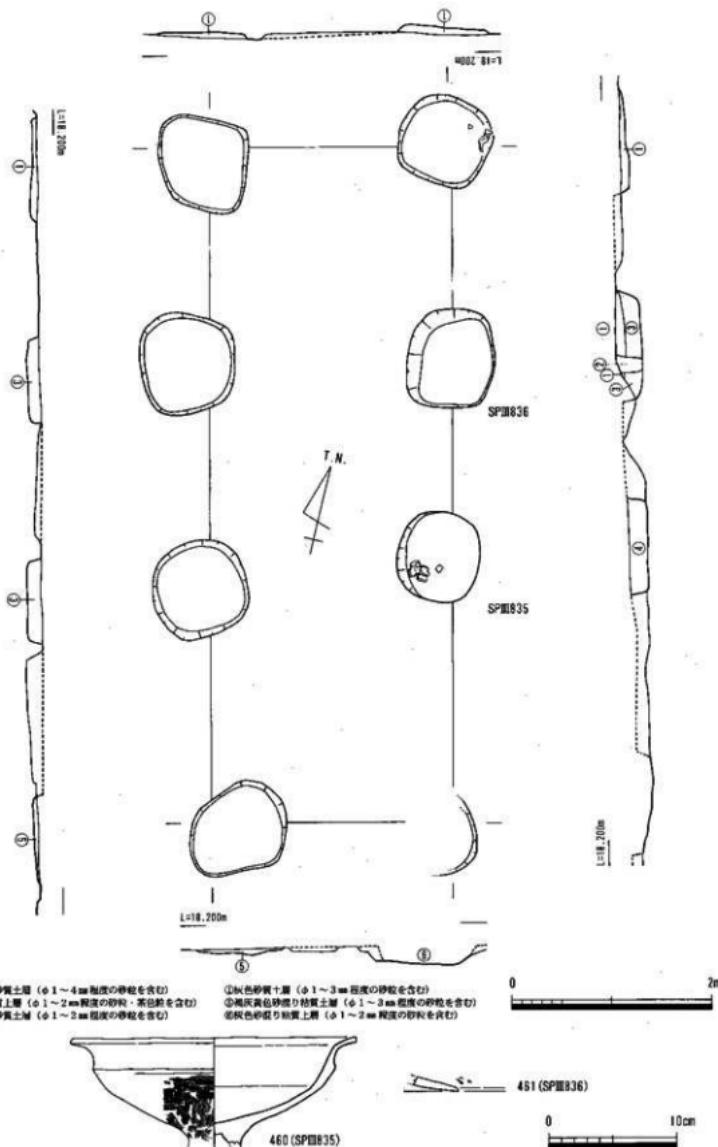
SBIII06

SBIII05 は第Ⅲ調査区中央南、標高 18.0 m において検出した 1 (梁間) × 3 (桁行) 間で、幅が狭く縱長の南北棟の掘立柱建物である。規模は梁間 2.39 m、桁行 6.74 m、16.1 m² を測り、南北主軸は N-15°-W をとる。この建物を構成する柱穴は平面形態が円形あるいは隅丸方形状を呈し、規模は直径 85 ~ 90 cm、深さ 10 ~ 25 cm を測る。

柱穴内 SPIII835 から弥生土器高杯が出土している。少量の出土遺物、柱穴埋土が茶灰色系を呈しており、弥生時代の遺構の埋土と同様であること SHIII06・07 という中心的建物と同じ位置にあることか



第79図 SBIII05・STIII07平・断面図(1/50), STIII07出土遺物実測図(1/4)



第80図 SBIII06平・断面図(1/50), 出土遺物実測図(1/4)

土壙墓

第III調査区では墓と考えられる土坑を合計9基検出した。しかしそれも明確に墓と認定できる根拠がなく、推定の域を出ない。ここでは平面形態が長方形を呈し、長幅比（短軸÷長軸×100）が概ね50～60程度、断面形態が箱形を呈する土坑を土壙墓として記述する。

STIII01

STIII01は第III調査区北部、標高17.4mにおいて検出した土壙墓で、平面形態は長方形を呈する。規模は長軸2.4m、短軸0.85m（長幅比35）、検出面からの深さ0.22mを測り、長軸主軸はN-1°-Wをとる。長幅比が50以下であるが平面形状からここでは土壙墓とした。

土層は上下2層に細分できる。

墓坑内からは少量遺物が出土している。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考える。

STIII02

STIII02は第III調査区北西部、標高17.6mにおいて検出した土壙墓で、平面形態は長方形を呈する。規模は長軸1.32m、短軸0.73m（長幅比55）、検出面からの深さ0.04mを測り、長軸主軸はN-14°-Eをとる。

埋土の状況から弥生時代と考える。

STIII03

STIII03は第III調査区南西部、標高17.7mにおいて検出した土壙墓で、平面形態は長方形を呈し、周囲に溝を検出していることから周溝墓状遺構の可能性が指摘できる。規模は長軸2.25m、短軸1.10m（長幅比49）、検出面からの深さ0.15mを測り、南北主軸はN-14°-Eをとる。周溝墓状遺構の主体部と考えられるSTIII03には土層断面から北側と南側小口部分で小口板の痕跡が確認できる。平面で明瞭に検出した南、小口板の掘り方は幅14cm、長さ60cm、深さ24cmを測る。

土層は上下2層に細分できるが、下層は調査時に地山の可能性も指摘している。

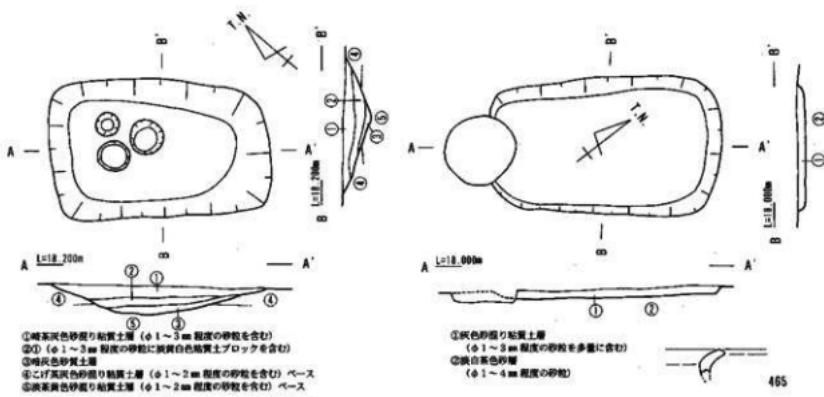
一方土壙墓の東側と北側で検出した溝は周溝状遺構である。東側の溝はほぼ直線的に検出し、規模は検出長約6m、幅約1m、深さ約0.1mを測り、方向はN-27°-Wをとる。また北側の溝はほぼ東側の溝から0.3m程度間隔をあけ、直行して検出している。規模は検出長約1.4m、幅約1.0m、深さ約0.1mを測り、方向はN-110°-Wをとる。

STIII03内からは北側部分で土器小片とサヌカイトの小片が出土し、東側の周溝状遺構SDIII14からはサヌカイト製の石匙が出土している。またSTIII03と東側の溝の間で土器の集中と川原石を検出したが共判するかどうかは不明である。

これら出土遺物は全て小片であること溝SDIII14から出土した石匙が縄文時代と考えられることなどから詳細な時期決定までは至っていないが、埋土の状況から概ね弥生時代と考えられる。

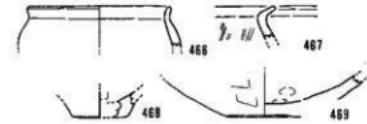
STIII04

STIII04は第III調査区中央西、標高17.7mにおいて検出した土壙墓で、平面形態は長方形を呈する。規模は長軸1.73m、短軸1.0m（長幅比58）、検出面からの深さ0.1mを測り、長軸主軸はN-68°-Eをとる。

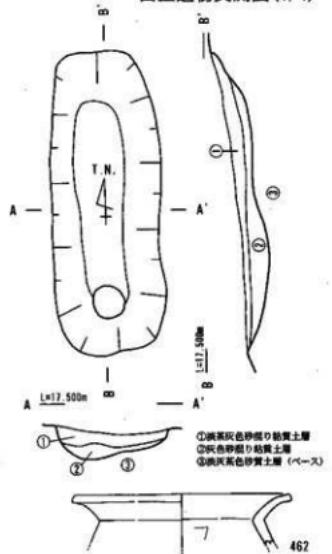


第86図 STIII06平・断面図(1/40)
出土遺物実測図(1/4)

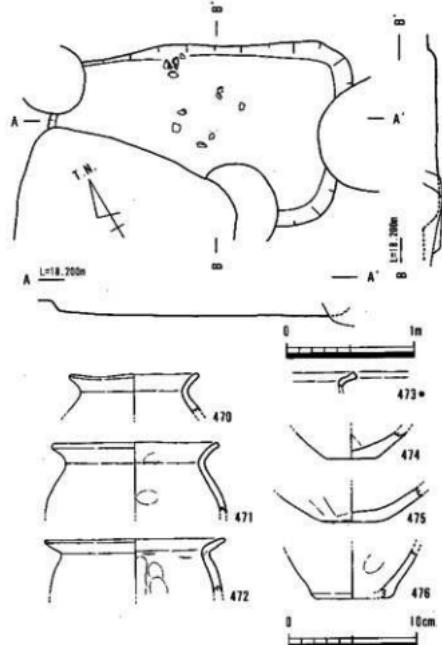
465



第88図 STIII09平・断面図(1/40)
出土遺物実測図(1/4)



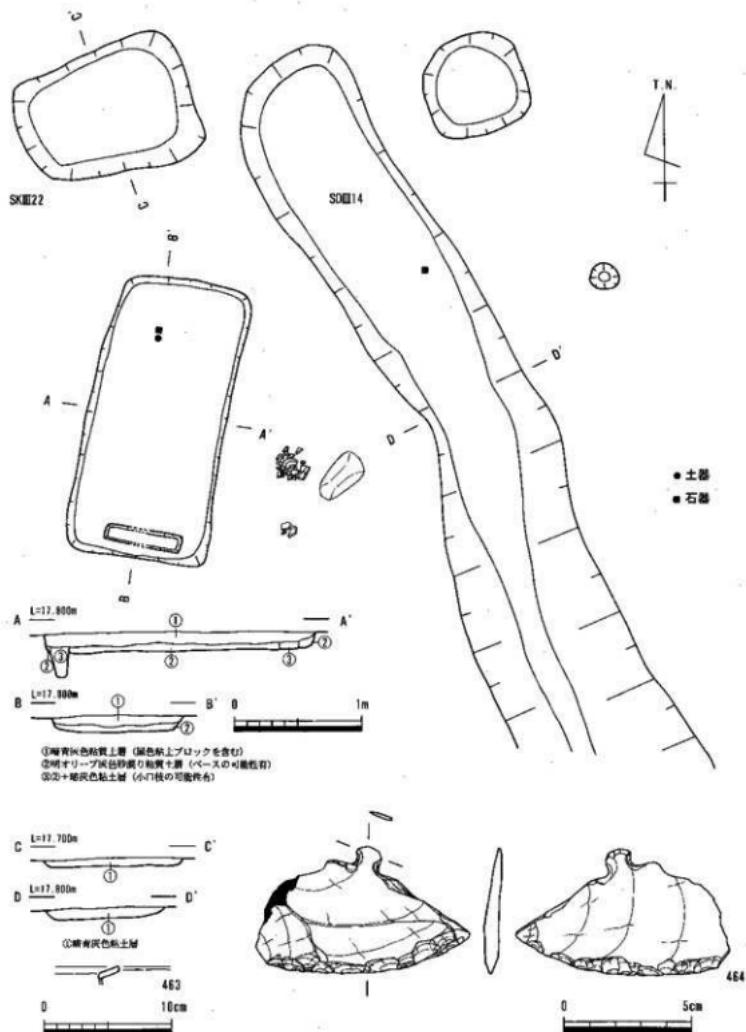
第81図 STIII01平・断面図(1/40)
出土遺物実測図(1/4)



第89図 STIII10平・断面図(1/40)
出土遺物実測図(1/4)

上層は単層である。

出土遺物は全て小片であることから詳細な時期決定までは至っていないが、埋土の状況から概ね弥生時代と考えられる。



第83図 STIII03平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)

STIII05

STIII05は第III調査区中央南、標高17.9mにおいて検出した土壙墓で、平面形態は長方形を呈する。ちょうどSBIII03の内側で検出した。規模は長軸1.77m、短軸0.95m(長幅比54)、検出面からの深さ0.1mを測り、長軸主軸はN-29°-Eをとる。

土層は単層である。

出土遺物は全て小片であることから詳細な時期決定までは至っていないが、埋土の状況から概ね弥生時代と考えられる。

STIII06

STIII06は第III調査区南部、標高17.8mにおいて検出した土壙墓で、平面形態は長方形を呈する。規模は長軸1.82m、短軸1.08m(長幅比59)、検出面からの深さ0.06mを測り、長軸主軸はN-37°-Eをとる。

土層は単層である。

墓壇内からは少量遺物が出土している。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

STIII07

STIII07は第III調査区中央南、標高18.0mにおいて検出した土壙墓で、平面形態は長方形を呈する。規模は長軸2.55m、短軸1.24m(長幅比49)、検出面からの深さ0.28mを測り、長軸主軸はN-21°-Wをとる。断面形態は箱形を呈し、土層の堆積状況は若干の乱れはあるものの5~10cm程度の各層は水平堆積している。明瞭な棺痕跡は確認できなかったが、一部短軸土層断面の土層⑥(焦茶灰色砂質土層)が棺痕跡の可能性がある。

この土壙墓は短辺側の中央に柱穴、そしてこの土壙を正位置で開発するように掘立柱建物SBIII05が検出されている。このことは何らかの関係があるものと考えられ、ここではモガリ屋的な覆い屋という位置付けを行いたい。

墓壇内からは壺・甕・高杯などの小片が出土しているが、墓とした場合の供獻遺物は出土していない。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、弥生時代と考えられる。

STIII08

STIII08は第III調査区南部、標高17.8mにおいて検出した土壙墓で、平面形態は歪な長方形を呈する。西側でSBIII05を構成する柱穴に切られ、東側をSKIII26によって切られている。規模は長軸2.0m、短軸1.5m(長幅比75)、検出面からの深さ0.1mを測り、長軸主軸はN-40°-Wをとる。

土層は単層である。

出土遺物は全て小片であることから詳細な時期決定までは至っていないが、埋土の状況から概ね弥生時代と考えられる。

STIII09

STIII09は第III調査区南部、標高18.0mにおいて検出した土壙墓で、平面形態は長方形を呈する。規

模は長軸 1.73 m、短軸 1.09 m(長幅比 63)、検出面からの深さ 0.23 m(最深部)を測り、長軸主軸は N-41°-W をとる。

断面はほぼ中央部が窪むすり鉢状を呈しており、土層は 3 層に細分できる。底面の形状から土壤墓ではない可能性がある。

墓壇内からは少量遺物が出土している。

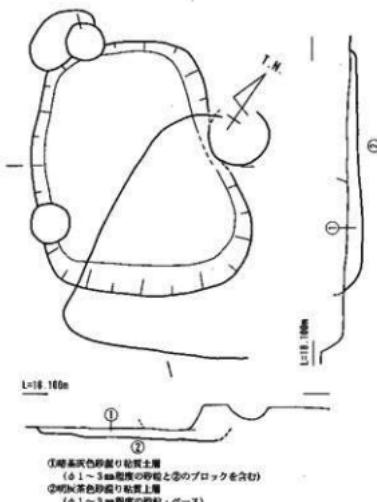
出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

STIII10

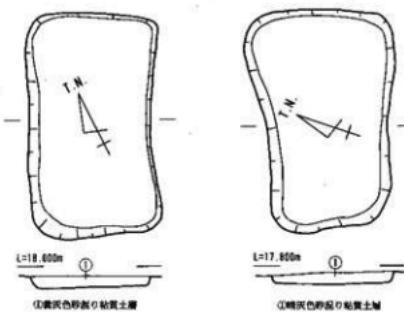
STIII10 は第 III 調査区南部、標高 18.0 mにおいて検出した土壤墓である。北西部を STIII09 に、他部分を柱穴によって切られているが、平面形態は長方形を呈する。規模は長軸 2.34 m、短軸 1.44 m(長幅比 62)、検出面からの深さ 0.10 m を測り、長軸主軸は N-60°-W をとる。

墓壇内からは壺を中心とする少量の遺物(第 89 図)が出土している。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

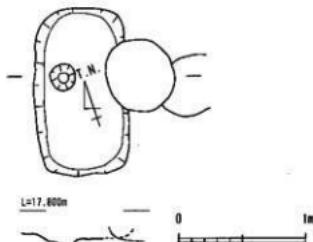


第87図 STIII08平・断面図(1/40)



第85図 STIII05
平・断面図(1/40)

第84図 STIII04
平・断面図(1/40)



第82図 STIII02平・断面図(1/40)

土坑跡

SKIII01

SKIII01は第Ⅲ調査区北部、標高17.4mにおいて検出した土坑で、平面形態はやや歪な円形を呈する。規模は長軸2.1m、短軸1.78m、検出面からの深さ0.22mを測る。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね中世と考えられる。

SKIII02

SKIII02は第Ⅲ調査区北部、標高17.35mにおいて検出した土坑で、平面形態はやや歪な円形を呈する。規模は長軸1.57m、短軸1.34m、検出面からの深さ0.26mを測る。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね中世と考えられる。

SKIII03

SKIII03は第Ⅲ調査区北部、標高17.6mにおいて検出した土坑で、平面形態は梢円形を呈する。規模は長軸1.62m、短軸1.36m、検出面からの深さ0.40mを測る。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

SKIII09

SKIII09は第Ⅲ調査区中央、標高17.8mにおいて検出した土坑で、平面形態は溝状を呈する細長い長方形を呈する。規模は長軸2.8m、短軸0.75m、検出面からの深さ0.10mを測る。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

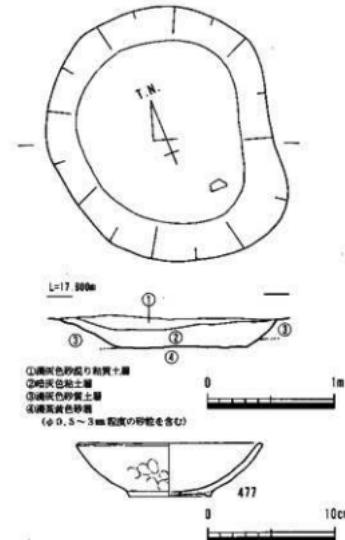
SKIII10

SKIII10は第Ⅲ調査区中央、標高17.9mにおいて検出した土坑で、平面形態は梢円形を呈する。規模は長軸1.1m、短軸0.86m、検出面からの深さ0.12mを測る。

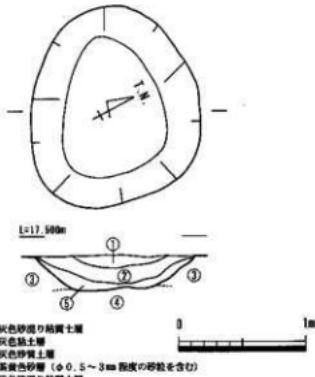
出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

SKIII11

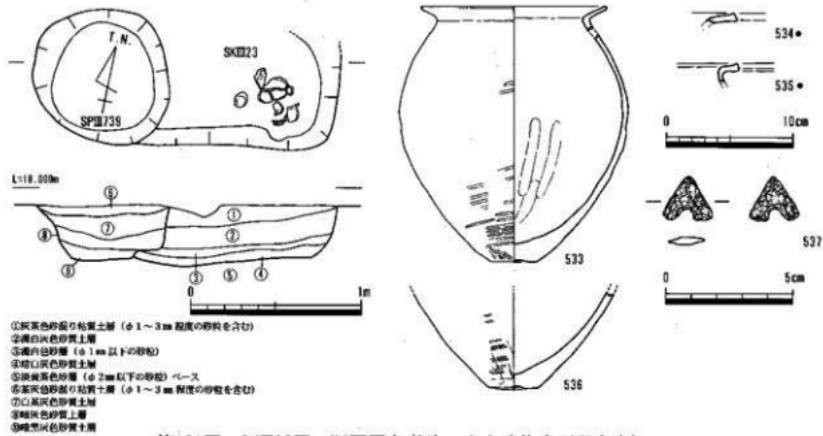
SKIII11は第Ⅲ調査区中央、標高17.9mにおいて検出した土坑で、平面形態は円形を呈する。規模は直径1.1m、検



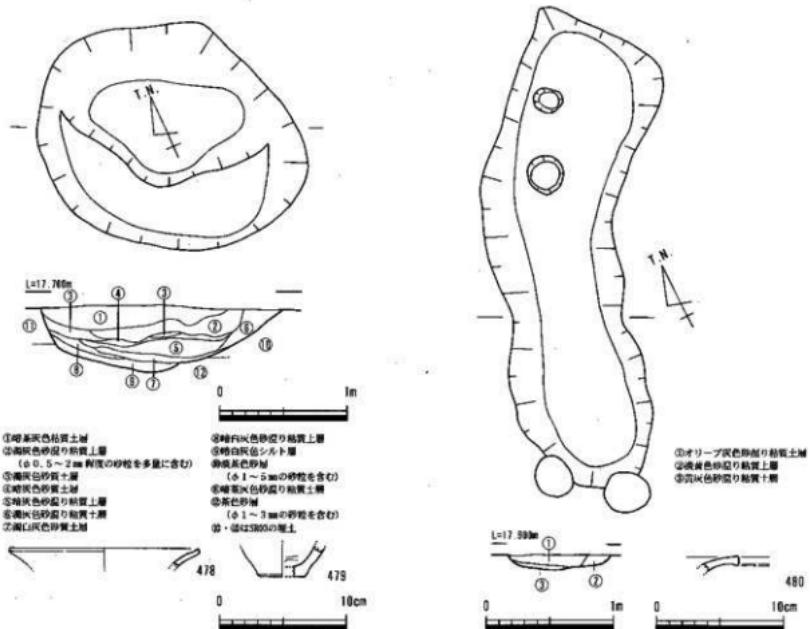
第90図 SKIII01平・断面図(1/40)
出土遺物実測図(1/4)



第91図 SKIII02平・断面図(1/40)

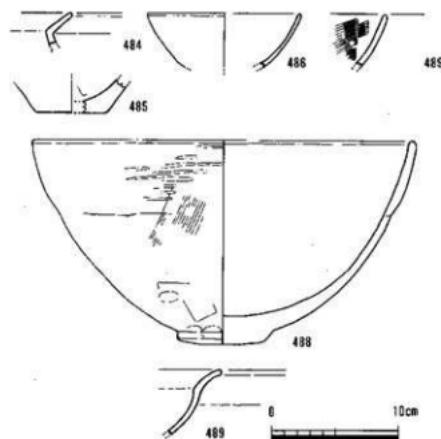
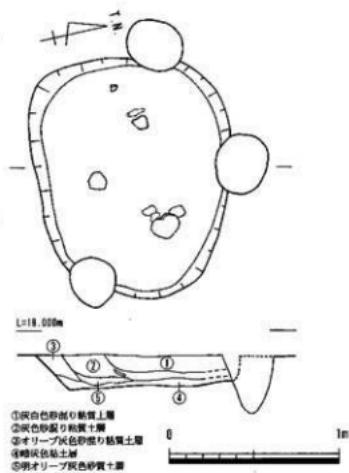


第101図 SKIII23平・断面図(1/30), 出土遺物実測図(1/4)

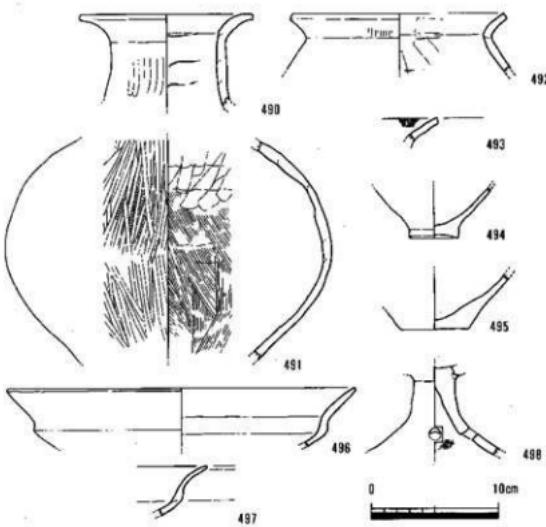
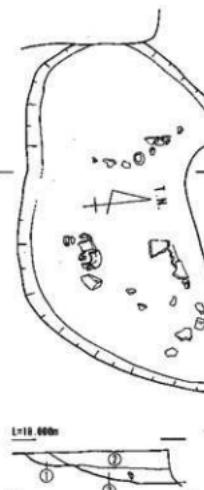


第92図 SKIII03平・断面図(1/40)
出土遺物実測図(1/4)

第93図 SKIII09平・断面図(1/40)
出土遺物実測図(1/4)



第96図 SKIII13平・断面図(1/30), 出土遺物実測図(1/4)



第97図 SKIII18平・断面図(1/30), 出土遺物実測図(1/4)

出土から深さ 0.32 m を測る。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

SKIII13

SKIII13 は第Ⅲ調査区中央、標高 17.9 m において検出した土坑で、平面形態は梢円形を呈する。規模は長軸 1.46 m、短軸 1.18 m、検出面からの深さ 0.16 m を測る。

土坑内から少量の弥生土器（第 96 図 484 ~ 489）が出土しており、時期は弥生時代後期と考える。

SKIII18

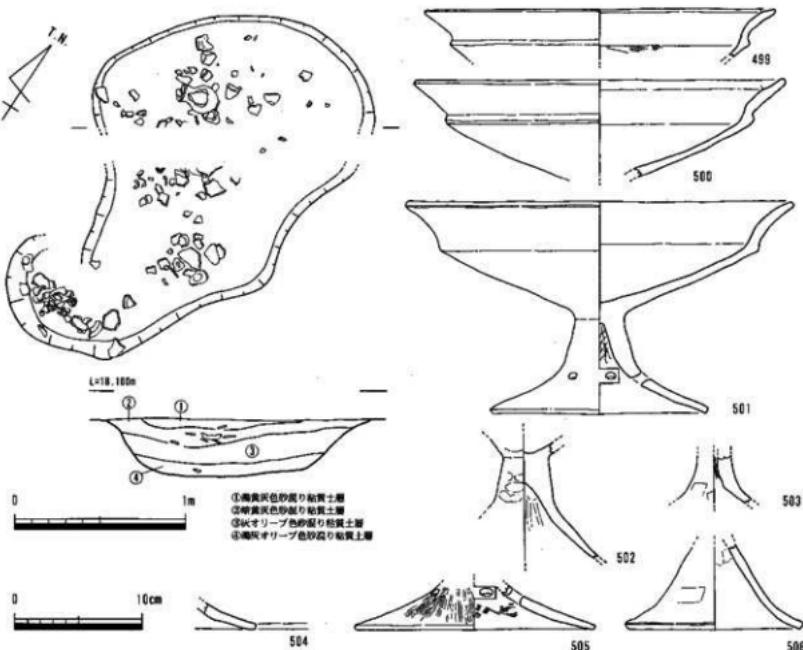
SKIII18 は第Ⅲ調査区中央、標高 17.9 m において検出した土坑である。北側を SHIII03 に切られているが、平面形態は歪な梢円形を呈する。規模は長軸 2.22 m、短軸 1.4 m、検出面からの深さ 0.18 m を測る。

土坑内から少量の弥生土器壺・甕・鉢・高坏（第 97 図 490 ~ 498）が出土しており、時期は弥生時代後期後半と考える。

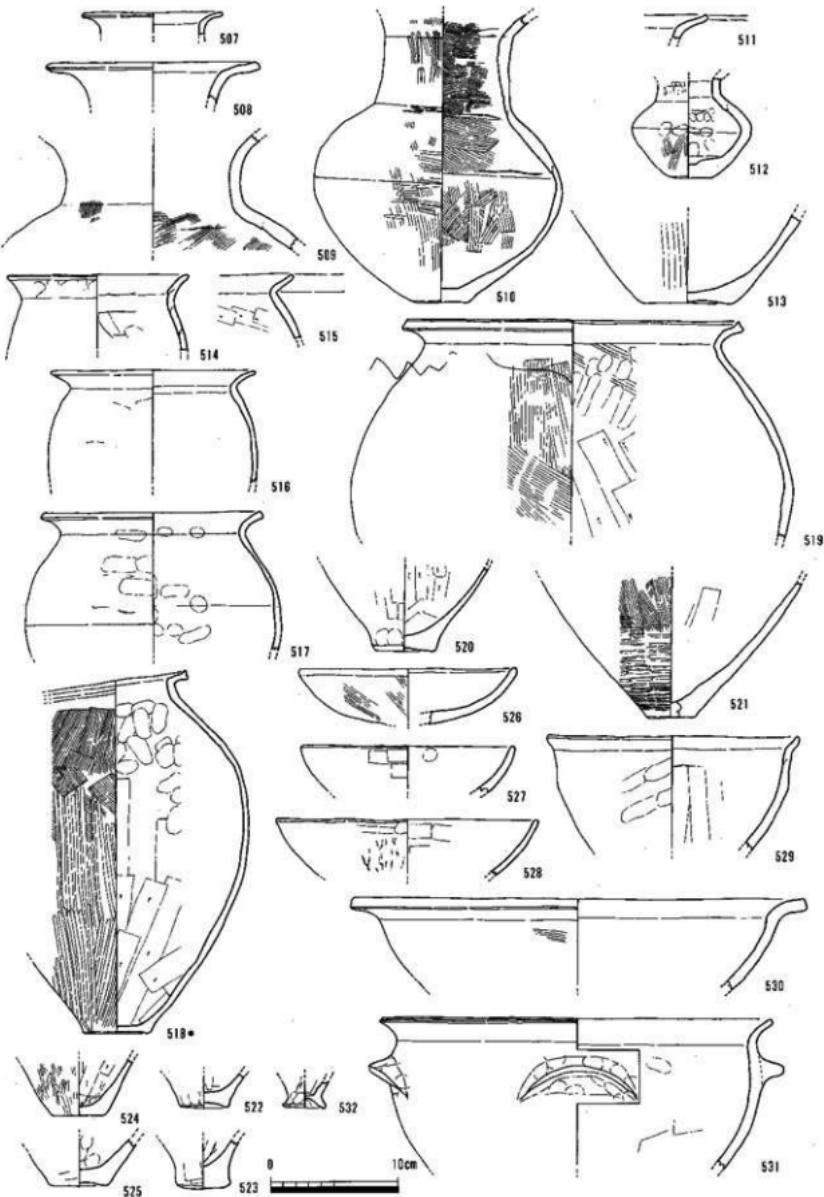
「下川津 B 類土器」の出土量は 1.7% と非常に少ない。

SKIII20

SKIII20 は第Ⅲ調査区中央、標高 17.9 m において検出した土坑で、平面形態は歪な梢円形を呈する。



第98図 SKIII20平・断面図(1/30), 出土遺物実測図(1/4)①



第99図 SKIII 20出土遺物実測図(1/4)②

規模は長軸 2.52 m、短軸 1.4 m、検出面からの深さ 0.34 m を測る。

土層は 4 層に細分できる。この内第 2 層からほとんどの遺物が出土していることからある程度埋没した後に一時期遺物を廃棄した土坑と考える。

土坑内から多量の遺物が出土した。器種は壺・甕・鉢・高杯・製塙土器と多種多様である。壺は小型の壺が認められる。甕は口縁端部を若干拡張させ、底部はしっかりした平底を持つものが出土している。また 519 の甕は体部上半、頸部屈曲部下にヘラ先による 1 条の鋸歯文状の線刻が認められる。鉢は大型のものと中型のものがあり、全体的に器高がやや深い傾向が認められる。高杯は杯部に明顯な屈曲部を残し、屈曲部は上位に認められる。製塙土器は体部外面にヘラ削りを持つものである。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代後期後半と考える。

「下川津 B 類土器」の出土量は、0.39% と非常に少ない。

SKIII21

SKIII21 は第 III 調査区中央、標高 17.9 m において検出した土坑で、平面形態は方形を呈する。規模は長軸 1.03 m、短軸 0.83 m、検出面からの深さ 0.11 m を測る。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

SKIII23

SKIII23 は第 III 調査区中央南、標高 17.9 m において検出した土坑である。西側を柱穴 SPIII739 に、北側が削平されているものの平面形態は長方形を呈するものと思われる。規模は現存長軸 1.0 m、現存短軸 0.5 m、検出面からの深さ 0.33 m を測る。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

SKIII24

SKIII24 は第 III 調査区中央南、標高 18.0 m において検出した土坑で、平面形態は梢円形を呈する。規模は東西 1.40 m、検出面からの深さ 0.55 m を測る。断面は 2 段掘を呈している。ちょうど SHIII05 内で検出しているが、中央土坑 SKIII25 (妙) を切っていることから SHIII08 に伴わないことが解る。

土坑内から少量の赤土器が出土しており、時期は弥生時代後期後半と考えられる。

SKIII25

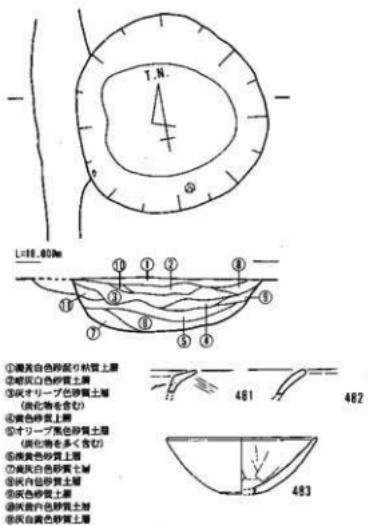
SKIII25 は第 III 調査区南東部、標高 18.2 m において検出した土坑で、平面形態は梢円形を呈する。規模は長軸 0.89 m、短軸 0.62 m、検出面からの深さ 0.18 m を測る。

出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。

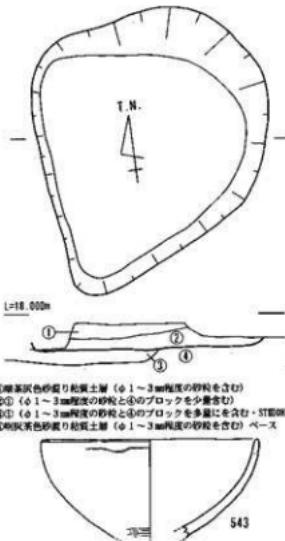
SKIII26

SKIII26 は第 III 調査区中央、標高 17.9 m において検出した土坑である。西側で STIII08 を切っており、東側は SHIII04 によって切られているが、平面形態はやや角張った円形を呈する。規模は 1.4 m、検出面からの深さ 0.14 m を測る。

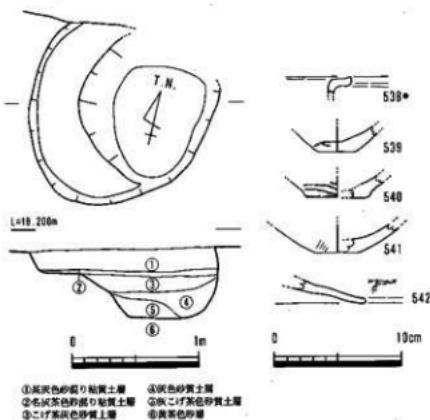
出土遺物と埋土の状況も合わせ、概ね弥生時代と考えられる。



第95図 SKIII11
平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)



第104図 SKIII26
平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)



第102図 SKIII24
平・断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)



第103図 SKIII25平・断面図(1/40)

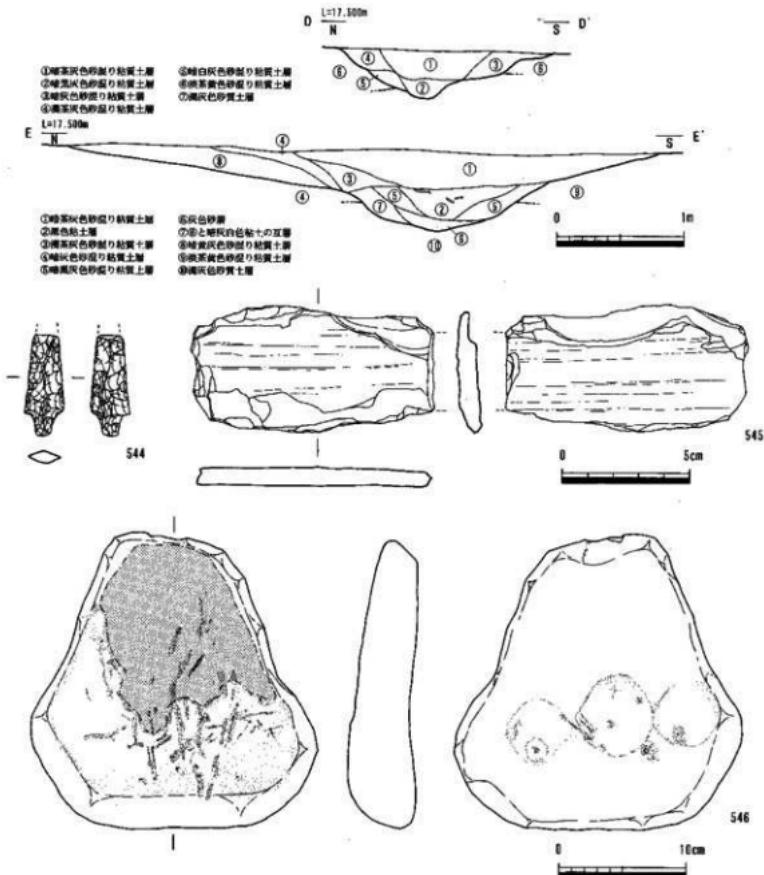
溝状遺構

SDIII01

SDIII01は第III調査区北部、標高17.4mにおいて検出した溝状遺構で、南東方向から北西方向に蛇行しながら延びる。東部でSRIII03に切られ、ほぼ中央部でSDIII02によって切られていることから、この当たりでは一番古い溝である。規模は幅約1.7~4.7mで、現存長約47mで検出した。溝は断面浅い「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.4~0.64mを測る。西部では幅が3.3mとかなり広がる部分が確認できる。

SDIII01とSRIII03の関係はSRIII03の最終埋没時には切られているが、下位部分では土層から同時併存の可能性があり、SDIII01がSRIII03からの導水路と考えられる。

溝からは壺・甕・鉢・高坏・製塙土器が多量に出土している（第105~108図）。

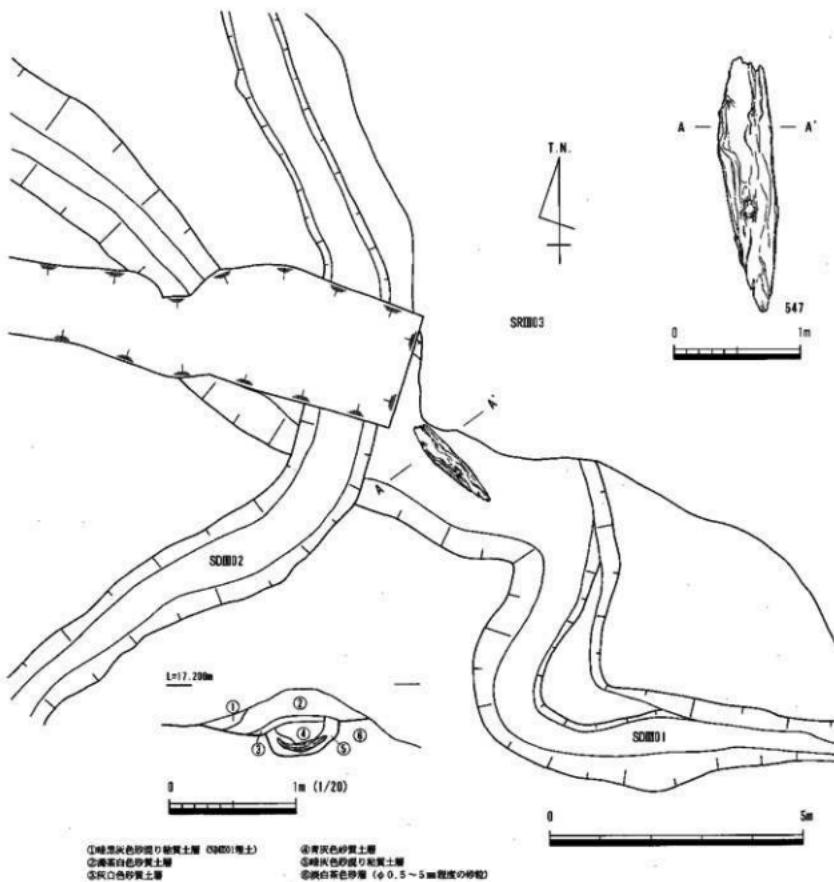


第105図 SDIII01断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)①

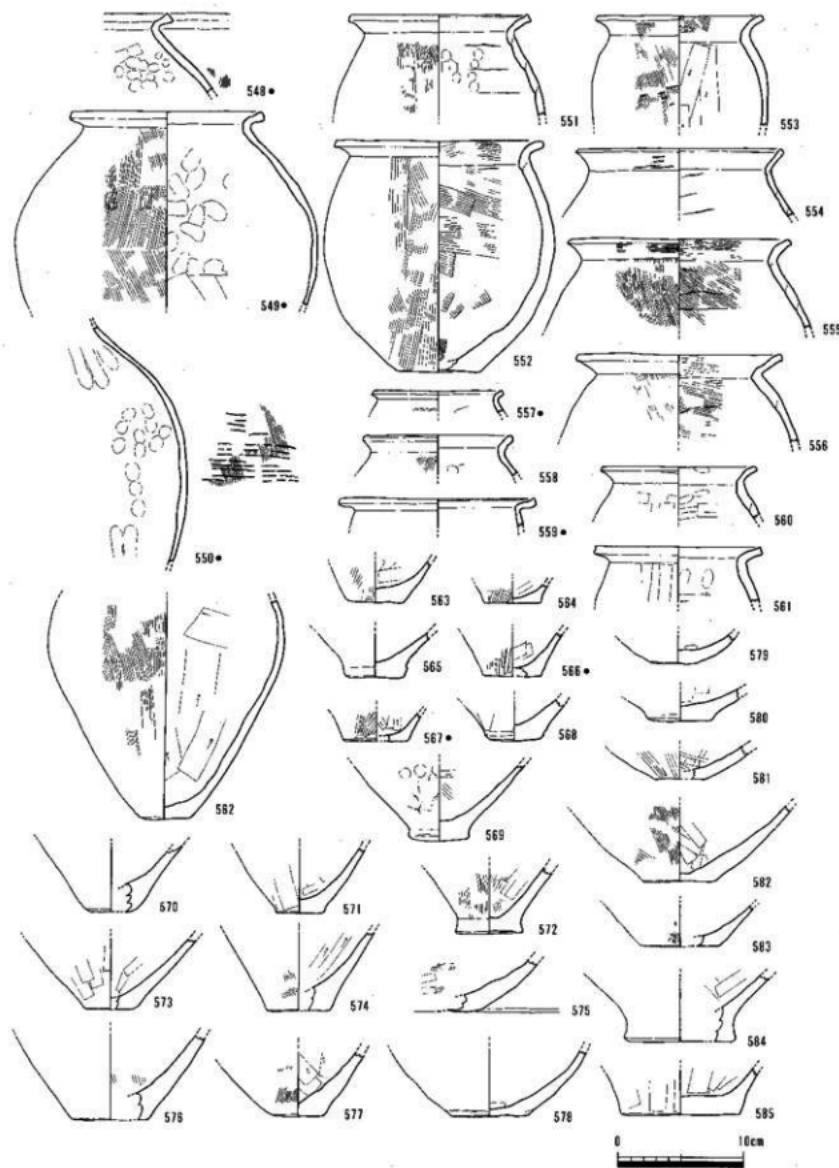
壺は口縁端部を上下に拉張し、外面に退化した嘴を持つものもみられ古い様相を呈する。壺は全て底部平底を持つ。鉢は数点で量的には少なく、浅いものはない。特に製塩土器が一ヶ所から纏まって多量に出土している。底部は分厚く「ハ」の字を開き、体部はやや内湾気味に口縁端部に到る。体部外面は上方から下方へのヘラ削りが施されている。全て2次的な被熱がみられ、全面に淡赤色を呈する。そのため器壁はかなり剥落し体部は小片となっていた。底部計測法でみると10個体以上確認できる。石製品はサヌカイト製の石鎌、結晶片岩製の石庖丁、砂岩製の台石が出土している。

また溝のほぼ中央部SDM02との切り合いが確認できる部分で木査状の木製品が出土した。断面「U」字型を呈し、全長約2mのものである。表面がかなり摩滅していることから、自然木の可能性も考えられる。

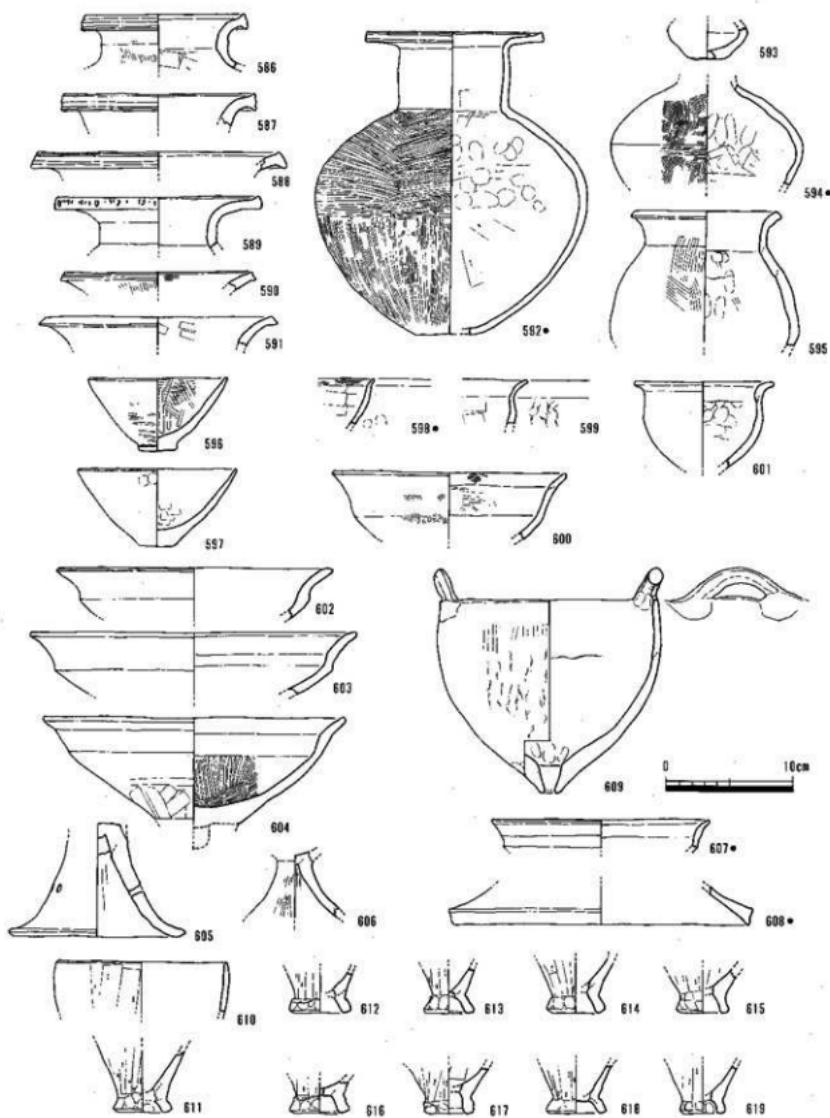
溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期後半でも前半と考える。



第106図 SDM01平・断面図(1/100), 出土遺物実測図(1/4)②



第107図 SDIII-01出土遺物実測図(1/4)③



第108図 SDIII-01出土遺物実測図(1/4)④

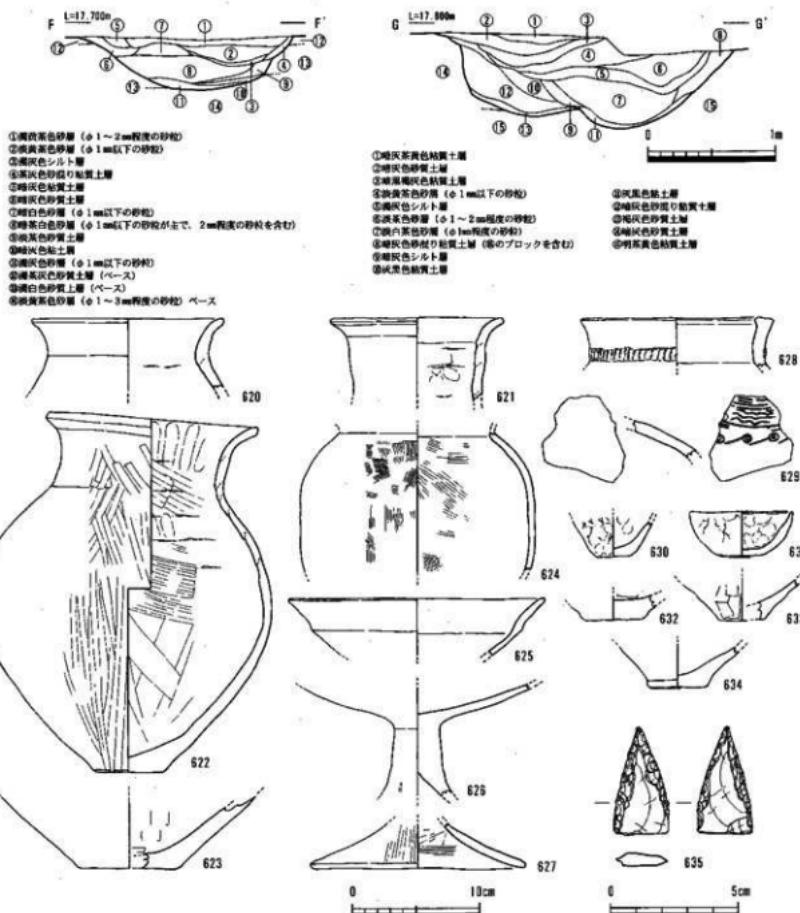
SDIII02

SDIII02は第III調査区北部、標高17.7mにおいて検出した溝状造構で、南部ではほぼ東西方向に流路を取り、中央部で直角に湾曲し、蛇行しながら最終的には北方向に流路を取る。東部では調査区外により詳細は不明であるが、北部ではSDIII01、SRIII03を切っている。規模は幅約1.7~2.9mで、現存長約35mで検出した。溝は断面「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.4~0.7mを測る。かなり蛇行するものの掘り方はしっかりとした溝である。

溝からは壺・甕・鉢・高杯・製塙土器が出土している（第109図620~635）。

溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期後半と考えられる。

「下川津B類土器」の出土量は、0.3%と非常に少ない。



第109図 SDIII02断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)

SDIII08

SDIII08は第III調査区中央、標高17.9mにおいて検出した溝状遺構で、南部分をSHIII03に切られており、北部分ではSXIII03を切っている。規模は幅約0.6~0.7mの溝がほぼ直角に屈曲し、現存長約3.8mで検出した。溝は断面浅い「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.15mと浅い。

溝内から少量の遺物が出土している（第111図636~642）。

溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期後半と考えられる。

SDIII09

SDIII09は第III調査区中央、標高約17.9mにおいて検出した溝状遺構で、SHIII03を切っている。規模は幅約0.3mの溝がほぼ東西に直線的に延び、現存長約3.4mで検出した。溝は断面「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.13mと浅い。

細く延びる溝にかかわらず甕・高环を中心とした遺物は多量に出土している（第112図643~649）。

溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期と考えられる。

SDIII10

SDIII10は第III調査区中央東、標高約17.7mにおいて検出した溝状遺構で、やや蛇行しながら南東から北西方向に流路をとる。規模は最大幅約1.4m、最小幅約0.6mで、現存長約6.0mで検出した。溝は断面緩やかな船底状を呈し、検出面からの深さは約0.12~0.49mと浅い部分と深い部分がある。土層埋土は粘質土と砂質土の交互層で、砂質土層はラミナ状を呈しており自然の洪水堆積と考えられる。ここでは溝状遺構としたが人為的なものとは考えにくい。

溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期と考えられる。

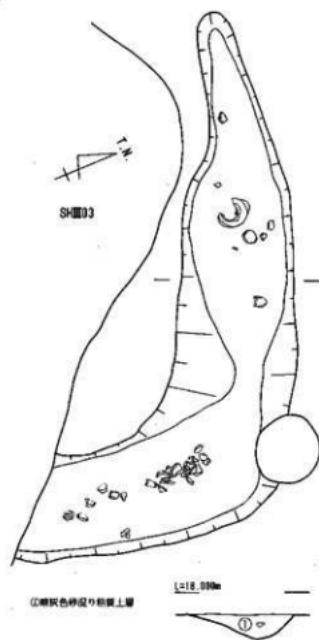
SDIII11

SDIII11は第III調査区中央東、標高約18.0mにおいて検出した溝状遺構で、やや蛇行しながら南東から北西方向に流路をとる。分断しているがSDIII10と繋がるものである。規模は最大幅約2.4m、最小幅約0.8mで、現存長約15.4mで検出した。溝は断面緩やかな船底状を呈し、検出面からの深さは約0.4~0.8mとかなり深く、底面には浅い部分と深い部分がある。土層埋土は粘質土と砂質土の交互層で、砂質土層はラミナ状を呈し、自然の洪水堆積と考えられ、土層より概ね3時期に分けられる。ここでは溝状遺構としたが人為的なものとは考えにくい。

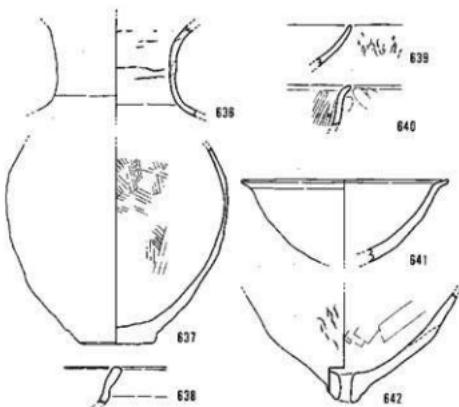
溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期と考えられる。

SDIII13

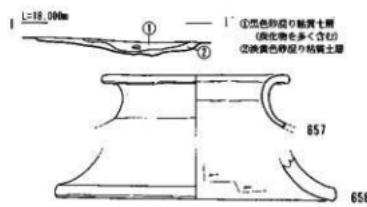
SDIII13は第III調査区中央、標高17.9mにおいて検出した溝状遺構で、SBIII02の北側にあり、長軸主軸とほぼ同一方向に流路を取る。SBIII02の雨落ち溝と考えられ、この溝の東部分ではSBIII03に切られている。この溝がSBIII02に伴うものとすればSBIII03と時期差が認められる。規模は幅約1.0mの溝がほぼ東西に直線的に延び、現存長約11.0mで検出した。溝は断面緩やかな船底状を呈し、検出面からの深さは約0.1mと浅い。



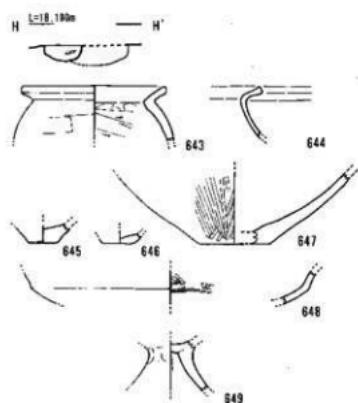
第110図 SDIII08平・断面図(1/40)



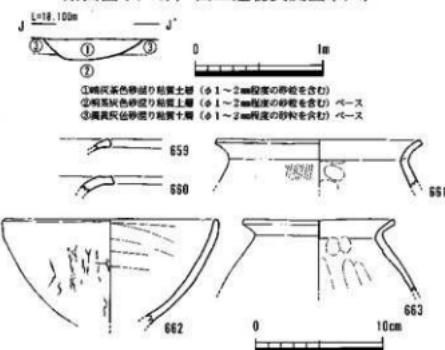
第111図 SDIII08出土遺物実測図(1/4)



第115図 SDIII13
断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)



第112図 SDIII09
断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)



第116図 SDIII20
断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)

溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期後半と考えられる。

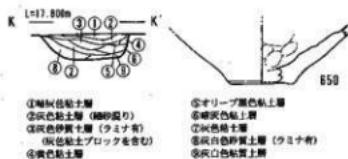
SDIII20

SDIII20は第III調査区南部、標高約18.0mにおいて検出した溝状遺構で、やや蛇行しながらほぼ南北に流路を取る。規模は最大幅約1.0m、最小幅約0.3mで、現存長約6.6mで検出した。溝は断面緩やかな船底状を呈し、検出面からの深さは約0.12～0.25mで、底面は浅い部分と深い部分がある。

溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期と考えられる。

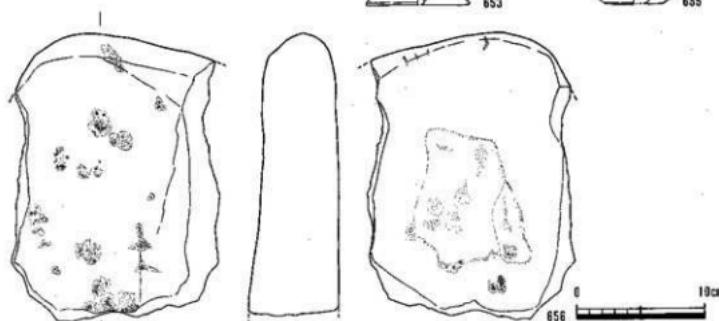
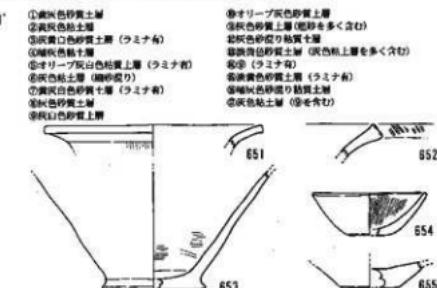
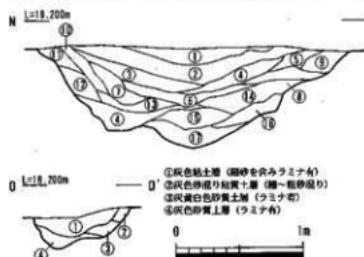
SDIII21

SDIII21は第III調査区南部、標高約18.1mにおいて検出した溝状遺構で、ほぼ直線的に東西に流路を取る。SHIII09を南側で切っている。規模は幅約0.20m、現存長約11.0mで検出した。溝は断面緩やかな「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.05mと浅い。



第113図 SDIII10
断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)

第117図 SDIII21
断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)



第114図 SDIII11断面図(1/40), 出土遺物実測図(1/4)

溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期と考えられる。

SDIII23

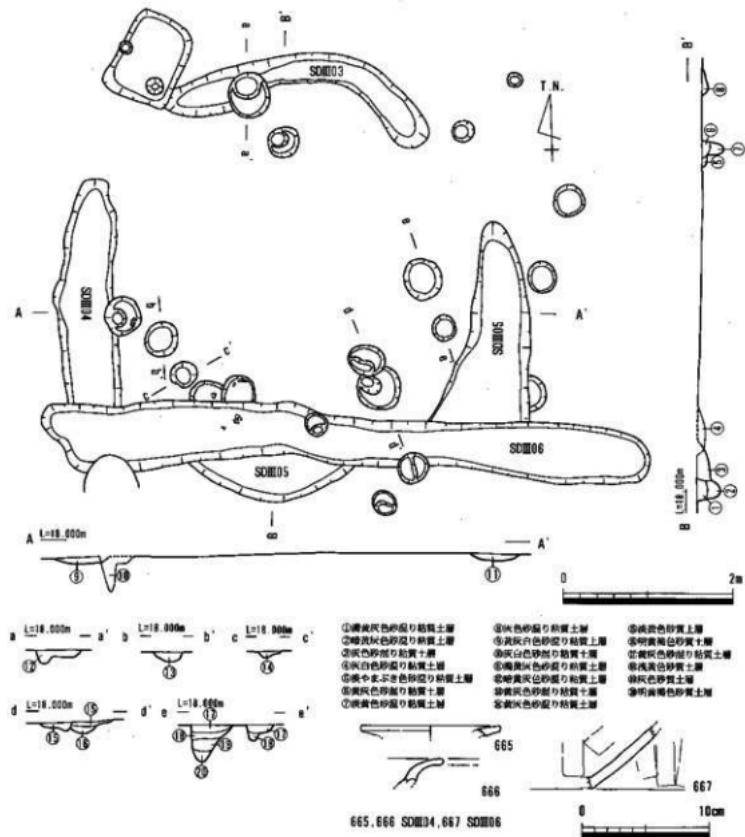
SDIII23は第III調査区南部、標高約18.2mにおいて検出した溝状遺構で、ほぼ直線的に東西に流路を取る。現水路で削平を受けている。規模は幅約0.20m、現存長約24.5mで検出した。溝は断面至な「U」字型を呈し、検出面からの深さは約0.26mとやや深い。

溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期と考えられる。

不明遺構

SXIII01

SXIII01は第III調査区中央、標高17.8mにおいて検出した不明遺構で、最大幅約1.0m、最小幅約0.3mの溝SDIII03～05が円形状呈し、北西方向と北東方向に約1.0mの間隔をあけた状態で検出した。不



第119図 SXIII01平・断面図(1/60), 出土遺物実測図(1/4)

明遺構外側の規模は東西約5.5m、南北6.0mを測り、ほぼ円形を呈することが解り、周溝状遺構を呈する。溝は断面浅い「U」字型を呈し、検出面からの深さは全体的に0.1mと浅い。南半分をSDIII06・07・SX III02によって切られており詳細は不明である。また周溝状遺構内には柱穴が確認できるが、同時併存の決定的な根拠はない。

西側の溝から出土した弥生土器及び埋土の状況も合わせ、弥生時代後期と考えられる。

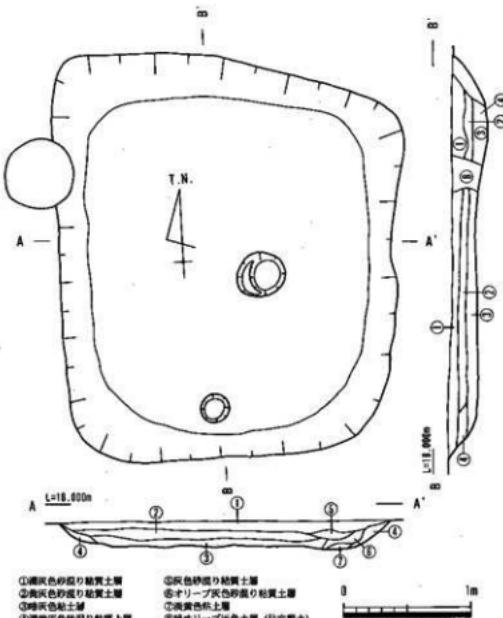
SXIII02

SXIII02は第III調査区中央、標高17.9mにおいて検出した不明遺構で、平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西2.6m、南北3.2mを測る。断面は掘り方肩部から緩やかに底面に至り、底面はほぼ平らを呈する。検出面からの深さは0.2mを測る。土層はほぼ水平堆積で、徐々に埋没したことが確認できる。溝出土の小片遺物及び埋土の状況も合わせ、弥生時代と考えられる。

SXIII03

SXIII03は第III調査区中央、標高17.9mにおいて検出した不明遺構で、西側では幅0.30m程度の溝が直角に曲がり、東側では6cm程度の落ち込みが直角に曲がる。ちょうど北辺では溝の延長と落ち込みの延長が一直線になり、平面的には竪穴住居に伴う壁溝と肩部の可能性が指摘できる。

竪穴住跡とすると平面形態は方形を呈し、規模は一边約7mを測る。床面積を推定復元すると約49m²になろうか。またほぼ中央にSXIII12とした平面形態が推定円形で、2段掘を呈する土坑（炉？）が



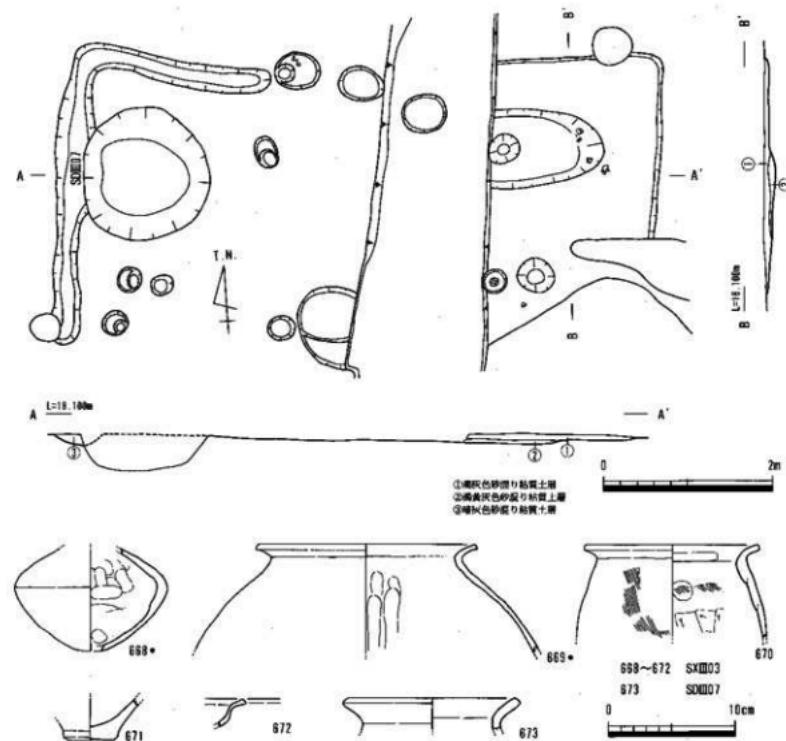
第120図 SXIII02平・断面図(1/40)

あり、規模は南北 0.95 m、検出面からの深さは最深部で 0.10 m を測る。しかし南半分では明確な痕跡が確認できず、主柱穴もないことからここでは不明遺構とした。

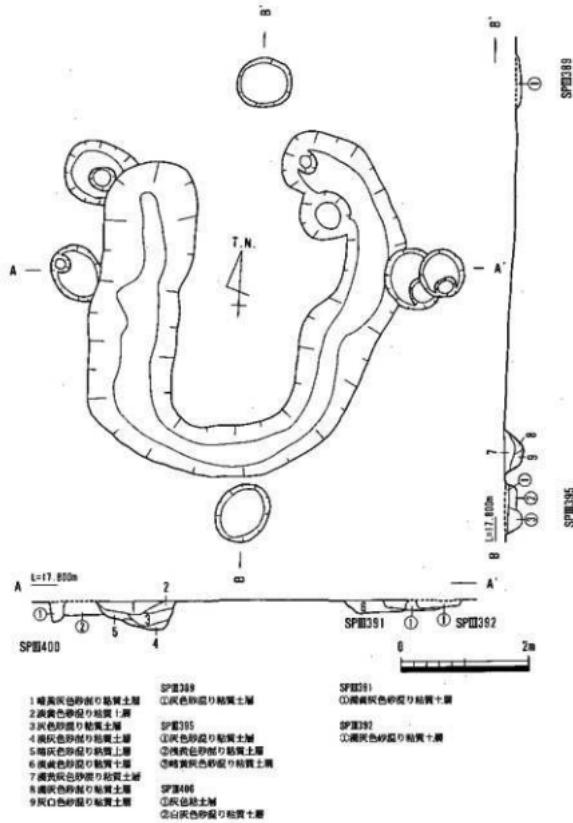
僅かな埋土中及び西側の溝から壺・甕・高杯などの弥生土器が出土している（第 121 図 668～673）。時期は弥生時代後期と考えられる。

SXIII04

SXIII04 は第三調査区西部、標高 17.65 m において検出した不明遺構である。最大幅 0.7 m、最小幅 0.4 m の溝が「U」字状に屈曲し、北に開く。不明遺構外側の規模は東西約 2.4 m、南北 2.75 m を測る。溝は断面箱形あるいは緩やかな船底状を呈し、検出面からの深さは西側が 0.23 m、東側が 0.10 m と西側の方が深い。南に近接して周溝墓状遺構 STIII03 を検出していることから同様な遺構とも考えられるが、主体部が確認されていないこと溝内からほとんど遺物が出土していないことなど積極的な根拠に乏しい。溝出土の小片遺物及び埋土の状況も合わせ、弥生時代と考えられる。



第 121 図 SXIII03 平・断面図 (1/60), 出土遺物実測図 (1/4)



第122図 SXIII04平・断面図(1/40)

自然流路

SRIII01

SRIII01は第III調査区東端、標高17.7mで検出した自然流路（現古川の旧流路）である。この調査区の東境界は現古川の西側に沿うように設定されている。その東端にやや蛇行しながらも概ね平行するようす SRIII01 の西の掘り方を検出している。

SRIII01の調査は流路方向を上面精査で確認し、掘削は南側ではほぼ完掘し、北側はトレンチ調査で終了した。

埋没過程を解明する資料として土層断面を4ヶ所（第123図）で取った。北側から土層断面P-P'、土層断面Q-Q'（SR03 土層断面②の一部）、土層断面R-R'、土層断面S-S'とする。

土層断面P-P'では大別して上下層に分けられる。上層（土層①～⑬）は灰色系の砂混りの粘質土を基調とし、その中位に白灰色系のシルト層がある。下層（土層⑭～⑯）は濁白色系の砂を基調とした土層である。土層断面からみると急激に深くなるようで、調査時には深掘トレンチにより SRIII01 の底部まで検出したが、全掘はしていない。

この内中央部の土層断面は SRIII03 土層断面Q-Q' の東側の一部で確認でき、なだらかなレンズ状堆積が認められる。こここの土層断面からみると灰色系の砂混り粘質土を基調とし、ほぼ中位に白灰色系のシルト層がある。

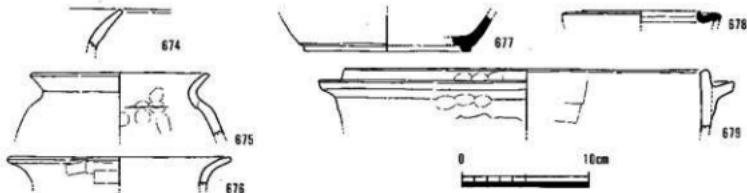
土層断面S-S'は大別して上下層に分けられる。上層（土層①～④）は灰色系の砂混りの粘質土を基調とし、その中位に白灰色系のシルト層がある。下層（土層⑤～⑯）は灰色系の砂を基調とした土層である。土層断面からみると深さ1.4m程度で平らな部分が続き、現古川より（東より）になると下層が急激に深くなるようで、調査時には底部まで確認していない。

以上 SRIII01 の3ヶ所の土層断面をみると基本的には灰色系の砂混り粘質土あるいは濁白色系の砂層を基調とし、中位に白灰色系のシルト層がある上層と灰色系の砂を基調とした下層が互層となり、これらは基本的に同じ堆積状況を呈している。おそらく上層は SRIII01 の自然堆積で、下層は洪水砂層と考えられる。

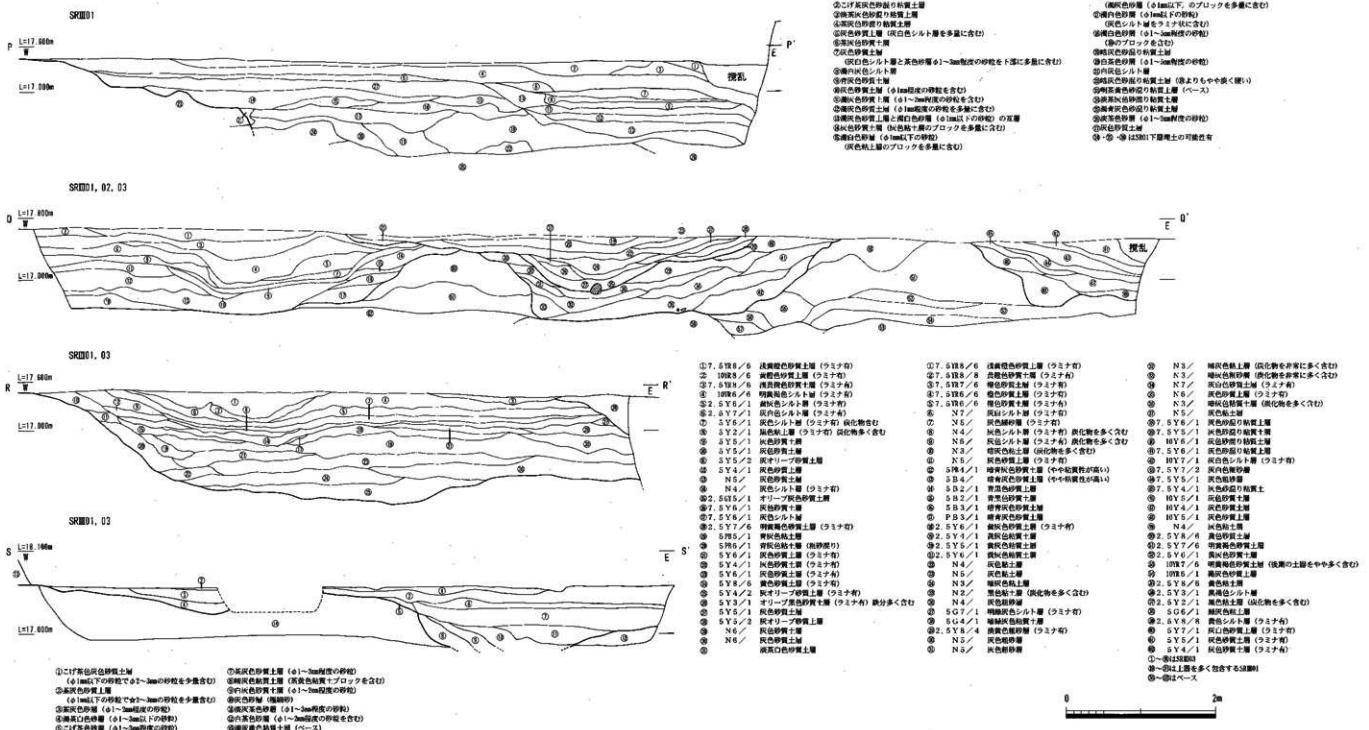
平面精査で確認した SRIII01 は、土層断面からの埋没過程でみると同一流路であることを確認したことになる。

この SRIII01 から弥生時代・古代の遺物が少量出土した。このことから SRIII01 が機能していた時期及び埋没時期は概ね古代を中心とする。

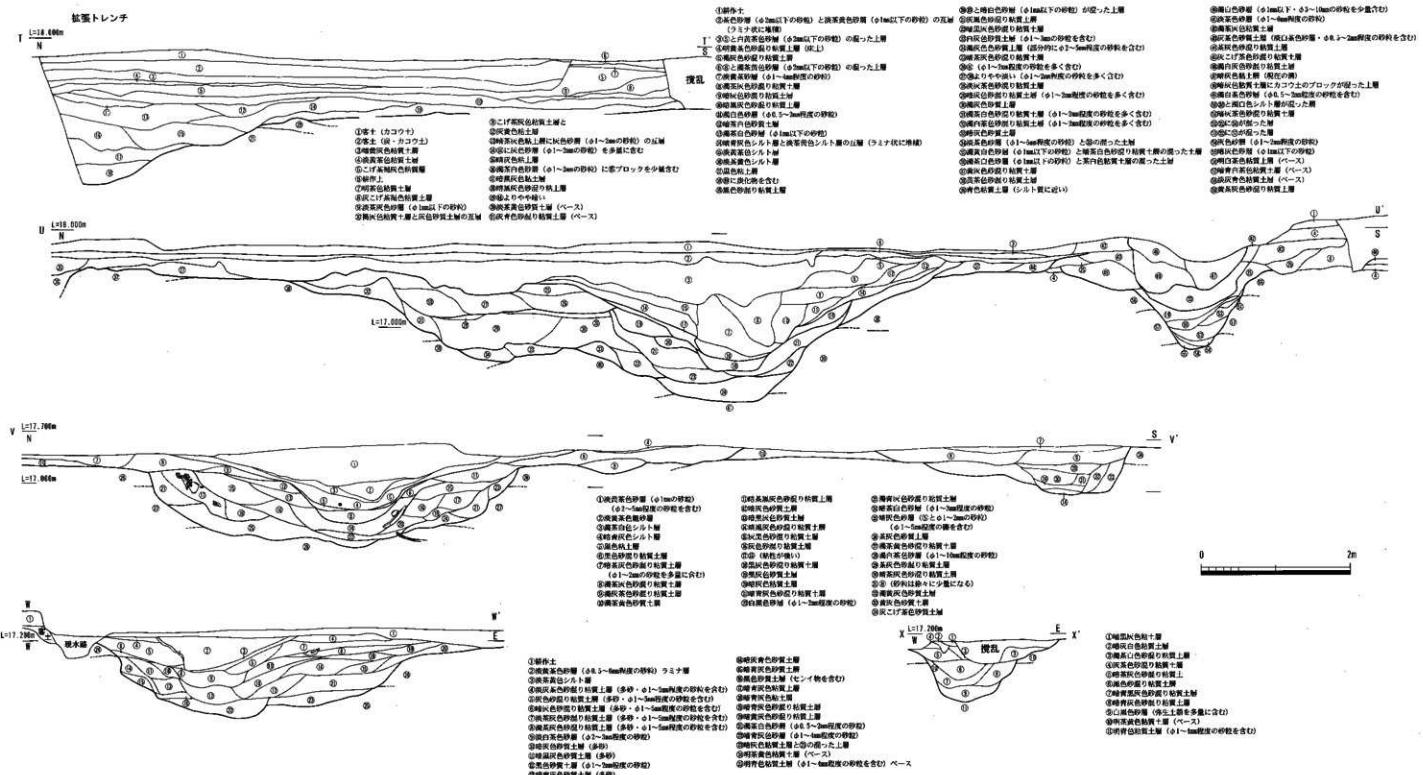
現在古川は護岸工事に伴い耕地の整備が行われており、以前の川幅を推定できないが、この発掘調査の結果、現古川の古代における旧流路西側が確認できたことになる。東側の第IV調査区でも SRIII01



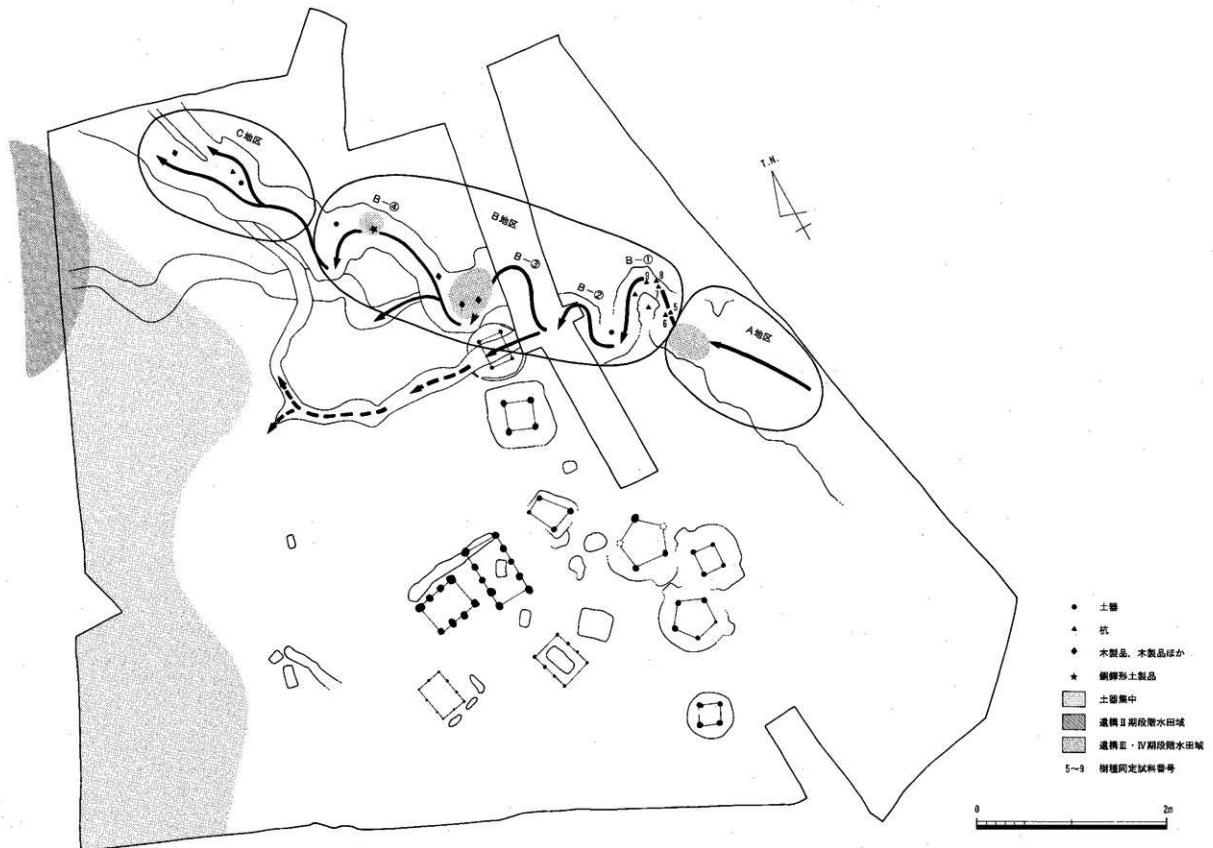
第125図 SRIII01出土遺物実測図(1/4)



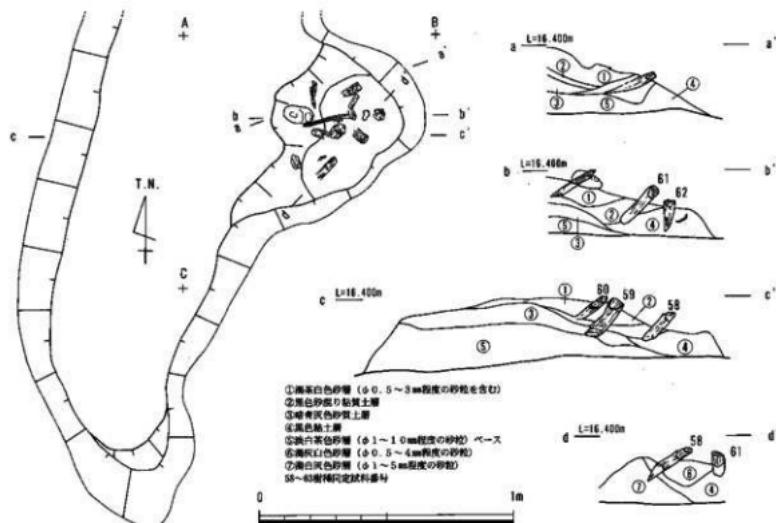
第123図 SRM01, ~03土壌断面図(1/40)



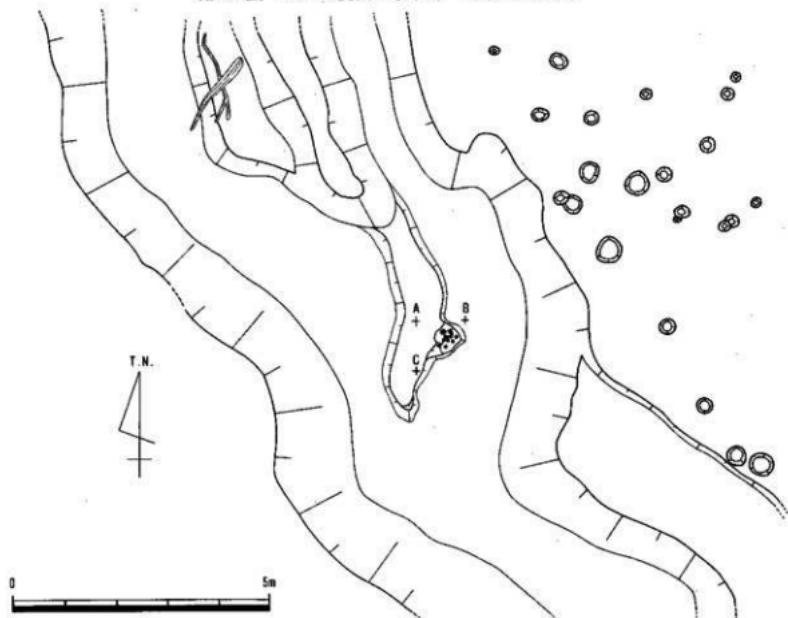
第124図 SRIII03, SDIII02土層断面図(1/40)



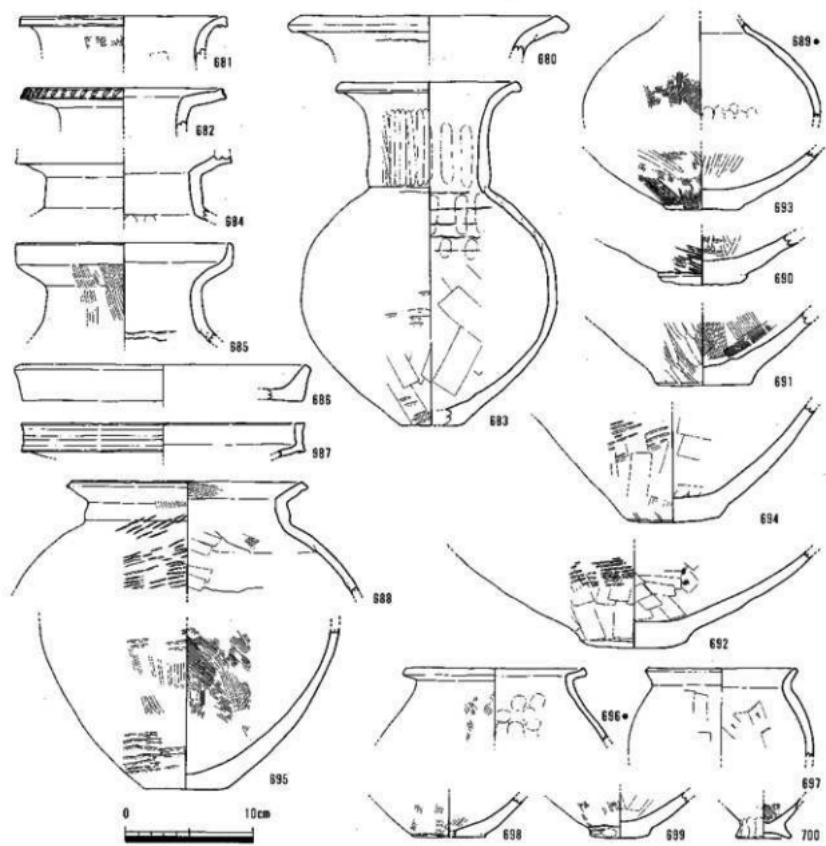
第128図 SRM03流路模式図(1/400)



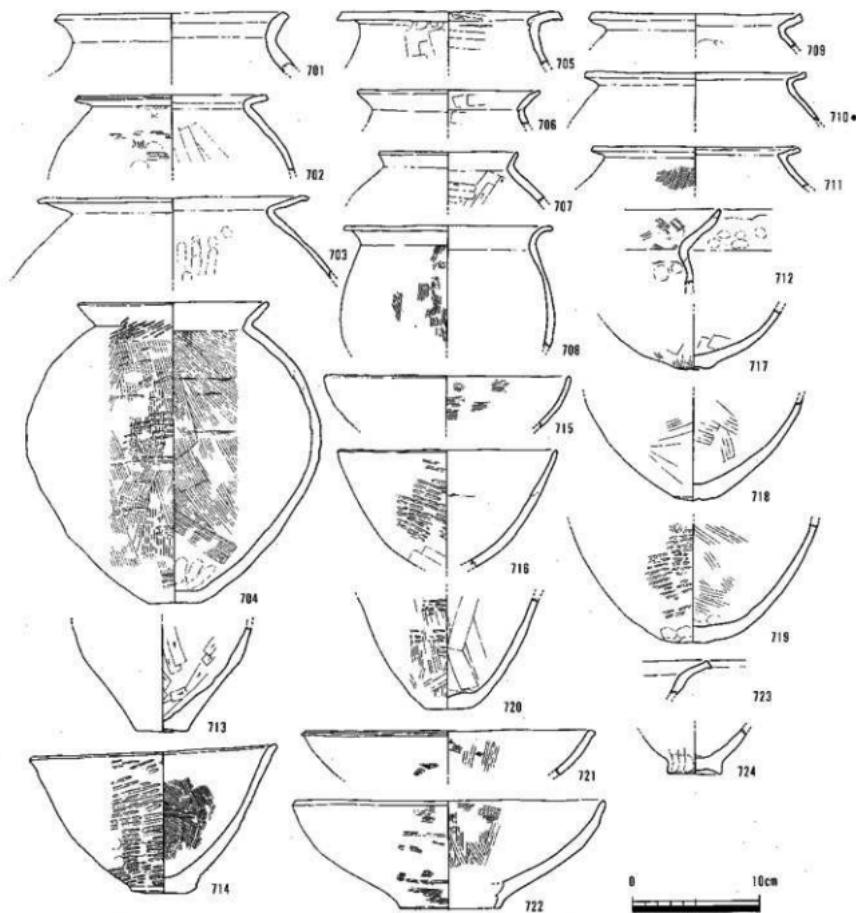
第126図 SR III 03杭出土状況平・断面図(1/20)



第127図 SR III 03杭出土位置図(1/100)



第129図 SR III 03 (第128図A地区) 出土遺物実測図(1/4)①



第130図 SRM03(第128図A地区)出土遺物実測図(1/4)②

と同時期の流路 (SRIV01) の東側を確認しており、この結果 SRIII01 と SRIV01 は幅 31 m の流路であることが判明した。

SRIII02

SRIII02 は第 III 調査区東端、標高 17.7 m で検出した自然流路（現古川の旧流路）である。この SRIII02 は SR III01 のほぼ中央部から北西方向に派生するように検出し、SRIII03 方向に延びているが、完全に重複することができないので、途中で消滅しているかあるいは未調査部分に延びているものと考えられる。

このように上面精査で SRIII01 に切られられており、後述する SRIII03 と重複するように切っていることが解る。また土層断面からも SRIII03 を切って、上位にあることが確認できる。

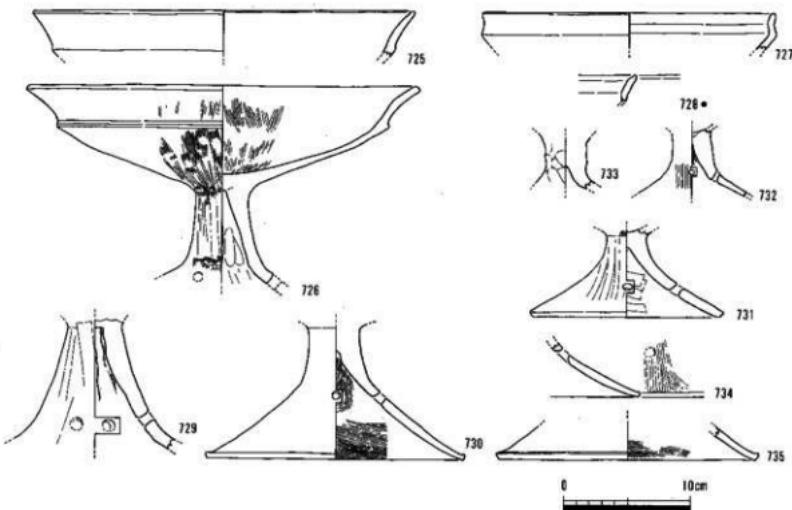
SRIII03 土層断面②で SRIII02 の土層が確認できる。この部分では SRIII03 の上位にあり、重複している。暗灰色系の砂混り粘質土を基調とするもので、最下層に灰色系のシルト層がある。最深部で 0.7 m 程を測る。

SRIII03

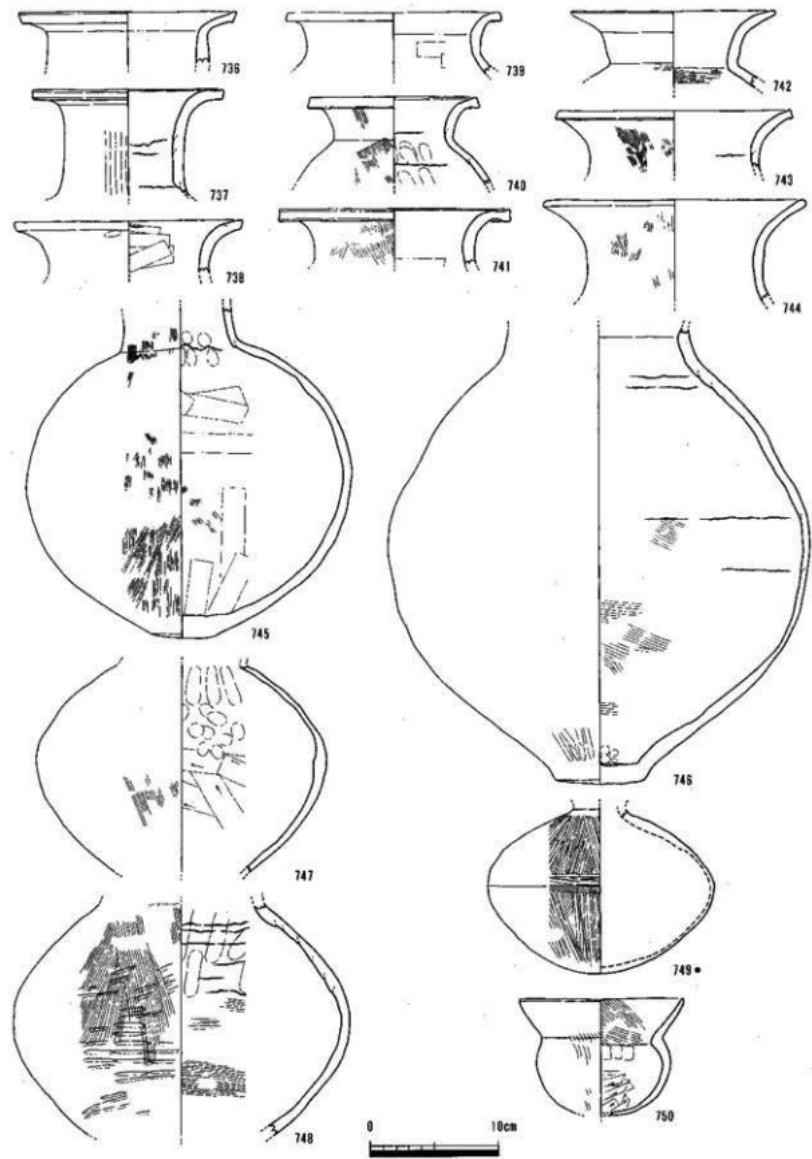
SRIII03 は第 III 調査区北部、標高 17.8 m において検出した自然流路である。第 III 調査区東中央部分から検出し、南東方向から北西方向に蛇行しながら流路を取り、北西端では主流路（西側）と支流（東側）の 2 条に分岐する。

規模はほぼ中央部分（第 124 図土層断面 V-V'）で、検出幅約 4.9 m、深さ約 1.2 m を測るが、最終埋没時の最大幅は 7.0 m 以上を測る。分岐した後の主流路部分の検出幅は約 5.2 m、深さ約 1.1 m を測り、支流部分の検出幅は約 2.0 m、深さ約 0.8 m を測る。この結果、概ね SRIII03 の検出幅は 5 m 程度で、深さは 1 m 強であることが解る。

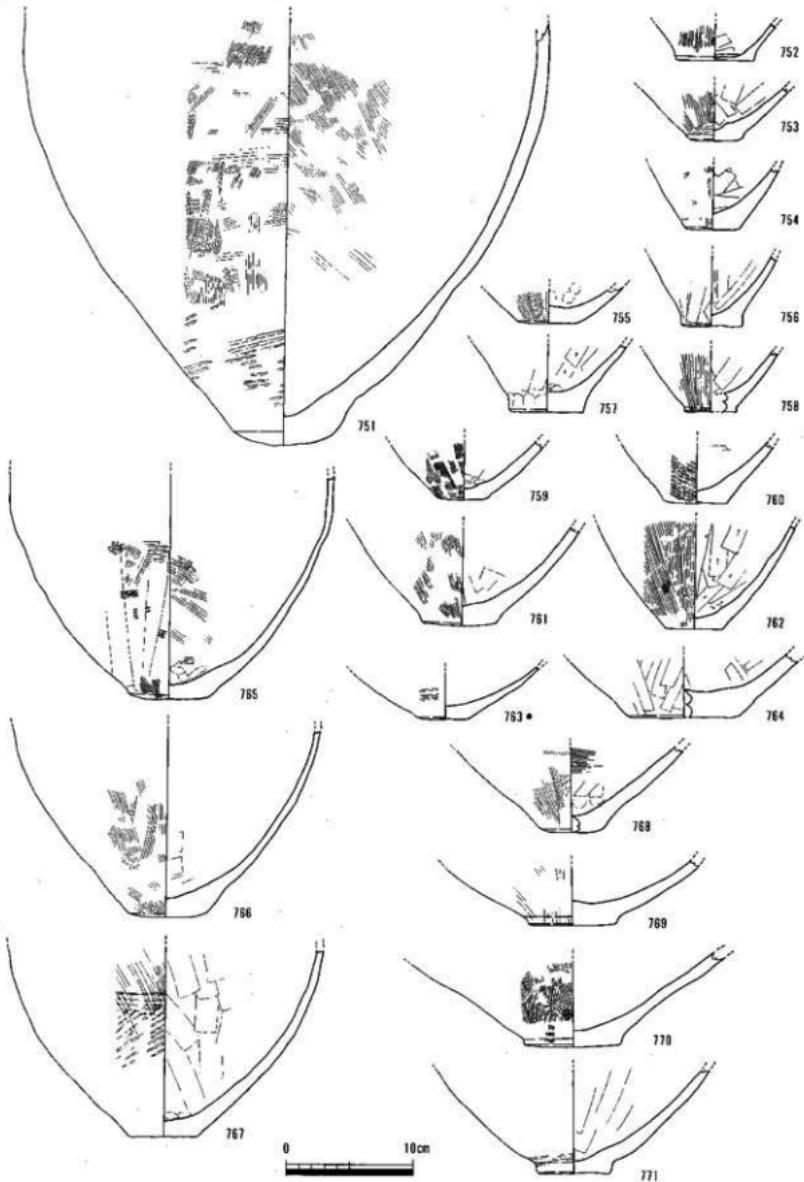
SRIII03 の機能を第 IV 調査区 SRIV02 も含め検討したい。



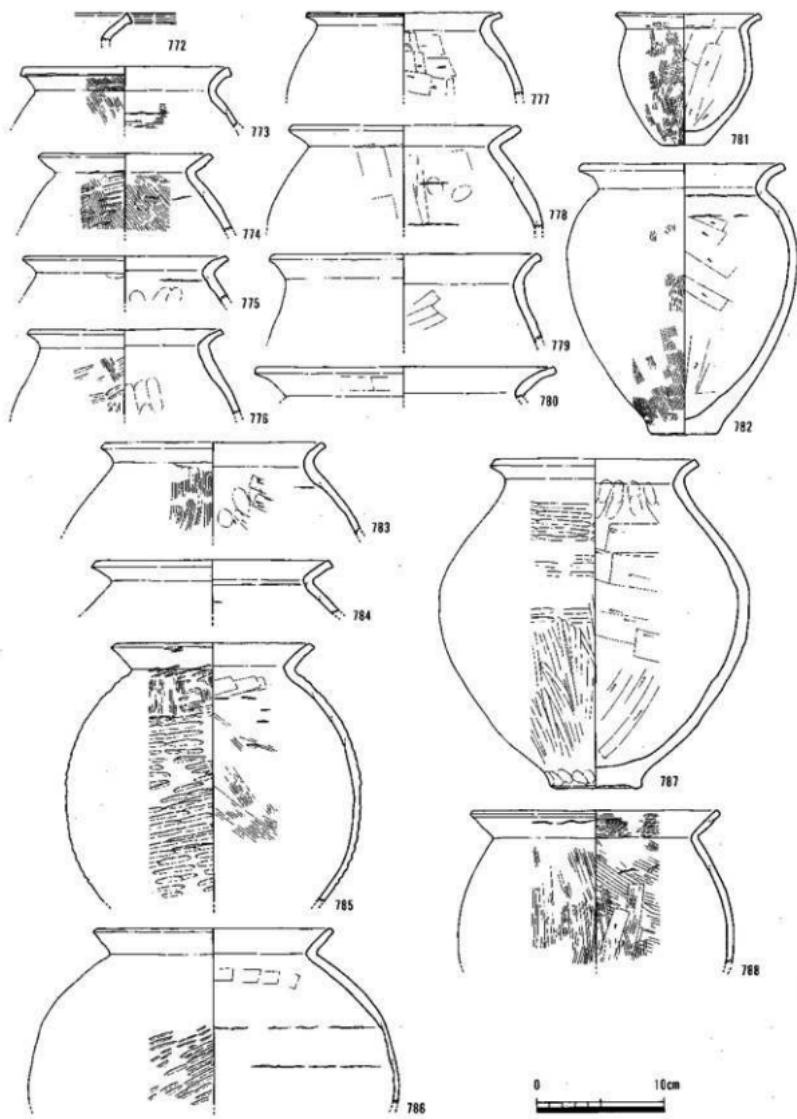
第131図 SRIII03 (第128図A地区) 出土遺物実測図(1/4)③



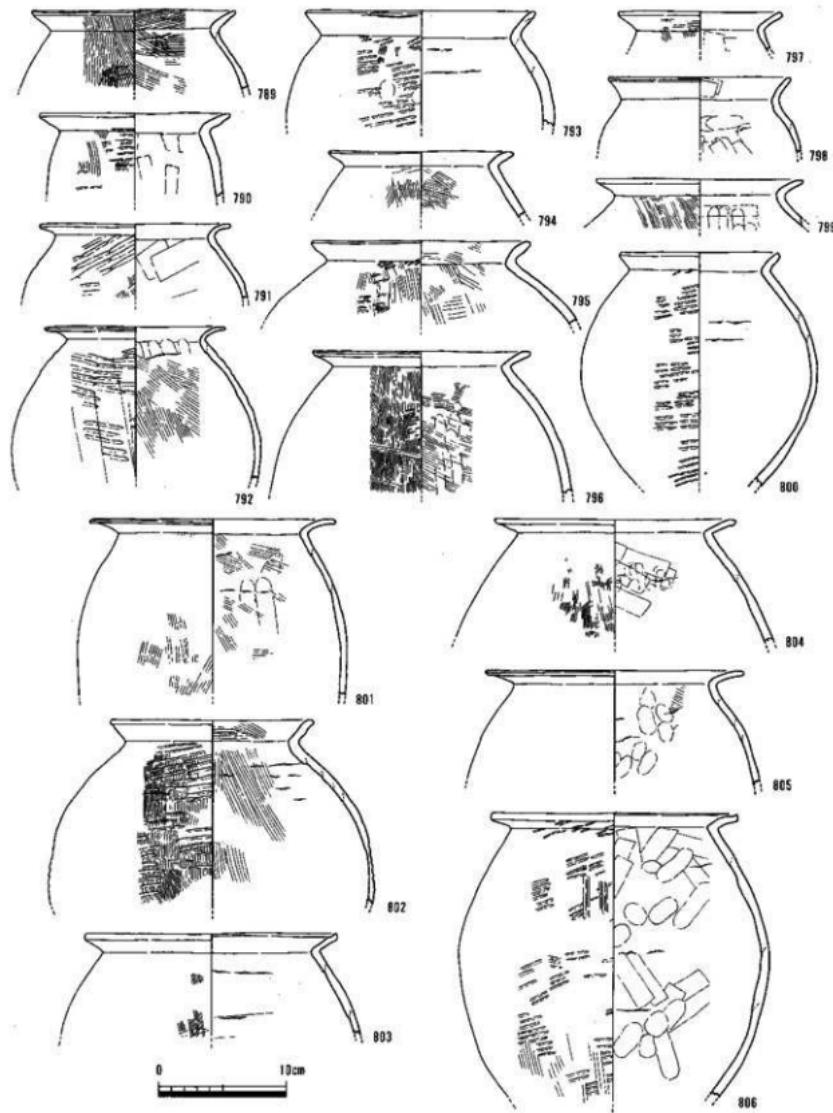
第132図 SRM03 (第128図A地区) 出土遺物実測図(1/4)①



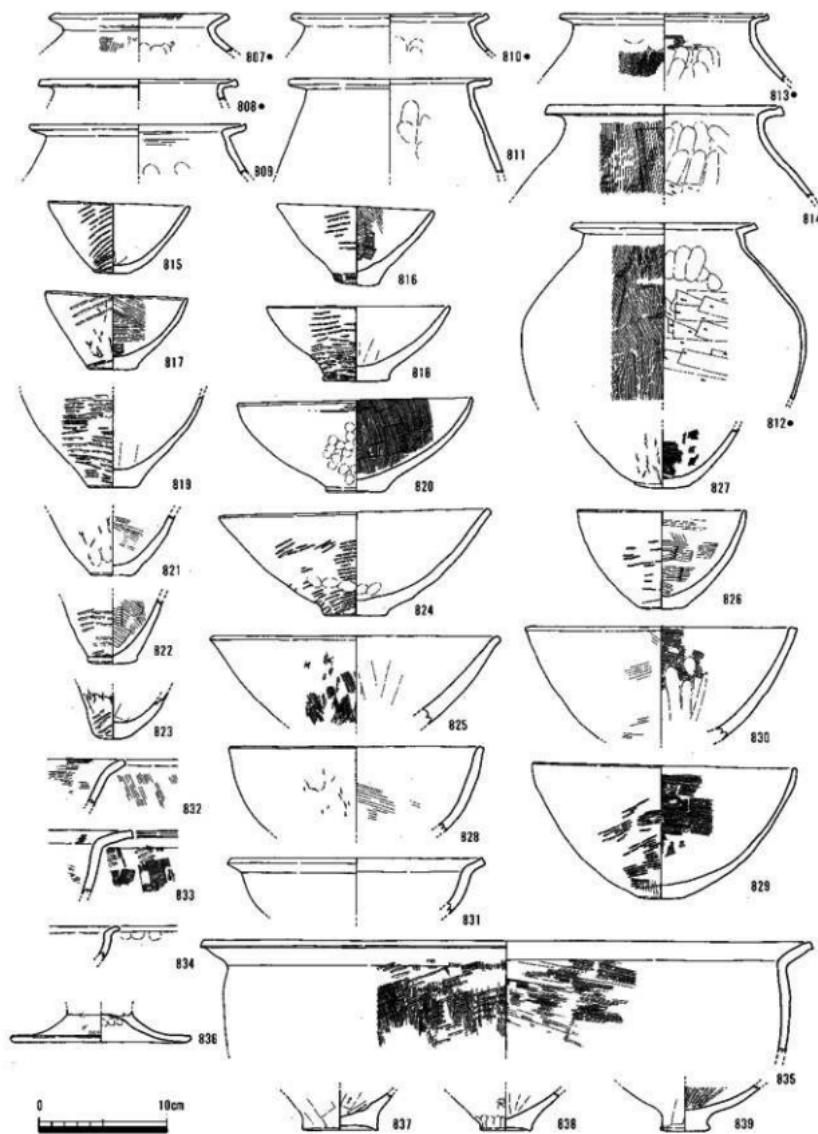
第133図 SRM03(第128図A地区)出土遺物実測図(1/4)②



第134図 SRM03(第128図A地区)出土遺物実測図(1/4)③



第135図 SRIII03 (第128図A地区) 出土遺物実測図(1/4)④

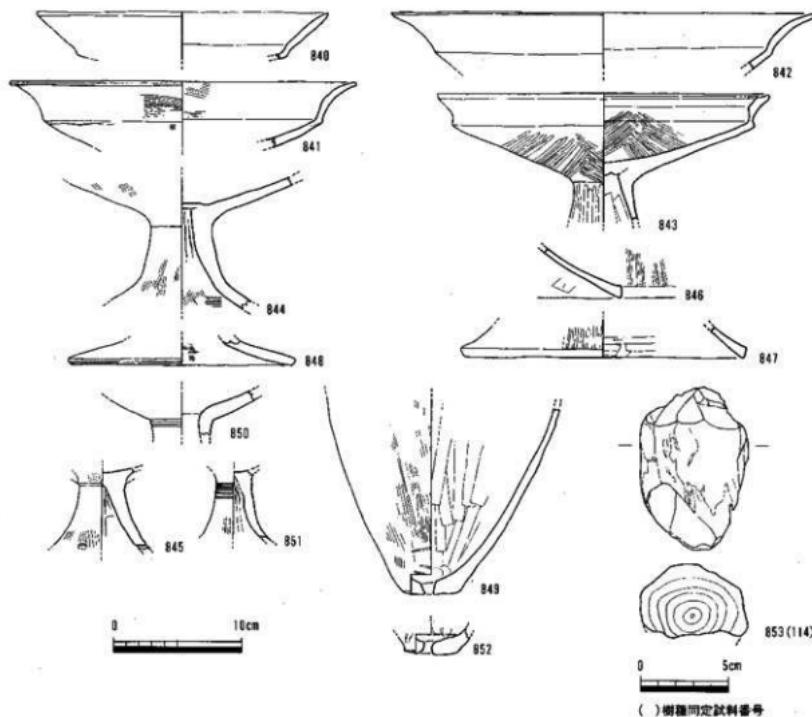


第136図 SRM03 (第128図A地区) 出土遺物実測図(1/4)⑤

自然流路を検出した地区全体で SRIII03 をみると東側に近接する第IV調査区で検出した SRIV02 と流路方向、堆積埋土などからこれらは同一流路と考えられる。SRIV02 も含め流路の検出状況を見ると第IV調査区で東丘陵裾部に当たり、北西方向に屈曲し、現古川によって切られているものの第III調査区A地区までほぼ直線的な流路方向をとると推定できる。続くB地区では約 40 m の範囲内で4回のS字カーブを描くよう蛇行し、C地区ではまた直線的に北西方向に流路を取る。B地区の4回のS字カーブを南からB-①～④地区とする。この4地点を詳細に見るとB-①～③は約 22 m 間で急激に屈曲するが、B-④地点では約 18 m の間で緩やかに屈曲していることが解る。

一方 SRIII03 の南側に SDIII01・02 を検出している。SDIII02 は調査区北西部で SRIII03 を切っており、明らかに前後関係が認められる。しかし堆積土層を見ると淡茶・白色系の砂層を多量に含む様相は SRIII03 の最終堆積層と近似しており、SRIII03 の最終形態が SDIII02 の可能性も考えられる。SDIII01 はちょうど SRIII03 B-④地区の入口部の西側から派生しており、切り合い関係が認められなかったことから同一時期に機能していたものと考えられる。ただし SRIII03 と SDIII01 の底場の高低差が約 80 cm 程度あり、SRIII03 の水量にもよるが、かなりのダムアップの施設が必要と考えられる。

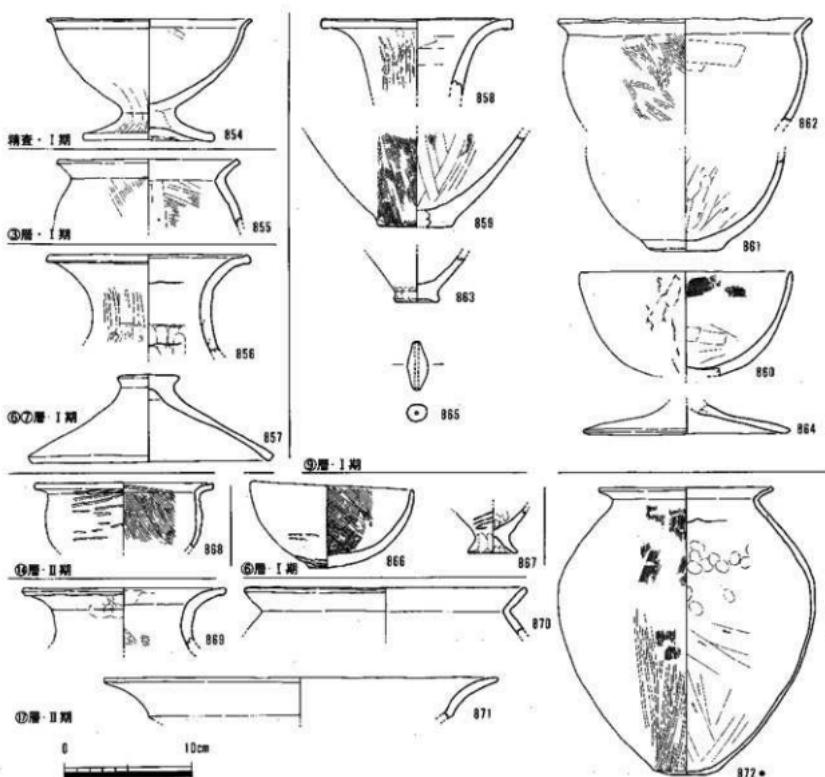
A・C地区での直線的な流路に比べるとこのB地区で認められる約 40 m 間の4回の蛇行にはどういった意味があるのであろうか？



第137図 SRIII03 (第128図A地区) 出土遺物実測図(1/4)⑥

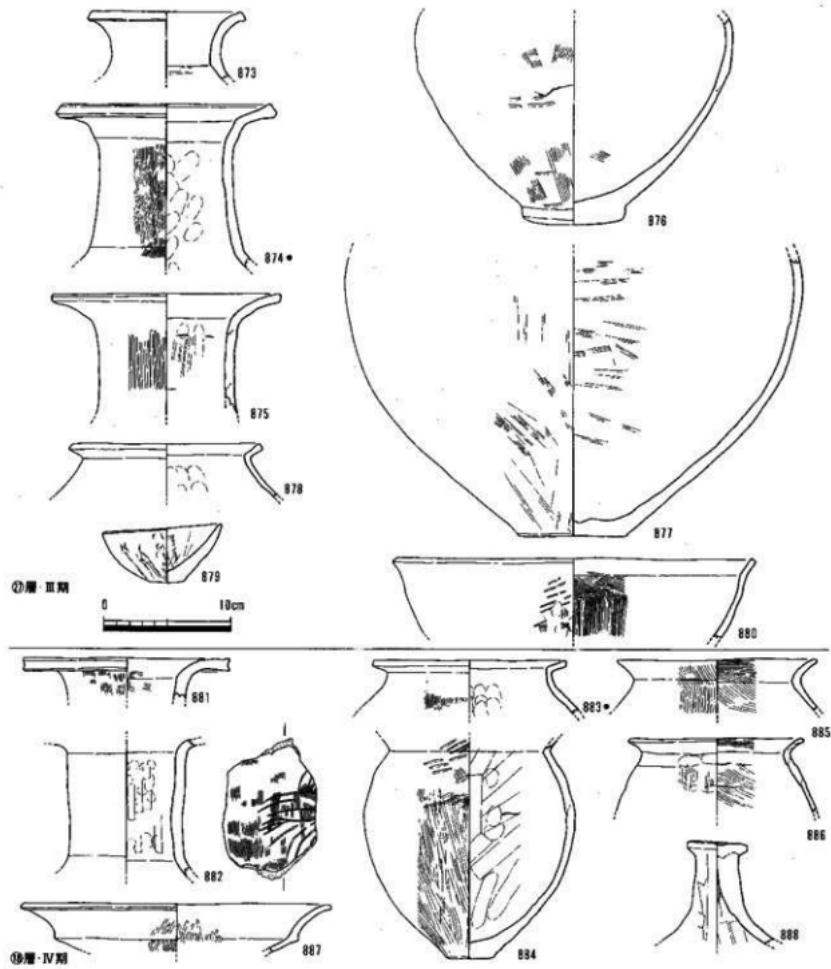
出土遺物の検出状況を見るとまずB-①地区とした1回目の蛇行部分の入口部分で7本程度の木製の杭（第174図1526～1532）を検出した。これらは地山に刺さった状態ではなく、堆積埋土最下層から出土したものである。しかしこの部分に杭を使用した何らかの施設、近接して導水路がないことからおそらく水流・水圧の制御施設があったことは推定できる。また木製の杭はC地点のSRⅢ03が分岐する部分においても検出している（第127図）。この部分で検出した杭は総数11本程度が40cmの範囲内に集中しており、概ね30～50°程度東（支流側）に傾斜して打ち込まれた状態である。残存状態が20～30cm程度と悪く、上部構造が不明であるが、分岐部分にあることからSRⅢ03主流部から水田域へ水を引き込む施設と考えられる。これらの杭は直径3～4cm程度と非常に細く、また最下層に堆積する砂層・粘土・砂混り粘質土という不安定な土層に打ち込まれていることから簡易な施設の可能性も考えられる。これらの杭は主としてクヌギ（コナラ属クヌギ節、ハコヤナギ属、シイ属）を使用しているが、他の木材もあることから、木材の材質固定ではなく、周間に生息する樹木を使用したと考えられる。

杭以外の木製品の出土状況は堅杵・鋤がB-③地区の北側とB-④地区の南川部分の最下層から出土



第124図 土層断面U-U' 参照

第138図 SRⅢ03（第128図B-①地区）出土遺物実測図(1/4)①



第124図 土層断面U-U' 参照

第139図 SR III 03 (第128図B-①地区) 出土遺物実測図(1/4)②

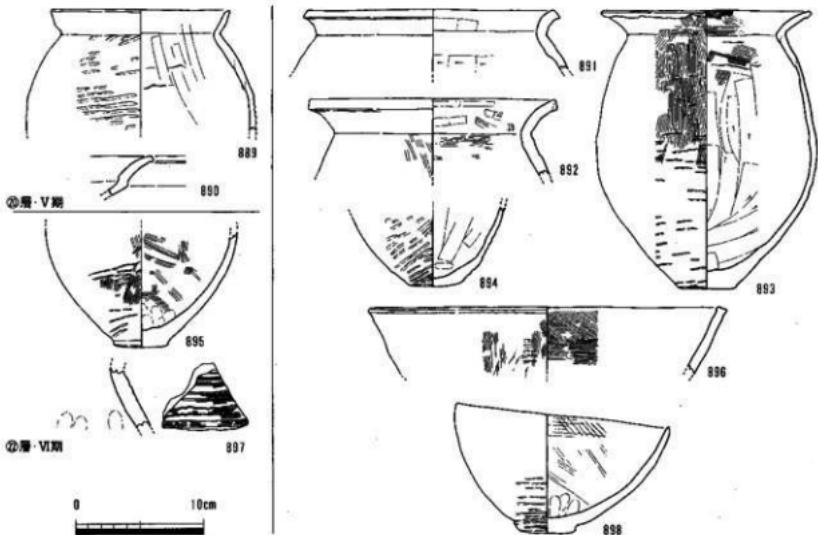
し、弓がC地区の分岐した主流路部分の東肩部分で出土している（第128図）。

土器の出土状況を見ると SRM03 内の全域から出土しているが、特に集中する部分は A 地区と B-③・④ 地区の 3ヶ所である。A 地区から出土した遺物は第 129 図 681 から第 137 図 853 まで西側の肩付近に集中して出土している。おそらく SRM03 西側に広がる集落からの廃棄と考えられる。B-③ 地区から出土した遺物は第 138 図 854 から第 157 図 1225 まで、底部及び B-③ と ④ 地区間の北側から張り出す高まり上から出土している。B-④ 地区で土器が集中する部分はちょうど第 124 図 土層断面 V-V' を設定した位置で、土層⑯（粘性の強い灰黒色砂混り粘質土）から多量に出土しており、位置的には SRM03 の北側から投げ込まれた状態で出土しているものと考えられる。

以上の土器の出土状況を見ると A 地区及び B-③ 地区の出土状況は SRM03 の南側に展開する集落からの廃棄と考えられるが、B-④ 地区の出土状況は SRM03 北側から投げ込まれた状態であった。

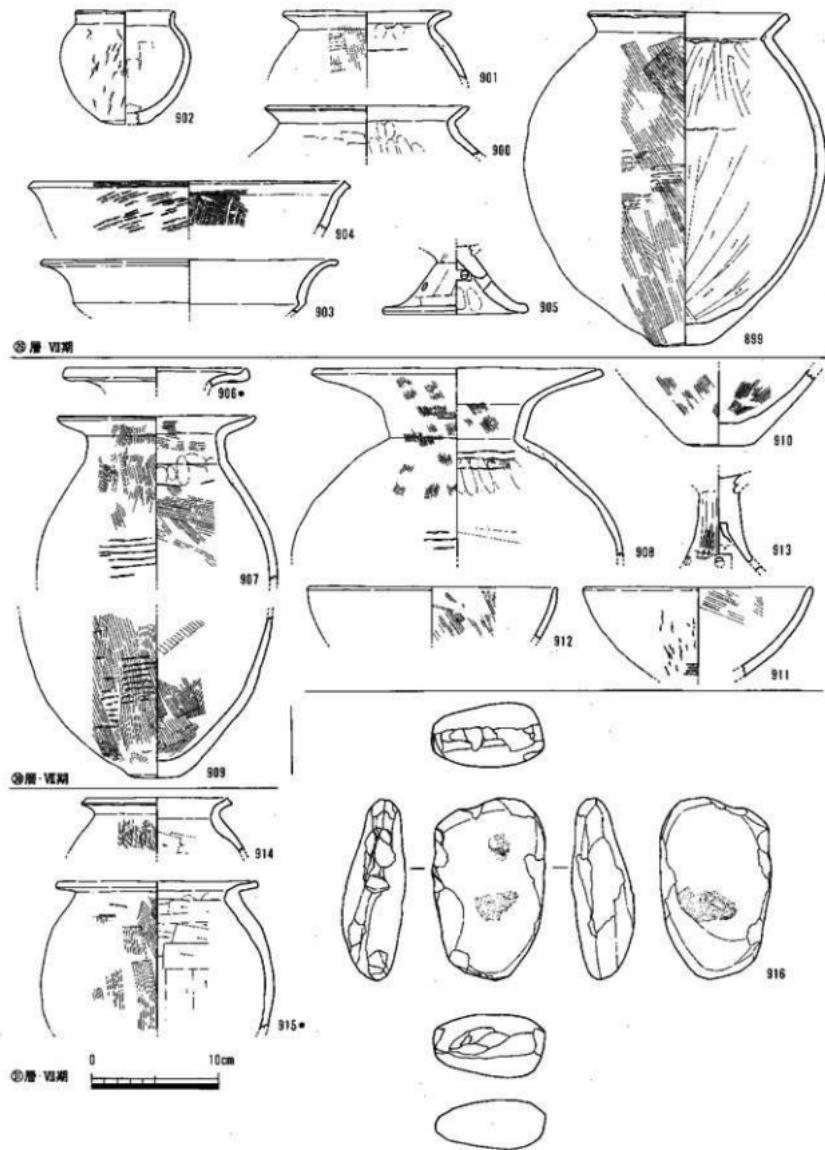
第Ⅲ調査区で検出した集落は当初検出した微高地上にあり、SRM03 はこの微高地を南東方向から北西方向に横切るように検出している。この微高地は第Ⅲ調査区からさらに北方向に延びることから調査区外ではあるが SRM03 の北側に集落が展開する可能性が考えられる。

以上の述べた① SRM03 の検出状況、② 派生する溝 SDM01 の状況、③ SRM03 出土遺物の状況からまとめるに SRM03 は旧地形の復元で確認した微高地を横切っていることから旧古川の支流と考えられ、低湿地部分（水田域）へ導水する流路で、ここでは自然流路 SR としたが人為的に掘削された溝とした方が適切と考えられる。またそれを裏付けるものとして B 地区の蛇行に意図的なものを感じ、ここに水流・水圧に対する制御機能を与えることも可能と考えられる。B 地区においては流路を蛇行させることにより水圧を調整し、その後直線的な流路となり、水田域への取水路としての機能を持たせたものと考えられる。



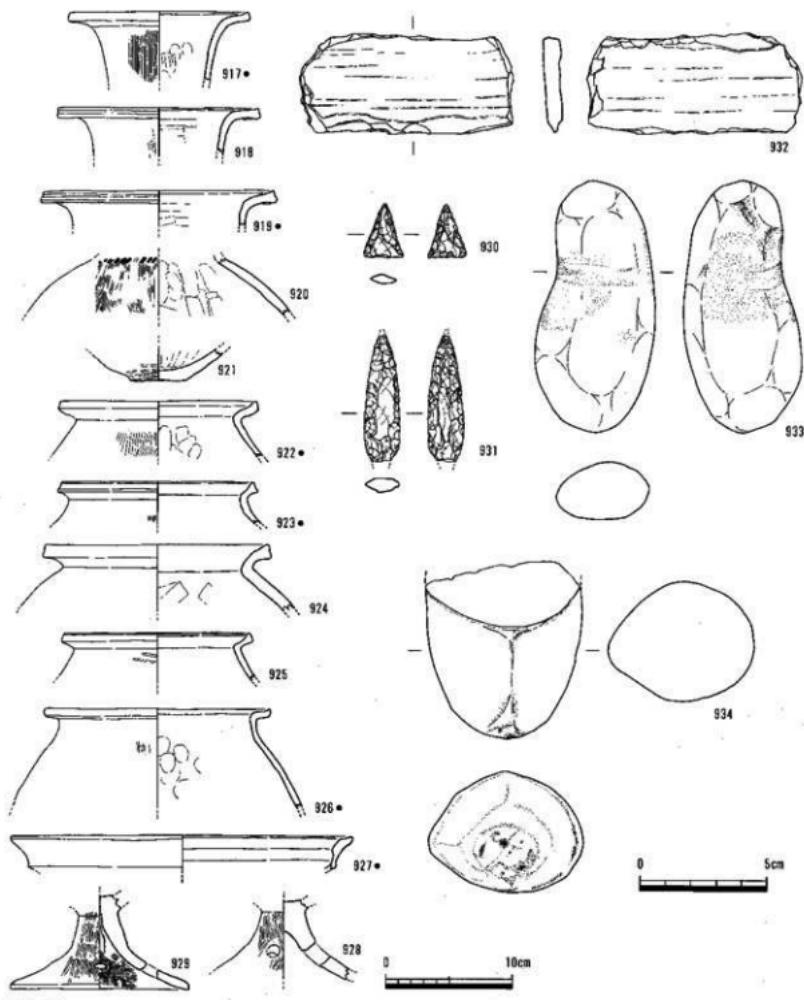
第124図 土層断面U-U' 参照

第140図 SRM03 (第128図B-①地区) 出土遺物実測図(1/4)③



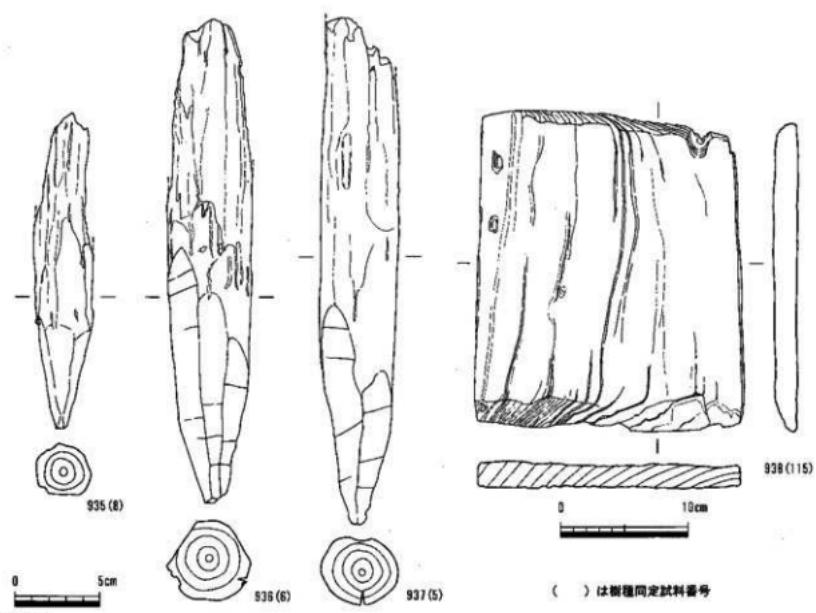
第124図 土層断面U-U' 参照

第141図 SRM03 (第128図B-①地区) 出土遺物実測図(1/4)④

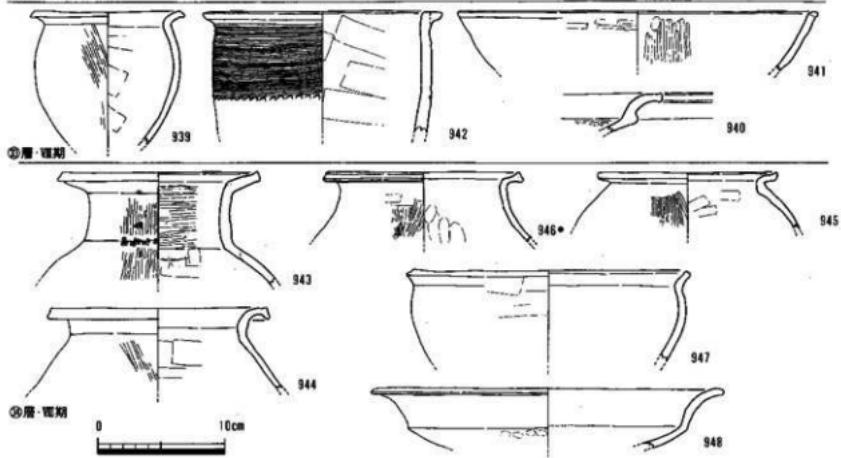


◎第124図 土層断面U-U' 参照

第142図 SRIII03(第128図B-①地区)出土遺物実測図(1/4)⑤



②層・晩期



第124図 土層断面V-V' 参照

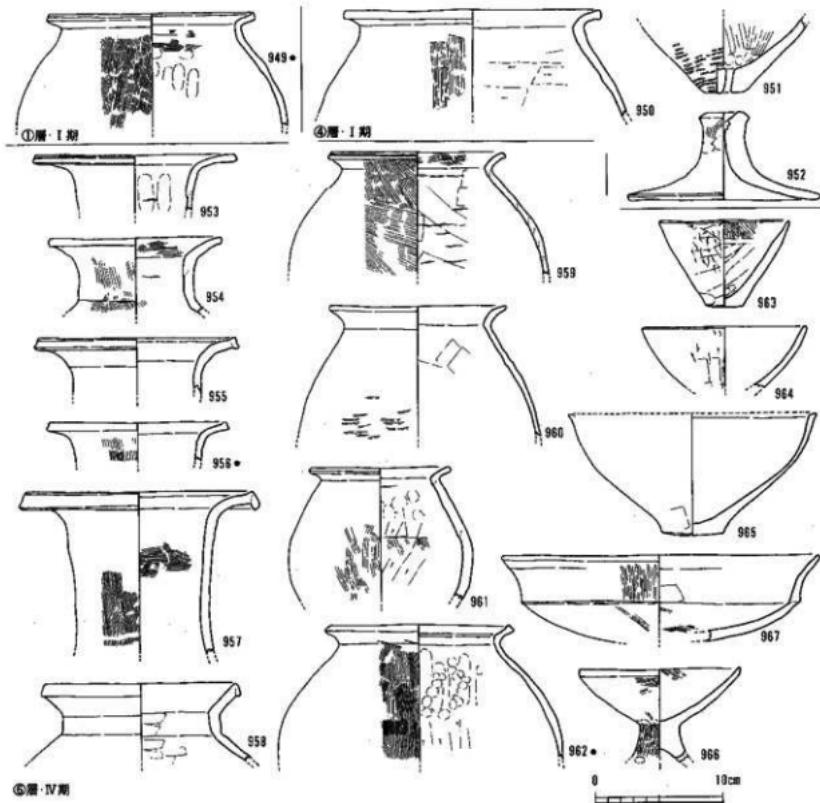
第143図 SRIII03 (第128図B-①地区) 出土遺物実測図(1/4)⑤

える。

主流から引き込む流路をあるいは主流を制御し、水田域に引き込む取水路にする灌漑技術特に土木技術に優れた高度な知識を持っていたものと考えられることから人為的な要素の濃い流路で、人為的に掘削された溝である。

これらの流路から推定できる水田域（生産域）はおそらく旧地形復元時に想定した低湿地aがそれになると考へられる。低湿地aは谷筋からの湧水で湿地状になり、推定面積は約33000m²を測る。また第Ⅲ調査区で見ると西に向かって傾斜する西側部分に遺構が無く、その部分に予備調査で確認した弥生時代水田耕作土と考えられる暗灰色粘土層が堆積していることから低湿地aの東側が第Ⅲ調査区内まで広がっているものと確認できる。このことから集落域と水田域は近接して位置していたことが解り、約33000m²にも及ぶ広大な水田域の耕作者を第Ⅲ調査区居住者のみでは広すぎることから、原間遺跡の弥生時代集落全域の水田域として低湿地aは機能していたものと考えられる。

次に堆積土層からその埋没過程を考えてみたい。



第124図 土層断面V-V' 参照

第144図 SRM03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)①

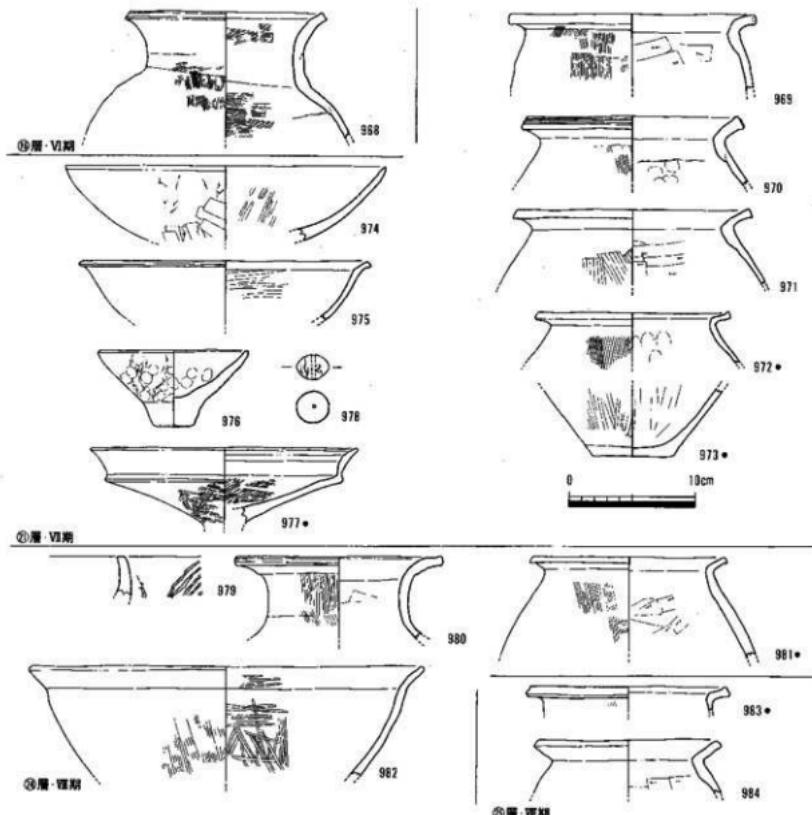
この流路の土層断面は第124図にあるように4ヶ所で取った。そのなかで最も明瞭に流路の幅、時期ごとの変遷が追える土層がSRIII03 土層断面U-U'、V-V'である。そこでこの土層断面及び出土遺物を基に各小期に分けたい。

まず土層断面U-U' でみると8つの小期に細分でき、上部からⅠ期からⅦ期とする。

Ⅰ期はさらに砂層を基調とした上層（土層①～③）とシルト層を基調とした下層（土層⑥～⑯）に分けられる。上層とした砂層は第Ⅲ調査区全域に薄く堆積するもので、特にSRIII03ではレンズ状にやや厚く堆積している。下層としたシルト層は厚さ0.6mでレンズ状に堆積している。このⅠ期としたのはSRIII03の最終埋没堆積土層で、ほとんど遺物を含まず、上層としたものは洪水砂層と考えられる。土層断面からするとⅡ期とした土層⑩もⅠ期と連続して堆積した土層と考えられる。

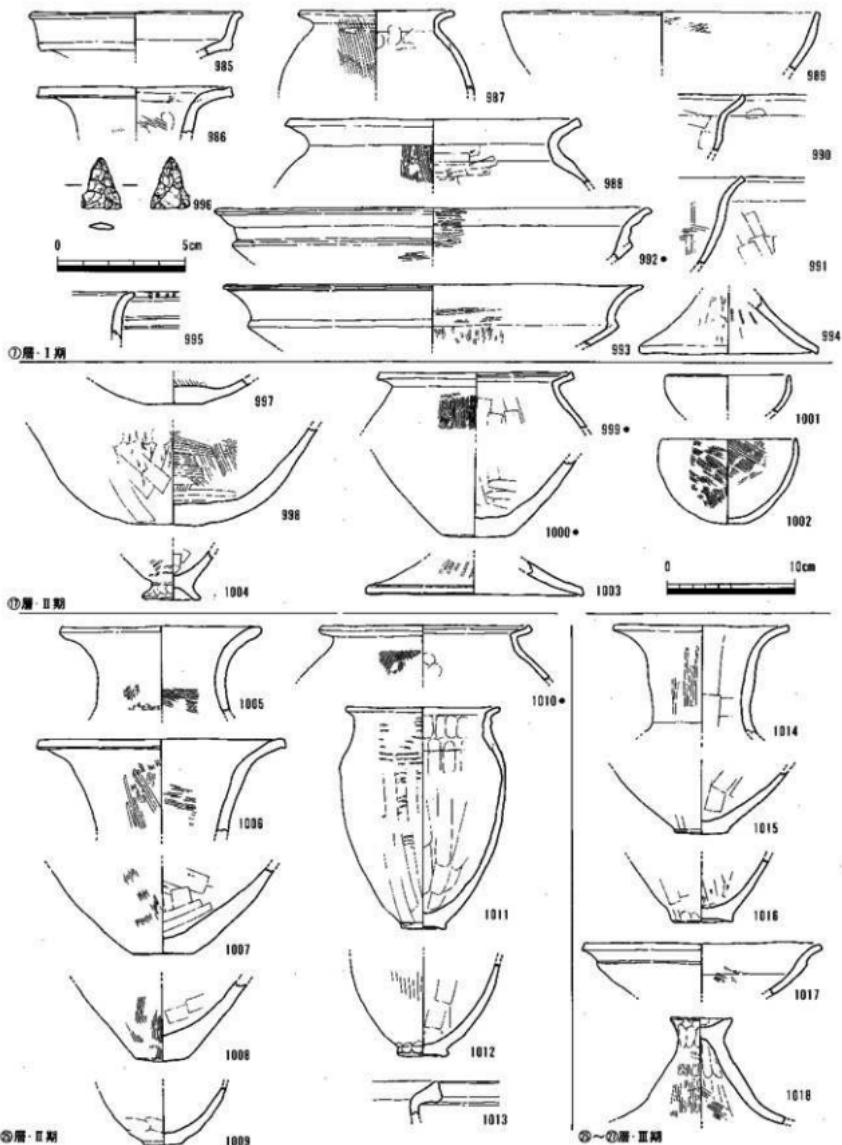
Ⅲ期からがSRIII03の各小期ごとの流路幅の変遷と考えられる。

Ⅲ期は流路幅が8.9mと最大となる時期で、土層断面では流路端に置いて土層はほぼ水平堆積する。中心部はⅠ期・Ⅱ期の堆積層によって確認できない。Ⅳ期からⅥ期は天幅3.3m、深さ0.6mを測る流



第124図 土層断面V-V' 参照

第145図 SRIII03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)②



第124図 土層断面U-U' 参照

第146図 SRM03 (第128図B-③地区) 出土遺物実測図(1/4)①

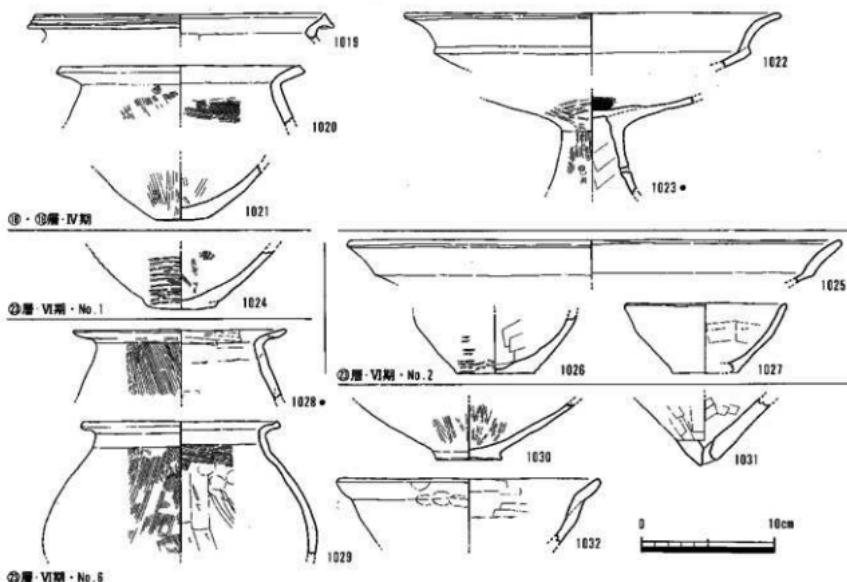
路で、Ⅲ期に比べると狭くなり、かなりの遺物を含むことから安定した流路であったものと考えられる。Ⅶ期になると再度流路幅が7mと広くなり、Ⅲ期と同様に流路端に置いて土層は水平堆積する。Ⅶ期はⅧ期への連続するものとみられ、流路幅はⅦ期とほとんど変わらないものと考えられる。

土層断面から読みとれる各小期をみると大別してⅠ～Ⅱ期、Ⅲ期、Ⅳ～Ⅵ期、Ⅶ～Ⅸ期の各期が認められる。この土層断面はちょうど蛇行するSRⅢ-03の屈曲部に当たり、北側（土層図では左部）は水流の全面に当たり、かなり水圧を受け掘削される部分である。このことからⅠ期からⅢ期及びⅦ期からⅨ期はかなり水量があり、安定していない状況が読みとれる。そのなかでⅣ期からⅥ期は流路幅も一定することからSRⅢ-03の不安定期と考えられる。しかし第124図土層断面V-V'でみるとⅢ期は第124図土層断面U-U'に同様に流路幅の拡大傾向がみられ、かなりの範囲で堆積が確認できる。一方Ⅲ期以外の各期はかなり安定したレンズ状堆積を呈しており、流路の定期が指摘できる。

このSRⅢ-03は現古川の旧流路（主流）かあるいは主流から派生する支流かは判然としないが、どちらにしても水量はかなりあったものと考えられる。

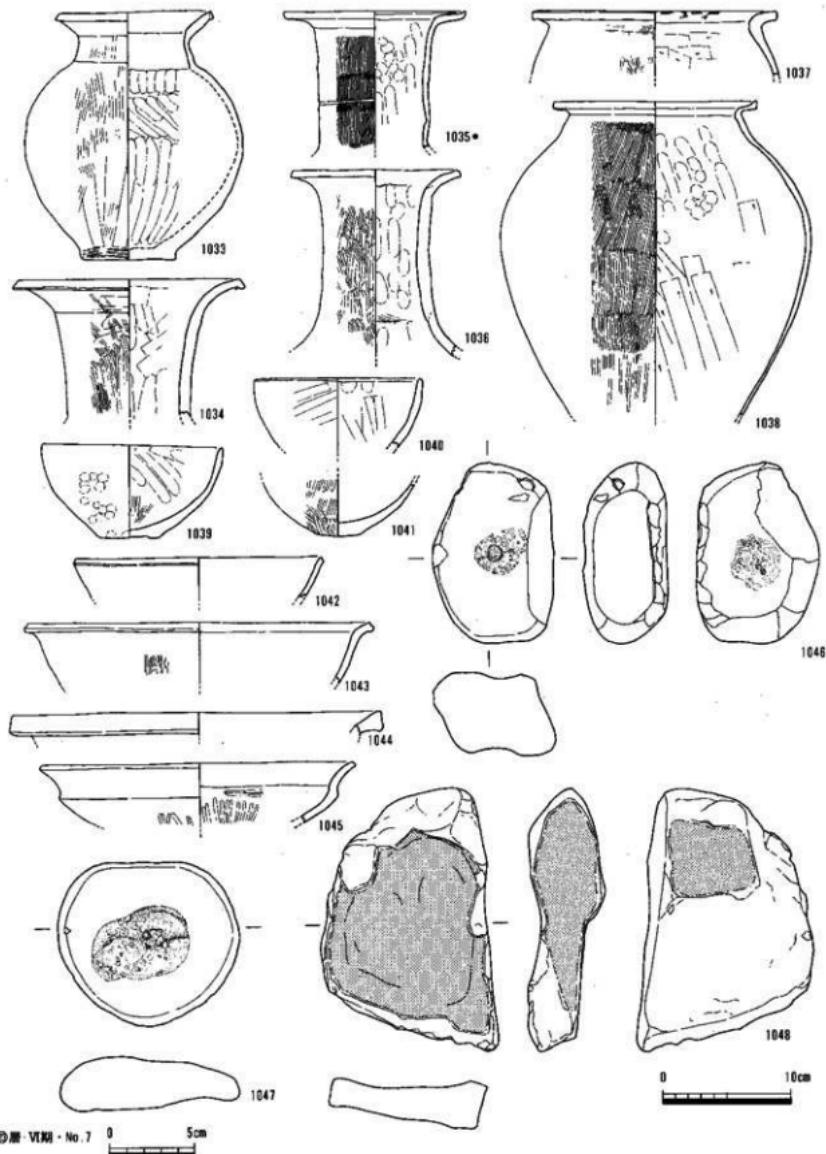
次に出土遺物の取り上げ方を説明する。

調査時に細かい調査区ごと及び土層観察用の畔を境としてSRⅢ-03を5ヶ所に細分し、尚かつ土層ごとの遺物の取り上げを行った。この5ヶ所は第128図にあるように南からA地区、B-①・②地区、B-③・④東、B-④西、C地区とする。A地区はSRⅢ-03の南東部で直線的に延びる部分に当たり、B-①・②地区はSRⅢ-03がS字状に蛇行するB地区の前半の屈曲部、B-③・④東地区はSRⅢ-03がS字状に蛇行するB地区の後半の屈曲部、B-④西はB地区の最後の屈曲部分、C地区はSRⅢ-03が再び直



第124図 土層断面U-U' 参照

第147図 SRⅢ-03 (第128図B-③地区) 出土遺物実測図(1/4)②



第124図 土層断面U-U' 参照

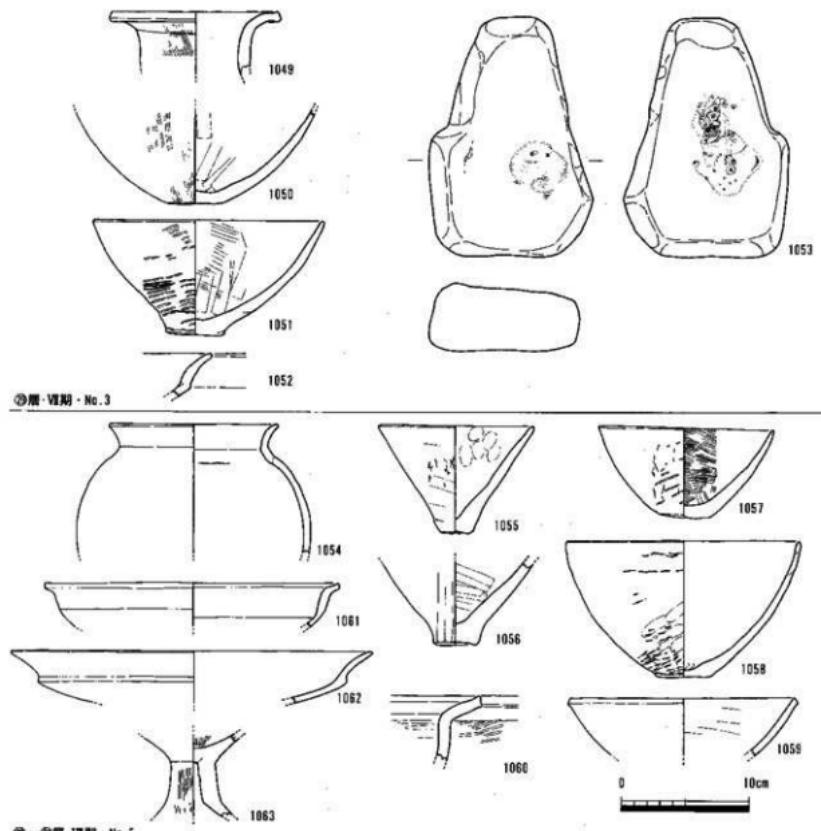
第148図 SRIII03 (第128図B-③地区) 出土遺物実測図 (1/4) ③

線的な流路になる部分、C 地区で SRM03 は分岐し、下流に向かって右側の流路を SRM03 支流、左側の流路を SRM03 本流とする。

取り上げ土層については A 地区出土遺物は SRM03 土層断面 Q-Q' の土層序を基に、B-①・②地区、B-③・④東地区出土遺物は SRM03 土層断面 U-U' を基に、B-④西、C 地区は SRM03 土層断面 V-V' を基に取り上げた。それぞれの土層断面には若干の相違が認められるが、土層断面 U-U' 、V-V' で提示した I 期から VII 期の設定は合致する。

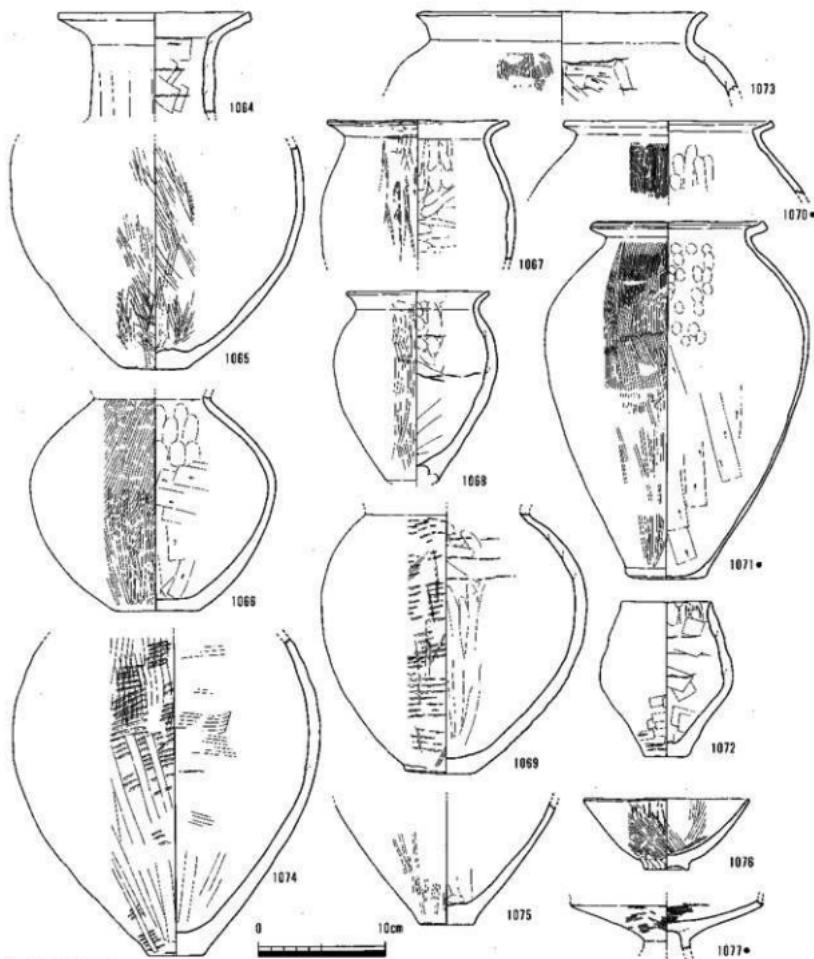
このそれぞれの区画ごとに各層及び各期（I～VII期）ごとに出土遺物の概略を説明する。

I 期の出土遺物は壺・甕・鉢・高坏・瓶・製塩土器・土錐・サヌカイト製の石錐・結晶片岩製の打製石庖丁・砂岩製の台石などが出土している。この層は基本的に白色系の砂で構成されることから洪水砂層と考えられ、そのために時期幅が考えられる。II 期は明確に I 期と分けられるが、遺物量が少ない。III 期出土遺物の器種構成は I 期と同じである。特異なものとして第 163 図 1319 の壺体部外面に



第124図 土層断面 U-U' 参照

第149図 SRM03 (第128図B-③地区) 出土遺物実測図(1/4)④



②～⑤層・Ⅵ期 No.4

第124図 土層断面U-U' 参照

第150図 SRM03 (第128図B-③地区) 出土遺物実測図(1/4)⑤

は2~4条のヘラ書き沈線による線刻が認められる。

以上のI期~III期がほぼ同時期と考えられ、出土遺物から体部球形の壺・丸底を呈する鉢が主体、外面タタキ目を施す製塙土器の出現を特徴としている。第I調査区検出遺構の変遷の各期に当てはめるとIII期・IV期に相当する。またII期出土の壺は下川津IV式期に併行する。

IV期はSRIII03の流路幅が狭くなり、安定する時期で、その最終埋没層と考えられる。

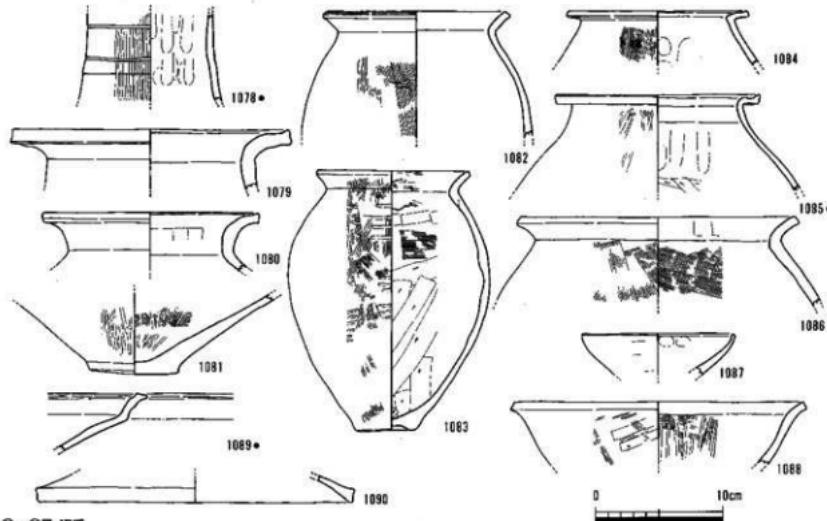
IV期出土遺物は壺、壺、鉢、高杯、瓶、製塙土器、砂岩製の台石などが出土している。出土遺物から壺は球形に近いものが出でているが、依然底部は平底を呈している。鉢には大型・中型・小型のものがあり、特に中型・小型の鉢は多量化する。小型の体部は内湾するものと直線的なものがあり、内湾するものが目立つ。また中型・小型鉢の底部は丸底傾向が認められるが、依然平底を呈し、外面に指頭痕を明瞭に残す突出底が目立つ。製塙土器は体部外面に叩きが施されているもので、I期~III期に比べると脚部がしっかりとしており、やや高い。

搬入土器と考えられる第150図1070・1071は下川津B類土器の壺で、下川津Ⅳ式期に併行する。

V期出土遺物は埋土が少なかったために出土遺物も少なかった。

特異な遺物として遺物中には第159図1263にあるように銅鐸形土製品が出土している。IV期からVI期段階の流路の安定時に銅鐸形土製品を使用した祭祀があった可能性がある。

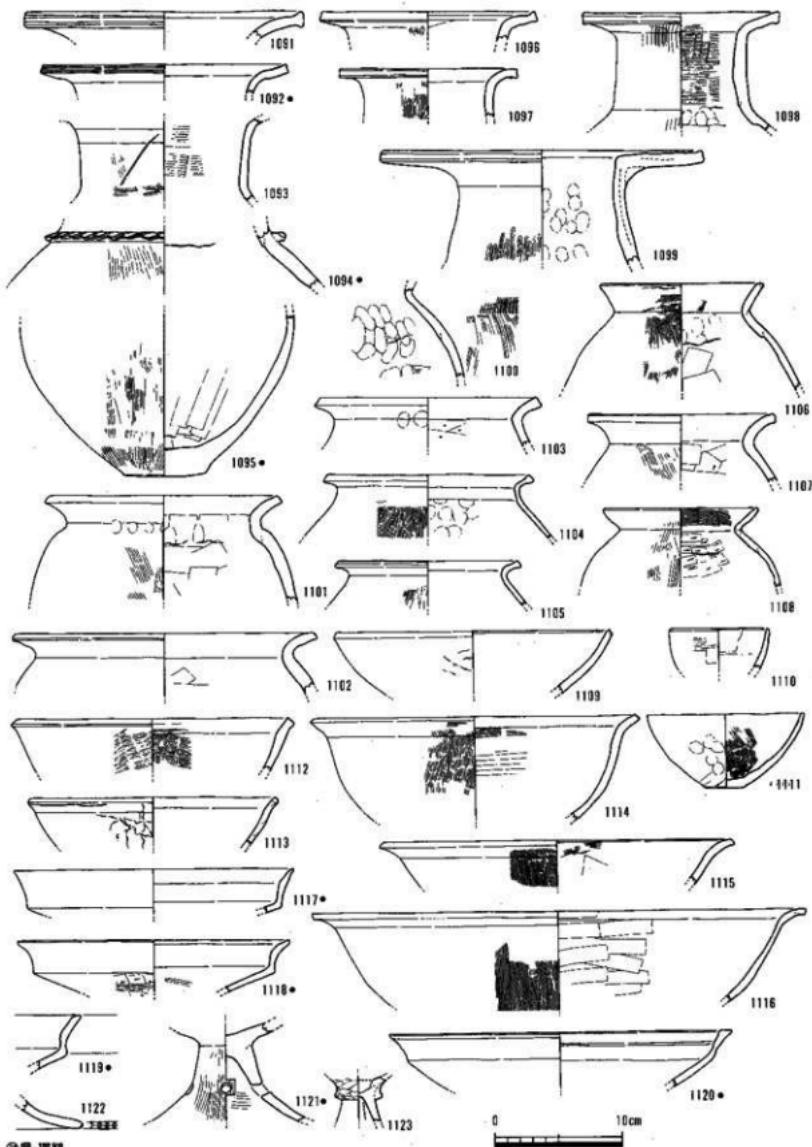
VI期出土遺物は壺、壺、鉢、高杯、製塙土器、サヌカイト製の打製石庖丁、砂岩製台石などが出土している。出土遺物からみると壺は体部最大径が中位にあるが、全体に縦長で、球形は呈していない。底部は平底を呈している。鉢は中型・小型のものが主流で、量は少ない。製塙土器は体部がやや内湾気味に外上方に延び、外面をヘラ削りしている。明らかにIV期出土の製塙土器とは違う。



⑥~⑧層・VI期

第124図 土層断面U-U' 参照

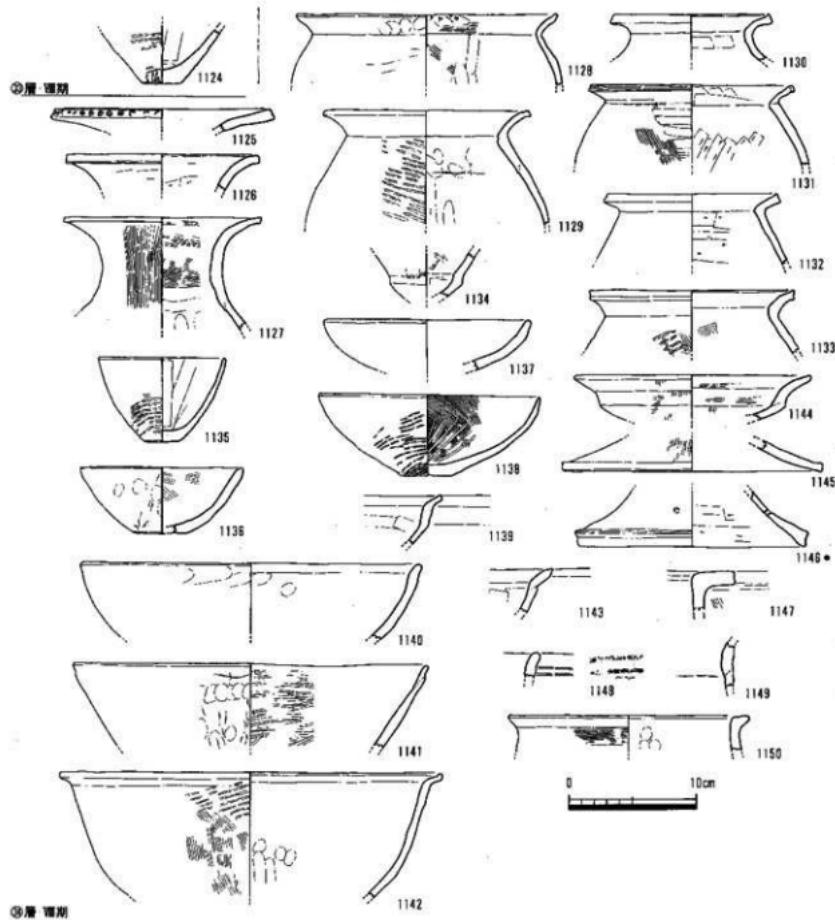
第151図 SRIII03 (第128図B-③地区) 出土遺物実測図(1/4)⑥



◎層 順期

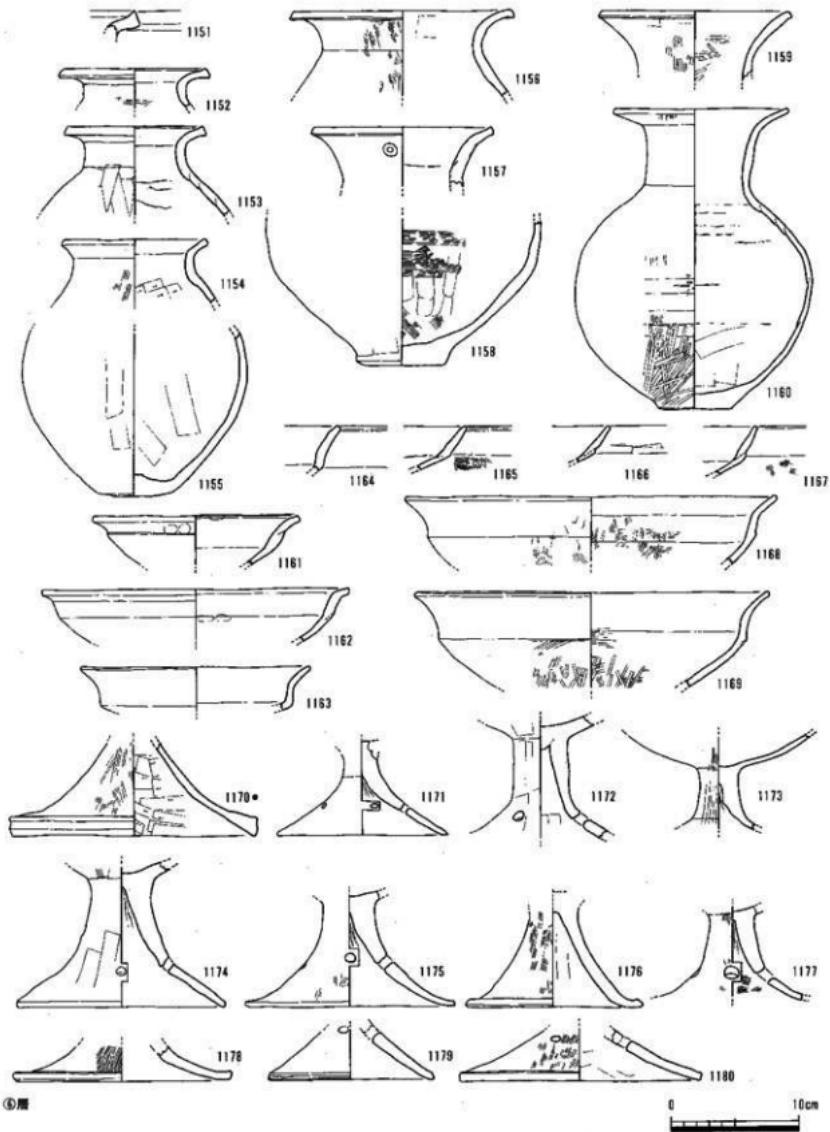
第124図 土層断面V-V' 参照

第152図 SRM03(第128図B-③地区)出土遺物実測図(1/4)⑦



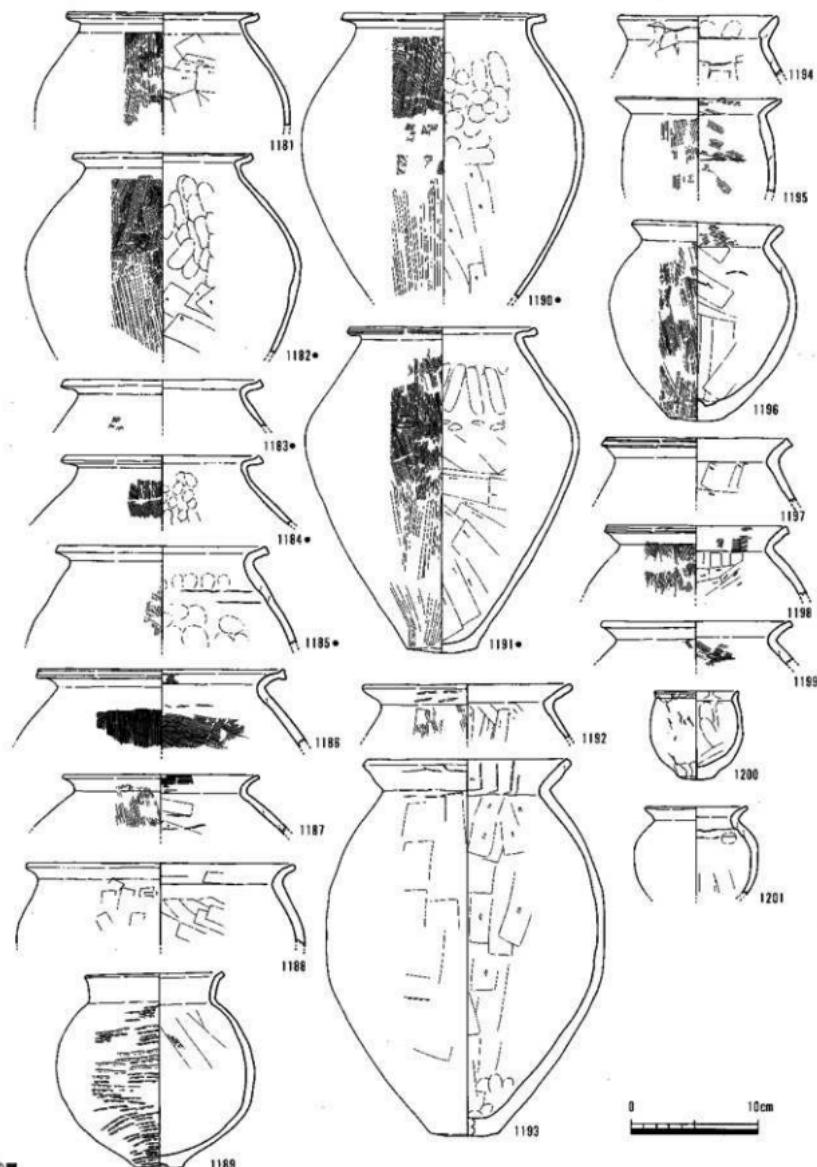
第124図 土層断面V-V' 参照

第153図 SRM03 (第128図B-③地区) 出土遺物実測図(1/4)⑧



第124図 土層断面V-V' 参照

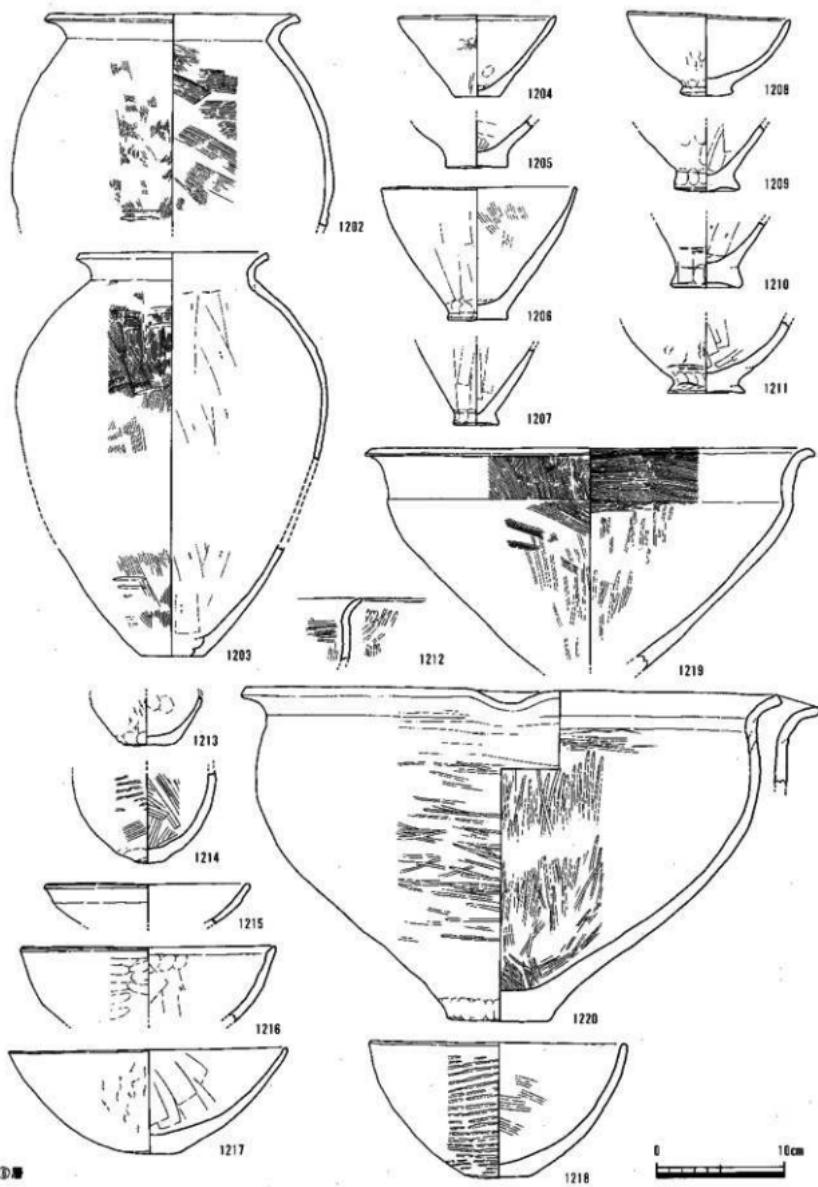
第154図 SR III 03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)①



④層

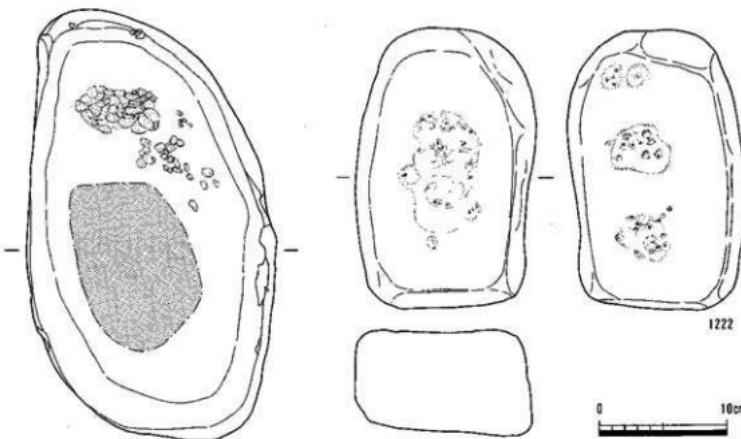
第124図 土層断面V-V' 参照

第155図 SRM03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)②

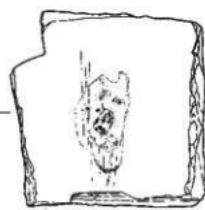


第124図 土層断面V-V' 参照

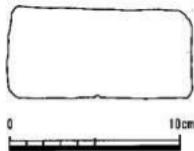
第156図 SRM03(第128図B-④地区)出土遺物実測図(1/4)③



1221

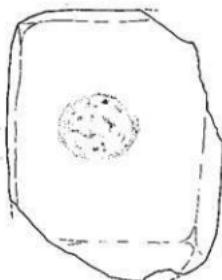


1223



0

10cm



1224

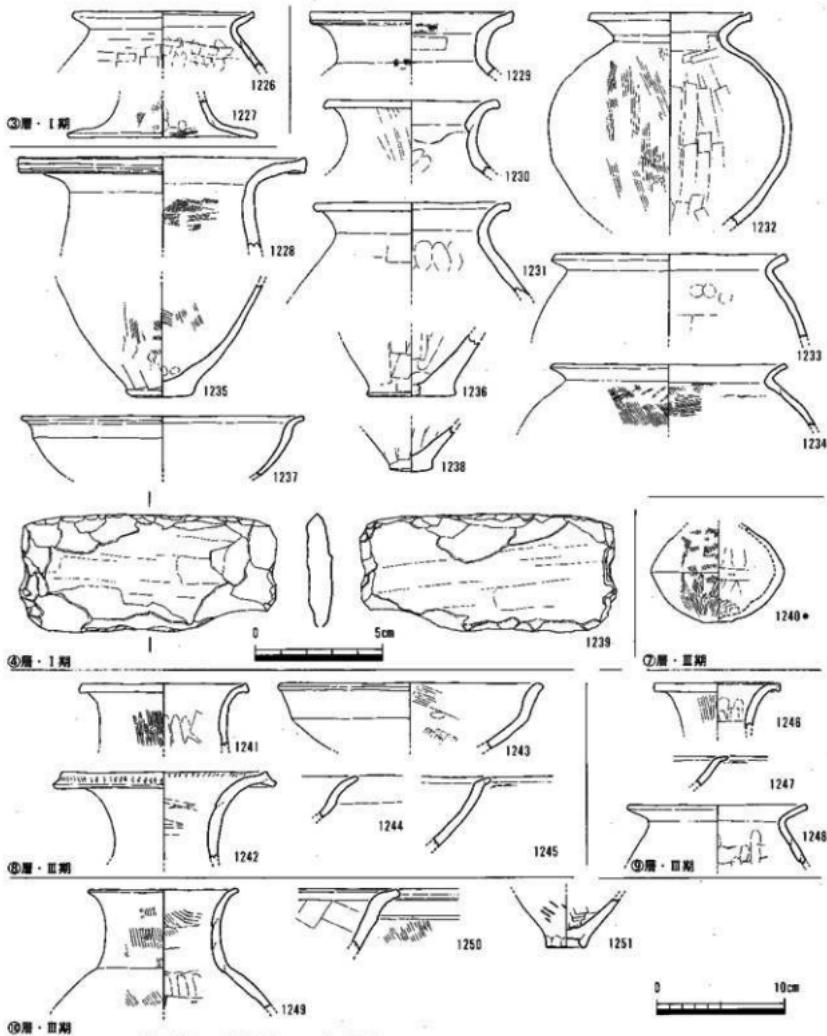


1225

④層

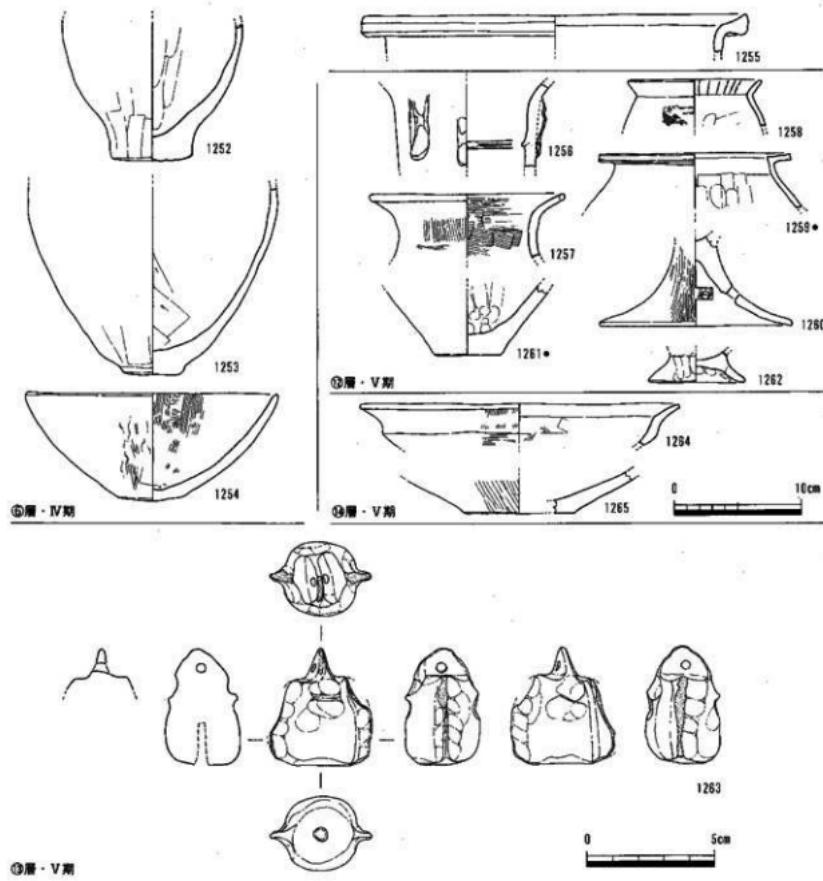
第124図 土層断面V-V' 参照

第157図 SRIII03(第128図B-④地区)出土遺物実測図(1/4)④



第124図 土層断面V-V' 参照

第158図 SRM03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)①



第124図 土層断面V-V' 参照

第159図 SRIII03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)②

IV期からVI期は土層断面から流路幅が同じで、かなり安定した時期であったと考えられる。遺構の各期でみるとIV期が遺構III期に相当し、VI期が遺構II期に相当する。搬入土器と考えられる第155図1190・1191は下川津B類土器で、下川津II式期に併行する。

VII期は流路幅が広くなり、不安定期と考えられる。

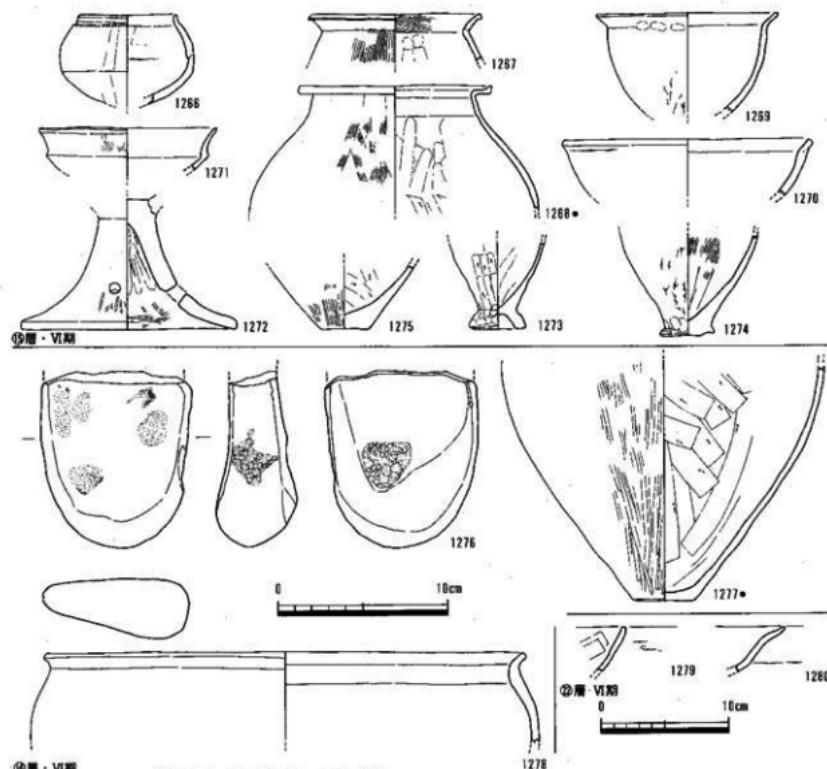
VII期出土物は壺、甕、鉢、高坏、砂岩製の砥石・台石などが出土している。出土遺物からみると鉢が少なく、体部が直線的に延びるもののが目立つ。

集落の各期でみるとVII期は遺構II期に相当する。搬入土器と考えられる第161図1283は下川津B類土器で、下川津II式期に併行する。

VIII期はVII期の最下層に位置づけられることからVII期とほぼ同時期である。

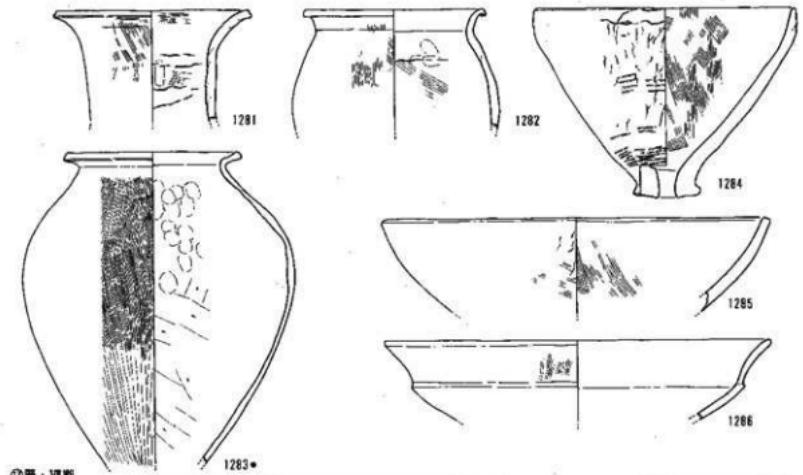
VIII期出土物は壺、甕、鉢、高坏、サヌカイト製石鎌、結晶片岩製石庖丁、砂岩製台石・叩き石、木製品などが出土している。時期的にはVII期と同じ時期と考えられる。

木製品には堅杵、鋤、駒形木製品、杭、弓などが出土していることから狩獵・農耕を裏付ける資料である。

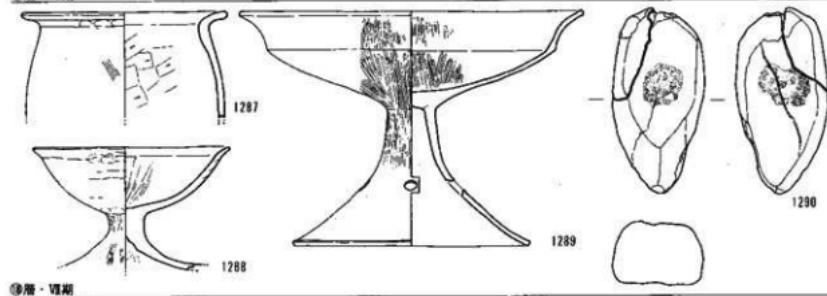


第124図 土層断面V-V' 参照

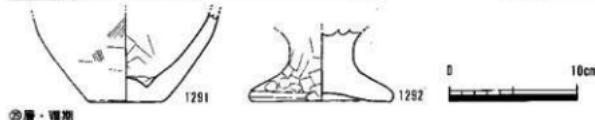
第160図 SRIII03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)③



②層・VI期



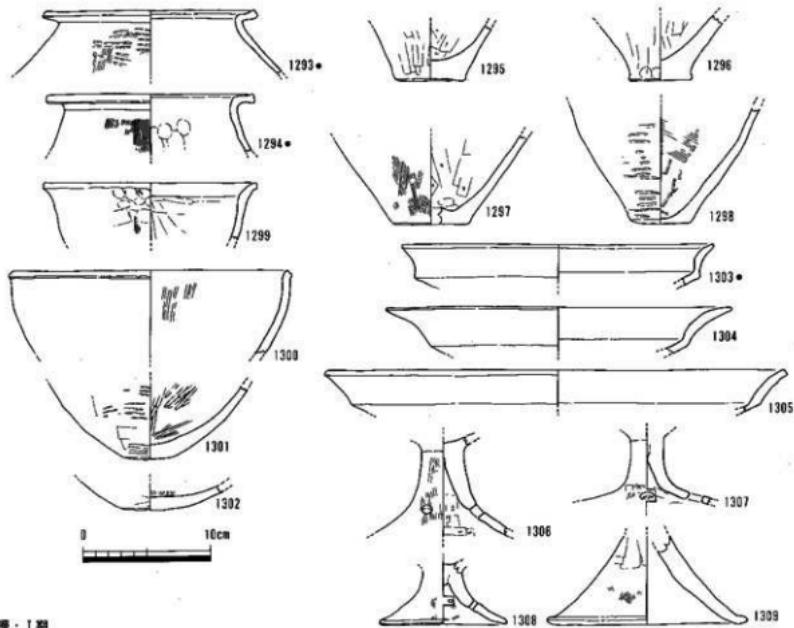
③層・V期



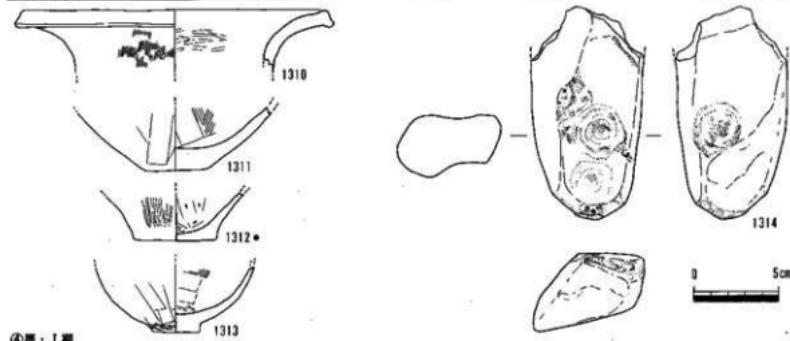
④層・IV期

第124図 土層断面V-V' 参照

第161図 SRM03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)④



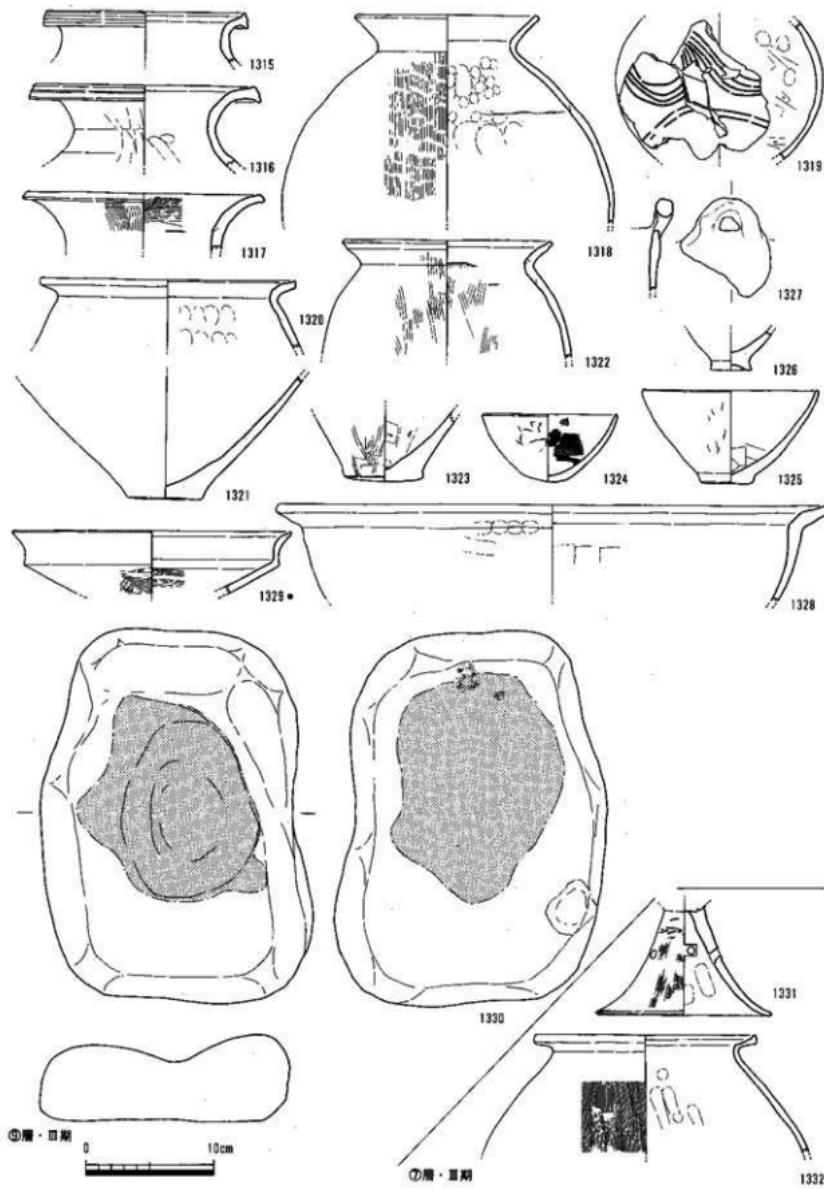
①層・Ⅰ期



②層・Ⅰ期

第124図 土層断面V-V' 参照

第162図 SRM III 03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)①



第124図 土層断面V-V' 参照

第163図 SRMII03 (第128図B-④地区) 出土遺物実測図(1/4)②